慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中華民国国立故宮博物院蔵楊氏観海堂善本解題：中国訪書志一
Sub Title	
Author	阿部, 隆一(Abe, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1970
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.9 (1970.) ,p.1- 190
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000009-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中華民国国立故宮博物院蔵楊氏観海堂善本解題

――中国訪書志一――

阿部隆一

はしがき

一昨年の十一月末か十二月初、東洋文庫専務理事の榎一雄東京大学教授からお電話を頂いた。君は前に台湾の典籍調査に行きたいと言っておったが、今でもその意向があるなら、ハーバート大学燕京研究所の研究費を日本東方学会を通じて申請したらどうか、そのつもりなら締切が迫っているから、十日位のうちに計画書・豫算書を至急提出するようにとの、まことに有りがたい御勧誘であった。このお話には次の如き経緯がある。

筆者は本文庫の研究題目の一つとして漢籍旧鈔本類の綜合的調査を担当し、それを通じて、室町以前の日本漢学史、唐以前の漢籍の伝流、逸書佚文の拾輯等を目指し、我が国内の関係資料に関しては殆どその捜索調査をすませ、そのマイクロフィルム化を終了した。かゝる研究調査は、既に江戸後期の狩谷棭斎・近藤正斎等を先達中心とする校勘学者の協同研究によって進められ、その成果が「経籍訪古志」八巻である。しかし明治後はその継続進歩は部分的には勿論見るべきもの多々あるとしても、大局としては幕末の校証学派の熱意に及ばず、最近まで中断されていたと評されても残念ながら必しも此を酷評と反論するわけにゆかぬ状況にある。訪古志の遺業を継いだのは、明治十三年清国駐日公使の随員として来朝して四ケ年滞留した楊守敬であった。楊氏は訪古志を指針として、当時我が国人が捨て顧なかった漢籍旧鈔本・旧刊本類を熱心に渉猟し、且つあらゆる努力をはらってそれ等を購得して厖大なコレクションを持ち帰ったのである。楊氏は日本の旧鈔本が六朝唐代の遺風を遺し、宋刊本を祖とする今本を訂する例が多く、且つ日本伝本が

漢土亡佚書を多く含む等、その宝重すべき所以を声を大にして指摘し、日本滞在中に従観せる書の題跋を集めたのが「日本訪書志」十六巻（光緒廿三年刊）である。この楊氏蔵本は卒後民国政府が買い上げ、一半は故宮博物院に「観海堂蔵書」として保管され、一半は松坡図書館に交附された。その蔵書の概略については「日本訪書志」や「故宮所蔵観海堂書目」四巻（民国廿一年故宮博物院図書館刊）によって知られていたが、その全貌と詳細に関しては未だ調査が発表されず、明かでなかった。従って筆者にとっては、どうしても楊氏蔵本を見逃して、研究を進めるわけに行かなかったのである。

今次大戦後楊氏蔵本は故宮博物院の文化財と共に国民政府によって桴海東渡して台湾に移り、台中に保管され、また南京の国立中央図書館の宋・元・明刊本の厖大な善本も台湾に無事保管されているという話が伝って来た。その後民国四十六・七年（昭和卅二・三年）「国立中央図書館善本書目」三冊、「国立中央図書館宋本図録」（民国四十七年刊）「国立中央図書館金元本図録」（民国五十年刊）が刊行され、同館の蔵書の量質共に豫想を遙かに越える美事さに瞠目驚嘆した。ついで米国国会図書館に寄託されていた旧北平図書館蔵本が台北に返還され、それ等を収録せる、「国立中央図書館善本書目増訂本」四冊が民国五十六年発行された。その間台北市郊外に故宮博物院の新厦が落成開館され、その収蔵美術考古品の豊麗なることが次第に多くなった観光者からも伝えられたが、典籍についての調査報告は聞くことなかった。しかし楊氏蔵本の閲覧の可能なる日も遠くはないことを期待していた。民国五十七年即ち昭和四十三年「国立故宮博物院善本書目」が公刊され、文淵閣四庫全書原本、清朝秘府所蔵本、楊氏観海堂本の故宮全蔵本が無事保管公開されるに至ったことを知った。筆者の台湾訪書熱はたかまったが、直にそれを実行に移す具体的準備に着手したわけでなかった。早く実行に移そうとは思っても、既に蒐集せる典籍資料の整理調査に忙殺され、ぐづ〳〵していたわけである。台湾現存善本の調査とその主要本のマイクロ・フィルム将来の必要性をいつか榎教授に雑談の間にお話したことがあった。教授はそれをよく記憶にとどめられ、今回御推挙下さったわけである。

筆者にとっては正に思いもかけぬ棚からぼた餅であったが、その準備ができておらず、こちらがいくら熱望しても果して先方が当方の希望に応じて下さるかどうか。図書閲覧だけなら、割合簡単に許可がでるであろうが、貴重書の全巻マイクロ複写の厖大な量となるとそう思った程容易ではないかもしれず、所が短期間の滞在では厖大な典籍を読破精査することは不可能であり、諸本との比較校勘にはマイクロフィルムはどうしても研究上必要であった。先方の事情に全く不案内であったが、後のことは後のことゝして、取り敢えず御厚意に乗らせて頂くことを決意した。早速目録や参考書によって調査計画をあわたゞしく立案した。一方長沢規矩也先生は北京留学時代、当時北京図書館におられた、現故宮博物院長蔣復璁先生と親好があったと

かねてお聞きしていたので、長沢先生から院長先生への紹介状を頂き、率直に当方の希望を訴えた書簡を呈して、御許可と故宮の御事情をお伺いした。また国立台湾大学図書館学系主任教授頼永祥先生は先年斯道文庫に来訪された際おめにかゝっていたので、先生に中央図書館・国立中央研究院歴史語言研究所その他の台湾に於ける事状やマイクロ複写の様子等をお尋ねした。両先生からは早速渡台を観迎する旨の御返翰を賜り、また簡単ながら先方の事情が明かになり、複写等の当方の希望もほぼ達成されそうな見通しがついた。

しかしこの計画を実行するについては、現在行なっている研究計画に相当の変更を加えねばならず、此は筆者個人の都合のみならず、勤務先の斯道文庫の研究企画とも関渉する所頗る多いので、当局に計った所、幸に中国訪書調査の企画を斯道文庫の研究事業の一項に新に加え、筆者は同僚の尾崎康君と共に之を担当することになった。台湾現存漢籍善本調査並にそのマイクロ・フィルミングはその範囲と実行目標の順序を

㈠日本旧鈔本、日本旧刊・古活字版、日本人の校注書入等を有する宋・元・明刊本、日本人撰述漢籍注釈類。此に属する図書の大部分は故宮博物院蔵楊氏観海堂本で、一部中央図書館にも蔵される。

㈡宋・元刊本類。故宮博物院・中央図書館・中央研究院語言文化研究所がその主要所蔵機関である。

㈢日本に現存しないその他の善本類。

㈠を第一目標とし、㈡を第二目標とし、㈢はそれが終った後のことゝし、先づ㈠㈡の達成を期したいというのが計画である。目録によった概算では要調査書は㈠が約六百五十部四千五百冊、㈡が約九百部一万冊、そのうちマイク副本作成が㈠約一千五百冊㈡約五千冊、それに要する経費は、出張調査旅費、マイクロ複写費合計約一千万円、期間三ケ年と概算した。しかし此は台湾の具体的状況がよくわからぬまゝに、筆者の従来の経験から推量したにすぎぬ数字であって、果して先方の事情が当方の思う通りに叶えられるか甚だ不安定な独り相撲であった。特に他の財団より補助を仰ぐ責任の上から、この企画を実状に応じて具体的に精密化する必要があり、また決定した以上一日も早く着手するに如くはないということから、三月から四月初旬の学年末初の期間一ケ月を利用して、慶應義塾小泉資金・斯道文庫賛助員会資金によって、台湾の関係諸機関との協議視察と図書調査を目的とし一ケ月間筆者が台北に出張することが急に決定した。棚から落ちたぼた餅は雪だるま式に餡を加えてころがって行った。

昭和四十五年三月十五日朝羽田を出発、同日台北着。空港に本塾大学院に留学中の鄭栄進君が帰省中であったので出迎えておられたが、思いがけず故宮博物院長蔣先生の秘書が日曜にも拘らず車を用意してわざ〳〵出迎えておられ、今晩歓迎の宴を催すという院長先生からの招待状を頂いたのには恐縮した。同夜の歓迎会には院長先生を始め故宮の関係の方々のみならず、

中央図書館・台湾大学等の歴訪豫定の諸機関の関係の皆さん方の殆ど全部が一堂に会しておられた。院長先生の歓迎の御言葉に、先生が北京大学を出てまだ就職しないでいた頃、政府が買い上げてあった楊氏蔵書の整理を行なうということになり、御親戚のすゝめで入ったのが、斯の道に入った縁由である。従って楊氏蔵本は思い出の深い愛着おく能わざる本であるが、その後残念ながら此を活用する人は殆どなかった。こゝに初めてその人を迎えたことは喜びにたえないと温容慈父の如く述べられた。まことに奇縁であった。筆者には頗る感銘の深い一刻価千金の春宵であった。

翌日から一ケ月間殆ど故宮博物院に通って調査を始め、その間国立中央図書館・国立台湾大学図書館・国立中央研究院歴史語言研究所等を訪ね、調査・視察・協議を行なった。どこでも心のこもった款待に浴し、この企画について全面的な協力の約束を頂くことができた。連日の如く通った故宮博物院図書館に於ては、多忙の中をつぎ〳〵と図書の出納を要求されるのはさだめし御迷惑のことであったろうと思うが、係りの皆さんが至れり尽せりの最大の便宜を計って下さった。おかげで調査は豫期以上に快調に進み、一ケ月の間に楊氏蔵本中でも最も重きをなす経部と、中央図書館では前記の目標㈠の経部の調査を終了することができた。心配していたマイクロ複写についても諒解が成立し、夫々の所蔵機関が複写を行ない、ポジフィルムが交附されることになった。一ケ月間の経験で、マイクロ複写は各機関の複写係りの手不足から当方の豫測よりはかなり多い期間を要する外は、当初考えた計画に殆ど変更を加える必要を見ないことを確認して、四月十四日帰国した。

帰国後、申請中のハーバート大学エインチェン研究所からは一九七〇―七一年度より向う三ケ年の期間に分って研究補助金の交附が決定し、また三島海雲記念財団からは斯道文庫に対し、本研究計画について昭和四十五年度学術奨励金（機関補助）が贈与されることになった。後者については吉川幸次郎先生の御尽力に負う所が多かった。

右の研究資金による今年の第二回調査には、文庫助教授尾崎康君が同行し、長沢規矩也先生の秘書志岐ちづ嬢が加って、二月十日出発、志岐嬢は三月五日帰国、尾崎君は三月十八日帰国、尾崎君と入れ違いに、文庫研究嘱託酒井健彦君が三月十七日来って調査に参加、四月六日帰国、筆者は滞在を豫定より延期して四月廿三日に帰国した。今回も故宮の蔵書調査が主で、中央図書館蔵本の一部にも及んだ。分担を大体筆者が楊氏蔵本及び中央図書館の目標㈠の蔵書、尾崎君が故宮博物院保管の北平図書館旧蔵・中央図書館蔵の史部宋元刊本、酒井君は日本旧刊本類、志岐嬢は故宮博物院蔵史部宋・元刊本類となした。昨年同様係りの皆さん方の御厚意により、また個人的にもいよ〳〵相互に親しみをましたので、調査がはかどり、楊氏観海堂本は医書を除き豫定書の調査を終え、また中央図書館本の目標㈠の該当書は宋・元版に属する十餘部を除いて閲覧をすませ、

即ち本企画の目標㈠の日本旧鈔本、日本旧刊・古活字版、日本人手識宋・元・明刊本、日本人撰述漢籍注釈書類については医書を除きほゞ調査を完了した。宋・元刊本類に関しては史部正史、故宮博物院蔵本の史部編年類その他について調査を進めた。以上調査書のうち主要図書の全巻マイクロ・フィルム複写を申請し、故宮博物院からは既に漸次フィルムが到着しているが、全部の複写完了には今後多少の年月を要する見込である。

以上の成果を収め得たのは、偏に関係諸機関各位の御懇情の賜物である。最も御世話になった故宮博物院に於ては、院長蔣復璁閣下を始めとし、文献処長昌彼得先生、図書館主任蘇篤仁先生、呉哲夫先生、図書館員各位のこまやかな友情、中央図書館では、館長李志鍾先生、特蔵組主任喬衍琯先生、劉兆祐先生、劉顕叔先生、台湾大学図書館系主任教授頼永祥先生、また異郷滞在の生活につき万事御高配を賜った台湾慶應会の会長彰化商業銀行董事長張聘三氏、筆者と本塾の卒業年度を同くする同会幹事蔡瑞銘氏、鄭栄進氏御一家、また本塾豫科に一年学ばれて後米国に遊学され文教大臣等の要職を歴任された国民党の元老黄季陸閣下からは絶大の激励と御後援を賜り、最後に研究資金を援助されたハーバート大学燕京研究所、三島海雲記念財団、本調査達成に並々ならぬ御配慮を辱うした長沢規矩也、吉川幸次郎、榎一雄の三先生、以上各位の御厚意は深く銘記する所で、謹んで感謝の意を捧げると共に、未完成の本調査の今後に対し変らぬ御指導と御後援を請う次第である。

本解題は上記の如く日本伝承漢籍類の部分の調査が一応終了したので本調査の中間報告として発表するものである。その殆どが楊守敬旧蔵の観海堂本であるから、「観海堂善本解題」と題し、中央図書館蔵の日本伝来本関係の解題を附録として収めた。楊氏蔵本の全体については別に稿を改める豫定で、また日本訪書については既に先人の論考もあるから、こゝにはその概要のみを簡単に記しておく。楊守敬の伝記については、自撰に熊会貞氏が続補を加えた「鄰蘇老人年譜」（民国四年刊石印）があり、また袁守和氏の「楊惺吾先生小伝」（図書館学季刊一ノ四）があり、略伝は「清代撲学大師列伝」に見える。守敬字は惺吾、晩年鄰蘇老人と号した。道光十九年（一八三九、天保十年）湖北宜都に生れた。家は商を業とし、四歳父を喪い、母が文字読書を教えたと云う。十一歳読書をやめて商に従ったが、夜間学文に励み、十四歳県考に応じ、同治元年廿四歳挙人に中り、その後屢々会試に応じたが不幸合格しなかった。しかし入都毎に当代の学者と往還し、初め金石学を治め、学者として注目された。四十一歳の光緒六年庚辰（明治十三年）駐日清国公使何如璋の召に応じて我が国に来り、唐土佚亡書の蒐集を企て、日に古書肆に遊んで、当時の旧学廃棄の風に乗じて、士人が唾棄して顧なかった善本を索めて廉価を以て購得し、一年ならずして三万餘巻を集め、次年来任の公使黎庶昌の知遇を受け、黎氏の古逸叢書の編刊に従事して、我が国に於てその雕板を行ない、滞留四年にし

て光緒十年文字通り五車の書を満載して帰国した。後、黄州府教授となり、さらに張之洞に聘されて両湖書院及び勤成・存古二学堂の教習に任じた。民国二年袁世凱に召用されて入京して参政院参政となり、民国四年卒した。年七十六。博聞強記、考証を善くし、鑑識に精通し、地理・金石・書誌の学に長じ、著編・校刻書頗る多く、その主なるもの禹貢本義・論語事実録・漢書地理志補校・三国郡県表補正・隋書地理志攷証・歴代輿地沿革険要図・水経注図・水経注疏疏要删・同補遺・日本訪書志・留真譜・蔵書絶句・叢書挙要・望金堂金石文字・壬癸・己庚・丁戊金石跋・寰宇貞石図・晦明軒稿等の外、未刊稿本多数を存すると伝え、清末考証学派中に異彩を放っている。

楊氏は日本滞在中古書市・民間蔵書家の書を空しうせしめたと評される如く、購書に凡ゆる手段を使って狂奔したこと、明治初の日本の書道界に与えた刺戟と影響の頗る大なることは、既に周知の通りである。その訪書の事情については楊氏自らが来朝の翌年草し、後訪書志の巻首に冠した「日本訪書志縁起」中に語っている。「経籍訪古志」の写本を入手して、それを指針として踪跡に力め、またその編者の生き残りの森立之との遭遇、立之によって与えられた影響、両人が互に利用し合った経緯は甚だ注目すべきである。楊氏自ら記録せる資料には「日本訪書志」の外に、楊氏自ら「経籍訪古志」に手批を書入せる本がある。此は嘗て橋川醉軒氏が偶然燕市の書肆で入手され、翁より譲られて今長沢先生が蔵される。狩谷棭斎在生中の古書鑒定会や緑汀の会合に於ける目睹書の前後頁の影写の手記を輯せる「留直譜」の草稿を立之より入手し、さらに楊氏が宋元版等の書影を補ったのが「留真譜初編」十二冊（清光緒廿七年宜都楊氏刊）「留真譜二篇」八冊（民国六年宜都楊氏観海堂刊）である。「留真譜」にも楊氏手批書入本が静嘉堂文庫に架蔵される。但し此は全冊ではない。初篇の三冊は初め東京にて摹刻したといわれ、また同本は現行本に比し墨釘のまゝの箇所が多いから、恐らく此はそれ等三冊の校正刷であろう。この二部は以下の解題中に度々引用させて頂いた。なお楊氏の日本訪書については、この楊氏手批本二部を詳細に紹介しながら考証された長沢先生の「楊惺吾日本訪書考」（「書誌学」七ノ四、九ノ一）があるから、参照されたい。

楊氏が日本滞在中時機もよかったにせよ、短期間によく本を集めたことはその蔵書目録を一見するだけで容易に知られる。しかし単なる本道楽で探集したにとゞまったのではなく、よくそれを精読していることは「日本訪書志」に示された見識によって知られる。筆者は観海堂本全体を調査し、諸本に書入された校字に接し、その精励に敬服の念を一層深くした。しかし残念ながら楊氏が齎持し帰った数多い旧鈔本・旧刊本類と日本旧鈔漢籍に対する氏の卓見は、当時の学界に大きな刺戟影響を与えて歓迎されたとは見えず、またその主張に対し公平な評価が下されたとも思えない。中国士人は根強い中華意識からそれ等を東夷の本として侮蔑し無視し去ったようである。楊氏につい

て筆者は深く知る所なく、僅に著書から察するにすぎぬが、才発俊敏ではあったが、俗に謂うかなりアクの強い性格であったように想像する。従ってその評判は毀誉褒貶相い半ばしている。名著「書林清話」の著者葉徳輝はその巻十に「日本宋刻書不可拠」と題し、「至留真譜誤以明繙宋刻為真宋本之類。殆如盲人評古董。指天画地。不値聞者一笑。楊又刻有激素飛青閣雙鉤法帖。其作用亦同。蓋貌為好古之人。而実為孳孳為利。吾断其所著所刻書不足信今而伝後矣。」と、また「近人蔵書侈宋刻之陋」と題する中に、「至宜都楊守敬。本以販鬻射利為事。故所刻留真譜及所著日本訪書志。大都原翻雑出。魚目混珠。蓋彼将欲售其欺。必先有此二書。使人取証。其用心固巧而作偽益拙矣。」と、言を極めて誹謗にこれ力めている。今から見れば楊氏の考証鑑識には多々失考の存するのは言うまでもない。しかし葉氏の非難は酷であり、人身攻撃に過ぎる。長沢先生は上記論考の末に「楊氏の鑑識」と小題して

楊氏の古書に対する鑑識は、上に述べたる如く、初は言ふに足らず、森立之以下の各具眼者に接し、又、わが帝室の宋元版、名家坊間の旧籍を観るに及んで、漸く深くなりたるものなるべし。古逸叢書所収古書を以て評すれば、刻工姓名によって寧宗頃の刊本と観るべき広韻を徽宗朝にかけ、序目の跋に紹興刊本世説新語を北宋と称す。但し、当時にありては止むなきのみ。広韻の如き、予が刻工姓名を比較研究するによって始めて知り得たるのみ。日本訪書志に於ては、光宗朝刊本尚書正義を北宋と記し（但し古逸叢書序目末には南宋とあり）、覆正平刊本論語集解を正平刊本となし（是亦当時に在りては已むなきのみ）、南宋刊本大広益会玉篇及び広韻を北宋刊本と断じ（是亦已むなし）たるが如き大過はあれども、本邦より帰国後の鑑識は傑出したるものありしが如く、諸般より攷ふるに、葉徳輝よりも勝りしこと数等なるべし。且又、人物の点より観るも、遙に葉氏の上に在りしならん。

と評されたのは、蓋し公平の論であろう。

楊氏卒後、その蔵書は民国政府が買い上げた。「国立故宮博物院善本書目」序に

楊氏卒後、其観海堂蔵書以国幣三万五千元售之政府、政府以一部分撥交松坡図書館、所餘貯置集霊囿。本院成立後、即以之撥帰本院、初置大高殿、後亦集中寿安宮庋蔵。書凡一千五百餘部、一万五千餘冊、宋元明刻而外、日本旧刻古鈔甚夥、医書尤富、不乏罕観秘笈、頗足以珍。

と。また喬衍琯氏の「日本訪書志叙録」（「書目叢編」収）には「其蔵書以七万餘金鬻諸政府、日久頗多散佚、七年以半数撥付松坡図書館、所餘於十五年撥帰故宮博物院保存、現已啓運来台、該院所蔵観海堂旧本是也」と。政府購入後所管が決まらぬ間に散逸したものがあるらしい。以上の如く、故宮博物院蔵観海堂現存本は楊氏旧蔵の全てではない。楊氏は生存中既にかなり図書を売却或は交換していることは日本訪書志等から察せられる。それ等の一部は廻り廻って後述の如く、国立中央図書館

に入っているものがある。一半は松坡図書館に撥交されている。日本訪書志や楊氏手識経籍訪古志等の書入から見て、重要典籍で観海堂蔵本中に逸しているものがあるが、概して言うならば貴重書の大部分は観海堂中に現存すると称してよいようである。蔣院長先生の談によれば、旧鈔本の多くは故宮に分けられ、松坡図書館には刊本が多く分与されたと云うことである。また松坡図書館はその後経営困難になり、北京図書館に収受されたと噂に聞いたが、確かでないと語られた。訪書志著録の「安吉州思溪法宝資福禅寺大蔵経」は蔣先生の談では松坡図書館に交附された分であるが、此が「北京図書館善本書目」巻五（一九五九年刊）に録されている。同目録には他に楊氏手跋本がかなり多く著録されている。楊氏手跋の本必しもその旧蔵本と見るわけにゆかぬが、彼是勘合すれば松坡図書館蔵本が北京図書館に収蔵されていることはほゞ確実のように思われる。いずれ松坡図書館分蔵本の行方が確認されゝば、楊氏旧蔵本の全容がさらに明かになるであろう。

楊氏は「日本収蔵家除足利官学外以金沢文庫為最古当我元明之間今日流伝宋本大半是其所遺次則養安院当明之季世亦多宋元且有朝鮮古本此下則以近世狩谷望之求古楼為最富雖其楓山官庫昌平官学所儲亦不及也又有市野光彦渋江道純小島尚質及森立之皆儲蔵之有名者余之所得大抵諸家之遺」（日本訪書志縁起）と述べている。江戸時代後期校勘学派が起って以来、民間にあっては我が国の善本は多紀家・狩谷棭斎・市野迷庵・伊沢蘭軒・小島宝素・渋江抽斎等の門流の間に輻輳していた。明治初善本を捜索すれば、直にそれ等蔵書家の手沢本に遭着することは当然であり、又その逸品の多くを楊氏が入手し得たのは、その生き残りの森立之が窃有していた先輩の遺書を鬻売したからである。従って楊氏蔵本の多くは「経籍訪古志」編集に関係ある校証学派の人人の遺書であることは楊氏自らが語る通りである。観海堂本中分類別に見れば医書の量が最も多いのは小島宝素以来三代の小島家宝素堂蔵書を一括購入したからであろう。従って訪古志著録本中現在国内で行方の知られなかった多くの典籍が観海堂中に現存するのを確認することができた。逸品中には棭斎旧蔵本が多く、棭斎蔵本の奥行の深さの測り得ぬことを今更の如く新に痛感せしめられた。楊志蔵本は以上の意味でその旧刊・旧鈔上の価値のみならず、その手跋・書入・校合・蔵書印記等に留意調査すれば、我が江戸後期の漢学界の消息を知るには不可欠の重要資料である。又一面我が国が唐と修交以来一千有餘年の間いかに善本秘笈を伝存蓄積していたかを物語るものである。

最後に些か私事に渉るが附記したいことがある。蔣先生が楊氏観堂本は書誌の業に入った機縁をなし、最も愛着のあるコレクションであると述懐されたことは前に記した。奇しくも筆者も亦同様の感慨を抱くものである。福岡にあった旧財団法人斯道文庫が戦災で建物施設を烏有に帰したが、たゞ幸に書庫と蔵書の大部分は難を免れた。筆者が敬愛してやまぬ今は亡き先輩大塚英雄氏が文庫主事で、氏のおすゝめで、慶応の助手の傍

ら、文庫に関係するようになったのは終戦の年の春であった。そして間もなく終戦であった。廃虚の中で、文庫再開を待つ間の蔵書整理目録編纂を筆者は委任された。実を言うと、当時の筆者は哲学専攻の関係で古書にはとんと未経験な素人で、しかも書誌学には無知蒙昧な白面の青年であった。今から考えると盲蛇に怖じない向う見ずには冷汗が出る。空想的な筆者は少年の頃から、将来の人生行路について、あれもしたい此もやりたいと多種多様な網を織っては夢想した。しかしその多彩の夢裡中に書誌の業だけは一度も入ったことなく、夢想だにしなかった。やゝ長じては書誌の世界をおぼろげながら知らぬではなかったが、寧ろ男子一生の業とするを潔しとしない、玩物喪志の如く視ていた。それが一転して、自らその適任に非ざること百も承知で、引き受けたのは夢を抱いたからである。全てが崩落した敗戦直後さながらの如き文庫の広い敷地に立った時、建物の跡、元寇の防塁を築山にした庭園は昔の面影はなく荒れ、ただコスモスが伸び放題に伸びて、たゞ無心に花が咲き乱れ、夕陽を背景に書庫の土蔵が一隅にわびしく見えた。その時たゞ無性に斯道文庫を再建したくなったのである。この夢に生命を託そうと思ったのである。当時の情勢ではそれは蟷螂の斧であったであろう。それから博多湾の海辺の文庫の焼け残りの小屋で一人古書に沈潜した。古書に昧く独学の身の悲しさは、恥しいながら、盲滅法に猪突猛進して、他を顧る餘力がなかった。今考えると迂路をあえぎ〳〵辿り、愚な竹槍戦法をとっていたものである。いかにも行いすまして図書に精励した如く見えるが、初め志した専攻から次第に離れ行く焦躁感に悩み――反省すれば仕事よりは自己の怠慢に原因があるのであるが――、目録をとりながら節を折ったと感ずる鬱悶の情が時として蟠るのを禁じ得ないこともあった。しかしたゞ夢を追っていた、往々床に入ってから研究室はこゝに書庫はあそこに等と一人で設計図を空想裡に引いては悦に入っていた。戦後騒乱の世情をよそにして、夢を追った書裡沈潜の五年間は当時の学究者としては人の羨む幸運と言うべきである。当時の自分としては文庫の為にいくらか苦労もし画策もしたつもりであったが、後から顧れば、何のことはない、財団の設立者たる麻生太賀吉氏を始め文庫の旧関係者の温い庇護の下に温室の中で本を読みながら空想を逞しうしていたようなものである。

文庫整理が一段落した機会に職を辞して母校にもどった。筆者の夢はその芽ばえすら萠え出なかった。筆者と雖も数年位で簡単に文庫再開が実現できると考えるほど世間知らずではないが、深い挫折寂寥の感を抱いて上京せざるを得なかった。斯道文庫の蔵書を再びゆっくり繙く機会に恵れることはあるまいと諦めていた。それから十年後降って湧いた様に麻生氏から本塾に斯道文庫蔵書一切を寄贈したいという申し出を頂いた。従来の縁故から筆者はその準備と大学附属研究所としての斯道文庫の復活を担当して今日に至った。文字通り寝食を共にした蔵書は再び我が身辺に来たのである。

文庫には故浜野知三郎氏蔵本が一括して入っていたので、狩谷棭斎から森立之に至る経籍訪古志にゆかりの深い幕末校勘学者等の手沢本・稿本・書入本が多かった。従って筆者が初めて接した所謂稀覯本というのは、楊氏蔵本と同じく、この派の学者の本であった。「渋江抽斎」に始る森鷗外の歴史小説と首っぴきで、整理調査にいそしんだ。筆者の蒙を少しでも啓き、鑑識の眼を漸次鍛えてくれたのも此等の本であった。従って楊氏蔵本は筆者にとっては、異域の文庫ではなく、故郷に帰った如き親身の情を感ぜしめ、故宮図書館に恰も我が斯道文庫の延長分室の如きファミリアリティを覚えざるを得なかった。初めての土地であり、中国語に通じない筆者であったが、故宮の図書室内では常にアト・ホームで、気楽であった。此はまた院の方々の厚い友情のおかげであることも言うまでもない。限られた短い滞在期間中にできるだけ多数の典籍を見ようとする貪慾は閉館時間が迫ると、時計の針が暫く進むのを停めよかしと祈る思いであった。滞在中の毎日が廿数年前初めて古書目録編纂に入った青年時代の清新にして緊張せる一日一日に直結した。俗務から解放されひたすら図書に沈潜した福岡の旧斯道文庫の生活が再現した。こゝにも筆者の人生を一貫する一筋の糸がつながっている奇縁を懐い、人の情に感じ、一刻を愛惜し一刻を怡悦した。

「経籍訪古志」は我が国曠古の漢籍解題であるが、その記述が図書の外形形態の書誌に止って、その内容に及ぶ考証に疎なる点が惜まれ、立之等編者の学識の浅劣が楊氏を始め諸家の指摘する所となっている。今回の調査は短時間にできるだけ多数の書を縦覧瞥観し、その精密な調査はマイクロ・フィルムによって行なう方針をとった。マイクロ・フィルムの大部分が未到着である現在敢て怱々に筆を執って中間報告を発表するのは、記憶の鮮明なうちに記しておきたかったこと、四部の各本全体に対し立ち入った考証解題の執筆はもとより筆者の力の及ぶ能わざる所であるからである。他に、繰言する如く、観海堂本の多くは学界未開拓の本で、今後その真価がいよ〳〵発揮される性格を有し、幸にそのポジフィルムが斯道文庫に将来されて閲覧に供され、また故宮博物院にはネガフィルムが留められて、同院では希望者にはその複写に応ずることになっているから、今後その研究は容易になる筈である。研究者が原本を見ずにいきなり写真にのみ頼ることは甚だ危険である。マイクロ複写の発達普及は研究者の間に無自覚な弊害を増大していることを痛感しているが、観海堂本についてはその地理的障害から、何人も原本閲覧が容易というわけではないから、今後のマイクロ複写による調査利用の一助に資したいというのが筆者の念願でもある。従って本解題は勢い図書の形態上の解説に止った所が多く、忽率の間のノートによったのであるから、粗漏のあることを懼れている。本解題の不備浅陋は筆者も今後の調査研究によって充足するつもりであるが、多くの研究家がそれぞれの専門分野に於て、補正されんことを期待して止まない。

上記の如く、医書の部は観海堂本中最も量が多く、小島家宝素堂三代の蒐書で、多彩にして、旧刊本・旧鈔本のみならず、貴重な影写本を含み、楊氏蔵本としては逸すべからざる部門である。しかし時間の関係上、再度の訪書に於ても、たゞ二点の旧刊本を除て、その調査に手が及ばなかった。来次の訪書には時間の許す限り閲覧し、筆者の不注意から観海堂本中見残しの数点と共にその解題を補う豫定である。帰国後解題執筆に着手してみると、調査上筆者の不注意からの思いがけぬ見落しや曖昧や疑問が生じ、それ等は書信を以て院図書館主任蘇篤仁先生を煩わして原本にあたって頂き、或はその箇所のゼロックス複写を送って頂いた。多忙な館務の中を一々親切に応答された労に深く感謝する次第である。昭和四十六年早秋識。

凡　例

一、善本と称する中には、本そのものとしては稀覯とは言いぬが、書入等で注目すべきもの、楊氏校注書入手識を有する本、日本訪書志に著録された本は収録した。

一、分類排列は概ね「国立故宮博物院善本書目」（民国五十七年刊）「国立故宮博物院普通旧籍目録」（民国五十九年刊）に準拠した。国書は最後に「国書」の項にまとめたが、邦人撰漢籍注釈書は被注釈書の次に配した。

一、標題の書名に冠した＊印は、当該書が全巻マイクロフィルムに複写豫定書たることを示す。

一、各本の蔵書印はなるべく記した。たゞ楊氏蔵印は観海堂本には全部鈐され、その殆どが「楊印／守敬」「宜都／楊氏蔵／書記」（陰刻）「星吾海／外訪得／秘笈」「飛青／閣蔵／書印」（陰刻）の三種で、他に別種陰刻二種の「楊印／守敬」「瀛東／飛清／閣蔵／書記」「星吾東瀛／訪古記」「楊星吾／東瀛所／得秘笈」等の印が鈐されたのもあるが、その数が少ない。従って楊印については煩を避けて特記を省いた。

一、「経籍訪古志」「日本訪書志」「日本訪書志補」（王重民輯、民国十九年序刊）著録そのものゝ本は、その旨明記し、以下の解題では、前者を「森志」、後者を「楊志」「楊続志」と略記した。楊志・楊志補所収の楊氏題跋で、その手稿が当該本に附綴或は記されているものは、全文を引載した。楊志には誤刻が多く、手稿は楊志所収文と比較するに往々出入異同が見られ、また楊続志にも少しく脱落があり、同書は特殊出版であったので、流布少きが故である。

一、当該本の書影が「留真譜初編」「留真譜二編」に摸刻されている場合は「楊譜」「楊続譜」の略号を用いて明記した。前者には巻次丁次が附してあるので、巻一第六丁は「楊譜一6著録」の如く記した。両譜とも写真影印ではなく、臨写による摸刻であるから、実物と比較すると必ずしも正確ではなく、特に匡郭や界は単辺が双辺に、無界が有界になっている如き例が往々見られるから、使用上注意を要する。

一、奥書・識語その他の引用文の字は支障のない限り、通行活字体を以て組み、原文の改行は／印を以て表記した。

国立故宮博物院蔵楊氏観海堂善本解題

経部

易類

＊周易　六巻　魏王弼注　〔室町末〕写　三冊

黒無地表紙（二四・五×一六・六糎）。第三冊表紙に元題簽あり、「周易自五至六」と題す。単辺（二一・五×一三・七糎）有界六行、毎行十九写、注小字双行毎行廿二字内外。首に「周易上経乾伝第一」、次行下端「王弼注」、巻末「周易巻第六経二千三十四字注四千九百一字」と題し、毎尾題下経注字数あり。本文同筆の朱筆の勾点句点朱引、墨筆の訓点四声点を附す。欄外に少しく校字、僅かながら私益曰等の書入がある。巻末奥書に

天文廿一壬子年以足利学舎古写本書写／畢天曙山人誌

とあるが、この奥書は本文と異筆で墨色が落ちつかず、明治後の妄補たる疑念を抱かしめるものがある。巻末尾題の次に朱筆細書を以て「朱点一校早」、また綴ぢ目に「六ノ廿丁早　二月八日」の識語がある。首に「養安院蔵書」、第二冊首にのみ印文不明の鼎形朱印、表紙右下端に「三学」の墨署名を有する。養安院は江戸初の有名な医官で蔵書家であった曲直瀬正琳（慶長十六年歿）の蔵印で、曲直瀬家は歴代この蔵印を襲用したようである。楊続譜著録。

＊同　〔室町〕写　二冊

空押行成文様茶褐色表紙（二六・五×二〇糎）。江戸期の題簽に「易経古註乾（坤）」と。単辺（二一・六×一五・八糎）有界七行、毎行十六字、注小字双行。尾に鼎形印あり。毎冊首に目次を附し、首尾題体式前本に同じく、ただ巻六尾題にのみ経注字数あり。本文同筆の朱点朱引墨筆訓点を附す。この本或は森志著録求古楼蔵大永享禄間鈔本か。

＊同　〔室町〕写　三冊

渋引表紙（二六・七×一九・一糎）、題簽に「周易第一（第二）」と。単辺（二〇・一×一五糎）有界九行、各行十七字、注小字雙行。書眉を設け、幅三・五糎。首に目次を附し、首尾体式前本に同じく、たゞ首題第幾の下に巻内卦名を小字双行を以て注し、巻二・三の尾題下には経注字数がない。第二冊（巻三・四）は別筆であるが、ほゞ同時代の筆、或は配補か。朱筆の句点朱引勾点墨筆訓点を附し、書眉に所々校字や仮名音義の書入があり、巻三・四の別本には書眉行間の書入注が他巻よりやゝ多く、周易本義や元朱祖義の「周易句解」等の新注を引用抄録して首書する。首尾に「小島氏／図書記」印あり、小島氏宝素堂旧蔵。森志一・楊続譜著録。

＊同　六巻（欠巻一）　〔室町〕写　五冊

銀杏に雷文の空押文様渋引茶褐色表紙（二七・二×一九糎）。単辺（二〇・五×一四・八糎）有界七行、毎行十六字注小字双行。層格を設け、その幅四・七糎。卦画に木印を使用。朱点朱引朱勾点墨訓点を附す。巻一を欠き、巻二首に「周易上経泰伝

第二　王弼注」巻六末に「周易巻第六終」と題する。巻四・五の尾題下に経注字数がある。層格或は行間にゾ式の和文注の書入がある。また見返或は扉に巻内卦名の目次を記す。各巻尾に「誓誓」なる室町期の朱筆署名があり、巻首に「森氏開萬／冊府之記」（森立之）の印を有する。森志一に「明応間鈔本狩谷氏求古楼蔵」と著録。楊続譜著録。

*同　六巻　〔室町〕写　三冊

改装。後補紺表紙（三〇・三×二二糎）。襯紙を入れ補修を加う。巻五・六の両巻は別筆であるが、他巻とほゞ同時代の筆。単辺（二〇・六×一九・二糎、巻五・六は一九・三×一七・一糎）有界九行、各行十七字（巻五・六は八行十六字）、注小字双行。上層（幅四・八糎、巻五・六は六糎）を設ける。巻首「周易上経乾伝第一」、次行「王弼注」、巻末「周易下経巻第六 経二千三百十四字 注四千九百一字」と題し、巻二・三以外各尾題下経注字数を記す。朱筆のヲコト点（明経点か）・句点・朱引、墨筆の訓点・四声点濁点（朱筆の訓も交える）を附し、上層行間に書入が周密で、その多くは纂図互注本からの抄録で、また正義・本義・句解、元胡一桂の「周易本義附録纂註」等の新・古注を引き、他に校字・音義注や和訓についての各家の訓説を首書する所もある。卦画に木印を使用し、貞の字に欠筆があり、少しく楊守敬の校字附箋がある。森志一に「永正間鈔本　求古楼」と著録。狩谷棭斎旧蔵本。楊志補・楊続譜著録。守敬は別にこの本を新に影写せしめた副本を作り、それが後掲の如く国立中央図書館に蔵され、それには左の楊守敬の手書題識（楊志補所収文とはかなり出入あり）を附する。

周易王弼注六巻

按隋書経籍志称周易十巻王弼上下経注六巻韓康伯／繫辞注三巻又王弼略例一巻合数為十巻也新旧唐志云／王弼注七巻則並略例数之也宋志乃并上下経注属之韓康／伯則謬矣日本古鈔周易多只王弼注六巻彼国人称／為六朝之遺此本亦六巻毎半葉九行行十七字五／六両巻半葉八行行十六字毎巻後記経注字数第二第三末記／欄外層格節抄正義及朱子本義又纂図互注其体式／与森立之訪古志所載永正間鈔本一一相符顧末／見抄写年月然前四巻与後二巻筆法廻不／相同其為原補配本無疑或抄写年月原在書衣／而重装時去之也訪古志又称此本為求古楼蔵而亦無／狩谷棭斎印此則由棭斎収蔵絶富往々有未鈐／印者立之蓋従求古楼架上親見之而著于録也／攷此本文字注末亦頗多虚字其異同亦多与山井／鼎所称古本足利本合而亦間有与宋本合者篇中／凡遇貞字皆欠筆訪古志称係従北宋本鈔出／似為可信但不知其経文何以与唐石経多出入其注／文与岳刻本又多異拠岳氏令校梓時甄集／凡十餘互勘豈少北宋本而此本遠岳本之処／何以多不従此相台之末満人意者今以岳本一一／校対朱筆圏記之其異文不見於山井鼎攷文者如小／畜彖注何由知其未能為雨岳本脱其字困彖注唯／履正而能体大者也岳本無唯字震注故曰震来虩／虩恐致福也岳本脱曰字艮九三注至中則列夤矣／岳本脱夤字節九五注所往有尚也岳本脱所字／既済九三注故能貞也岳

本貞作興其餘無関宏／旨尤不勝記読者当自得之／光緒壬辰秋七月宜都楊守敬記於鄰蘇園（印）

この本が貞の字に欠画のある所から、森志は「蓋従北宋板鈔者」と推定し、守敬もやゝ疑を抱きながら「似為可信」と言っている。しかし貞・桓等の字を欠画するのは、室町後期の流行であるから、その祖本が宋板であったという証拠とするに足りない。

同　六巻附陸徳明音義　〔慶長一〇年〕刊　伏見版　古活字本　二冊

原装。空押行成文様濃茶色表紙。表紙見返裏ばりに古活字刷印零葉を使用。双辺有界八行、毎行十七字、注小字双行。版心粗黒口、「周易巻幾　（丁付）」。この古活字版は徳川家康が伏見に於て三要・承兌等に命じて刊行せしめた、所謂伏見版で、巻末に慶長十年の承兌の刊語一葉が附してあるが、此には之を欠く。「坊城蔵書」（朱陰刻）、「藤氏」「優将」（陰刻）等の印あり。菅家に属する東坊城家旧蔵本。経文には所々江戸初の墨筆訓点が加えられている。楊譜一3著録。

*同　一〇巻　魏王弼・晉韓康伯注　（略）魏王弼撰唐邢璹注　〔慶長〕刊　古活字版　清原宣賢点移点　三冊

後補黒色表紙（二七×一九・三糎）。双辺（二〇・二×一四・三糎）有界七行、行十七字、注小字双行。版心粗黒口「周易巻幾　（丁付）」。慶長中刊無刊記第一種(イ)種本。貞字欠筆。朱筆句点勾点墨筆訓点があり、眉上行間に校字音義注が書入さる（巻七・八は朱句点のみ、巻九・十は訓点なし）。巻二・四・六の巻末に次の奥書が移写されてある。

（巻二）写本云永正六年四月一日書写之同加朱墨訖　少納言清原朝臣／家本紛出之間先年以資生軒阿一点本先仮書写之了而近日古本尋出之校合之／処彼点大背先儒之訓点仍悉直付者也　大永三年五月四日　侍従三位清原宣賢

（巻四）永正六年六月三日終書写之功即加朱墨訖　給侍中清原朝臣／以証本校正了

（巻六）写本云永正六年八月四日書写之終朱墨点訖　給侍中清原朝臣

永禄七年甲子二月七日令遂書写朱墨之功者也　宗二六十七歳

この本の訓点・校注・音義は清原宣賢加点本をその門人林宗二が書写せる本によって移写せるものである。

この宗二手写宣賢加点本の原本については、嘗て川瀬一馬氏がビブリア一号所収論文に於て言及された。しかし現在その所在不明である。林宗二本の祖となった大永三年清原宣賢手鈔本は崇蘭館蔵として、又その影写本が吉家称意館旧蔵渋江抽斎蔵として森志に著録されているが、亦所在未詳で、他に宣賢加点周易が存しないから、清家点周易の考察上この古活字本の書入は頗る貴重である。「光源院」等の蔵印あり。楊譜一1著録。

*同　〔慶長〕刊　古活字版　三冊

後補濃紺表紙（二八・三×二二糎）。双辺（二〇・六×一四・三糎）有界七行十七字、注小字双行。版心小黒口「周易巻幾

（丁付）。慶長刊無刊記第二種古活字本。第一冊巻一前半のみ経文に朱ヲコト点・墨筆訓点四声点、行間に音義注の書入を有する。巻初一葉の眉上にある朱校字は守敬筆か。

＊同　慶長一〇年釈涸轍祖博跋・〔今関正運〕刊　古活字版　五冊

栗皮表紙（二七・七×一九・五糎）。双辺（二〇・五×一四糎）有界七行十七字、注小字双行。版心小黒口「周易巻幾（丁付）」。貞字欠画。巻六まで墨筆訓点の書入を有する。

本古活字本は末に慶長乙巳季夏日東下洛涸轍子祖博謹跋の刊語と共に、「関東下総住正運刊焉」の刊記（本文末裏葉 跋文の前の葉）がある筈であるが、どうしたことかこの本にはその葉に正運の刊記が刷られていない。本版は涸轍の跋文によれば注下に釈文の音釈を附した唐本を底本として、外史局本（清原本か）を以て涸轍が校訂を加えて梓行したと云う。

周易註　一〇巻　魏王弼・晋韓康伯注　井〔上〕通熙校　宝暦八年刊（江戸・須原屋伊八郎）　二冊

欄外行間に古本・足利本・石経・岳本・宋本・閩・監・毛本・釈文等との校合注並に正義より清人に至る注説の書入周密。書入者未詳。この校注は「七経孟子考文補遺」に拠るか。

＊周易正義　一四巻　唐孔頴達撰　〔室町〕写　七冊

茶褐色表紙（二七・七×二一・七糎）。題簽は江戸期の筆で「周易正義幾」、表紙右下端に原筆を以て「全部七冊之内」と墨書。単辺（二〇・四×一八・九糎）無界。毎半葉十四行、各行廿字。層格を設け、幅五糎。首に「周易正義序」、本文初行「周易正義巻第一」、第二・三行「国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔頴達奉／勅撰定（第二巻以下無定字）」、第四行「周易上経乾伝第一」（第二巻以下並に同じ）、最巻末「周易正義巻第十四」と題する。卦画は木印を使用。朱点朱引朱勾点墨筆訓点を附し、上層行間に句解等の新注を引く書入がある。第二冊以下は書入が少ない。首並に表紙に「新宮城書蔵」（紀州新宮城主水野忠央）の印あり。正義単行本。

＊同　〔室町〕写　七冊

縹色表紙（二六×一八糎）、元題簽「正義（序八論乾）幾」と題す。単辺（二〇×一四・七糎）有界十三行廿字。序にのみ層格を設け、幅三・五糎。巻首体式ほゞ前者と等しいが、たゞ首の「周易正義序」の次・三行に孔頴達の題銜廿一字あり、巻一の題がない。巻十二までは尾題下に字数を記す。朱点朱引朱勾点墨訓点（朱点は巻九まで、以下墨点、巻十四は訓点なし）を附し、序・巻一には上眉行間に書入が多く、新注も引く。卦画は木印を使用する。正義単行本。

「養安院蔵書」「江戸市野光／彦蔵書記」「林下／一人」「弘前医官渋／江氏蔵書記」「正健／珍蔵」の蔵印あり、後表紙見返に「養庵十世之孫正健子剛所持之本也」と墨記あり。曲直瀬正琳・市野迷庵・渋江抽斎等旧蔵本。森志一に「元亀天正間鈔本　渋江氏容安書院蔵」として著録。楊続譜著録。

＊同　〔室町〕写　七冊

縹色表紙（二五・五×二三・二糎）、題簽「周易正義注幾」（江戸初筆）と題す。単辺（一八・五×一四・四糎）有界十二行、行廿字。層格幅四・五糎。首尾題体式前々掲本にほゞ同じ。朱点朱引朱勾点。墨筆訓点を附し、層格行間に書入が多く、新注をも引き、行間に和注や印本との校字も有する。但し巻三以下は書入が少くなっている。毎巻首に「森／氏」印あり、森立之旧蔵。守敬の筆跡と思われる毛本（稀に養安本）との校字の朱筆附箋が多い。正義単行本。

帙題簽に「天隠禅師書周易正義全函七本」と題し、裏に「森氏」印を鈐し、帙中に白絹帛を貼り、山本北山・亀田鵬斎・市川寛斎の次の手跋がある。

睡仙堂主人所蔵天隠禅師所親写／周易正義文化乙丑正月十日　観希世／之珍也　北山信有題（印）（印）

古写本周易正義全十四冊賞鑒家云／京師建仁寺堂頤和尚天隠禅師之書／也其書遒勁其本古色蒼蒼実数／百年前之物也　丙寅夏五鵬斎識　（印）（印）

文化丙寅夏六月二十八日観上毛河世寧（印）（印）

この本天隠龍沢の手写とするが、書中にその証なく、筆蹟亦疑わしい。楊続譜著録。

*同　〔室町〕写　一四冊

濃茶褐色表紙（二五・七×一八・八糎）、「正義幾」と外題。包背装。匡郭なく、字面高さ約廿一・二糎。毎半葉八行、毎行廿一字、正義文小字双行。卦画は木印使用。首に「五経正義表」を冠し、以下の首尾題体式前掲諸本に同じく、巻第三尾題下にのみ「計一万二千八百二十二字」の字数を記す。正義表・巻一は別筆なるも、他と同時頃の筆写にかゝる。或は配補本か。朱点朱引（一部）並に墨訓点を附す。所々異本との校合注の書入あり。正義単行本。

首に「天師明経儒」「伏逢」の印あり、伏原家旧蔵。楊続譜著録。

*同　〔室町〕写　三冊

茶褐色表紙（二七×一九・二糎）、表紙に巻内卦名の目録外題を記す。界欄なく、序及び巻一の八論は字面高さ約十七・五糎、毎半葉八行、毎行十七字、他は字面高さ約廿一・五糎、毎半葉八行、各行廿一字、正義文小字双行。貞字に欠画あり。卦画木印使用。首尾題体式前掲諸本に同じ。巻九尾題下に狩谷棭斎が朱筆を以て「計九千七百一十字」と記し、「棭斎」の楕円形印を捺す。朱点朱引墨訓点を附し、印本との校合等の書入が少し存する。正義単行本。首に「森氏開萬冊府之記」、巻十四尾に「棭斎」印あり。「弘治永禄間鈔本　求古楼蔵」として森志一・楊志一著録。

*同　存六巻（巻七―一二）　〔室町〕写　三冊

香色表紙（二四・八×一七・五糎）。単辺（一七・九×一三・二糎）有界十二行、行廿字。層格幅四・二糎。題署体式前掲本に同じ。朱点朱引朱勾点墨筆訓点を附し、所々玉篇・広韻・古今韻会挙要・纂図互注・句解等よりの引抄を首書する。経・正

義大書単行本。表紙に「増島氏／図書記」「竹蔭書屋」、各巻首に「増島氏／暴書記」「森／氏」「子孫／永保」、尾に「問津館」の印あり。増島澧水蘭園父子・森立之旧蔵。森志一に「弘治永禄間鈔本　竹蔭書屋蔵」と著録し、「現存第五至第十四凡十巻」と録するが、今四巻を散ず。楊続譜著録。

*周易注疏　存首十三巻　〔室町〕写　伝鈔足利学校蔵

宋陸遜手識南宋越刊本　六冊

後補紺色表紙（二五・七×二〇・五糎）。単辺（二二×一六・五糎）有界八行、毎行廿字内外、注疏文小字双行、「疏」字大書。孔序・八論を欠き、巻九以下の二冊は別筆の後補本を以て配し、巻十三は雑卦第十一「小畜寡也注云」（低一格）にて止り、已下を欠く。首「周易注疏巻第一／」国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達奉／勅撰」（以下同じ）、尾「周易注疏巻第幾」と題する。朱点朱引朱勾点墨訓点を附し、朱墨にて異訓を旁書する。和注や句解云等を引く書入注も少しく存する。巻末題下に次の本識語が移写さる。

（巻四）午后歳未尽五日子遜東窻摽閲
（巻六）端平甲午歳除日三山東牕子遜摽閲
（巻八）乙未開歳五日子遜三山東牕摽閲
（巻十）乙未人日子遜於三山東窓
（巻十二）乙未立春日子遜三山東窻摽

即ち、この本の本文は、足利学校遺蹟図書館現蔵の宋の陸子遜（放翁の第六子）手識本たる南宋越刊本に拠った伝鈔本たることを知る。楊続譜著録。

周易兼義　九巻略例一巻釈文一巻　魏王弼・晋韓康伯注

唐陸徳明釈文　唐孔穎達疏　明永楽二年刊　五冊

大本。白綿紙本。双辺（二一・七×一五・五糎）有界八行、毎行十八字。疏文小字双行、毎行廿五字。版心白口、「周易巻第幾　（丁付）」。大字本。巻末に「永楽甲申歳刊」の小字の刊記を刻する。楊譜一4著録。

同　九巻　魏王弼・晋韓康伯注　唐孔穎達疏　明崇禎間

虞山毛氏汲古閣刊　六冊

巻八尾葉大半破損。全巻に朱筆句点が附され、朱（橙色に近い）・墨・硃（単疏古鈔本標起止大字）筆を以て、宋本・元本・古写本・養安本等との校字が書入されている。巻一末に「十一月五日句読卒羊記」の藍筆識語が存する。「仁多亭」「林印」等の蔵印あり。

程朱二先生周易伝義　零本（存巻三・四）　宋程頤伝朱熹本義　〔明初〕刊　覆元延祐元年翠巖精舎刊本　一冊

後補黒無地表紙（二三・八×一五・四糎）。左右双辺（二〇・一×一二・四糎）有界十一行毎行廿一字、注小字双行。版心小黒口「周易幾フ（僅に「周易伝幾フ」或は「周易巻幾」）（丁付）」。本版は国立中央図書館蔵存巻六一冊と共に、従来元延祐元年翠巖精舎刊とされて来たが、宮内庁書陵部蔵の同刊完本と比較するにその覆刻で、刷印また明前期にかゝる。明初建寧の坊刻版であろう。「壺隠軒」（墨陰刻）、「森／氏」の印あり。

周易経伝　二四巻附上下篇義・朱子図説・周易五賛・筮義各一巻　宋程頤伝朱熹本義　〔明〕刊　四冊

大本。白綿紙本。双辺（二一×一三・一糎）有界九行、毎行十七字、注小字双行。句点附刻。版心粗黒口「周易巻幾　（丁付）」、下象鼻に刻工名を陰刻。嘉靖頃の坊刻本。

*重輯東萊呂氏古易音訓　二巻　宋呂祖謙撰　王辛叟筆受　市野光彦（迷庵）重輯　寛政六年・文化二年写（光彦自筆）　一冊

丁子色表紙（二六・三×一八・一糎）。左右双辺（一九・二×一三・三糎）有界九行の印刷罫紙使用。毎行廿字、注小字双行。首に寛政六年甲寅夏四月（初め「文化乙丑春正月」と署してあったのを見せ消ちにて訂正）江戸市野光彦識（初め「謹識」と題し、「謹」見せ消ち）の提要自序を掲げ、本文首行を初め「重輯周易音訓巻上」と題したが、朱筆で「重輯東萊呂氏古易音訓巻上」と改め、第二・三行も初め「東萊呂祖謙選輯／金華王辛叟筆受」と題したが、朱筆で「東萊云々」の一行を見せ消ちにて削除。朱墨両筆を以て訂正する所が極めて多い未定稿である。巻末に森立之の左の手跋がある。

右重輯呂氏古易音訓市野迷庵手校而将附于梓／之本也如巻首提要亦是迷庵所撮抄迷庵初入／朱氏之学後開一活眼而専主張古学如此書未／入古学已前之作也／明治辛未抄冬廿五日枳園森立之書（印）〔印文「六十六翁」〕

「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森／氏」「問津館」の蔵印あり。

周易会通　存五巻　元董真卿撰　朝鮮旧刊　一冊

縹色表紙。裏打補修。双辺（一八・五×一二・五糎）有界十一行、毎行十九字、注小字双行廿二字。版心小黒口「易会通（小題）　（丁付）」。周易経伝歴代因革・程子説易綱領・朱子説易綱領・朱子易図附録纂註・雙湖胡先生易図各一巻を存する。元麻沙刊本のあまり精巧ならざる覆刻か。楊譜一9著録。

書　類

*古文尚書　零巻（存巻六周書泰誓首・巻七残巻）　旧題漢孔安国伝　〔江戸末〕影写古巻子本　一冊

紺表紙（三一・三×二五・二糎）。薄葉斐紙。字面高さ約廿四・五糎。毎半葉七行各行十四字、注小字双行。十三丁。冒頭に「東大寺写経裏反故紙ニアリ模」と注記。巻六は巻題を含む首三行半で「度孟津」の注文「十三年正月廿八日」に止る。巻七は洪範第六首より始って、経文「師君（通行本作尹字）惟日」に止って以下を欠き、旅獒第七は全巻を存し、次の金縢第八は首を欠き、経文「旦多材多藝不能事鬼神」に始り、大誥第九及び微子之命第十の経文「弘乃烈祖律」に止る。東大寺写経の紙背（元来は尚書の紙背に写経したものであろう）を影写したもので、原本はかなり破損していたと見え、その跡も模写してある。恐らく鎌倉旧鈔巻子本であったらしく、民字を欠画乃至は人に作り、古文異体字を使用すること極めて多く、音義注の旁記もあり、通行本と参差たゞならず、唐代の遺風をとゞめた校勘上極めて貴重な鈔本である。楊守敬の朱筆校字が上欄に多数書入されて

いる。この原本の所在は今不明であるが、民国三年羅振玉編刊「雲窗叢刻」中に「上虞羅氏蔵日本鈔本」として影印されている。但し同本には巻六の首三行半がない。原本にはヲコト点訓点が附されているが此には影写されていない。森志一に「旧鈔巻子本　塙氏温故蔵」として著録された洪範篇末一張というのは、恐らくこの僚巻で、この影鈔本に欠脱している箇所であるらしい。楊譜一10著録。楊譜守敬書入注記に「古鈔巻子本今在日本向山黄村家」と。なお楊譜一10に、これの僚巻と思われる「尚書盤庚上第九商書五」の題共初二行の書影を掲げ、「古文尚書盤庚第九一巻守敬所得八九百年間旧鈔也」と注記してある。しかしそれは現在観海堂に存していない。

同　存巻一一　明治一五年新井政毅影鈔東寺観智院蔵元亨三年鈔本　一冊

紺表紙。薄葉斐紙。巻首に「平安／東寺観智院所蔵／古文尚書古写本為横披之一軸／卦界字形以原本臨写了朱書乎古止点天旨如以以下略之」と朱書。ヲコト点は略してあるが、他は忠実な模写で、原本の巻末奥書は

元亨三年九月十六日以中家之秘本／馳筆了／則移点了／　左衛門権佐長頼

文暦二年六月廿五日以家之秘説／奉授納言尊閣家／　造酒正中原師弘

貞応三年三月廿二日見合家本／勘付了／于時落花紛々／　中原師弘

仁治三年四月十三日以累家之説／奉授大炊御門亜将閤畢／正五位下行造酒正中原朝臣師弘

建長四年四月九日以家説奉授／　一条中納言家了／　助教中原師弘

弘安第四之歳季秋十三之天以累祖／秘説授愚息筑前権守師国了／　助教中原師種

正応元年六月廿九日前左衛門佐顕家／兵庫頭兼助教中原師種

永仁五年卯月七日以累家秘説／授愚息師言訖／　散位正五位中原師国

同六年正月十日以家之訓説授申堀川大納言殿兼教訖／　大学権助中原師夏

元亨三年八月廿六日以家説候／中務卿親王御読訖／　内匠頭中原師利

文和三年七月二日以或家之秘説墨点了／喜久寿丸／　同五日一校了

貞和三年六月廿一日交合了／同六年正月廿七日読了

右の本奥書の次に左の影写の由来を示す奥書が続いている。

右古文尚書一冊原本為横披之一軸平安教王護国寺称東寺　観智院所／蔵也余偶在京師請観之即借得初丁一葉手写之其餘雇人使書／写了于時文化八年庚午七月二十三日　伴信友（花押）

明治十五年九月廿三日以屋代氏本写加数原氏校之新井政毅（印）

新井政毅は明治の蔵書家。この観智院本（天理図書館現蔵）は

隷古文尚書の古鈔本として江戸後期から学界に著名で、森志にも著録さる。この本と同様の影写本は宮内庁書陵部・大東急記念文庫にも蔵されている。

＊尚書　一三巻　旧題漢孔安国伝　〔室町末近世初間〕
写　清原家点本　三冊

淡香色表紙（二七×一九・八糎）、外題に「古文尚書自幾至幾」と、また表紙に「共三」と墨書、各冊首に目次を附す。字面高さ約廿一・五糎。毎半葉七行、各行十七字、注小字双行。首序「古文尚書序」、本文巻首「尚書巻第一」、次行「堯典第一　虞書　孔氏伝」、巻末「尚書巻第十三　経七百四十五字　注一千六百八字」と題し、各末題下経注字数を記す。朱筆の句点・ヲコト点（明経点）・四声点及び墨筆の訓点を附し、毎首題の眉上に正義巻次を首書し、行間眉上に音義注等を記し、家の訓説勘注或は蔡注等の新注を首書する所もある。次の本奥書が移写されている。

（巻九末朱筆）応永廿三年申丙仲夏廿八日以常盤井親王御本写点□／校合了　在□（この二行の下端祖本既に破損せるらしく、その跡を示してある。）

（巻十三末）寛喜三年五月二日書写畢／大学権助在判

貞永元年五月廿三日午刻加点了／校合了在判

建長八年三月廿二日以家説授申大学／助了　主計頭在判

弘安十年九月六日以家説授申前隼／人了　直講在判

弘長二年五月十一日奉受厳訓了然而／猶可奉受五条御説之由有御命仍不／及御奥書当時於貫首尚書亭読合／之間先所奉受之也一〻終功矣　在判

応安六年八月廿一日於禁裏講談今日終一部之／功而已　清原良賢

正嘉二年七月十七日重校或本了／散位在判

嘉歴二年五月十五日雨中校合新本了／家正在判

永享三年八月廿二日以清家秘本自加点畢／賀茂朝臣在盛

寛喜三年より弘安十年に至る清家累代の奥書は建仁寺両足院蔵梅仙禅師手写清家点本の奥書にも見えている。「吉家氏蔵」（医家吉田意庵）「天下無雙」「寺田／蔵章」「字士弘／号望南」「読杜／草堂」（寺田望南）の印あり。本鈔本は森志に「永享三年鈔本　求古楼蔵」と著録するが、永享三年賀茂在盛の手写本でなく、それに基づく室町末近世初間の重鈔本であろう。守敬もかく判断したと見え、森志への自筆書入に「飛青閣得伝抄本」と記している。楊続譜著録。

＊同　残本九巻（存巻一・二、七・八、九・一〇、一一—一三）　天正六年釈秀円等写　四冊

茶褐色表紙（二六・五×一八・三糎）。寄合書。単辺（一八・五×一四・五糎）有界九行、各行廿字、注小字双行。層格幅四・八糎。経文古文を用い、朱点朱引墨筆訓点を附し、上眉・行間に正義新注等を引いた書入がなされ、また守敬の校字書入も加えられている。巻九・十・十三の尾題下に経注字数を記す。第十三巻末奥書に

于時天正第六戊寅六月吉日　秀円（花押）

と。前掲本にも存する、巻頭の「古文尚書序」の題下に「此孔

子所作述尚書起之時代并叙為注之由故相承講之今依旧為音」、また本文首の「古文尚書堯典第一　虞〔原文作古文〕書　孔氏伝」の虞書の下に「凡十六篇十一篇亡五篇見存」の如き注が双行小字で加えられている。この本は一時二ケ所に分蔵されていたらしく、巻一・二の一冊の表紙外題に「古文尚書上　篁敦吉田氏留蠹書屋蔵本」、巻九・十の一冊の外題に「古文尚書下　篁敦吉田氏蔵本」、巻七・八、巻十一―十三の各冊外題に「尚書零本之乾（坤）森立之蔵本」と題され、前者には「行智」の印、後者には「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森／氏」「問津館」の印あり、森志一著録。森志に求古楼蔵として「巻末有天正六年六月吉日秀円題記及花押、毎半葉九行、毎行字数不同」と著録されているのは、この本の今失われている巻三至巻六を含む部分であろうか。第一冊（巻一・二）の前表紙見返の押紙に次の田沢仲舒の手跋がある。

蒙僧示古文孝経孔氏伝古鈔本古／文尚書二本経（孝経）近人参校文字是正／校勘博洽捺一朱印曰留蠹書屋儲／蔵経本予家蔵楚辞章句捺一朱印／曰留蠹書屋儲蔵子集巻端有篁墩／吉田氏手書手沢与孔伝校字者合／則知二書皆出於篁墩氏者敢不奇／賞尚書所用古文仿仏於顧野王玉／篇古鈔本所引者固為六朝間真本／多謝有餘匆々渉筆不尽飜縷磬折／辛丑正月　田沢仲舒

楊志補著録。巻十及び巻十三の巻末に左の光緒十八年守敬手書題識（楊志補収）が記されている。

右残本尚書孔伝存第七第八第十一第十二第十三五巻旧為日本容安書院所蔵見経籍訪古志冊首又有渋江氏印然則又為渋江道純物也余従森立之得之冊尾有天正第六戊寅六月吉秀円題記並花押当明萬暦六年也又按訪古志求古楼蔵此全本亦有秀円記（第十三巻末）

余既従森立之得容安書院蔵本二冊（第七第八第十一第十二第十三五巻）後又従市上得此二冊（第一第二第九第十）相其格式筆跡的為一書拠訪古誌所言是森氏尚見全部不知何時散落計余帰已十稔無復得全理為之太息光緒甲午六月宜都楊守敬記（第十巻末）

*同　一三巻（附上）五経正義表（附注）・尚書正義序・正義巻一　〔室町〕写　五冊

もと本文共紙表紙で、その元表紙は今扉になり、淡香色地布目表紙（二六・六×一八・八糎）がつけられ、裏打補修が加えられている。首に「古文尚書序」、本文巻首「古文尚書堯典第一、虞書　孔氏伝」と題し、毎末題下に経注字数がある。単辺（一八・四×一四・五糎）有界九行、各行廿字、注文小字双行。層格幅四・八糎。朱点朱引墨訓点を附し、経文は隷古文異体字が頗る多い。上眉・行間には正義・新注等から抄録せる書入が周密で、本文とは別筆の二手が加っている。序題下及び巻第一の虞書下の双注の書入は前掲本に同じく、大体に於て前掲本と同系である。

本鈔本に於いて特に注目すべきは、永徽四年長孫無忌等の上五経正義表（漢文注を附する。この注は他に類例がなく、亡逸せる緯書よりの引文が多いのは注目に価する）と尚書正義序及び正義巻一とを合せて一冊にして附してあることである。この

表・序にも層格行間に新注その他の諸書よりの抄録が多く書入れられてある。表（附注）・正義序・尚書序（附注疏）を標出せる書は他に足利学校遺蹟図書館蔵室町鈔本があるのみで、しかも此はそれと書入に至るまでほゞ同一であるから、足利学校系統本たることが判明する。筆者は従来度々論じて来たが、足利学校に於ては孝経直解・論語発題やその他の同校の経書に見られる如く、その書の全体を概括的に知らしめる教授上の便宜から、序のみを詳しくせるかゝるテキストを編纂使用したものと思われる。

首に「智福山／法輪寺」の印形朱印、巻尾に荷包形印（印文不明）が捺され、毎冊表紙の外題下に「九易（花押）」の墨署名がある。全巻に亘って楊守敬の校字附箋が存する。楊志補・楊続譜著録。後に記す如く、守敬がこの本を新に影写せしめ、光緒十八年の手書題識を附した本が国立中央図書館に蔵されている。

尚書　一三巻　旧題漢孔安国伝　〔慶長元和間〕刊　古活字第二種本　二冊

後補紺表紙大本。双辺有界八行、各行十七字注小字双行。版心粗黒口「尚書幾　（丁付）」。朱点朱引墨訓点を附し、毎首題の上欄に該当の正義の巻次を首書する。「緑静堂／図書之章」（杉原心斎）の印あり。

同　〔慶長元和間〕刊　古活字第四種本　三冊

後補紺色表紙大本。双辺有界八行、各行十七字、注小字双行。版心粗黒口「尚書幾　（丁付）」。首に「温故堂文庫」「大学校／図書之印」「払之印」等、第三冊尾に「昌平坂／学問所」「文化戊辰」の印あり。楊譜一12著録。

尚書正義　二〇巻　唐孔穎達撰　文化一五年近藤守重伝鈔南宋紹熙間刊本　文政元年手校　一〇冊

淡香色地刷毛目表紙（二七・二×二〇糎）。字面高さ約廿三糎。毎半葉十五行、毎行廿四字。金沢文庫旧蔵にして当時幕府の紅葉山文庫にあった、慎字までの闕画のある所から南宋の光宗紹熙年間の刊刻と思われる単疏宋槧本（宮内庁書陵部現蔵、大阪毎日新聞社及び四部叢刊所収の影印本あり）を、近藤正斎が文化十五年に伝鈔し、次いで文政元年に毛氏汲古閣本との対校朱筆書入を加えた本である。刻工名も写す。又楊守敬が閩本（明嘉靖李元陽刊十三経注疏本）と対讎せる朱筆校字の附箋も存する。首に「正斎蔵」、尾に「近藤／守重」「宇曰／重蔵」の印あり。楊志一・楊譜一14 15 16著録。原本に存する金沢称名寺の僧円種の加点識語（朱筆）及び近藤正斎の書写奥書（墨筆）と手校識語（朱筆）次の如し。

（巻一）文政改元六月朔比校

（巻二）文化十五年二月以紅葉山御文庫御本写之／近藤守重
文政改元六月五日　比校

（巻三）嘉元二年暮春廿五朝釣句読了　円種
文政改元六月八日　一校

（巻四）文化十五年戊寅二月借紅葉山御文庫御本写之／御書

物奉行近藤守重（印）〔印文近藤守重〕
守重按円種者入宋僧也見武州金沢称明寺鐘銘
嘉元元年歳次癸卯十月廿一日加朱点了　円種
文政改元六月八日　一校
使市俊卿校之　守重
（巻五）　文政紀元六月十一日　一校
（巻六）嘉元二年甲辰卯月廿二日拭老眼粗加麁点了／　仏子円
種流年六旬
文化十五年拝借紅葉山御本写之以為家珍／近藤守重（印）
文政紀元六月十一日　一校
（巻八）文化十五年戊寅以紅葉山御文庫本写之／御書物奉行
近藤守重／（印）（印）
文政紀元六月十四日一校
（巻九）　文政紀元夏六月十七日一校
（巻十）　文政紀元六月十七日校了
文化十五年三月拝借紅葉山御文庫御本写之／　御書
物奉行　近藤守重／（印）（印）
（巻十一）　文政紀元夏六月十九日校了
（巻十二）嘉元二年甲辰暮春十七日□加点了　円種
文政紀元六月十九日校了
（巻十三）　文政紀元六月廿一日校了
（巻十四）　文政紀元六月廿一日校了
（巻十六）　文政紀元六月廿三日校了
（巻十八）　文政紀元六月廿五日校了
（巻十九）　文政紀元六月廿五日了
（巻二十）　文政改元六月朔比校
文政元年戊寅六月以葉山御本写之

＊書〔集伝〕　六巻首目一巻　宋蔡沈撰　元至正二六年
刊（梅隠精舎）　四冊

後補淡香色表紙（二五・二×一五・六糎）。裏打補修を加う。題簽楊守敬筆を以て「元槧書集伝第幾冊」と。嘉定己巳蔡沈自序（自序の後に雙辺木記あり）・尚書纂図・朱子説書綱領（綱領末に木記刊語）・進書伝表を首冊とし、第二冊首に「書」、次行二格を低して「朱子訂定蔡氏集伝」と題して、孔安国序・漢書藝文志・孔頴達の説を集録して注を附し、書序に接する。本文巻首「書巻第一（隔八格）蔡氏集伝」と題す。双辺（二〇・七×一二・五糎）有界十一行毎行廿一字注小字双行。版心粗黒口「書幾（丁付）」。左上欄外に耳格あり篇名を刻す。蔡沈自序末の双辺木記に「梅隠書院／鼎新繡梓」と。綱領末の双辺木記の刊語に曰く、

両坊旧栞詩書集伝倶無音釈覧者／有遺恨焉本堂今将書伝附入鄱陽／鄒氏音釈詩伝附入金華許益之名／物鈔音釈各依名儒善本点校句読／仍取纂図賔之巻首大字栞行精加／校正無差庶幾読者豁然無疑矣与／坊中旧本玉石判然収書君子幸監／　至正丙午孟冬梅隠精舎謹識

本版は国立中央図書館蔵元建刊本（未見）の書影と比較するに

相互に覆刻の関係にある。この本印面やゝ磨滅のあとが見え、早印ではない。

全巻に朱句点、所々に朱墨両様の訓点を附し、送仮名は朱筆細字を以て加えられ、眉上に少しく朱墨校字の書入がある。首に「新宮城書蔵」の印、新宮水野氏丹鶴城旧蔵本。楊志補・楊譜一19著録。第一冊首に光緒十六年の楊守敬の次の手書題識三葉（楊志補収）を附綴する。

元槧蔡氏書集伝六巻首蔡氏自序／序後有木記云梅隠書院鼎新繡／梓八字下載纂図一巻又載朱子説書／綱領（疑即蔡抗表所称朱子問答一巻）又有木記称両坊旧／栞詩書集伝俱無音釈覧者有遺／恨焉本堂今将書伝附入鄱陽鄒氏／音釈詩伝金華許益之名物鈔／音釈各依名儒善本点校句読仍取／纂図寘之巻首大字栞行精加校正無差庶幾読者豁然無疑矣与坊中／旧本玉石判然収書君子幸監至正丙午孟冬梅隠精舎謹識（拠此知為合刊詩集伝之記）又載蔡抗進書伝表第二冊首標／題朱子訂定蔡氏集伝所録孔安国／序漢書藝文志孔穎達之説皆有／注文今按以下則朱子之説末有今定此／本云云知此書本朱子之志下接書序毎／条皆有注（与蔡抗表有小序一巻合）此如朱子之詩集伝／於詩序皆逐条弁駁也再下為本書／首行題書巻第一（無経字）蔡氏集伝按／今本題書経巻之一蔡沈集伝又刪除／其書序弁説朱子綱領及蔡抗進書／表皆為謬妄其経文異者如洚水敝予／不作降（拠蔡氏注称作降者為古文則集伝本作洚可知）益稷敖虐是作不作傲金縢惟朕小子／其新逆不作親迎（拠注知新当作親是蔡氏訂定之辞其正文必仍作新逆作迎者則又後人臆改）酒誥惟殷之迪諸臣惟工不作百／工武成一篇有注今考定武城一篇低一格無／注惟垂拱而天下治後夾注十餘行与今本／大異且増多百餘字観此知蔡氏雖改定／此篇猶以旧文為主今本則両篇並載注文／繁複非注書体又其注文如禹貢九河／既道注斉威塞八流以自広不作斉桓（蔡氏避宋諱自応作威）／皆当拠以訂正以還蔡氏之旧至其中亦間／有訛字則由坊刻不校之過読者当自得之

又按宋元之際所刊書籍多有木記称某／書院校刊今日蔵弆家直以為当時官／本其実皆坊肆所託如此本綱領後／木記云云決知非官刊之書

又此本木記既云附入鄱陽鄒氏音釈而／全書実無音釈当時坊賈故作此語／欺人但今日則又深幸未附音釈尚存蔡／氏原本面目又此書前所載纂図不著作者姓名後有／合沙先生云云按経義攷合沙漁父鄭東／卿自号東卿有尚書図一巻此必其所／作也／光緒庚寅夏四月宜都楊守敬記（印）

＊書〔集伝音釈〕　六巻（欠首目・巻五・六）　宋蔡沈集伝　元鄒季友音釈　〔元〕刊　四冊

淡香色地表紙（二二・九×一四・七糎）、外題「書巻第幾」。裏打補修を加う。双辺（一八・七×一二・六糎）有界十二行、各行廿二字、注小字双行。経（陰刻）・伝・音釈（枠陰刻）を墨囲を以て標識。版心細黒口「書伝（或は書）幾（或は幾フ）（丁付）」。本文巻首「書巻第一」、次行低四格「蔡氏集伝（隔五格）鄱陽鄒季友音釈」と題し、尾題「書巻幾」。巻一に十五丁分の補写あり。第一冊の初めの方にのみ朱点朱引の書入が存する。「仁和寺／真光院」「真光院」（墨印）、「小島氏／図書記」印。

宝素堂蔵として森志一、楊譜一23著録。書陵部本と同版。

書蔡氏伝旁通　六巻　元陳師凱撰　朱萬初校　〔近世初〕

伝写元至正五年余氏勤有堂刊本　四冊

後補濃紺色表紙（二九×二一・六糎）。単辺（二四・五×一八・三糎）無界十三行、各行廿五字。注低一格。「至正乙酉歳四月／余氏勤有堂印行」の巻末原木記をも移写。同版本の伝鈔本。第一冊には朱句点朱引墨訓点を附するが、他は所々あるのみで、第一冊には書入も少し存する。

尚書通考　一〇巻　元黄鎮成撰　〔近世初〕伝写元至正刊本　四冊

後補濃紺色表紙（二九×二一・六糎）。単辺無界十三行、各行廿五字、欵行全て前掲本と等しうする僚巻。巻一にのみ朱句点朱引墨訓点が附されている。元至正五年余氏勤有堂刊書蔡氏伝旁通及び元至正間刊尚書通考は共に内閣文庫に存する。

詩　類

＊毛詩　残本八巻（存巻三―六、一五・一六、一九・二〇）　漢毛亨伝鄭玄箋　〔室町〕写　四冊

後補濃縹色表紙（二七・三×二〇・四糎）、「古写零本毛詩幾」と朱書外題。第一冊前表紙見返に「毛詩古写残本四」なる書題簽が貼附され、森立之とおぼしき朱筆で「此七字市野迷庵所書」と注記。単辺（一八・五×一五・四糎）有界九行、各行廿字、注小字双行。層格幅四・八糎。首行「毛詩巻第三」、次行「鄘柏舟詁訓伝第四　毛詩国風鄭氏箋」と題署。尾題「毛詩巻第二十」次行「〇大凡三百五篇千百四十九章七千二百八十句／十四万四千七百八十言有其義亡其辞者又有／六篇不在三百／五篇数中也」と記す。朱筆の句点朱引勾点、墨筆の訓点を附すること詳細、行間・眉欄に書入注あり、正義・音義・詩伝その他よりの抄録、印本との校字を記す。巻末書写奥書に

〇毛詩全部之終　学侶之旹於足利書之

と。足利学校系の写本である。首に「江戸市野光／彦蔵書記」「林下／一人」（陰刻）「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森／氏」「問津館」の印。森志一に求古楼蔵として著録。

＊同　二〇巻　〔室町〕釈宗訓写　一〇冊

丹表紙（二五・六×一七・一糎）、江戸期の書題簽に「周詩幾」と。単辺（一七・二×一三・七糎）有界九行、各行廿字乃至廿一字、注小字双行。層格幅五・一糎。本文巻首「毛詩巻第一」、次行「周南関雎詁訓伝第一　毛詩国風鄭氏箋」と題署。巻十尾題前に篇章句数経注字数あり、尾題「毛詩巻第二十」、この次に前掲本と同文の篇章句数がある。たゞ「千二百四十九章」に作る。この字数の次に左の書写奥書を有する。

四国与州宇和之庄多田長寿寺宗訓書之

朱筆の句点朱引勾点墨筆の訓点を附し、眉欄行間の書入は正義・陸徳明音義等を引いて周密である。但し巻九以下は書入が少くなり、また本文とはやゝ時代の下る別手の首書が加る。また楊守敬の朱筆校字の附箋が貼ってある。「龍□」（陰刻）、「碧□」（鼎形）、「椒斎」の印あり。求古楼蔵として森志一、楊志

補著録。国立中央図書館には、楊守敬が新にこの本を影鈔せしめ、校字を書入し、手書題識を附した写本が蔵されている。後記参照。

＊同　〔南北朝〕刊　一四冊

後補紺色覆表紙（二六×一五・八糎）、今扉となっている江戸時代の表紙には冊内所収目次が記さる。裏打補修を加う。巻首「毛詩巻第一」、第二行「周南関雎詁訓伝第一」、第三行低二格「毛詩国風（隔七格）鄭氏箋」と題す。尾題下経注字数を記す所あり。左右双辺（一九・三×一二・七糎）有界六行、各行十六字、注小字双行。版心線黒口「毛詩幾　（丁付）」。朱句点朱引朱ヲコト点（明経点）・墨筆の訓点四声点を附すること詳細。眉上行間の書入も周密で、釈文・広韻・爾雅その他による反切音義・校合注、正義・陸機疏（呉陸機撰毛詩草木鳥獸虫魚疏）その他の引用、点本云々等の訓説の書入で、その筆ほゞ三手、室町期の古い筆蹟が最も多く、一手は江戸初に下る。新しい書入には新注が引かれている。しかし書入は巻が進むにつれ減少する。本旧刊本は伝本比較的少く、書陵部・静嘉堂文庫・成簀堂文庫・早稲田大学・両足院（有欠）本が知られ、旧刊本古文尚書正平本論語と共に、我が国伝来の古鈔本のテキストに基づく翻刻である。訓点・書入は概ね清原家本の系統に属する。首に「新宮城蔵」の印。楊譜一30著録。

同　〔慶長〕刊　古活字第二種イ種本　五冊

後補濃紺色表紙。双辺有界八行、各行十七字、注小字双行。版心小黒口「毛詩幾　（丁付）」。所々江戸初の朱ヲコト点（明経点）墨訓点（江説を附記）や反切校合の書入がある。「留灌書屋／儲蔵経本」（吉田篁墩）「森／氏」印。巻尾に「篁墩吉氏永保家蔵（印、前掲の蔵印）」なる篁墩の自署があり、巻一首題下の「天明景午歳購／毛詩活字本十冊」の墨書も篁墩手識なるべく、朱筆校字書入は恐らく篁墩が記入せるものであろう。楊譜一21著録。

又　五冊

経文にのみ江戸初の墨筆訓点四声点濁点が書入されている。

＊毛詩注疏　存八巻（存巻一上・四上下・五・六上下・一二上下）　漢毛亨伝鄭玄箋　唐孔穎達疏　〔近世初〕写　五冊

空押行成空色表紙（二六・五×一四・二糎）。単辺（二一・二×一六糎）八行、各行十五字、注疏文小字双行、各行廿二字。首に詩譜序あり、本文首行「毛詩注疏巻第一上」、次行より三行にわたり、二格を低して「国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達等奉／勅撰」、第四行低四格「毛詩国風」、第五行「周南関雎詁訓伝第一」と題する。尾題「毛詩注疏巻第十二下」。巻一上にのみ朱句点朱勾点を附し、朱筆校字があり、また全巻にわたって楊守敬が校字を朱記し、巻四下末に「辛巳八月六日校一過守敬」なる朱筆識語がある。首に「多福文庫」（陰刻）印。森志一に求古楼蔵として著録、森志曰く「此本係影写宋本其体裁正与足利学所蔵宋本易書礼記注疏符山井鼎作七経考文

曰未得此種本故於詩春秋唯以南宋附釈音本校之耳則此本雖曰残欠亦最可貴珍也」と。楊譜一33著録。

＊詩三説合録　一巻　山口景徳編　〔江戸〕写　文化一四年市野光彦手識本　一冊

本文共紙表紙（二七・三×一九糎）、仮綴。字面高さ約廿糎。毎半葉九行各行廿字。首に天明辛丑（元年）三月六日の自序。〔元〕永禄丁丑（十年）初秋十八日浅見安正（絅斎）識の「書正統監本詩書集伝後」、安永丙申（五年）冬十二月朔丸子弘篤（宇井默斎）識の「攷定詩伝或問」に自説「読詩大旨」を附せる、程朱学派の立場よりの詩経の解題。景徳、号は剛斎、大阪の人、儒の外に禅学・神道を修めたが、程朱学を主とし、兼ねて越後流兵学を究め、業成って塾門を開き、後津和野藩に仕えた。享和元年没。本書未刊。攷定詩伝或問の末に左の市野迷庵の朱筆識語がある。

朱子之書多為後儒所乱、山崎氏究攷始復其旧也／独詩集伝、末加是正、以其無所取于原也、明正統中所刊詩／集伝附綱領弁説、音注亦未失朱子之旧、／絅斎之言可証也、（以下上欄ニアリ）此本亦附綱領弁説音注与楚辞集註合默斎所論依此而正之則亦可復朱子之旧矣、」予老難于／騰写姑書絅斎默斎之説于巻末以告読集伝者、／文化十四年丁丑六月三日市野光彦書于青帰書屋

〔韓〕詩外伝　一〇巻　漢韓嬰撰　〔明嘉靖〕刊（沈弁之野竹斎）　二冊

後補紺色表紙（二四・七×一六・二糎）。白綿紙本。左右双辺（一九・八×一三・六糎）有界九行、各行十七字。版心白口「詩外伝幾　（丁付）」、下象鼻に所々「宇」の刻工名あり。首に元至正十五年の銭惟善の韓詩外伝序、序末に「呉郡沈弁之／野竹斎校雕」の篆書木記あり。本文首「詩外伝巻第一」、次行低十格「韓嬰」と題す。全巻に藍筆の句点が附され、巻末に「丙寅初秋念六日句読了惜陰主人泰」の藍筆識語がある。「帰鳥／草堂」（陰刻）「茂父」「森氏開萬／冊府之記」等の印あり。楊志一・楊譜一36著録。

同　朝鮮刊　覆明沈弁之野竹斎刊本　二冊

黄色帛表紙（二七×一七・五糎）、序の首一丁欠。左右双辺（一八・七×一三・五糎）。前掲本の覆刻であるが（原木記も覆刻）、序と本文五丁のみは粗黒口。刻工名なし。室町末近世初間の墨筆訓点（朱筆も交ゆ）の書入あり、且つ江戸時代の毛本・印本・楊本等との校合書入も加っている。求古楼蔵として森志一著録。

＊韓詩外伝　一〇巻　漢韓嬰撰　〔江戸〕刊（京・勝村治右衛門）　狩谷望之手校本　五冊

大本。棭斎が群書治要・詩攷・藝文類聚・北堂書鈔・列女伝・新序・説苑・家語・呂氏春秋等の引文と対校せる朱墨両様の校語を書入。後表紙見返に

此書加朱墨所校正係于五師棭斎先生／手沢今而観之考証精博足以視先生学／問之淵源矣／　天保乙丑晩春　簡斎逸人識

なる朱筆識語がある。首に「原／子祥」（陰刻）。「止止斎／図書記」「田荘／之印」（陰刻）等の印あり。

＊韓詩外伝考二巻・同補遺一巻・同考異一巻　岡本保孝撰　〔江戸末〕写　一冊

淡香色表紙半紙本。内題なく、標題は題簽による。毎半葉十行、各行廿字。朱点朱引を附す。「温故堂文庫」（和学講談所塙氏蔵印）「根岸氏之蔵／書不許散在」（根岸武香）等の印あり。

礼　類

＊周礼　一二巻　漢鄭玄注　清楊守敬影鈔宋刊巾箱本　一二冊

紺表紙（一二・七×八・五糎）。薄葉紙。字面高さ約九糎。毎半葉九行、各行十七字、注小字双行。注末の重言（陰刻）、弁（音義）は墨囲の印判使用。巻初首行「周礼巻第一」、次行「天官冢宰第一　周礼　鄭氏注」と題す。楊志一著録。南宋刊巾箱本の影写で、守敬曰く「中有重言無重意故標題略之其文字往往与岳本及明刊徐氏本合注疏本皆不及也江陰繆筱珊編修愛不釈手乃影摹一通而以原本帰之」と。繆荃孫の解題蔵書目録たる「藝風蔵書記」巻一に、「周礼十二巻　宋刊巾箱本鄭氏注有重言（二字陰文作）無重意刻印俱毎半葉九行　毎行十七字　日本曼殊院旧蔵有印白文」と記された本がそれであろう。この影摹本から考えるに、本版は足利学校遺蹟図書館蔵南宋刊本と同版である。

＊戎車考　山県大弐撰　〔江戸〕写　一冊

縹色表紙（一七・四×一八・六糎）。字面高さ約廿一・五糎。毎半葉十四行、各行廿六字。「森氏開万／冊府之記」の印。

儀礼　一七巻　漢鄭玄注　唐陸徳明釈文　明陳鳳梧校　明正徳一六年序刊後修　狩谷棭斎手校　四冊

栗皮表紙（二六・四×一六・二糎）。毎冊の「儀礼春（一冬）」（黄筆）及び所収篇目（白乃至朱筆）の外題は狩谷棭斎の筆。白綿紙本。単辺（二〇×一三・二糎）有界十行、各行廿字、注小字双行。版心粗黒口「儀礼巻幾　（丁付）」。首に「正徳辛巳春正月甲子後学盧陵陳／鳳梧謹書」の「重刊儀礼序」及び篇目あり、本文巻初首行「儀礼」、次行十二格を低して「漢鄭玄註」第三行頂格「士冠礼第一」と題する。たゞ首題「儀礼」の下三格（「巻第一」）が剜去された跡があり、この本は印面かなり磨滅した後印である。全巻に朱筆句点を附し、眉上の朱筆校字は恐らく棭斎なるべく、他に別手の墨筆校字の書入あり。首に「棭斎」「狩谷／望之」（陰刻）、尾に「湯島狩／谷氏求古楼／暴書記」の印。森志一・楊志一・楊志補・楊続譜著録。第一冊表紙見返しに左の守敬手書題識（楊志補収）あり。

此本校顧亭林所云儀礼脱経文五処皆在唯郷射士鹿／中下脱注文

経注不及宋厳州本及明徐氏本鍾仁傑本而勝於閩監毛／本又按陳氏既刻此本不脱経文何以其後刻注疏本並脱／経注而不覚遂後来閩監毛皆沿其誤

儀礼注疏　一七巻　漢鄭玄注　唐陸徳明釈文　唐賈公彦疏　明汪文盛等編校　〔明〕刊　八冊

淡香色表紙（二七・二×一六糎）。単辺（二〇・二×一三・二糎）有界十行、各行廿字、注疏文小字双行。版心白口「儀礼巻幾　（丁付）」。首序の第一・二行に「儀礼注疏序／（低五格）唐朝散大夫行大学博士弘文館学士臣賈公彦撰」、本文首行「儀礼注疏巻第一」、第二行八格を低して「漢鄭玄注唐賈公彦疏明汪文盛高瀛傳汝舟編校」と題する。本版は陳鳳梧校刊本と行款を同じうし、字様も相似しているから、それに基いたか、或は底本を同じうするものと云われている。

この本少しく補写あり、全巻に藍筆の句点、朱引朱勾点、藍・墨両筆（各々別筆）の校字その他の注が首書書入され、墨筆には「朱先生曰」「今按」等が見える。「小島氏／図書記」「江戸小／島氏八／世医師」「尚浜／之印」（陰刻）「字／学古」「俟宋」（鼎形）の印あり。小島家旧蔵。森志一・楊志補・楊続譜著録。前表紙見返に左の守敬の手書題識（楊志補収）あり。

此本我　朝校刊家皆不見其板式文字皆与陳鳳梧注疏本合／未知誰為後先序下題賈公彦撰刪等字疑此又在陳本後也　守敬記

*礼記　二〇巻　漢鄭玄注　〔室町〕写　一〇冊

後補淡葡萄色空押行成表紙（二六×一八糎）、改装、天地が少しく裁ってある。第一冊の扉（江戸時代の補葉）に「礼記　法雲寺」と墨書。単辺（一九・五×一四糎）有界八行、各行廿字内外、注小字双行。墨訓点を附し（なき所もあり）、所々朱圏点を附す。本文首行「曲礼上第一　　礼記壱　鄭氏註」と題する。但し巻六・七・十三は大題が上にあり、「註」を「注」に作る巻もある。巻五・巻十四尾題下経注字数あり。僅かであるが、上欄行間に音義・校合注の書入があり、正義・句解等を引録する。訓点はほゞ博士家点によるが、少しく異なる。求古楼蔵として森志一、楊志補著録。守敬はこの本の副本を別に影写せしめ、その本は後述する如く、国立中央図書館に蔵され、それには左の守敬の光緒十九年の手書題識（楊志補収）あり。

古鈔本礼記二十巻日本古鈔経書唯礼記与／左伝為最少山井鼎攷文所拠只一通森立之／訪古志所載只二通此其一也余於日本竭力／捜求古鈔本易書詩皆有数通左伝有巻／子本独礼記除此本外只有残本二通蓋彼土／習此経者亦少也毎半葉八行行十七八九二十字／不等首題曲礼上第一次題礼記一再下鄭氏注／合於大題在下古式而巻六巻七巻十三此三巻／均大題在上不知何故巻一及巻十四末記経注字数第一冊／首有法雲寺三字蓋古刹之旧籍也拠森立之／訪古志此為狩谷望之求古楼所蔵顧無被／斎印記求古楼蔵多不鈐印而皆有／古銅色紙包裹之是其証也篇中文字与山井／鼎攷文合而亦間有不合者如曲礼三賜不及車／馬注卿大夫士之子攷文云古本之子作子之非是此仍／作之子幼子常視勿誑注考文云古本作誑毋誑／欺也亦非此無上誑字全書如此甚多則知考文所拠本／偶有誤衍非古本尽如此也至若曲礼三賜不／及車馬注受車馬而身所以尊者備矣各本脱受／字則必賜之几杖注亦明君尊賢各本尊誤貪／執友称其仁注執友執同志者也各本脱下執字年長／一倍注今四十則二十者有子道矣各本則誤於孝子不服／闔注礼男女夜行以燭也各本脱礼字不許友以死

注／死謂執仇讎也各本謂誤為主人固辞注再辞曰固／辞也各本脱辞也二字尊客之前不叱狗注不敢厭／倦各本脱厭字二名不徧諱注言徴不言在言在不言徴／各本下二言字皆作称与疏不合凡此皆各本誤而此独是／者全書如此甚多此第就曲礼一篇言之而洪震煊為阮文達重校此／経或従或駁或略之未足見古本之長也是当／別為校議以発明之至其注脚虚字毎以／之字当也字此是鈔胥者省筆所為無関／宏旨存而不論可也／光緒癸巳春二月宜都楊守敬記（印）

＊同　存巻五・一二　〔南北朝室町初間〕写　二冊

後補茶色刷毛目表紙（二九×二二・三糎）。単辺（二三・五×一八・五糎）有界七行、各行十六字、注小字双行。首行「礼記巻第五」、次行「月令第六　礼記　鄭氏註」と題す。朱筆ヲコト点、墨筆訓点（朱筆を交ゆ）声点を附し、音義校注を旁記する。清原家点本系。

同　二〇巻　〔慶長〕刊　古活字第一種本　六冊

後補紺表紙大本。双辺有界八行、各行十八字、注小字双行。版心黒口「礼記巻幾　（丁付）」。「藤／氏」「俊将」「坊城蔵書」（陰刻）等の印記あり。

＊又　清家点移写本　十冊

大本。経文にのみ朱筆ヲコト点墨筆訓点四声点を附し、音義・校注その他の書入あり。毎巻首題の眉上に正幾疏幾と首書し、毎尾題下に経注字数を記す。諸巻末に左の清原家奕世の奥書を移写する。

（巻七）寿永元年季夏十七日朝間雨中以秘説授良業別駕了御判

≡　建治二年卯月第三候授申訓説於五藺外史了主水正兼直講御判

（巻九）御奥書云／嘉吉三年九月十五日授宗賢—訖／今日石清水放生会也　清原御判

永正十六年十月廿八日以唐本書写之以家本加朱墨最為証本者也／少納言清原在判

寿永元年七月九日以秘説授良才子了　御判

建治二年四月七日授申五藺外史了　直講良枝—

弘安十年三月廿七日以家説授申洞院相公羽林了　散位頼季

（巻十）寿永元年七月半亭午授秘説於良才子了　御判

建治二年四月九日授申五藺外史了　良枝—

寛永二年二月廿八日加朱墨点訖

（巻十一）寿永元年七月廿四日見合或証本粗渉猟正義了　御判

能州別駕清原良業奉受説了　判

建治二年四月十二日授申五藺外史了　主水正良枝—

（巻十五）寿永元年九月十六日授能州別駕了　御判

建治二年四月廿六日授申五藺外記殿了／主水正直講良枝

（巻十七）以唐本書写之以累代秘本加朱点墨点了

永正十六年十一月十二日　少納言清原判

寿永元年十月十日授秘説於良—別駕了大外史御判

建治二年四月廿九日授秘説於五藹外史了　直学士御判
以右御奥書本校正了　宣賢
（巻十八）寿永元年十月廿二日以秘説授良別駕了　御判枝
建治二年四月晦日以秘説授申五藹外史了　主水正良―
（巻十九）以唐本書写之以累代秘本加朱墨了／永正十六年十一月廿七日　少納言清原判
正応五年正月廿六日授申前書儒了　国子助教判
（巻廿）保〔延〕三年四月廿一日於永昌坊亭見合或本了　東市正頼滋
五月九日於大秦亭〔読〕了　年十六
嘉応元年初冬望日授家説於近業真人了此書／去保延三年所受先人之訓説也但不審／之所々以或書并正義頗加微点也雖招南堂之客嘲叶法海之孝意歟努力々々莫成懈倦／朝議大夫兼宮囲令大外史勢州外刺史御判頼業也
寿永二年仲春四日廃務之日及晩陰一部廿巻授秘説於良―別駕了／　年十三頼季（この五字次行「五藹外史了」の下にあるべし）大外史御判幸（マヽ）〔業〕也
建治二年五月三日授申五藹外史了　上林蔵氷御判
徳治二年端午前日書写了
寛元二年仲春四日授良季了　散下御判頼―
文永十二年二月廿八日授良―枝了　大外史御判良季
即ち永正十六年清原宣賢が、唐本を以て書写した本に清原頼業以来累代家説の点本を以て加点校合せる本によって、寛永二年移点書入せるものである。この宣賢手写手点本（巻一欠）は現に宮内庁書陵部に蔵され、その梅仙禅師の近世初伝鈔本は建仁寺両足院に存する。この本と同様に清家本によって加点書入された礼記古活字本には他に京都大学蔵伏原家旧蔵本・大東急記念文庫蔵本がある。森志一・楊譜二78著録。

＊蔡氏月令補　増島固輯　〔江戸〕写　一冊

淡茶色表紙（二三×一六・三糎）。字面高さ約十八糎。毎半葉十行、各行廿字。癸巳（天保四年）冬至後一日の自序あり。序に曰く、「陳留後人元和鉄翁所編蔡氏月例博捜遐稽諸唐宋所引殆旁括無遺矣独恨杜台卿玉燭宝典多引之而其書唯我存而久佚于彼故在其采収所滲（中略）玆粋輯獲一百餘条並訂其攷拠未允者録以附焉（以下略）」と。増島固、号は蘭園、幕府の儒官。その学は深遠にして該贍。天保十年歿、年七十一。

礼記中の一篇たる月令を注釈せる漢の蔡邕の「月令明堂論」「月令章句」「月令問答」は夙に亡逸した書であるが、蔡雲・王謨・臧庸、馬国翰・黄奭等の清朝考証学者によって輯逸が企てられた。しかし同書を多く引いている「玉燭宝典」は中国に亡んで、我が国には伝存したが、僅に前田家尊経閣の古鈔本一部が伝わるだけであったから、清儒等の知る所ではなかった。早くから「玉燭宝典」に注目していた蘭園（その手写本慶應義塾図書館蔵）は、同書に引用された月令章句一百餘条を以て元和鉄翁輯の蔡氏月令を補い、また月令問答の文十四条を摘録して附録となしたのが本書である。たゞ本書は刊行されなかったので、人に殆ど知られることなかったのは残念である。先行の

蔡氏月令輯本に玉燭宝典所引文を補入して刊行したのは近人葉徳輝の「月令章句四巻」（観古堂所著書収）であるが、此はそれより一世紀前に既に成就されていたのである。

*大戴礼記孔校補正　三巻　小島知足（成斎）撰　万延元年森約之令写　一冊

首に天保屠維大淵献之歳（十年）陽月福山源知足書の自序並に引拠各本目録あり。清戴震校本、汪中撰大戴礼記正誤、畢沅撰夏小正攷注、洪震煊撰夏小正疏義、阮元撰曾子注釈、王引之撰経義述聞、玉燭宝典、群書治要等を用いて、清孔広森撰大戴礼記補注に補正を加えた書である。巻末森約之の左の隷古文（次の引用は通行字に改む）を多く用いた手跋がある。

万延紀元歳次庚申孟夏上旬使／門人今尾清美討醇整写是自小島成／斎負丘山人知足字伯止父艸稿而／脱稿之第一最初於是始得広布天／下知足又号奇觚楼心画斎俗称五／一又称不惑道人其彼原草勛行草／混糅補落乙倒塗訛記旁覧閲甚難／今繕写大為了了耳衡堂己奄源森／約之以礼父記於華佗衕正名亭心／声斎之茘軒（以下世三字朱書）万延元年四月十九日之／未時已丹校比其原草竟商龕約之／自五帝徳至勧学半余安政丁巳冬／月自書其半巳半今令弟子庸写芝／青□堂□殷董斎識

森約之の朱墨両様の朱校首書が書入されている。

春秋類

*春秋伝　三〇巻（左氏単伝本）〔近世初〕写　一〇冊

丹表紙（二八×二二糎）。双辺（二一・三×一五・六糎）粗黒口の古活字印刷罫紙を使用。有界七行（界は烏糸欄）、各行十七字。巻八以下は前半と別筆。本文首行「春秋伝隠公第一」と題し、巻八以下は「春秋左伝文上第八」の如く題する。末に「春秋経伝集解後序」を附し、巻卅以外は経文を載せず、伝文のみ。朱点朱引・墨訓点・声点を附し、音義を朱書する。巻末に「辛巳十二月五日校一過畢惺吾」の楊守敬の朱識語があり、守敬の朱筆校字が書入されている。楊志一著録。守敬曰く、「其分巻与唐石経同中欠北宋諱当是拠北宋経伝本録出」「凡伝文多与石経及沈中賓本合（沈本之顕然訛誤者此亦不与之同）而間有与諸本絶異之処則往往与山井鼎所記異本合洵為北宋善本也」と。

春秋経伝集解　三〇巻　晋杜預撰　楊守敬令影鈔金沢文庫旧蔵書陵部現蔵鎌倉書写清家証本　三〇冊

空色表紙、大本。薄葉斐紙。

又　三〇冊

紺色表紙、大本。薄葉斐紙。以上二部は、金沢文庫旧蔵宮内庁書陵部現蔵、北条実時・篤時・顕時・貞顕が父子孫三代にわたって書写し、清原教隆・直隆・俊隆から清原家累代の家説を伝授された証本の影鈔で、毎巻末にその由来の奥書が存する。本鈔本が隋唐の遺風を残した左伝集解の全巻完具の最古本たることは既にあまりにも有名であるから、縷述の必要はあるまい。紙幅の都合上、各巻奥書等の紹介を省略する。楊守敬は本鈔本の影鈔副本をこの二部の外にも写さしめ、国立中央図書

館にも一部を蔵し、後に説明する如くそれには守敬の校字書入と手跋が存する。たゞ守敬の影鈔本には原本に存する訓点や紙背注は写されていない。また守敬は「留真譜二編」に於て二冊をあてゝ、この本の毎巻の首尾題及び奥書を摸刻して収めている。森志一・楊志一・楊志補・楊譜一37・楊続譜著録。

＊同　零巻（存巻一）　影鈔旧鈔巻子本　一冊

茶色表紙（二六・三×一八・五糎）。薄葉紙、字面高さ約廿一糎。毎半葉六行、各行十五字、注小字双行。双鉤の影写本。桓公二年から十六年に至るが、その間連続せず、欠脱がある。即ち、巻一桓公第二経二年伝二年の「古之命也」の伝注文に始り、「是以民服事其上而下無覬覦下」の行の右半に止って以下を欠き、経三年の首から経六年の経文「九月丁卯子」まで来って以下を脱し、また伝十五年の「雍糺殺」の伝文に始って、伝十六年の「秋七月公至自伐鄭」に止る。楊譜一38 39 裏著録。楊譜に起・止各二行の書影を摸刻し、注記して曰く「右左伝古鈔残一軸黄麻紙書較楓山本似尤邃古柏木貨一郎所蔵余借得全摹之特図其起止如此」と。この原本は詳かでないが、書体から察するに、奈良朝、或は平安前期を降らぬ古鈔本らしく、或は唐人写か。守敬は楊続譜にいかなる根拠からか、「北斎人書左氏伝共七祇一百四十六行　惺吾記」と注記している。楊譜は起として、本影鈔本の冒頭の句より前にある

之失徳寵賂章也鄀鼎在廟章執甚／焉武王克商遷九鼎于雒邑

九鼎殷所受夏九鼎

の桓公二年の伝文二行を、また楊続譜はこの二行を含め以下十二行、楊譜一38はこの本の巻首の句に接属する前六行を摸刻標出しているが、この本に影写されていないのはいかなるわけであろうか。この二行からこの本の首に至る間が連続して原本にあったのであろうか。柏木探古の蔵であったというが、今所在未詳であるから、この影鈔本は極めて貴重な存在と言わねばならぬ。楊守敬の朱筆校合書入が眉上に記されている。

＊同　三〇巻（欠巻一・二）　〔室町末近世初〕伝写宋嘉定六年臨川郡守江公亮跋刊本　一〇冊

後補黒色覆表紙（一九・七×一三・七糎）。改装、天地裁断さる。外題は「臨川本左伝(篇目)」と守敬朱筆。元表紙は本文共紙で、「左伝幾」と題書。単辺（一五・九×一一・五糎）有界九行、行廿字、注小字双行。全巻に朱点朱引墨訓点（朱筆振仮名を交ゆ）を附し、正義その他よりの抄録を首書し、林堯叟の左伝句解直解からの引文、私云、和文注等の書入があり、また楊守敬の朱筆校字を存する。首に「光明院」の印あり。本文首行「春秋経伝集解荘公第三　杜氏　尽三十二年」と題し、巻末尾題に「春秋巻第三十 経七千九百五十九字 注四千四百九十一字」と。経注字数を欠く尾題もある。太康元年の後序の次に左の祖本の原刊語を写してある。

凡三十四萬五千八百四十四字／ 経十九万八千八百八十二字 注十四万六千九百六十二字

臨川旧有レ板行二五経三伝一比二他一郡者為二精一好一歳／久浸底二磨滅一幾不レ可レ読公亮来守二是邦一一見為／レ之慨然雖レ承二凋

獘之餘一独念二聖一経有二此善本一豈三／可使二之至レ是故於下倥一
偬不レ暇レ給レ之中上首治二斯亥一／選二庠序生員一重加二校讎一樽二
節用度一銖二積寸一累以／供二其費一蓋閲歳始弁凡更新七百七十
板為レ字／三十八万五千有奇剔墁七百三十八板為レ字／四萬九
千有奇総用銭百萬有奇自今更永其／伝俾二学者覧観一無亥豕魯
魚之謬殆非二小補一嘉／定六禩閏月上澣三衢江公亮謹記

即ち、この本は宋嘉定六年臨川郡に於て江公亮が上梓せる宋槧本の重写で、森志巻二に

又宋嘉定癸酉刊本　足利学蔵

巻末有嘉定六年閏月上澣三衢江公亮跋、首有足利学校正伝院常住記、求古楼蔵旧鈔本、乃依此本重鈔者、

と著録された狩谷棭斎旧蔵本が此であろう。この本の祖本たる宋嘉定江公亮刊本については新楽定編「足利学蔵書目録」や近藤正斎の「右文故事附録巻之四」所収現存真本の目録にも著録されているが、その後流出して足利学校には現存しない。足利学校から流出した本であったかどうかはわからぬが、明治にはまだあったのか、竹添光鴻著「左氏会箋」に参照され、島田翰の「古文旧書考」巻二にその解題が存する。しかし現在その行方が不明で、同版本も他に所在を聞かない。正斎並に翰の著録によれば、本版は毎半葉八行各行十七字とあれば、この重鈔本は影鈔ではなく、行款を変えて伝写したものである。内閣文庫蔵享禄二年鈔本（欠巻一八・一九、附釈音左伝注疏巻一）もこの江公亮刊本の伝鈔で、本写本と行款を等しくし、書入も共通するものがあり、祖本を同じうするものと思われる。川瀬一馬氏は「足利学校の研究」末に新楽の「足利学蔵書目録」を翻印し、その存佚を注記された中に、同目録の「春秋左氏伝　全十冊　首ニ足利学校正伝院常住ト誌シ末嘉定六年閏月上澣三衢江公亮カ跋アリ」とあるのを、「末嘉定云々」以下を「（以下注記略す）」と削って、この本を「五山版。今、安田文庫」と注している。即ちその五山版とは安田文庫旧蔵で現在斯道文庫に蔵されている、足利学校庠主閑室三要の書入を有する我が国の旧刊本を此にあてゝいる。同本にも足利学校正伝院常住の墨書があり、巻末に江公亮の跋文が附写されているからであろう。川瀬氏説によると、旧刊本を宋刊本と誤認していたことになる。氏より早く、島田翰が既に「山君彝作考文、誤引以為宋本、経籍訪古志載以為宋嘉定癸酉刊本、足利学蔵、実即是本也、」（「古文旧書考」巻三）と言っている。かゝる宋本と旧刊本との誤認は江戸時代往々あったことであるが、この場合誤認と軽々に即断すべきではない。江公亮刊本の重写二本とも足利学校に於て書写された写本類に共通する特徴を有し、三要が旧刊本に跋文を附写しておいたのも、学校に公亮刊宋本があったからではあるまいか。此も後考を俟つ外ない。

同　三〇巻　〔南北朝〕刊覆宋刊本　市野光彦手識本
一三冊

渋引茶褐色表紙、大本。左右双辺有界八行、各行十七字、注小字双行。版心白口、「左氏幾　（丁附）」。巻一・二は朱筆ヲ

コト点墨筆訓点を附せる清原家点本系の江戸時代写本を以て配補さる。巻十二より巻廿三初に至る伝文には室町末近世初間の墨筆訓点が附される。巻末に別紙六葉を補って、宋嘉定中興国軍学刊本巻末に附された経伝識異・列銜・聞人模刊語を写し、末に「右春秋左氏伝之后者円光寺／学校為就安老翁令補益者也／天正三年林鐘九日／三要翁（印）」の閑室三要の手跋を摹写してある。しかし円光寺学校は慶長になって設立されたのであるから、天正の年記は誤写ではないかと思うが、後考を俟つ。次に文化十四年市野迷庵の手跋が附してある。

旧板左氏伝十五本（もと巻に作り、見消を以て訂）覆宋本而／模刻者流伝絶少世間所希見／足利学所蔵有三要老翁之跋／友人狩谷氏所蔵及此本。（終見三種）是而已／也曝書之次模写三要之跋粘於／巻末且贅数語／文化丁丑迷庵市野光彦誌（印（市野光彦））（印（俊卿））

この本は迷庵歿後渋江抽斎・森立之の蔵になった。楊志一著録。

＊又　清家点移点本　一五冊

後補茶褐色空押行成表紙。改装、天地少しく裁断さる。室町期の清家の朱筆ヲコト点、墨筆の訓点声点校字音義注等の書入が周密に移写され、眉上に朱墨両様（各々別筆）の書入がある。伝存の本五山版にはこの本と同様の清家点が移写書入されているものが多い。巻末に前掲本に補綴された三要・迷庵手跋に至る興国軍刊本の識異・列銜・刊語を臨写し、次に余氏万巻堂刊本、元至元後戊寅日新堂栞行本の春秋集伝凡例・図・世次を江戸初頃写せる十五葉が附綴されている。首に「杜氏／之珍」等の印あり。楊志一著録。

この旧刊本春秋経伝集解の底本となった宋刊本が何であるかについては、森志が「蓋依蜀大字本重刊者、与李鶚本爾雅同種」と、北宋蜀本と考えたのに対し、楊守敬は「余覆校之慎字欠筆知其決非北宋本其後借得楓山官庫所蔵興国本行款匡廓字体皆与此本同略校数冊文字亦無異乃知此本即覆興国本特所拠祖本失載考異聞跋耳（森立之未見楓山官庫本故不知此本原于興国）」と、南宋嘉定年間興国軍学刊本の覆刻と断定した。事実宮内庁書陵部蔵興国軍学刊本と対照すればそのしかることがほぼ認められるから、現在此が通説となっている。しかし巻末の集解識異・校者名列銜・嘉定丙子聞人模跋文を覆刻していない。覆刻の際に原刊記を省くことは往々あるが、何故重要な識異を削ったかゞ問題となる。守敬は底本となした本が偶々それを欠いていたからと云う。此に対し島田翰は、江公亮本の覆刻と主張して曰く、

予嘗試以正中本、較諸江公亮本及秘府興国軍学本、雖間有異同、大躰則頗相類、蓋其根原、則皆出於北宋閩民字本也、又以是書（筆者注則是旧刊本）、校興国本、界欄字形、皆是一様、始疑其出於玆、及精審之、而知其不然也、巻第九、文公十一年伝注、江公亮本云、其兄弟仲季、興国本則仲作伯、又巻第三十、哀公十四年伝注、愍賢者失所条、及病謂民貧困条、江公亮本、愍字民字、並因北宋閩民字本、作愍民、而興国本改作愍民、蓋方江氏入梓時、他皆塡画、其改之未尽者、独留玆二処也、

又其異同与興国本所坿識誤不相符、而是書異同、及闕筆、悉与江公亮本符、睹此可以知、是書之直原於江公亮本、江公亮本、興国軍学本、並從北宋闕民字本出、無復可疑矣（「古文旧書考」巻三第十八丁）

と。この闕民字北宋監本とその覆刻たる正中刊本なるものは実は翰が妄想捏造せる架空の書たることは長沢規矩也博士が夙に指摘された通りである。巻九の条、旧刊本の「仲」の字を興国軍学本は「伯」に作り、翰は江公亮本は旧刊本と一致すと云うが、前掲の江公亮重鈔本を検するに、「伯」に作ってあって、翰の言と合わず、旧刊本の「仲」は或は誤刻と見るべきか。旧刊本に見える民の字の闕画は実は末画の半分が少し闕けている如く見えるのは雕法の不手際から生じたもので、それを闕画と称するのは牽強も甚しい。要するに翰は江公亮本を実際見たわけでなく、前記の三要の旧刊本巻末附写の江公亮跋を材料となし、翰が旧刊本と興国軍刊本との対讎上発見せる差異にヒントを得て、北宋闕民字本正中本なるものと共に、江公亮本の解題も想像を逞しうした所産ではなかろうか。江公亮本の翰の解説は創作にすぎぬとしても、その実在は疑うことができず、同本と興国軍学本とが共に先行監本の覆刻たる可能性はあり得ることである。仮にそうであるとすれば、経伝識異を欠くこの旧刊本の直接の底本は江公亮本であったということも考えられぬではない。いずれにせよ、江公亮本が再び人間に出現せぬ限り、此も想像の域を脱せぬ話である。

同　三〇巻　〔慶長〕刊　古活字第二種(ロ)本　一五冊

後補紺色表紙、大本。双辺有界八行、行十七字、注小字双行、版心粗黒口「左氏幾　（丁付）」。東北大学等蔵本と同版。朱点朱引墨筆訓点（朱筆送仮名を交ゆ）を附し、正義等を抄録首書し、朱筆の校字書入がある。末に寛永刊本巻末の寛永八年堀杏菴の跋文を写して附綴する。「小島氏／図書記」「弘前医官渋／江氏蔵書記」の印あり。

同　〔慶長〕刊　古活字第一種本　一五冊

後補紺表紙、大本。双辺（二一・八×一七糎）有界八行、行十七字、注小字双行。「伝」の見出しは墨囲陰刻。版心小黒口「左伝幾　（丁付）」。朱引藍筆句点墨筆訓点を附する。足利学校遺蹟図書館・慶應義塾図書館等蔵本と同版で、足利本には慶長十七年の庠主寒松の識語があるので、それより前の刊行にかかることがわかる。「恵林什書／門外不出」の蔵印あり。

春秋正義　零本（存巻四至巻九）　唐孔穎達撰　〔江戸末〕写　伝鈔正宗寺蔵単疏本　一冊

褐色布目表紙、大本。字面高さ約廿一糎。毎半葉十五行、各行廿五字。宋刊左伝正義単疏本として有名な宮内庁書陵部に蔵される、文化十三年近藤正斎が常陸国正宗寺蔵本を伝鈔せしめた卅六巻本（昭和六年東方文化学院刊影印本、四部叢刊続編収影印本あり）に拠る重鈔零本である。この正宗寺本は天文年間の写本で、その原本は金沢文庫蔵宋刊本であった。金沢文庫蔵本は夙に亡逸し、正宗寺本も亦天保年間焼失した。この本には

楊守敬が毛氏汲古閣本との対校朱筆書入を加えている。楊譜一52著録。

附釈音春秋左伝註疏　六〇巻　晋杜預注　唐孔顥達疏
陸徳明釈文　〔元〕刊明正徳修　二四冊

後補淡香色表紙（二六・七×一五・六糎）。白綿紙。首に孔顥達撰春秋正義序、本文首行「附釈音春秋左伝註疏巻第一」、第二・三・四行低一格「国子祭酒上護軍曲阜縣開国子臣孔顥達等奉／勅撰／国士博士兼太子中允贈斉州刺史呉縣開国男臣陸徳明釈文」と題する。左右双辺（一八・八×一二・五糎）有界十行、各行十七字、注小字双行行廿三字。版心白口「釈充幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名を刻し、左欄外に耳格があって、「某公幾」と記す。但し補刻には耳格がない。明の補刻の多い版で、補刻の版心の上象鼻に「正徳六年」「正徳十二年」の補修年が刻されている。間々補写の葉があり、第一・二冊には朱句点の書入がある。首に「島田氏／雙桂園／蔵書記」の印あり、島田篁村旧蔵本。

本版は世に宋建刊十行十三経注疏本と称される一つであるが、この十三経注疏は宋刊に非ずして、その刻工名から見て、南宋末建刊本を元の大徳頃に覆刻したものであることは、長沢規矩也博士が既に考証された通りである。この左伝注疏は南宋建安劉叔剛刊本（足利学校遺蹟図書館蔵、有欠本に故宮博物院・北京図書館蔵本あり）の覆刻である。楊守敬はこの外に本版の残本（巻一至十六、巻廿二至卅五）を有し、それは日本から購得せるものでなく、守敬の手書題跋が附されている。後転じて呉興張氏適園収蔵となり、さらに現在国立中央図館に帰している。楊譜一53著録。

春秋穀梁伝　一二巻附考異一巻　晋范寧集解　唐陸徳明音義　（考異）清楊守敬撰　清光緒刊（古逸叢書本）
一冊

守敬の朱筆校字の書入がある。この摹刻本の祖となった原本は金沢文庫旧蔵柴野栗山蔵宋紹熙年間建安余仁仲万巻堂刊本であるが、古逸叢書は原本に直接基いたのではなく、狩谷棭斎が松崎慊堂と謀って、阿波国書生をして影鈔せしめた「毫髪尽肖宛然如宋槧、今猶在求古楼」（森志巻二）という影写本であった。この影鈔本は後転じて向山黄村に帰していたのを守敬が向村より入手したものである。しかしこの影鈔本は観海堂蔵本中には現存していない。栗山の蔵した余氏万巻堂宋刊本は阿波国文庫に挿架されていたが、戦後の徳島光慶図書館の火災で失われた。

＊同　二〇巻　晋范寧集解　唐陸徳明釈文　永禄二年写
三冊

後補渋引濃茶褐色覆表紙（二六・五×二〇・二糎）、江戸時代の題簽に「穀梁伝（永禄二年之写本　自一至六　称意館蔵本）」と。元表紙は本文共紙。毎半葉十行、各行廿一字（巻七以下七行十六字）、注小字双行。首に序を冠し、本文首「春秋穀梁伝隠公第一（起元年尽三年）　范甯集解　楊士勛疏」、巻

七以下は第一・二・三行にわたって「監本春秋穀梁註疏僖公卷第七（起元年尽五年）／（低一格）僖公（○名申恵王十八年即位）／（低四格）范甯集解　楊士勛疏」と題する。尾題は卷六までは「穀梁卷第幾」、卷七以下は「監本春秋穀梁註疏某公卷第幾」と題する。序のみは疏文を附するが、以下は疏がなく、注疏本から集解注のみを録出せるものである。第二冊末（卷十三尾）に、「永禄（二年カ）十一月五フ」の識語がある。恐らく書写奥書であろう。初めの部分に所々朱句点朱引、僅に墨筆訓点が附されている。穀梁伝の我が国の旧鈔本は他に所在を聞かない。「称意館／蔵書記」「称意館／図書章」「吉家／氏蔵」（吉田意安）の印あり。第一冊前表紙見返に楊守敬の左の手書題跋（楊志補収）がある。

此穀梁伝注蓋従宋監本註疏録出／唯序文並疏録之餘只録伝文第一至第／六標題春秋穀梁伝自第七至第二十并称監本春穀梁伝校其中文字雖有脱誤／而不沿明閩監毛之誤可喜也守敬記

＊春秋集伝釈義大成　一二卷　元兪皋撰　元後至元四年刊（日新堂）　五冊

淡香色表紙（二六・二×一五・四糎）、江戸時代の題簽に「春秋釈義仁」。首に泰定丁卯呉徵序、釈義引用諸家名氏、春秋集伝凡例があり。凡例の後に「至元後戊寅／日新堂栞行」の双辺両行木記を刻し、次に程子朱子説春秋綱領、三伝序、程子伝序並に胡氏伝序があり、本文首「春秋集伝釈義大成卷之一」、次行低七格「後学新安兪皋述」、毎卷尾「春秋集伝釈義大成卷之幾」（或は卷第幾）と題する。双辺（二〇・二×一二・三糎）有界十行、行廿字、注小字双行行廿七字。版心線黒口「春秋（或は「春秋伝」「春秋集伝」）幾　（丁付）」、左欄外耳格に「某公」と記す（耳格を欠く葉もある）。卷十二の尾一葉補写。首に「官庫」「佐野／氏／珍蔵」の印。森志二に求古楼蔵として著録。楊志二・楊譜一57著録。本版は他に所在を聞かない。帙の裏に次の椹斎の手抄を有する。

読書敏求記云兪皋春秋集伝釈／義十二卷先取各家注釈以己意／採集于前申之以程子之言後詳列／三伝胡氏伝使得備覧而尋繹／其説元刻中之佳者

孝経類

＊古文孝経　（単経附孔序）　文禄三年写　一冊

丁子色表紙（二四・八×二〇・三糎）。字面高さ約廿一・三糎。毎半葉八行、行十三字。古文孔経序に直接して「古文孝経孔氏伝／開宗明義第一」と題す。朱筆ヲコト点（明経点）・墨筆訓点四声点を附し、巻末に本文と筆蹟を異にする各々別筆の左の二行の奥書を有する。

文禄三年五月中旬令誂之　全真（行□□）

此本全真ヨリ申請者也喜悦〻〻千丸

＊同　（単経附孔序）　〔近世初〕写　一冊

水色表紙（二六・三×二〇・三糎）、「孝経」と題する丹色題簽を貼附。字面高さ約廿二糎。毎半葉十行、行十五字。首「古文孝経序　孔安国」と題し、序後一行をおいて「古文孝経孔氏伝／開宗明義章第一」と題す。墨筆訓点を附する。

*同　（単経附孔序）〔室町末近世初間〕写　一冊

本文共紙表紙（二三・五×一六・七糎）、厚手斐楮交漉紙、両面書、綴葉装。字面高さ約十九糎。毎半葉六行、行十二字。墨筆訓点を附し、朱筆を以て異訓等を記す。経文に隷古字を使用する。

*古文孝経　旧題漢孔安国伝　〔近世初〕写　一冊

濃縹色表紙（二五・八×二〇糎）。字面高さ約廿・五糎。毎半葉六行、行十二字、注小字双行。墨筆訓点を附す。章題下に経字数（欠く所もあり）、尾題下に経注字数あり。首葉上端に朱印があるが、墨で塗抹してある。この本或は森志著録の求古楼蔵の「一簽上有称意館印者（毎半葉六行行十二字）」に該当か。

*同　〔江戸前期〕写　吉田篁墩・楊守敬手校本　一冊

後補紺色表紙（二八・一×一八・八糎）。字面高さ約十九・五糎、毎半葉九行、行十五字、注小字双行。朱点朱引墨訓点を附す。章題下経字数を記す。「留靈書屋／儲蔵経本」の印あり。吉田篁墩が墨・藍・朱筆を以て書入を加え、亠（巻子本）ㄈ（宣賢点本）宀（水戸密蔵院本）の略号を以て対校し、その他諸書から孔伝孝経の関係記事を抄録首書すること周密で、対校に使用せる本の奥書を巻末に左の如く記している。

（巻子本）　弘安二年九月十三日書写之早（花押）

（密蔵院本）　弘治四年戊午孟春卅日（如此松平）　密蔵院本（朱）

（宣賢本）　本奥書云文亀二年二月日感得之朱墨両説清説無相違頗可証本者乎　左大史小槻宿禰時元判

（宣賢一一一）天文六年二月廿五日講始三月廿九日講畢六ケ度　環翠軒宗尤（以下枝賢に至る講読識語あり省略）

以上三本中、巻子本は所謂弘安本で、福山藩侯阿部家所蔵、東京震災で焼失したが、福山藩刊の摹刻本があり、宣賢本は建仁寺両足院等蔵本の系統本で、密蔵院本のみはその原本の所在が明かでない。また楊守敬の校字その他の朱筆書入も存し、遊紙に藍筆の篁墩、朱筆の守敬の次の識語がある。

（寛政二年当乾隆五十五年（朱筆））寛政二年庚戌五月購此古文孝経鈔本一巻（藍筆）

*同　〔室町末近世初間〕写　一冊

後補紺表紙（二七・五×二一糎）。単辺（二二・二×一八・三糎）有界七行、行十四字、注小字双行。章題下経字数、尾題下経注字数あり。第四章まで墨筆訓点四声点を附し、述有等の校合注を旁記し、第五章の一部に朱ヲコト点を附するほか、以下は白文。博士家点本系。この本は森志二著録求古楼蔵「大字本（毎半葉七行行十四字）」に該当か。

*同　（欠孔序）　〔室町末〕写　一冊

淡香色表紙（二四・七×一六糎）、裏打補修が加えられている。単辺（一九・二×一二・五糎）有界七行、行十九字、注小字双行。朱点朱引墨訓点を附す。孔序を欠き、章題下に経字数、尾題下に経注字数あり。「小島氏／図書記」「弘前医官渋／江氏蔵書記」の印あり。

*同　〔室町末近世初間〕写　一冊

後補紺表紙（二七・三×二〇糎）。単辺（二一・九×一六・

四糎）有界九行、行廿字、注小字双行。朱点朱引墨訓点四声点濁点を附し、所々朱ヲコト点を加う。章題下尾題下に経注字数を記す。首に「宗／恕」「有馬氏／溯源堂／図書記」、尾に「通継」の印あり。森志二に求古楼蔵として著録。

＊孝経直解　三巻（欠巻二）　〔室町末〕写　一冊

後補紺表紙（二七×一九・三糎）、襤紙を以て改装、元料紙高さ廿五糎。単辺（一八・六×一三・七糎）有界九行、行廿字、注文小字双行。層格を設け、その幅三・九糎。朱点朱引墨訓点を附す。孝経直解とは、孔伝及びそれを注せる隋の劉炫の孝経述議を素材として室町時代に邦人が編せる孝経の一テキストで、足利学校蔵本が名高い。その構成は、述議を割裂挿注せる孔序を「孝経直解巻第一」となし、刑昺正義の章旨等を引用して各章旨と伝文の字句を説明せる「五等」「語録曰」以下「侏儒」に至る五十四条の標目の注解を「孝経正義巻之二」とし、次に巻三として経・伝の全文を収める。この本は巻二を欠く。高野本或は高本（高野山宝寿院蔵鎌倉鈔本）との対校標記が少し入っている。首に「小島氏／図書記」、尾に「尚浜／之印」「字／学古」の印、巻末に「勝貞」（墨筆）「勝直」（朱筆）の署名あり、森志二に求古楼蔵として著録。

同　三巻　〔江戸末〕影鈔永禄三年鈔本　一冊

淡香色表紙（二七・三×一九糎）、外題「影古鈔古文孝経」。単辺（二一・九×一六・五糎）無界、毎半葉八行、行廿四字、注小字双行。巻末本奥書に、

于時永禄十二己巳季十二月十三日午刻書写早

と。この永禄十二年写本（この原本の所在未詳）を影鈔して、それに森立之が弘治三年奥書直解本（東洋文庫現蔵）を以て対校書入せる渋江抽斎旧蔵本が斯道文庫に存する。「小島氏／図書記」「古籍珍／書借／得鈔写」「森印／氏之」等の印あり、後表紙見返に「森立夫旧蔵本辛丑夏五購」の墨書がある。

故宮博物院に現在蔵する観海堂本の古文孝経旧鈔本は以上の十部であるが、「経籍訪古志」への楊守敬書入には、「日本古文孝経旧鈔本甚多余所得凡十五本」と記してある。

＊孝経名義考・孝経考証　苦匏散人撰　（考証）海保元備（漁村）撰　〔江戸末〕写　一冊

後補紺表紙（二二・七×一七糎）。二部の書を合綴。名義考は双辺（一七・二×七・八糎）有界十行版心「聿修堂蔵」と刻せる印刷罫紙を使用。自序に、

孝経有二本曰古文曰今文諸家概以今文為正也／古文者諸家或以為劉炫所偽造也此論未必然也／雖然古今俱有得失矣不可用此而廃彼也唯如作／者則千載之下可得而考乎先哲弁之極多諸家／説者不帰一也唯恨余性質痴冐臆鶻突言不去／口伏待諸家之弁解今承命於／　儒学教諭流水先生講此書於函崎之高堂焉因編／此注書於柳嶼之茅屋云爾弘化二年歳次乙巳嘉／月念四日／苦匏散人譔并書

孝経に関する和漢の諸家の説を列挙輯集する。撰者の伝は明かでなく、文中吾友鈴木嘉云と引く。嘉は越後の人、号は順亭、

嘉永元年年廿四にて歿、孝経疏証并解題考異の著あり、一時多紀家に学んだこともある。苦匏散人は多紀門下の人であろう。

孝経考証は字面高さ約十八糎。毎半葉十二行、行廿二字。朱引藍筆句点を附し、巻末に、多紀棠辺の次の手識あり。

右一書海保漁村元備古文孝経欄外所記也借之／漁村先生擬倣何焯読書記体繕修以為冊子時弘／化乙巳夏朔抄謄於医庠　劉元佶記／(朱書)同初二日校訖

四書類

論語　一〇巻（単経・附集解序）　天文二年刊（堺阿佐井野氏）　二冊

大本。単辺（二〇・六×一八糎）有界七行、毎行十四字。版心細黒口、中縫に通しの丁付のみを刻す。何晏の論語序を冠し、本文首行「論語学而第一　何晏集解」と題する。小題の尾題なく、毎巻末「論語巻第幾」と題する。清原宣賢の跋に、

泉南有佳士厥名曰阿佐井野一日／謂予云東京魯論之板者天下宝也／雖然離丙丁厄而灰燼矣是可忍乎／今要得家本以重鏤梓若何予云善／按　応神天皇御宇典経始来　継／體天皇御宇五経重来自尓以降吾／朝儒家所講習之本蔵諸秘府伝於／叔世也蓋唐本有古今之異乎家本／有損益之失乎年代寖遠不可獲而／測遂撰累葉的本以付与庶幾博雅／君子糾焉／天文癸巳八月乙亥／金紫光禄大夫拾遺清原朝臣宣賢法名宗尤

この跋文は普通巻末にあるが、この本には以下二本とともに之が巻首にある。市野迷庵の「正平本論語礼記」中天文印本を載せて「巻首有従三位侍従清原宣賢叙」と注しているから、宣賢跋を巻首においた本があったと見える。此は跋でなく序であったかもしれぬ。本版は泉州堺の医家と伝えられる阿佐井野家の刊行になり、その板木は今も堺の南宗寺に伝っているので、世に南宗寺版論語或は天文版論語と称される。本版の伝存本は殆どが江戸時代の後刷か大正五年の南宗寺刷印本で、室町期の早印本は稀有である。楊譜二38—40著録。

又　二冊

やゝ後印。「読杜／艸堂」「寺田／盛業」「字士弘／号望南」の印あり。

又　二冊

後印。「根岸氏／図書記」（根岸嶰谷）の印あり。

*同　一〇巻（単経・附集解序）　天正四年写　一冊

後補白色表紙（二五・六×一八・三糎）、外題に江戸期の筆で「天正鈔本論語」と。単辺（二二・六×一五・五糎）有界十一行、行十七字。朱点朱引墨訓点、持に振仮名を精密に附する。首に集解序あり、本文首行は「論語学而第一（ロンゴカクジテイイツ）　凡十六章（ショウ）　何晏集解」（以下「何晏集解」の四字なく、第六以下章数なし）、毎巻尾「論語巻第幾」と題する。この本の訓点は博士家点とはやゝ異る。巻末書写奥書に、

天正四白丙子初冬七日不分烏焉馬任管城公写旃附与松木善五郎殿了

と。首に「弘前医官渋／江氏蔵書記」「向黄邨／珍蔵印」「森／

氏」印。森志二・楊続譜著録。

同　一〇巻（単経・附集解序）　〔江戸初〕刊　総振仮名附訓本　二冊

後補刷毛目表紙（二五・七×一八・三糎）、題簽に「論語清家点本」と墨書。裏打補修を加え、天地少しく裁断さる。単辺（二一・五×一五・四糎）無界、毎半葉七行、行十七字（序は六行十三字巻摺）。版心粗黒口「論語巻幾（丁付）」。集解序を附し、本文首「論語学而第一（ロンギガクジダイヰチ）　何晏集解（カアンシフ）」、毎巻尾「論語巻第幾」と題する。「子曰（シノタフマク）学而時習之不亦説乎（マナンテトキニナラフヤヤタヨロコハシカラヤ）」の如く、ほゞ清家点によって総振仮名を刻してある。斯道文庫蔵本と相互に覆刻の関係にあり、此の方が振仮名が多い。「正心斎／之家蔵」「穆／清風／楼」の印あり。

＊論語　一〇巻　魏何晏集解　観応元年写　四帖

縹色表紙（二六・二×二〇糎）、もと巻子装であったが、後記の識語にある如く安永三年折帖に改装、天地少しく裁断さる。界高廿二糎、界幅二・八糎、毎行十四字、注小字双行。朱筆の句点朱引ヲコト点（明経点）、墨筆の訓点四声点濁点（○・●）を附し、また朱筆を以て異訓が記してある。本文首行「論語学而第一　何晏集解凡十章」、巻末「論語巻第十（経一千二百二十三　注一千一百七十五字）」（毎尾題下経注字数）と題する。巻末書写奥書に、

観応元年五月廿二日非夫人之為／書而誰為書柳下恵則可吾／則不可／　本住院権律師豪俊書

と。また後表紙見返に「従観応元年安永三年迄凡四百二十五年也（七月廿二日改之　性誉代法瑞伝者也）」の識語がある。森志二・楊志一・楊譜二31 32著録。首より巻五（擁也篇）に至る上論と以下の下論とは筆蹟が別であるが、書写年代はほゞ同時頃と見られる。森志は「此本末巻与首巻書法自別、蓋後来補鈔者」と言って、下論を別写本を以て配補したと考え、また

按、此本巻首至雍也、体式一与諸巻子古本同、実為六朝旧本転伝之真、　而述而以下蓋従宋時改竄本補鈔者、　注中所引諸説、但記其姓不及名、句末也乎矣已等字大半删去、是其証也

と。これに対し守敬は

上論二冊為一手所書墨法濃古下論二冊又為一手所書用墨稍淡其自学而至雍也注皆全載姓名句末亦多虚字然自中人以上章以下亦僅載其姓述而以下則多削其名句末虚字亦多删削亦有全載姓名者第三冊先進顔淵両篇全載姓名亦有数章削名者子路憲問以下至末則全削其名此書不〔不字恐衍〕見於森立之訪古志余初得小島尚質校本於里仁後跋云弘化三年丙午暮春従巻子改帖本朱校同異於正平本上層此本上二帖紙墨最古洵為六百七年外古鈔而下二帖観応元年権律師豪俊所鈔補也又於雍也篇後跋云巻首至此体式一同斯本実為六朝旧本転伝之真而述而以下蓋拠宋時改竄本補鈔者固不可就彼本以改此正平善本也又於冉子退朝章馬融注匡字作匡因以為是豪俊補写時据宋代刊本之証又云若据彼改此六朝旧本則不能免取開元改字之本以駁漢時博士之譏也今得此原本細審之迺知尚賢〔賢当作質〕所云述而以下拠宋本補写之説為謬而所云拠宋本以改此六朝本者為得其実蓋自述而以下雖多

削其名而与学而一冊同出一手一時所書毫無疑義況亦有全載姓名者先進以下則多不載注者之名而亦未全行删除其注末虚字雖皆準宋本而注中実与宋本多異迺知此書四冊雖出両人手而実為一時所鈔其自述而以下有削名者則以当時習見宋本皆無名故鈔手随意省之其有仍全書姓名者則其删略不尽者也至退朝章注中匡作匡此亦因当時宋本書流伝彼国最多触目皆是故鈔胥輩亦信筆効之即如楓山庫所蔵古巻子左伝確為六朝本之遺而所書桓字亦多作桓蓋縁彼本亦鈔於宋末故有此弊也不特此也

と。守敬の説従うべきであろう。この本眉上に朱筆を以て舛疏を引録し、墨筆を以て校字を記す所あり、訓点の字は全巻を通じ二手で、一手はやゝ本文より時代が下る。

＊同　永正十二年写（巻九・一〇）享禄二年写　三冊

後補洋紙覆表紙（二四×一七・四糎）。単辺（二〇・五×一五・六糎）有界八行、行廿字、注小字双行。朱点朱引墨訓点を附す。第三冊に巻七以下が収められているが、巻九・十の両巻のみは別筆である。本文首行「論語巻第一（学而為政）　何晏集解」、第二行「学而第一」、巻末「論語巻第十終」と題する。集解序を巻二の末に綴ぢ、各篇小題下に義疏文を挾み、眉上行間に和文注を書入、それと別手の江戸期の筆を以て、「今印本云」（朱筆）「朱註大全云」（藍筆）、或は栂尾本・足利本・修善寺本・天授蔵本との朱墨両様の校字が記入されている。巻六・八末に

（巻六）永正拾弐年五月一日　付与曇澍　宗穏

（巻八）永正拾弐年五月一日／付嘱曇澍　宗穏

の本文同筆の識語、終冊末遊紙に

享禄第二戊丑臘月三日依奥賢所望奉賀書之七十五才／不堪老暗漸愧〻〻注有不審不及私用捨任本書了／仰后勘耳（巻九・十本文と同筆）／右此本修禅寺中坊永運求之廿六才時読之了／授到大坊先住尊印御房也／天正十七年庚寅弥生中旬

また遊紙に「友楳館鳥山／雛嶽主人」の墨署がある。

＊同　元亀二年藤沢一寮写　五冊

丹表紙（二七・二×一九糎）、題簽に「輦鏘巻第幾」と。薄葉紙使用。単辺（二〇・一×一四・一糎）有界六行、行十三字、注小字双行。朱句点朱引を附す。本文首「論語学而第一何晏集解凡十六章」（以下或は凡幾章（旧幾章凡幾章今幾章皇幾章）、巻末「論語巻第十（経一千二百二十三字注一千一百七十五字）」（毎巻尾題下経注字数）と題する。毎冊末に同文の左の奥書を有する。

伊勢太神宮奉納全部

（極門廿五代時江州坂田郡七条之生／藤沢一寮筆）

元亀二年八月廿八日　（花押）

首尾に「清住禅／院文庫」の印あり。楊譜二32 33著録。同書の守敬注に曰く「是本毎冊後皆有元亀二年題識書估従西京販来為杉本仲温所得借而校之大抵与正平本合也」と。

＊同　〔室町〕写　三冊

香色地表紙（二七・五×一九糎）。裏打補修あり。単辺（二二・一×一五・五糎）有界八行、行十五字、注小字双行行廿字

内外。朱句点朱引朱ヲコト点（明経点）、墨筆訓点四声点濁点（°ゝ）を附し、義疏・正義を引録し、或は音義・訓説や和訓の注を首書し、行間にも校字注（中にイヘノ本有（无）等あり）を旁記し、訓にも濁点を附する所がある。本文首「学而第一　何晏集解凡十六章」、巻末「論語巻之十終　経一千二百二十三字　注一千一百七十五字」と題するが、巻二以下は首行に「論語巻第幾」と題し、第二行に篇題以下を署する。尾題の体式は毎巻必しも同じからず、経注字数を欠く所もある。「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森／氏」「問津館」の印あり。森志二・楊続譜著録。

*同　存巻一・二　〔室町末近世初間〕写　一冊

濃代赭色表紙（二八・五×一九・六糎）、外題「魯論」。単辺（二二×一五・二糎）有界六行、行十三字、注小字双行。朱筆勾点朱句点朱引墨筆訓点を附し、振仮名に濁点がある。本文首「論語学而第一　何晏集解凡十六章」、巻末「論語巻第二　経一千二百二十二字　注一千九百三十二字」と題する。「論語序」の下に「緒也　廓也」の注を附し、義疏を竄入せしめる傾向の端緒が萌したテキストである。「森／氏」「問津館」の印あり。

*同　一〇巻　〔室町〕写　一冊

艶出茶褐色地空押行成表紙（二五×一七・五糎）。単辺（一八・二×一五糎）有界九行、行廿字、注小字双行、層格を施け、その幅三糎。朱句点朱引朱筆ヲコト点（明経点、但しナリの点は紀伝点に同じ）墨筆訓点を附す。首の序は第一行「論語序　何晏集解」と題し、第二行「叙曰」に始り、題下並に序全文に皇疏を小字双行に挿み、本文首「論語巻第一　何晏集解」、第二行「学而第一」と題し、以下並に大・小題下に小字双行を以て皇疏を附する。室町期の書入は周密で、ほゞ二手からなり、皇疏・昺正義・新注等を引き、別に江戸期の朱・墨筆を以て茂卿曰、純曰等の書入も存する。訓点書入の風から見て足利学校系の本かと想像される。

*同　欠巻七・八　〔室町〕写　四冊

後補紺色表紙（二六・八×一八・八糎）、襯紙を入れて改装。元料紙縦二五・七糎。字面高さ約廿一・五糎。毎半葉六行、行十三字、注小字双行。朱筆句点朱引朱筆ヲコト点墨筆訓点濁点（ゝ）を附す。この濁点は振仮名にも附されている。本文首行「論語学而第一　何晏集解凡十六章」、巻末「論語巻第幾」と題し、尾題下経注字数あり。尾に鼎形印（印文不明）・六角形墨印（印文不明）あり、また「主正菊也」と朱書。

*同　欠序　〔室町〕写　五冊

縹色表紙（二五×一七・五糎）、題簽に「円珠論語幾」と。「円珠経」とは中世時代我が国に於ける論語の別名。単辺（一七・六×一三・五糎）有界九行、行十六字、注小字双行。層格幅四・五糎。朱句点朱引墨筆訓点を附す。序を欠き、本文首「論語巻第一　何晏集解」、第二行「学而第一」、毎巻末「論語巻第幾」と題し、毎篇題下皇疏を小字双行に挿む。首に「九／雲」、尾に「法／得」（鼎形）の印あり。

*同　零本（存巻一・二・九・一〇）　〔室町末〕写

二冊

後補朱色覆表紙（二八・八×一九・八糎）、縹色元表紙あり、裏打補修が加えられ、元料紙縦廿五糎。単辺（二一×一四・三糎）有界七行、行十八字。朱筆句点朱引墨筆訓点（振仮名に濁点あり）を附す。序に標題なく、本文首「論語巻之第一」、第二行「学而第一　何晏集解」、巻末「論語巻第一終 経一千四百七十字 注一千五百一十五字」（巻二以下経注字数なし）と題する。首に「溝東精舎」（林学斎）印、尾に「持主明印」の朱筆署名、後表紙見返に「子／藤」「学斎」等の印あり。

＊同　一〇巻　〔室町〕写　二冊

栗皮表紙（二六・五×一九・六糎）。単辺（一八・七×一三・三糎）有界八行、行十八字、注小字双行。層格幅四・五糎。朱点朱引墨筆訓点を附す。但し序は朱引のみ。本文首行「論語巻第一　何晏集解」、第二行「学而第一」、巻末「論語巻第幾」（巻十等の尾題下に経注字数あり）と題する。毎篇題下に皇疏文を竄入。「念／川／蔵書」の印あり。

同　〔室町初〕刊　覆正平十九年刊本　五冊

後補黒表紙大本。単辺有界六行、行十三字、注小字双行。正平十九年堺の道祐居士の刊になる正平版論語は、板木が夙に亡失したらしく、室町初期にその覆刻が二種行われ、一は原刊記の最後の「学古神徳楷法日下逸人貫書」の一行を削除して、「堺浦道祐居士重新命工鏤梓／正平甲辰五月吉日謹誌」の二行の刊記を残したので、世に正平版単跋本と謂われ、他は三行の本刊記をそのまゝ覆刻したので正平版双跋本と称される。単跋本は後室町中期にこの刊記を削って刷印されたので、この後印本を無跋本と云う。単跋無跋は板木は一版である。この本は不幸巻末の一葉を欠くので、単跋か無跋かは不明であるが、恐く無跋本か。序にのみ朱筆句点、初一葉に室町末江戸初間の音義等の書入がある。首に「中村敬宇／蔵書之記」の印あり。楊志二・楊続譜著録。森志二の正平版論語の条の守敬書入に「今得此書二部以一部上木仍蔵一部」と。単跋本を守敬は古逸叢書に覆刻して収めたが、臆改がある。

同　欠巻九・十・札記　文化十三年序刊（市野光彦覆刊正平版単跋本）　三冊

大本。市野迷庵が札記一巻を附して、単跋本を覆刻せるもの。小島宝素が前掲の観応元年奥書本の上論と対校せる朱筆校字の書入がある。「小島氏／図書記」「尚質／私印」「学／古氏」の印あり。

同　〔慶長〕刊（要法寺）　二冊

後補渋引茶褐色表紙大本。双辺（二一×一五・一糎）有界七行、行十七字、注小字双行。版心小黒口「論語幾　（丁付）」。巻末刊記に「慈眼刊／正運刊／洛陽要法寺内開板」と。要法寺版には整板古活字の乱板があるが、此は整板のみ。朱引朱筆訓点の書入あり。「杉垣篆／珍蔵記」等の印あり。

同　〔近世初〕刊（覆古活字版）　二冊

大本。双辺有界七行、行十七字、注小字双行。版心黒口「論

語幾　（丁付）」。朱筆句点・朱引墨筆訓点を附し、校字書入あり。字様から古活字版の覆刻と思われるが、その底本となった版が発見されない。前表紙遊紙に「与佐時綱校正以皇侃本為対寛延辛未秋九／月廿八日始業」と朱書。「多紀氏／蔵書印」の印あり。

＊論語義疏　一〇巻　梁皇侃撰　〔室町〕写　一〇冊

後補刷毛目表紙（三五×一七・三糎）、改装、裏打補修が加えられ、天地少しく裁断さる。単辺（一八×一四・四糎）有界九行、行廿字、集解注改行低一格、疏小字双行。朱筆句点朱引墨筆訓点を加え、少しく朱筆ヲコト点を附す。首行「論語義疏巻第一　梁国子助教呉郡皇侃疏」と題し、何晏集解序は首「論語序（疏を小字双行に挾む）　何晏集解」と。本文首行「論語義疏巻第一（学而為政）　何晏集解」（巻二は何晏の四字なく、「梁国子助教呉郡皇侃撰」と）、第二行「学而第一」、毎巻尾「論語義疏（或は論語）巻第幾」と題する。眉上に首書書入あり、新注云等を引録。上欄に守敬の筆とおぼしき朱筆の校字附箋を貼附。「嵯／峨／蔵」「読杜艸堂」の蔵印あり。

＊同　〔江戸末明治初間〕影写　四冊

香色表紙（二五×一六・七糎）。薄葉紙。字面高さ約廿・二糎。毎半葉十行、行廿字、注改行低一格、疏小字双行。巻一前半に朱句点朱引朱ヲコト点・墨筆訓点、巻四・五・六には墨筆訓点が附され、他は所々僅に墨筆の返点が加えられる。巻首尾題体式は前掲本とほゞ同じであるが、本文巻一の題下を「何晏集解皇侃疏」に作り、巻二以下は「梁国子助教呉郡皇侃撰」と署する。この本は恐らく室町鈔本の摹鈔で、昺正義・朱注その他の新注を抄録首書し、中に「太宰子曰」等の後代の書入も入っている。第一冊尾に「新井□次作之」、後表紙見返に「あら井次郎」の墨書が存する。

＊同　欠皇疏序　〔室町〕写　五冊

香色表紙（二六×一八・三糎）。単辺（一八・四×一五・三糎）有界九行、行廿字、注改行低一格、疏小字双行。層格幅五・四糎。巻首題署の体式前掲諸本とほゞ同じ。首の皇侃序なく、集解序には皇疏を欠く。朱筆句点・朱引・朱筆ヲコト点（明経点）を附し、やゝ後筆と思われる朱筆振仮名も加えられ、層格に昺正義新注等が抄録さる。首に「和学講談所」「向黄邨／珍蔵印」の蔵印。楊続譜著録。

＊同　欠序　〔近世初〕写　五冊

後補縹色空押行成表紙（二五×一八糎）。字面高さ約廿一・五糎。毎半葉九行、行廿字、注改行低一格、疏小字双行。朱筆句点・朱引（巻四以下なし）、墨筆訓点（巻九・十なし）を附す。皇序集解序共に欠く。巻首尾題署の体式ほゞ前者に同じ。首に「杉垣篆／珍蔵記」（山田広業）尾に「慧／極」等の印、毎冊尾題下に「永普」の墨署名あり。「九折堂蔵」として森志二著録。

＊同　零本（存巻一・四・七・八）（巻一）〔室町〕写（巻四・七・八）〔江戸〕写　三冊

三種の取り合せ本で、巻一と巻七・八の二冊は後補縹色表紙、巻四は後補紺表紙（二六・三×一九糎）。巻一は裏打補修が加えられ、単辺（二二・五×一二・一糎）有界八行、行廿字、注改行低一格、疏小字双行。層格幅四・一糎。朱筆句点朱引墨筆訓点を附し、経注文には朱ヲコト点を加う。巻四は巻一の僚巻の原本を摹写せる如く、但し朱点・ヲコト点と行間の書入は移写せず、後半は訓点も写していない。巻七・八は他の室町鈔本を写せるか否か未詳。単辺（一九・七×一五・三糎）有界八行、行廿字。墨筆訓点が附されている。巻首尾題署ほゞ前者に同じ。第二冊首に「有馬氏／溯源堂／図書記」の印あり。

*同　零本（存巻四）〔室町末近世初間〕写　一冊

表紙なく、仮綴（二二・八×一六糎）。単辺（一九×一二・九糎）、毎半葉七行（初二葉のみ有界）、行廿一字、注改行低一格、疏小字双行。経注文にのみ墨筆訓点を附す。巻首「論語義疏巻第四　述而第七」と題し、尾題なし。

*同　一〇巻附論語発題　〔江戸〕写　五冊

香色表紙（二三・三×一五・三糎）。双辺（一九・六×一三糎）有界九行版心「巻　。盈進斎蔵」の印刷罫紙使用。毎半葉廿字、注改行低一格、疏小字双行。朱引、経文には藍筆句点、注疏文には朱筆句点を附す。巻首尾題署の体式はほゞ前掲諸本に同じ。他本と異るは集解序の次に、「論語発題」を附することである。発題とは室町時代邦人が編した論語の解題書で、初に孔子の譜系履歴歿後孔氏世系の記事を各書より抄録し、次に史記孔子世家・皇侃義疏皇序・集解何晏序（附皇疏）を全載し、且つ朱子学新注の説も引き、末に井田その他器物に関する図を附する。但しこの本の発題は史記世家・皇序・集解序並に図がない（論語発題については「斯道文庫論集」第二・三輯収拙稿「室町以前邦人撰述論語孟子注釈書考」参照）。また特に注目すべきは、現存義疏本にはいずれも、篇題下に邢昺正義文の竄入があるが、この本にはそれを見ないことは、鈔写年代は新しいが、極めて貴重視すべきである。たゞ江戸後期の写であるから、書写者が祖本にあったのを削除したかもしれぬ。刻本との朱筆校字が眉上に書入されている。この本の書写者は明かでないが、使用の罫紙に「盈進斎蔵」と刻されている。遺言によって嗣子に遺書を足利学校に寄贈せしめた江戸の儒者中村蘭林（名は名遠、字は子晦、宝暦十一年歿）は一に盈進斎とも号し、程朱学を宗としたが、墨守せず、博覧を力め、心を考拠に用いた。或はこの蘭林手沢本かとも想像されぬでもないが、確証はない。巻首に光緒十一年の左の楊守敬の手書題跋（楊志補収）四丁が附綴されている。

論語皇疏自日本根本遜志刊本流伝入／中国鮑氏刻之知不足斎叢書中有／深信為古本者有異議者其信為古本者以其中佚事旧聞往往而在如公／治長通鳥語之類独見於此書其有／異議者則拠経典釈文子行三軍則／誰与云皇音餘又子温而厲云皇本作／君子今此書二条皆不相応余謂以釈／文勘皇疏誠為切証但通読皇疏無／為経作音者按釈文叙録有徐邈論語／音又不易得也下

釈文云孫音亦蓋指／孫興公論語集注然則此音餘之説或／是孫徐之本伝写者誤為皇与若子／温章皇本云明孔子徳也亦有云子曰者／是皇本明同今本別無可解説亦恐釈／文有誤大抵欲勘此書当知此十三家／之注雖純駁不一而義訓自古又六朝人声／口与唐代不同今以他経旧疏照之其語／言如合符契如果日本人有此手眼是／与孟子孫奭偽疏何啻天淵攷／日本自源氏以来荒滅已甚其崇尚／経学在徳川氏中葉而彼土今存此書／鈔本有在四五百年前者則謂即根本／偽作者未核其実也余独怪根本所刊／義疏体式全同閩監毛之邢疏本／按合注于疏始於南宋今所見十行本注／疏及黄唐本尚書注疏周易注疏礼記注疏／及元元貞本刊本論語邢疏皆注文雙行／安得皇疏旧本一同明刊之式此懐疑／未釈者及来日本得見皇疏古鈔／本数通乃知其体式迥異刊本毎章／分段以雙行先釈経文提行処皆頂／格注文則別行低一格大字居中（亦有不跳行／者則空数字疑抄胥為之）其有所疏者亦以雙行釈之／提行処並低一格俱不標起止足知／刊本之妄且其文字為根本以他本及／邢本校改者亦失多得少此本無鈔／書年月相其紙質亦二百年前之物／後有重刊此書者当拠此正之

又按六朝義疏既有此式何以唐人五経／正義皆不循此轍余疑皇疏古原本／亦必標起止別為単疏今此式亦日本人／合注于疏者之所為而刪其所標起止与／惜日本所伝古鈔本皆不出元明之／世無従実証之耳

光緒甲申余帰後総理衙門致書／日本公使索皇氏此疏原本使署／中随員姚君子良以根本刊本進且称／其古鈔本多譌字不足拠是真買／櫝還珠矣／光緒乙酉夏楊守敬記于黄岡学舎（印）

〔印文「飛青／閣蔵／書印」〕

論語集解義疏　一〇巻　魏何晏集解　梁皇侃疏　根〔本〕遜志校　寛延三年刊（江戸・藤木久市等）　楊守敬等手校本　一〇冊

大本。本書が六朝の佚書を初めて公刊して、世に広め、禹域に伝流して翻刻され、彼の土の考証家を驚動せしめた功績は没すべからざるものがあるが、不幸校書の法を誤った為に、臆改以て原書の旧形を損じたことは先学の指摘する通りである。この本の巻末に「安政元年孟春　佐久間象山（印）」の墨署朱印、首に「野之／国学」等の蔵印あり。この本には三種の書入が加えられ、一は墨筆を以て、釈文・正平本その他の諸経諸書より抄録し、且つ校字も交っている。二は墨筆の校字で、宝徳本・盈進斎本（前掲本）・宝勝院本との対校書入。三は朱書の守敬書入で、首に「代殊筆皆宝勝院本森立之所蔵古鈔」と守敬が朱書注記してある。宝勝院本とは東福寺の塔頭宝勝院の釈芳卿光隣の手沢たる室町鈔本で、現在斯道文庫蔵。

論語大疏　二〇巻　大田元貞（錦城）撰　〔江戸〕写六冊

黄色表紙（二四×一六・九糎）、改装天地少しく裁断さる。字面高さ約廿二糎。毎半葉十六行、行卅字内外不等。未刊。首に「安閑堂蔵書」、尾に「水沢蔵書」の印あり。

孟子　一四巻　漢趙岐注　〔慶長年間下村生蔵〕刊　古

活字版　五冊

後補紺色表紙（二七×二〇・三糎）。双辺（二一・八×一六・二糎）有界七行、行十七字、注小字双行。版心白口「孟子巻幾（丁付）」。刊記はないが、下村生蔵刊中庸と同種活字であるから、下村刊四書の一つと推定されている。巻四中途まで序・経文にのみ墨筆訓点を附する。楊譜二46 47著録。

*同　〔慶長〕刊　古活字第五種異植字版　楊守敬手校本　五冊

後補紺表紙（二七・三×一九・五糎）。双辺（二一・一×一六・二糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心粗黒口「孟子巻幾（丁付）」。本版は「古活字版之研究」未著録であるが、同書の所謂第五種本中の異植字版と看做すべきであろう。首に「緑静斎／図書章」（杉原心斎）「中田／蔵書」印。朱筆句点朱引墨筆訓点（注は朱句点のみ）が附され、眉上に守敬自筆ではないが次掲本の自筆校字を人に写させと思われる「孔刊某作某」の孔氏微波榭刊本との校字の附箋が多数貼附してある。楊譜48著録。

*同　〔江戸〕写（影慶長年間今関正運刊古活字版）手校本　五冊

紺色表紙（二七×一九糎）。薄葉紙。字面高さ約廿糎。毎半葉七行、行十七字、注小字双行。朱筆句点墨藍両様の声点を附する。首に「伊沢氏／酌源堂／図書記」（伊沢蘭軒）「森氏開萬／冊府之記」の印あり。凡そ二種三手の校字書入が加えられている。一は朱・藍・墨・緑の四色の校字で、明本・異本・古本・足利本・広隆寺本〔斯道文庫現蔵南北朝室町初間鈔本〕・養本〔次掲の養安院蔵室町鈔本〕との対校を首書する。他は墨筆の守敬筆による足利本・孔刊本との校字附箋である。

*同　零本（存巻一至巻四）〔室町〕写　二冊

淡香色表紙（二六×一五・二糎）。裏打補修が加えらる。元料紙幅廿四・三糎。単辺（一九・一×一二・三糎）有界十一行、行十八字、注小字双行。朱引墨筆訓点、少しく朱筆句点を附する。本文同筆の書入あり、新注を引く所がある。巻首に趙氏孟子題辞なく、首行「孟子巻第一　凡七章」、次行低一格「梁恵王章句上 凡章数二十三也 上有七章下十六　趙氏註」、巻末「孟子巻第幾」と題する。「養安院蔵書」「敕安」（鼎形、曲直瀬正琳）、「小島氏／図書記」「攷古」「尚」「絅」「向黄邨／珍蔵印」あり、曲直瀬・小島両家旧蔵。楊志補著録。巻二及び巻四巻末に「光緒辛巳九月二十三日楊守敬校過」の手識があり、又次の守敬の手跋（楊志補収）を存する。

右孟子趙注残本四巻蓋従南宋重／言重意本出也光緒辛巳借之向山黄村校／於足利活字板上守敬記

按宋十行本及明閩本注疏無題辞／此本亦無之乃知趙注之奪乱不自／明代始也附記之（印）〔守敬〕（印）〔慳吾〕

この本は守敬の言う如く題辞はないが、章旨を存し、重言重意がないから、南宋重言重意本より出たと早急に断定はできない。

孟子攷　撰者未詳　〔江戸〕写　一冊

淡香色表紙（二三・四×一六・三糎）。字面高さ約十六・五糎。毎半葉八行、行十七字。内題なく、標題は外題による。欽定四庫全書総目に始り、歴代藝文志や諸書目等より、孟子類に関する各書の解題・著録の記事を抄録編輯し、注記を首書する。日本人の編であるが、撰者未詳。

＊大学章句　宋朱熹撰　〔慶長年間下村生蔵〕刊　古活字版　一冊

厚手白色表紙（二五×一八・六糎）、仮綴。天地裁断さる。双辺（二一・七×一五・七糎）有界七行、行十七字。版心白口「大学章句　（丁付）」。朱筆の句点朱引ヲコト点墨筆訓点が附され、それとは別筆のやゝ時代の降る朱筆の和注が眉上行間に書入されている。「禰家／蔵書」印あり。本古活字版は「古活字版之研究」未著録の異版で従来知られなかった古活字本である。この本は下村生蔵刊古活字版中庸章句（慶應義塾図書館蔵）と版式活字が同種である所から見て、下村生蔵の刊行になるものと思われる。無刊記であるが、下村版中庸と同種の活字・版式の論語孟子がある所から、下村が四書全巻を刷印したと推定されていたが、大学だけが従来発見されなかった。古活字版の学庸は四書大全等の現行本と異ったテキスト（朱子晩年改訂以前の本という）に属し、宋元版系の本と同じく巻末に音釈を附するが、この本には音釈がない。欠丁なのか、元来なかったのか、他に同版の伝存本がないので未詳であるが、下村版中庸には音釈が附してあるから、此は恐らく欠丁であろう。

小学類

爾雅　三巻　晉郭璞注　〔清光緒〕影刊宋蜀大字本　古逸叢書校正刷　一冊

又　古逸叢書本　一冊

胡本・影宋本・馬本との朱墨の校字書入あり。

同　〔明治〕影写　三冊

黒表紙大本。題簽に守敬筆を以て「景北宋本爾雅」と。前掲の古逸叢書に覆刻された本で、原本は森志巻二によれば、京師高階氏蔵にして、後唐長興三年国子監刊本に基づく北宋刊南宋孝宗の時の補修版を我が室町時代に覆刻せる旧刊本と云う。今この高階氏蔵本の所在は明かでないが、守敬は見たらしく、「又按此書拠松崎明復云是日本室町氏所刻原本今尚存東京高階氏余嘗于黒田某所見之果是日本重翻字体校影鈔殊肥黒田告余云日本今存僅此一本」と記している。その本が果して我が国の旧刊本なるか、或はしからずして宋槧なるか、今推するを得ない。古逸叢書本を精査すればその底本が北宋刊南宋修本ということについても疑点がある。楊志二・楊譜三123著録。首に左の光緒七年の守敬の手書題識（楊志補収）を附綴する。

北宋刊本爾雅日本東京高階氏所蔵／巻末有将仕郎守国子四門博士臣李鶚／書一行按王明清揮麈録後唐平蜀／明宗命大学博士李鶚書五経倣其／製作刊板于国子監中印書之始今則盛／行於天下蜀中為最明清家有鶚書五経／印本存焉後題長興三年也

拠此／則此本当根源于長興本今日海内所存宋／槧当以此為第一勿論爾雅刊本無与之／為比也其中文字足以訂正他本不勝指数其／尤妙者釈畜狗四尺為獒注引書孔伝犬高四尺曰獒即此義十一字段茂堂／拠単疏謂此非郭注後人所附益此／本不引孔伝与段説合／辛巳七月荆州楊守敬記（印）〔楊守敬印〕

*爾雅註疏　一一巻　晉郭璞注　宋邢昺疏　明嘉靖李元陽福建刊十三経注疏本　狩谷望之校合移写本　四冊

白綿紙本。狩谷棭斎が文化文政年間に、朱墨両筆を以て家蔵経注本・経典釈文・鄭樵注本・昌平黌蔵元槧本・九行本等による対校を標記し、且つ私按と注記せる書入を忠実に移写せるもので、この書入の原本となった棭斎自筆書入の李元陽刊本は現在我が斯道文庫に蔵される。諸巻末の奥書は次の如し。

（巻二）壬申八月廿五日以鄭樵注本校　望之／（朱）戊寅五月十三日再校

（巻三）（朱）以一本訂正辛未五月朔自序至此望之明刻単注本／五月三日与釈文比讐／（朱）庚寅三月十九日比讐元刻注疏本

（巻四）五月三日与経典釈文比讎　望之／八月廿六日鄭本比校

（巻八）（朱）校讐一本自釈宮至于此五月二日望之

（巻十一）（朱）以家蔵経注本校／（朱）辛未五月三日卒業望之／（朱）自釈艸至此／五月八日与経典釈文比校／壬申九月十二日以鄭樵注本校　望之／（朱）文政十三年以昌平学蔵元槧（旧在若芝金龍寺）九行本（旧仁正寺紅栗斎蔵）校讐／渋江道純対読五月十一日卒業

「弘玄院文庫」「閑雅堂／秘蔵記」（佐竹義路）等の印あり。

新刻釈名　八巻　漢劉熙撰　明畢効欽校　明暦二年刊（京・上村次郎衛門）　合一冊

大本。「斎藤／蔵書」印。前表紙見返に左の楊守敬の光緒十年の手書題識（楊志補収）あり。

此書有宋臨安府陳道人書籍舗刊行本／旧蔵張金吾処又有明呂枏刊即従陳道人／本出相伝為此書善本然按載表元題好過／庭書譜後云往時杭州陳道人家印書／書之疑処率以己意改令諧順然則／陳道人本亦未可尽信此本亦未知与陳道／人本何如記之以俟他日守敬甲申正月

戊子正月閲陸心源儀顧堂集知呂桎／野重刊陳道人本釈天慧星上脱霧／冒也気蒙乱覆冒物也蒙日光不明／蒙蒙然也十九字此本亦脱則知此本原／於呂本而程栄何鏜漢魏叢書本又沿此本之誤也守敬再記

釈名疏証八巻補遺一巻続釈名一巻　清畢元撰　〔江戸〕小島尚質令写　小島尚絅手校　二冊

渋引茶褐色表紙（二六・五×一七・五糎）。薄葉紙。字面高さ約十八・三糎。毎半葉十一行、行廿二字、注小字双行。諸巻末に存する左の奥書（墨筆は宝素識語、尚絅識語は朱筆）に明かな如く、文化十三年頃小島宝素が人をして書写せしめ、文政四年読過し、明治四年その孫尚絅（号は春渙）が呂本によって

朱筆校字を書入せる本である。

（巻一末）明治辛未十一月十二日照呂刻本一校尚絅

（巻三末）此本向介伊儋甫属一士人鈔写分為三冊其第一冊被／張恭庭持去恭庭没後松屏書楼蕩為灰燼而／其本亦俱為烏有今新補写合装以蔵于家焉

（巻四）文政辛巳四月二日被擢為直医後六日／宿于／西城直舎夜半読過小島質燈下記

辛未十一月廿三日据呂仲木本硃筆／校読了小島尚絅識

（巻七）十一月廿四日校了紮湾尚絅

（巻八）明治四年辛未十一月廿四日照家蔵明呂仲木刊本／一校了尚絅鐙下書

（続末）文政四年七月十日読完是日侍于経筵／聴林煜講魯論源質記于直舎

明治四年辛未十一月廿四日夜読于攷古斎鐙下不肖孤尚絅

「小島氏／図書記」の印、「文化丙子十一月攷古斎蔵」の朱記あり。

埤雅　二〇巻　宋陸佃撰　明嘉靖二年序刊（括蒼郡署・王俸）　四冊

白綿紙本。首に宋宣和七年陸宰序・明成化十五年胡栄撰重刻埤雅全集序、末に嘉靖二年長州王俸が括蒼郡署忠愛堂に於て書せる跋ありて、重刻の縁起を記す。双辺有界十一行、行廿字、版心粗黒口。「森／氏」印。求古楼蔵として森志二著録。

新刊埤雅　二〇巻　宋陸佃撰　〔明〕刊　四冊

丹表紙（二四・八×一六糎）。首に宋宣和七年六月旦謹序の男朝請郎直秘閣指発遣淮南路計度転運副使公事借紫金魚袋宰撰の埤雅序、新刊埤雅目録あり、本文首「新刊埤雅巻之一」、次行低四格「中大夫守尚書左丞上柱国呉郡開国公賜紫金魚袋陸佃撰」、巻末「新刊埤雅巻二十」と題し、毎巻末に音釈を附する。双辺（二〇×一三・六糎）有界十一行、行廿二字。版心白口「埤雅巻之幾　（丁付）」。この本印面甚だ美麗で、料紙甚だ異風なるを以て、「故宮博物院善本書目」は日本翻明刊本とするが、和刻本ではなく、明後期刊本であろう。楊志補著録。首の遊紙に光緒十四年の左の守敬の手書題識（楊志補収）あり。

此本／亦原于張存性本故欠簡皆同然間有誤字又失張存性一序／不如顧域校刊本之精唯毎巻後有／釈音而顧本無之按宋人刻書多附釈／音此所載雖不敢謂原出陸氏然其為宋時／旧有必矣原書今俗謂虹為虹字下有云音絳此当是顧氏原音然全書只此一条蓋以俗音詮義故特出之／又巻首標題新刊埤雅顧刊無新刊字／当亦宋本之／旧拠張存性序此書自宣和刊本後再刊于贛州故／有新刊之目宋人重刊書多題如此非畢氏増加也胡文煥格致／叢書亦沿此本而刊落陸宰一序又删農師官銜則妄矣／戊子正月守敬記

玉篇　零本（存巻九・巻十八之後分・巻十九・巻廿七）

梁顧野王撰　天保六年田沢仲舒伝写唐・平安鈔本　五冊

縹色表紙（二六・二×一九糎）、外題「玉篇」。字面高さ約二一・五糎、毎半葉六行、注小字双行字数不等。首に進玉篇啓・

大中祥符六年校勘増加玉篇牒・南史顧野王伝を抄録し、次に左の田沢仲舒の序を掲ぐ。

顧野王玉篇残本二冊上冊出于京師下冊出于／南都云蓋唐時之増加本也下冊巻末押石山寺／経蔵之朱印方部末記馬道二字未審馬道是／何人矣余嘗校類聚名義抄其書以仏法僧分部帙／故一名三宝名義抄今閲此書南都本巻末背紙／写帰名三宝之梵書可謂奇矣夫名義抄原於玉／篇編目言之然則玉篇存三宝之名由来久之安知／名義抄所拠作者非於此書耶嗚呼物之陰顕有／数而存矣逸於彼而存於我隠於古而顕於今豈／偶然乎繕写功成即以野王進玉篇啓唐時校勘／増加玉篇牒及南史野王木伝関繋此書者附于／巻端云／天保乙未冬十月　田沢仲舒識

玉篇は梁の武帝大同年中顧野王の編であるが、その後間もなく簡文帝は蕭愷をして改刪せしめ、唐に入って上元元年冨強が字を増加し、宋の真宗の大中祥符六年陳彭年等が勅を奉じて之を重修して、全く原態を失い、爾来中国ではこの宋の重修の大広益玉篇が盛行したので、野王原撰本・上元本共にその伝を絶つに至った。我が国では平安・鎌倉時代原撰本が使用されたので、野王原撰本の唐或は平安旧鈔の零巻が幸に伝っている。江戸後期考証校勘学の勃興にともなって、佚書となった玉篇原撰本が発見注目されるに至った。この写本は森志巻二著録鈔本と同種で、㈠巻九（自言部第九十二）㈡同（至幸部第一百十七）㈢巻十九之後分水部㈣巻十八之後分㈤巻廿七（石山寺蔵）を収める。守敬は伝鈔本によって古逸叢書中に四巻を摸刻した。ちなみに玉篇原撰本の現存旧鈔本の巻次、所蔵者、その摸刻・影印本を表示すれば次の通りである。

巻八（心部零簡）　大東急記念文庫　東方文化学院影印本
巻九（言部第九十二至幸部第一百十七〔中欠〕）　早稲田大学　古逸叢書・羅氏・東方文化学院刊本
同（冊至欠）　崇蘭館　古逸叢書・羅氏刊本
巻十八之後分（放部第二百七十一至方部第二百八十四〔中欠〕）　藤田家　柏木探古・古逸叢書・東方文化学院刊本
巻十九（水部濩至洗）　藤田家　古逸叢書・東方文化学院刊本
同（水部冷至湛零簡）　安田文庫旧蔵
巻廿二（山部第三百四十三至灸部第三百五十六）　神宮文庫　吉川半七・古逸叢書・東方文化学院刊本
巻廿四（魚部第三百九十七零簡）　大福光寺　羅氏・東方文化学院刊本
巻廿七（糸部第四百二十五自至纏）　高山寺　印刷局・古逸叢書・羅氏・東方文化学院刊本
同（糸部第四百二十五至索第四百三十）　石山寺　古逸叢書・羅氏・東方文化学院刊本

この写本には朱墨の校字書入が加えられ、墨は守敬の筆。森志二・楊志三参照。

同　零巻（存水部）〔江戸〕影写石山寺蔵旧鈔本　一冊

茶褐色表紙（三〇・三×一九・八糎）。薄葉紙。毎半葉六行、注文小字双行字数不等。「小島氏／図書記」印あり。

＊大広益会玉篇　三〇巻　梁顧野王撰　唐孫強増補　宋陳彭年等奉勅重編　元至正十六年刊（翠巖精舎）

四冊

後補縹色表紙（二二・五×一四・三糎）、題簽は狩谷棭斎筆にて「元本玉篇（梁顧野氏原本 唐孫強増益 第幾至幾）」と。裏打補修を加う。首に「大広益玉篇一部并序」と題し、大中祥符六年牒文、大広益玉篇序、進玉篇啓、大広益会玉篇総目あり、総目末に、「至正丙申孟夏／翠巖精舎新刊」の双辺木記が刻され、次に新編正誤足註玉篇広韻指南がある。本文首「大広益会玉篇巻第一凡八部」と題し、巻一巻末に「至正丙申孟春／翠巖精舎新栞」の双辺木記を有する。左右双辺（一九・二×一一・九糎）有界十三行、行大字十九字、注小字双行、行廿七字。版心線黒口「玉幾（丁付）」。印面美麗なる早印本である。同版本に恭仁山荘旧蔵武田家現蔵本（明修）がある。元坊刻の大広益玉篇は陳彭年重修本であるが、いずれも宋本に比して注中の刪略、毎部文字の次第の錯乱が多い。首に「千手千／眼大士／爾宝」（上に龍形飾りを附す）、「狩谷／望之」「棭斎」、尾に「惟／明」（壺形）「湯島狩／谷氏求古楼／暴書記」の印あり。森志二・楊志三・楊譜三14著録。第一冊首に光緒七年の守敬の左の手書題識（楊志巻三収）三頁を附綴する。

元槧大広益会玉篇三十巻毎半葉十三行／毎行大字十九字左右双辺首有大中祥／符六年牒文次野王序次進玉篇啓目録／後有至正丙申孟夏翠巖精舎新刊木記／又後有新編正誤足註玉篇広韻指南蓋／拠釈神珙反紐図而増益僧守温等之字母／為之第一巻後又有木記与前同此本以張士／俊所刻宋本校之此多大中祥符一牒而毎／部文字次第不与張本同殆坊賈欲均其／注文字数以便排写唯図易於検尋而／不知依類相従之義考玉篇原本次第皆本／説文（以古逸叢書残巻照之可証）張刻宋本已有移易然／不甚懸絶此則任意排置全無義例／但所拠原本当是祥符官刊故仍存祥／符一牒張刊本無牒文故朱竹垞認為／上元孫強之本然大広益会之題末改／則亦従祥符本出也二本同源異流当有／互相訂正処此本巻首有狩谷望之印／又有棭斎印即望之之字也望之博極羣／書其求古楼所蔵秘本為日本之冠／光緒辛巳秋分宜都楊守敬記（印）

＊同　欠首目　〔元至正二六年南山書院〕刊　七冊

淡茶褐色表紙（二五・七×一五・七糎）。首目を欠く。本文首行題署前者に同じ。双辺（二〇・八×一二・七糎）有界十二行、注文小字双行廿八字。版心線黒口「玉篇巻幾（丁付）」。補写が少しくある。書陵部・静嘉堂文庫・東洋文庫蔵の首目の指南の後に「至正丙午良月／南山書院新栞」の刊記を有する至正廿六年刊本と同版。首に「赤龍館」の印。尾に「□□□附之」の墨書があるが、削除の跡あり。第一冊首に次の光緒十年楊守敬の手書題識（楊志三収）一丁を附綴す。

大広益会玉篇三十巻此本欠牒文／序啓反指南一巻本書冊巻皆全其／篇幅贏於至正鄭氏両本蓋亦元刻／毎半葉十二行四週雙

辺毎巻有／赤龍館印按岸本氏蔵本与此体式／相同此似更在前或彼即従此本翻／雕以其欠首序例故抑置第四其中／文字異同已詳前三巻／光緒甲申九月宜都楊守敬記

＊同　〔明初〕刊　三冊

後補香色表紙（二三・四×一四・八糎）。首目巻首題体式至正翠巖精舎刊本と等し。双辺（二一・二×一二・七糎）有界十二行、注小字双行行廿八字。版心小黒口「玉篇巻幾（丁付）」。前掲本と覆刻の関係にあるが、雕刻やゝ粗雑である。守敬等元刊となすが、明初に降る刻と思われる。「岸本家蔵書」等の蔵印、尾に「英」の墨筆署名あり。楊志三・楊譜三11著録。第一冊首に左の光緒十年の楊守敬の手書題識（楊志収の文と小異あり）二丁を附綴する。

大広益会玉篇三十巻毎半葉十二行四／週雙辺篇幅較至正本鄭氏本尤廓／無刊板年月蓋亦元槧此書与張刊／宋本異同之処已見於至正本鄭氏本／両跋茲復即毎部字数合校之如須／部張刊本六字此本少一顥字長部張刊本／十六字此本多一鎔字土部張本四百五十／五字此題四百五十六字因就此部字字互／対乃知複一埒字而両処説解不同又張／本有埒埌垕厘四字而此本無之（至正本鄭本同）／此本有**埒埌壞塚**四字（至正本鄭本同）而張本／無之然則他部之出入何可勝紀他日／当合此数部与張本一一対勘姑為／発其端於此／光緒甲申七月宜都楊守敬記（印）〔楊守敬印〕

＊同　〔元末明初間〕刊（建安・鄭氏宗文堂）　五冊

濃茶褐色表紙（二四・六×一六・三糎）。裏打補修が加えられ、元料紙（二三・六×一三・八糎）。左右双辺（一八・八×一一・八糎）有界十三行、注小字双行、行廿八字。版心線黒口「玉幾フ　（丁付）」。少しく補写を交ゆ。前掲至正十六年翠巖精舎刊本とほゞ覆刻の関係にあり、首目・題署の体式それと同じく、総目の後に篆書「宗文」の二字のある鼎形木記及び「建安鄭氏／鼎新綉梓」の両行双辺木記がある。建徳周氏旧蔵北京図書館現蔵の同版本（巻十一至二十三配明初刻本）が四部叢刊に影印さる。守敬等この本を元刊とするが、寧ろ恐らく明初刊と目すべきであろう。建安の鄭氏宗文書堂の出版は元の至順頃に始り、明の嘉靖頃まで二百餘年続いた。首に「新宮城書蔵」印あり。楊志三・楊譜三16著録。第一冊首に光緒九年五月の守敬の手書題識（楊志収）二丁を附綴する。

同　存巻一至巻六　明宣徳六年刊（清江書堂）　一冊

大本。双辺（二〇・九×一二・八糎）有界十二行。注小字双行、行廿八字。版心小黒口「玉篇幾巻（或は「幾」）（丁付）」。首目・首題署の体式前掲諸本に同じ。玉篇広韻指南の後の裏丁に「宣徳辛亥孟冬／清江書堂新栞」の両行双辺木記がある。楊志三・楊譜三17著録の明成化弘治間頃の劉氏明徳堂刊本と款行内容もほゞ同じらしく、元刊本に比し各部増字が加えられている。首に「和州五／条小林／氏図書」（小林辰）の印あり。楊譜三12著録。

同　三〇巻　〔元和寛永初間〕刊　覆慶長覆元至正二六年南山書院刊本　五冊

黒色表紙（二六・五×一六・九糎）。首目・題署の体式ほゞ前掲諸本に同じ。双辺（二〇・五×一二・八糎）有界十二行、注小字双行、行廿八字。指南の末の「至正丙午良月／南山書院新栞」の原木記もそのまゝ覆刻。この本には巻末の慶長九年五月の鉄山宗鈍の跋文の葉を欠く。その跋文によれば、道本・祖転の両翁の捐資によって、正運・純孝が雕板に力を尽したという。但しこの本はこの慶長版を原木記・宗鈍跋文ともに、元和・寛永初間にさらに覆刻した別版である。

景祐天竺字源　七巻　宋釈惟浄等集　〔江戸〕写　五冊

茶褐色布目表紙（二六・七×一八糎）。字面高さ約十九・五糎。毎半葉八行、行十八字。宋仁宋景祐二年御製序を冠し、本文首行「景祐天竺字源巻第一」、次行「譯経三蔵朝散大夫試光禄卿光梵大師賜紫沙門臣惟浄等集進」と題し、巻七末に「景祐二季九月日奉／聖旨開板摹印頒行」の原刊記並に御書祇候臣盛師等の銜名がある。本書は梵字を華語に対訳せるもので、直斎書録解題に著録されているが、漢土に於ては夙に逸して、我が国に伝存し、宮内庁書陵部（東京博物館より移管）に高山寺旧蔵の欠巻七の平安鈔本六軸及び嘉禄二年釈善海が抜抄書写せる一軸（民国五年羅氏影印）が蔵される。この本はその両本の伝鈔である。首に「效梵書院蔵本」「蒼嘗林蔵」、梵字の矩形印、尾に「浅草門外／福井之坊／覚畊蘭若／円明験院」等の印あり。本文同筆の墨筆校字書入並に守敬手校も少しくあり、第一冊表紙見返に守敬が直斎書録解題の解説を抄録している。楊志四・楊譜十一14著録。

漢隷字源　零巻（存去声）　宋婁機撰　闕名者続増

〔明初〕刊　一冊

後補紺色表紙（二六・三×一八・七糎）。題簽に「漢隷字源続増残本」と墨書。裏打補修を加う。双辺（二二・四×一四・五糎）有界六行、大字行六字、注小字双行字数不等。版心線黒口「漢隷字源去声　（丁付）」。首を欠き「戮八五」に始って、「鳧卅四」に止る。婁機原書未収の字等には圏で囲んだ「続増」を以て附注してあるから、後人の続増本である。森志巻三に「零本□巻　元槧本　求古楼蔵　未見」として著録。楊志三・楊譜三56著録。楊志に曰く、

狩谷氏求古楼旧蔵訪古志所称元槧未見者即此本也（中略）今存去声五寘自義字起（前半葉欠）至冊九宥臭字止凡八十六葉有半其書以婁氏字源為主毎字先以陰識楷書標目其下隷字次第亦与婁氏同而筆画小異凡婁氏已収之碑而有所遺者則題云某碑今補原書有誤者則題云今正原書未収之碑及未収之字則題云続増並沿婁氏之例以数目字記之惜其首巻碑目不存無従考其為何碑也按蘇平仲集及宋濳溪集均有宋季子重校漢隷字源六巻序似此書即季氏所編然濳溪称其於字原之外増多僅一千八百十七字而此書所増約略計之幾及原書之半然則亦非宋氏書也視其板式当在明初惟漢碑之出土者元明二代著録寥寥不応此人得見如此之多或所採沿及南北朝或足以印章之近隷書者観其所補之字以隷釈及今所存漢碑照之皆合則知其所増之字必非郷壁虚造擬其博綜欧趙以還

良堪指数惜欠其首尾使作者姓名翳如真可謂之不幸要其所増之字雖無碑名望而知其可為典要学者猶有資焉記之以告海内之講金石者

*竜龕手鑑　八巻　遼釈行均撰　後人増補　朝鮮嘉靖四二年刊（高徳山帰真寺）　七冊

茶褐色表紙（三四×二三・二糎）。首に統和十五年燕台憫忠寺沙門智光撰の竜龕手鑑序及び竜龕手鑑目録を冠し、本文首・次行「竜龕手鑑巻第一／（低二格）金部第一」と題する。巻二末に「幹善道人釈熙。熙円」、巻三末に「主上殿下寿萬歳／王妃殿下寿斉年／聖列仁明大王妃殿下寿萬歳／恭懿王大妃殿下寿萬歳／世子邸下寿千秋／（隔二行）監刊華厳宗中徳成仏寺住持法達／（隔二行）幹善道人釈熙／一巻成仏寺僧人等開刊」、巻七末「幹善道人　化主信仁」、巻八末に

判禅宗事都大禅師兼奉恩寺住持
大功徳主判教宗事都大教師兼奉先寺住持　天則（隔二行）化主信仁

嘉靖四十二年高徳山帰真寺開板

と幹縁名や刊記が刻されている。双辺（二六・五×一九糎）有界十行、注小字双行。版心粗黒口「竜龕巻幾　（丁付）」、下象鼻に所々陰刻を以て「行青」「青」「守」等の刻工名らしき人名が刻され、左欄外下端にも「清刀」「能仁」等の名が見える。また右欄外下端には「施主戒円」「華厳宗中徳前伽耶寺住持法達」「施主信寛」「柳〇」「道熙」「智玄」「元牛」等多数の助縁者名が刻されている。毎巻首に「養安院蔵書」「向黄邨／珍蔵印」の印記、巻四首尾に韓印と思われる印文不明の方形大朱印、巻四首の欄外右下端に「全州郷校上」の墨書、第七冊の後遊紙には「脩竹山房架蔵」の江戸時代の墨書がある。森志巻二に「求古楼蔵」として著録された本が即ちこの本とも思われるが、「又有蟠桃院印、及如実庵図書記印、此本原係能登石動山僧大恵旧物、大恵歿後帰求古楼」という両印は見えない。伝来の異る別蔵本か。楊志四著録。

本書は元来「竜龕手鏡」と題され、遼版を直接承けた高麗版は鏡に作るが、宋版は避諱して鏡を鑑に改めた。元来四巻であるのが、この朝鮮版が八巻に分つのは、巻六の尾題を「増広竜龕手鑑」と作る如く、注文末に「今増」の陰刻標識を附して、毎部増字が多いからで、この増広は朝鮮に於てなされたと云われる。この増字につき、楊守敬は

此本雖有後人羼入之字而其下必題以今増与原書不混至其文字精善足以訂正張刻本函海本不可勝数邇来著録家雖有此書伝鈔旧本而無人翻雕得此本固足宝貴況其所増之字亦多経典常用之文不尽梵筴俗書異乎郷壁虚造者矣

と。我が国の古活字版はこの朝鮮版に基づく翻印である。

*広韻　五巻　宋陳彭年等奉勅重編　元至順元年刊（敏徳堂至順二年印）　五冊

水色表紙（二一・九×一五・二糎）。裏打補修を加う。首に陳州司法孫愐唐韻序をおき、序の末に、「至順庚午／敏徳堂刊」

の両行篆書の双辺木記あり、その左旁に「辛未菊節後十日印」と刻する。本文首行「広韻上平声第一」と題し、次行目あり、目に接続して本文とする。左右双辺（一八・三×一一・八糎）有界十三行、小字双行、行約廿八字。版心小黒口「匀幾　（丁付）」。少しく朱句点が附され、「永昌／図書」、「読杜／艸堂」等の印あり。他に同版本の所在を聞かない。容安書院蔵として森志二、楊志三・楊続譜著録。第一冊首に左の光緒九年の楊守敬の手書題識（楊志所収文と小異）四丁を附綴する。

元刊本広韻五巻首載陳州司法孫愐唐／韻序序後有至順庚午敏徳堂刊篆書木／記木記後又有辛未菊節後十日印計刊此／書首尾年餘宜其刻印俱精此本校張士／俊沢存堂所刊重脩本注文殊簡而与顧亭／林刊本略同朱竹垞謂明代内府刊板中涓欲／均其字数取而删之　提要謂永楽大典引／此本皆曰陸法言広韻引重修本皆曰宋重／修広韻世尚有麻沙小字一本与明内府板同／題曰乙未歳明徳堂刊当為元刻非明中涓／所删然其本但題曰乙未歳究不能確指為／元刊（余蔵有玉篇亦劉氏明徳堂刊本似已在明初）此本明著至順則刊于元代無疑又　提要称二十一殿不作二十一欣／殿独用不作与文通皆与此本合又称匡字／紐下十三字皆闕一筆避太祖諱其他則不／避此本亦与所説合但朗字雖不避而一東融／字注朗作朗又蕩字下徒朗切亦欠筆作朗／是其他不避者重刻時補之也拠此其根／源于宋本無疑又　提要称東字下舜七／友譌作舜之後此本作七友不誤足知明徳／堂本又不如此本之善也今略校之其足以訂／重修本之誤者如東韻中忪字重修本注／古文見道経此本見作出二義雖通以下仝字／注例之則作出是也同字注亦州此本州下有名／字狨字注細布絨字注上同此本狨字注猛也／絨字注細布蒙字紐下注廿六此本作廿七按／蒙紐実廿七字聰字注聞也此本作開皆当／以此本為是而絨狨二字則一望而知為重修／之謬其他雖亦有此本独誤者皆是未校之／故可以参証得之至永楽大典／称此本為陸法言広韻殊非典拠按法／言之書自名切韻其書久亡崇文総目有／陸慈切韻五巻而未知即法言之書否唯郡／斎読書志称広韻五巻陸法言撰其後唐／孫愐増加字是公武以孫愐之書本之法言／故以標題然屢経増改非事実矣孫愐自序云名曰唐韻蓋取周易周礼之義是非特法言之書不称広韻即孫愐書亦不得称広韻（以上卅八字上欄ニアリ）況封氏聞／見記載法言韻凡一萬二千一百五十八字今此本／有二萬五千九百二字則為増加本無疑又李涪／刊誤云尚書嘉謨嘉猷法言曰嘉予嘉猷詩／曰載沈載浮法言曰浮伏予反今此本謀猷二／字皆在尤韻与李涪説不相応則非法言書／更無疑義要之法言之切韻孫愐之唐韻／重修本之広韻三書同源異流此本毎巻／既題広韻則非孫愐之旧無論法言然／少於重修本二百九十二字則非従重修本出疑／重修本既行於世而孫愐本仍存書坊刻／孫本因冠以広韻之目其中参差各不／相照書此以俟知者／光緒癸未夏五月宜都楊守敬記（印）

＊同　〔元〕刊（余氏勤徳書堂）　五冊

淡香色表紙（二二三×一四・七糎）。匡郭内のみを切って台紙に貼って綴う。体式題署前掲本に同じ。左右双辺（一八・一×一一・七糎）有界十三行、小字双行、行約廿八字内外。版心線

黒口「員（匀）幾　（丁付）」。序の後に「余氏勤徳書／堂鼎新刊行」の両行双辺木記あり。序・巻五尾各一頁補写。印面やゝ磨滅の跡あり、朱筆句点を附す。版式前者とほゞ覆刻の関係にあるが、内容に少しく出入あり。「浅野源氏／五萬巻楼／図書之記」「漱芳閣／鑑蔵印」「彫函翠蘊」（浅野梅堂）の印、最巻末に「雲洞常住（花押）」の室町期の墨書がある。他に同版本を見ない。楊志三・楊譜三31著録　首に光緒十年の守敬の左の手書題識（楊志収）三丁を附綴する。

元槧広韻五巻孫愐序後有木記云余氏勤／徳書堂鼎新刊行不著年月相其字体紙／質頗似南宋但摸印稍後此書余既得至順至正両／本已著其参差之迹然究不能定為何時何／人之作反覆研尋乃知張刊宋本非陳彭／年之旧此本係従重修原本出非従張／本節刪故有勝於張本之処而其依用礼／部韻略則此本与張刊本皆然按張溟／雲谷雑記詔丁度等以唐諸家韻本刊其／韻窄者凡十三処許令附近通用此蓋今／所行礼部韻略也東斎記事所説亦同今以／集韻礼部韻略校広韻則知併殷於文／併厳於塩添併凡於咸銜上声併隠於吻去／声併廃於隊代併厥於問入声併迄於物／併業於葉帖併乏於洽狎凡得九処餘／悉相同及考之上声末合儼於琰忝合范／於蹥檻去声末合釅於豔椻合梵於陷鑑／与平入之部分不相応乃知此四処亦韻略集韵／所合併併合之前九処恰符十三之数並非広韻原／注如此乃校刻広韻者因韻略集韻而改移／之当因此四韻尤窄之故細校此本闕宋孝光寧三帝諱／旨惇字皆欠筆張氏重脩本亦欠欽宗／諱是其根源不出南北宋之間皆非祥符官／刊原本張氏本注文詳瞻与兼明書史略困学紀聞姚／寛戦国策後序所引多合其為孫愐以下諸家増／加之本無疑此本簡略過甚其中実有刪削／不成語者其為従祥符本節損無疑然如狨／絨二字之互異則顕為張刊本之誤則不唯部分／有改易即注文亦未尽陳彭年之旧吁二百六／部之祥符本尚費尋究何論陸法言与孫愐／古書罕存存者又不得其真源流変遷非深／識不能見其癥結此余所以有経籍沿革／考之作也／光緒甲申三月宜都楊守敬（印）（印）（印）

同　元至正二六年刊（南山書院）　五冊

淡香色表紙（二三・八×一四・三糎）。裏打補修を加う。首の陳州司馬（諸本司法に作る）孫愐唐韻序の後に「至正丙午菊節／南山書院刊行」の両行双辺木記あり。題署前掲本に同じ。双辺（二〇・九×一二・五糎）有界十二行、小字双行、行約廿八字。版心線黒口「韻（匀・広匀）巻幾　（丁付）」。印面やゝ磨滅の跡あり。「江戸市野光／彦蔵書記」「杉垣簃／珍蔵記」「増島氏／蔵書記」等の印あり。同版本に内閣文庫・尊経閣・天理図書館・龍谷大学・北京図書館蔵本がある。楊志三・楊譜三27著録。首に左の光緒九年の守敬手書題跋（楊志所収文と小異）三丁を付綴す。

右元槧広韻五巻首題陳州司馬孫愐／唐韻序序後有木記題至正丙午菊節／南山書院刊行行款与至順本同而篇／幅則廓又四週雙辺知非従至順本翻／刻按各本皆題為司法此題為司馬当是／浅人所改此書前人未得刊刻年月故多疑竇余已略疏其分合於至

順本今又得／此本注文亦簡略尤足証非明中涓所删／或疑此即陸法言之原本謂切韻亦兼／唐韻之名引唐志宋志皆載陸法言唐／韻五卷為証余検新旧唐志皆不載／法言之書唯旧唐志有陸慈切韻五／卷或法言以字行与然題為切韻並無唐／韻之目唯宋志有法言広韻宋志多謬不足拠此蓋沿郡斎読書志之称而又／失其意者宋人多以切韻唐韻広韻三書為一困学紀聞已弁之／或又謂孫愐以後陳彭年以前／修広韻者尚有厳宝文裴務斎陳道固／三家此本当為三家之遺今按重修本／牒文有郭知元関亮薛峋王仁煦祝尚邱／諸人増加字亦不止厳裴陳三家考日本／現在書目自武玄之以下皆称切韻無称／広韻者況祥符牒文云仍特換於新名／庶永昭於成績宜改為大宋重修広韻／可知広韻之称実始祥符陳彭年以／前固不得冒此名也且果為厳宝文等之／遺何以独載孫愐一序余跋至順本亦疑／此為孫愐之書特為書賈改題今細繹之／亦非也愐自序称按三蒼以下之書数十種並／列注中今此本注皆不引各書名尤有切証／者邱光庭兼明書云孫愐唐韻引風俗／通云邱氏魯左邱明之後也此本邱下但注地／名二字則非孫愐之書無疑又按魏鶴山称／呉彩鸞唐韻写本廿九山之後継之以三十／先三十一仙則此本非唐韻又一証也（鶴山之説未足拠困学紀聞已弁之○／按雲煙過眼録及研北雑志皆云彩鸞所書為廿三先廿四僊此／巻国初尚存故閩潛邱称親見彩鸞所書唐韻次第／較鶴山亦不合）然謂此本是拠重修本所删削乎則／又非也重修本二十文下注欣同用十八吻下／注隱用同此本二十一殷（不作欣不避宋諱）与二十文皆独／用十八吻目録注隱同用而巻内仍注独用不使連属按合欣於文合隱於吻始于／景祐中之修礼部韻略非特唐人無此（顧亭林朱竹垞皆力言其非）／即重修本亦不応有此幸／此本尚有参差之迹可尋不尽為景祐／之合併所泪没唯其注文之簡略前既／非孫愐後亦不同陳彭年武玄之以下／之書既不存無従考験其根源或以／簡略為古或以詳贍為真皆未可為定／論也　光緒癸未秋八月楊守敬記

＊同　明永楽二二年刊（広成書堂）　五冊

淡褐色布目行成表紙（二四・八×一五・七糎）、題簽「孫愐広韻幾」（江戸期の筆跡）と。裏打補修を加う。首目題署の体式前掲諸本に同じ。孫序の後に「永楽甲辰良月／広成書堂新栞」の両行双辺木記あり。双辺（二一・二×一二・七糎）有界十二行、小字双行行約廿七字。版心小黒口「韻幾　（丁付）」。版式上は前掲本に基づく粗雑なる覆刻に近いが、文字に少しく異同があり、諄の字等に欠筆が見られる。「釈」「意／芳」「多紀氏／蔵書印」の蔵印あり。森志著録の同版本は宮内庁書陵部現蔵。楊志三・楊譜三32著録。首に左の光緒八年の守敬の手書題識（楊志収）一丁を附綴する。

広韻五巻標題改司法為司馬与元至正／本同序後木記云永楽甲辰良月広成書／堂新栞行款匡廓亦同至正本而字体稍／寛博文字亦有異同避宋諱処則皆与朱／元本同則亦拠旧本重翻者也毎巻有釈／意芳印第一冊有多紀氏印按多紀亦／称丹波元堅字�庭三世為医博通典／籍収蔵極富此本毎巻鐵題分書／孫愐広韻当是多紀氏之筆蓋彼／国人亦疑為孫書余所得旧本／広韻之第五冊／光緒壬午三月宜都楊守敬記（印）

＊同　明宣徳六年刊（清江書堂）　五冊

淡香色表紙（二四・三×一五・五糎）、裏打補修を加う。首目題署の体式前本に同じく、字様また相似す。孫序の後に「宣徳辛亥孟冬／清江書堂新栞」の両行双辺木記あり。双辺（二〇・八×一二・八糎）有界十二行、小字双行行約廿七字。版心小黒口「匀幾　（丁付）」。巻末「山根／蔵書」印。清江書堂より同年に出版された前掲の大広益玉篇と対をなしている。

＊同　明弘治十四年刊（劉氏文明書堂）　五冊

後補縹色表紙（二六×一五・五糎）、題簽の「広韻（上平／弘治辛酉文明書堂翻元本）」は守敬手筆。裏打補修が加えらる。首目題署の体式字様前掲本に相似し、孫序の後に「弘治辛酉劉氏／文明書堂新刊」の両行双辺木記あり、また巻一末にも「文明坊刻劉氏新刊」の蓮牌木記を持てる児童の絵あり。双辺（二〇・九×一二・六糎）有界十二行、小字双行行約廿七字。版心小黒口「匀（韻）幾（丁付）」。巻三初葉破損補写あり、巻二尾題の丁に印刷せる封面の故紙を使用する。巻一には江戸前期の墨筆を以て訓点振仮名を附し、上欄に校字書入がある。巻三尾題下に室町期の筆で花押が墨署され、首に「黄絹／幼婦」「読杜／艸堂」等の印記を存す。楊志三・楊続譜著録。首に左の光緒八年の守敬手書題識（楊志収）一丁を附綴する。

広韻五巻標題亦改司法為司馬与元至正／本同序後木記云弘治辛酉劉氏文明書／堂新刊四週雙辺匡廓亦与至正本不殊／但字体略大其中正俗文字不一然其避宋／諱処宋元本同知其亦翻旧本非重／書上木也首冊書眉有日本人以他本校／字往往此本為是此余所得旧本広韻／之第六冊旧係日本寺田弘所蔵有読／杜草堂印記／光緒壬午十月宜都楊守敬記

以上の明刊本三種は版式行款相似して、ほゞ覆刻に近い関係にある。

＊韻鏡　宋張麟之編　享禄元年跋刊（泉州堺・釈宗仲）

一冊

古丹表紙（二七・二×一九・七糎）。首に紹興辛巳三山張麟之子儀の序、序後「慶元丁／巳重刊」の原木記あり、次に嘉泰三年麟之序、調韻指微、三字六字母帰納助紐字、帰字例、横呼韻、五音清濁、四声定位列囲とつづき、末に「韻鑑序例終」と題し、次に本文は内転第一より第四十三に至る。双辺（二一・九×一五糎）有界十行、行廿字。版心小黒口「匀竟　（丁付）」。巻末に堺の普門院宗仲論師が諸本を校訂して本書を開板する旨を識した清原宣賢の左の跋文がある。

韻鏡之書行於本邦久而未有刊者故転写／之訛烏而焉焉而馬覧者多困彼此不一泉／南宗仲論師偶訂諸本善不善者且従且改／因命工鏤板期其帰一以便於覧者且曰非／敢拡之天下聊備家訓而已於戯今日家書／乃天下書也学者思旃／享禄戊子孟冬初一日／正三位行侍従臣清原朝臣宣賢

江戸初の朱引墨筆訓点が書入され、「江戸市野光／彦蔵書記」「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森氏開萬／冊府之記」の蔵印あり。森志二・楊志四・楊譜三50著録。本書は撰人名氏を著録していないが、唐末の作と推測されている。南宋初張麟之が其本

を得て重編し、別に序例を作って之を刊した。元来の書名は「指玄韻鏡」であったが、宋代には避諱によって「指微韻鏡」或は「指微韻鑑」と改題された。しかし何故か行われなかったとみえて、元明以来伝本なく、亡佚した。我が国には鎌倉時代に将来され、中世期から江戸時代を通じて、韻学の基本図書として愛用され、特に名乗りに使用されたので盛行し、比較的古写本が多く、江戸時代には多種の刊本が輩出した。刊行はこの享禄版が最初で、その後三十餘年を経た永禄七年に、享禄の板木に一部修訂を加えて、宣賢跋の次に、「頃間求得宋慶元丁巳張之所刊之的本而／重校正焉永禄第七歳舎甲子王春壬子」の陰刻の刊記を追刻した修補版が出た。古逸叢書は享禄版は頗る更改があり、永禄本はそれを重校してその旧に還したとして永禄版を模刻した。この享禄初刻本は永禄修版が出たせいか、伝存本が殆どなく、何故か巻末の宣賢跋文の一丁が全然印刷されていない竜谷大学図書館蔵（写字台本）の一本のみが知られ、次掲の元和頃の覆刻本が往々原刻本と誤認されていた。従ってこの観海堂本は完全な享禄版としては現存唯一の本である。

同　〔江戸初〕刊覆享禄元年刊本　一冊

縹色表紙（二八・三×一九糎）。前掲本を元和頃に覆刻せる本で、寛永十八年の刊記を追刻した後印本もある。少しく朱引や墨筆の書入がある。

＊魁本排字通併礼部韻注　五巻　宋不著撰人　〔元〕刊　五冊

後補縹色地空押卍繋ぎ文様表紙（二五・五×一六・六糎）。裏打補修あり。序跋なし。本文首行「魁本排字通併礼部韻注巻第一　上平声（墨囲陰刻）」と題し、次に一格を低して四行に亘って目を列し本文に接属する。巻末「礼部韻註入声巻終」と題す。左右双辺（二二・二×一四糎）有界十二行、注小字双行。版心小黒口「匀幾　「丁付）」。「頼古堂／□蔵」、「在／田」（鼎形）「源／竜」（陰刻）、「浅野源氏／五萬巻楼／図書之記」「湫芳／閣／清賞」「湫芳閣」「長章／祚之」「湫芳閣／新収記」「楳堂閲蔵」「彤函翠蘊」、「読杜／艸堂」「寺田／盛業」「字士弘／号望南」等の印記あり。狩谷棭斎・浅野梅堂（長祚）・寺田望南等旧蔵。楊志四・楊譜三46著録。他に同版本がない。巻末に左の天保十五年の梅堂の手書題跋三丁を附綴する。

魁本排字通併礼部韻註五巻狩谷氏求古／楼蔵本也巻首有清周亮工頼古堂蔵印及第二巻末韓人源竜在田印記此書張金吾／愛日精廬蔵書志著録元大徳本新刊韵略／五巻曰金王文郁撰是書并上下平声各為／十五上声二十九去声三十八声十七合一／百六部此并旧韻二百六部為一百六部之／始也所并之韻首一字以魚尾隔之如鑑韻之字不混入冬脂韻之字不混入支韻是也／不至若後来之漫無区別也論者謂并／韻始劉淵ゝ成書後文郁二十四年淵書今／不可見就韻会挙要引考之蓋襲取文郁所／之書而稍有増損者也如一東烘燎也爝火／気紱細布二冬佟姓也膿腫血三江肛虚江／切脖脖張四支泜水名在常山嵯嵯嵊山不／斉俱与韻会所引平水韻合是則全襲文郁／之原書也一東茺蔚草也韻会引作益母也／躬謹敬之貌韻会

引作恭貌二冬夆掣也韻／会引作牾也三江𨿽蹋地声韻会引作履地／声四支紕飾縁辺也韻会引作辺飾謂之紕／琵琶推手為琵引手為琶取其鼓時以為之／名也韻会引琵琶胡楽胡人馬上鼓所推／手前曰琵引手後曰琶荑蕖韻会引作荑／荑蕖薬名攡太元経云張也韻会引作攡張／也太元幽攡万能是則因文郁之旧而稍有／増損者也淵書行而是書晦故後人知有淵／而不知有文郁耳毎韻末間有標新添重添／者文郁所添歟未可知也／巻末有大徳丙午重刊新本平水中和軒王／宅印是書也無伝本諸家書目亦従無著録／此本猶是元時旧槧首尾完善洵韻学中有／一無二之秘籍也又載正大六年己丑季夏／中旬大夫前行有司諫致仕河間許古道真／書於嵩郡隱者之中和軒序及鈍大昕手跋（以上金吾跋ノ引用）／今此本経本邦人改装脱許道真序文前後／無鋟刻年月木記及銭氏所謂聖朝頒降貢／挙程式御名諱一条等而張金吾所考勘／如東冬江支四韻字註及全韻之数所并之／韻字首以魚尾隔等悉相符矣但肛虚江切／作許江切泜水名在常山無在常山之三字／而作泜水名又音遲至荑字全註荑莖荑薬／名四字又所謂韻末標新添重添者此本無／有且諦審版式字様与琳瑯書目所挙金版／貞観政要条下曰字宗顔体刻印精良者相／似顧金版於西土流伝寔尠耳目罕経譬諸／吉光片羽今此本既非大徳再刊者而異同／板様亦復如是雖難遽定其正大巳丑初刻／本即是此種然而其与張本則夐乎不侔是／殆金版無容疑也嗚呼張氏不夢知排字通／併之旧名僅獲元大徳重添新刊本而詫其／有一無二秘籍若見此版鄭重驚奇当更何／如也且張氏所疑新添重添者果係刊刻者／所増

此本可拠而断焉古刻之可尊如此豈／可不十襲為宝愛之乎／天保甲辰秋八月書於峽府香芸書堆長祚（印）〔某／堂〕

また第一冊の首に「鄰蘇園」の印刷罫紙三丁に記せる楊守敬の次の手書題跋（楊志所収文とは出入異同あり）を附綴する。

此本無序跋上下平各為疊声（楊志作為十五上声）二十九去声三／十入声十七蓋合併二百六部為一百六部也／所併之韻韻首以墨蓋隔之（如魚尾形）韻略所載依／字母為次第如東通同籠是也此本則東紐下／次同而籠通隔越於後与広韻次第同向伝今／韻之併始於平水劉淵銭竹汀跋王文郁刊本／謂始於文郁詳見張金吾愛日精廬蔵書志今／以此本照之則金吾称韻会所引平水韻与其／本不合者皆与其本合唯泜下云水名又音遲／無在常山三字筮下文郁本只一荑字韻会本／作巫荑薬名四字此本則不与文郁本合而与韻会同然文郁本有新添重添之字此本無之／是又出文郁本之前又以欧陽徳隆釈疑校之／則　隷之字互有出入如東字紐下此本有凍／字同字紐下此本無齈䶵三字蟲字下無爞／字中字下無忡字而忡字又別出一紐曰敕／中切似又在欧陽之前也又通字紐下無桐字／同字紐下無重字先字紐下無西字煙字紐下／無殷字是不従毛晃増韻之説或本又在毛氏／前也然以元祐刊本校之而贏出之字為不少／矣且元祐本両音之字有圏以記之欧陽釈疑／本同此本則無圏記当是坊刻去之此本毎半／葉十二行大字横列排匀（郭守正所刊韻略亦如此）鐫刻頗精為日本寺田宏所蔵毎巻有浅野源氏五萬／巻楼図書之記印章末有天保甲辰長祚題跋其跋首録張金吾跋以此本此勘又拠銭竹汀／跋定為金刊余望而知為元版（凡宋蹟皆不欠筆）而

寺／田奇貨居之堅称金刻余以中土此書頗少破慳得之惜不得金吾蔵本一一校之也

余又得朝鮮明天順八年黄従兄刊本首有盆／城金孟子進序又有朝奉大夫知清道郡事兼／勧農副使大丘道兵馬団練副使黄従兄跋蓋与／玉篇直音合刊者首題排字礼部韻略上平声／無魁本二字其隷字及注与前本十同八九／唯前本以反切居前此本居後刊刻草率之極／拠金孟序是属淄流所鐫余以已有前精本故以此為次録其玉篇直音則全删其解説但著音／読而又乱玉篇次第不足録也

又按此本訓解之字与広韻多同而与元祐刊／本韻略及欧陽釈疑本多異不第次第有参差／也

＊排字礼部韻略五巻附新編直音礼部玉篇　二巻　朝鮮黄喜編　朝鮮天順八年跋刊（黄従兄校刊）　三冊

後補紺色表紙（二三・八×一六・二糎）、裏打補修が加えらる。天順甲申秋七月朔日盆城金孟子進序の「聖朝　頌降排字礼部韻略序」、及び天順八年甲申七月日朝奉大夫知清道郡事兼勧農副使大丘道兵馬団練副使黄従兄跋を冠し、本文首「排字礼部韻略上平声一」、巻末「排字礼部韻略入声」と題する。礼部玉篇は首に「新刊排字礼部玉篇目録上（下）」あり、本文首「新編直音礼部玉篇巻上」、巻末「新編類聚改正礼部玉篇巻下」と題する。単辺（匡郭内寸法不等、ほゞ一八・五×一二・五糎）有界十三行、注小字双行。版心粗黒口或は大黒口「　（巻次）（丁付）」。字様版式甚だ稚拙。楊志四（前掲参照）・楊続譜著録。

増修互註礼部韻略　五巻（欠巻二・五）　宋毛晃増注・毛居正校勘重増　元至正四年刊（〔建安〕余氏勤徳堂）　三冊

後補紺表紙（二六・七×一七・一糎）、襯紙を入れて改装。首に紹興三十二年十二月日衢州免解進士臣毛晃上表の「擬進増修互註礼部韻略表」あり。本文首行「増修互註礼部韻略巻第一上平声（墨囲陰刻）」、第二行低一格半「衢州免解進士毛晃　増註」、第三行低四格半「男進士　居正　校勘重増」と題し、次に目があって本文に接続する。巻一末に「至正甲申仲夏／余氏勤徳堂栞」の両行双辺木記が存する。左右双辺（二一・五×一三・七糎）有界十一行、注小字双行行廿八字。版心小黒口「毛韵幾フ（丁付）」。毎葉裏左欄外上端に耳格（無郭）あり。少しく補写を交えるが、早印美麗である。楊譜三45著録。同版の完本に成簣堂文庫旧蔵本がある。

同　五巻　元至正一五年刊（〔建安〕日新書堂）　五冊

後補紺表紙（二五・七×一六・四糎）、裏打補修あり。首目題署体式款行前本に同じ。左右双辺（二〇・六×一三・七糎）有界十一行、注小字双行行廿八字。版心小黒口「毛韵幾　（丁数）」。毎葉裏左欄外上端耳格（無郭）あり。巻一末に「至正乙未仲夏／日新書堂重刊」の両行双辺木記を存する。前掲本の覆刻である。「向黄邨／珍蔵印」等あり。森志二・楊志四著録。書陵部・内閣文庫・天理図書館に同版本あり、台北の中央図書

館蔵本（刊記剜去さる）は目録に日新堂刊と著録されているが、覆刻（一部少異あり）の関係にあるが、同版ではない。

*同　〔元至正二六年〕刊（秀岩書堂）　五冊

淡香色表紙（二六・五×一二糎）、裏打補修を加う。首目・首題の体式款行前掲本等に同じ。左右双辺（二一・四×一三・八糎）有界十一行、注小字双行行廿八字。版心小黒口「毛韵幾フ　（丁付）」。耳格極めて稀にあり。巻一末に「太歳丙午仲夏／秀岩書堂重刊」の両行双辺木記あり。前掲二本と覆刻の関係にあるが、彫板が疎雑で、明刻の特徴が出ているのが見える。しかし刊記の丙午は至正丙午廿六年に繋けてよかろう。「妙足院文庫」「黄絹／幼婦」「読杜／艸堂」等の印あり。楊譜三44著録。同版本に天理図書館蔵本がある。

同　〔南北朝〕刊　覆元刊本　五冊

後補淡鼠色表紙（二六・六×一七・二糎）。首目・首題の体式・行款前掲元刊本に同じ。左右双辺（二一・四×一三・八糎）有界十一行、注小字双行行廿八字。版心粗黒口「毛韵幾フ（丁数）」。毎葉裏左欄外上端に耳格（無郭）あり。巻五の第五至八葉の裏左欄外下端に「日本永春刀」の刻工名があり、巻一巻末に双辺木記が刻されてあるが、文字がなく空格になっている。此は底本の原刊記の匡郭のみを覆刻して、刊者名を削除したか、底本既に抉去してあったものであろう。東洋文庫本には応永六年の識語があるから、刊年の下限を推定することができる。川瀬一馬博士は精刻な覆宋刊本と称するが、前掲元刊本のいずれかの覆刻であって、字様版式から見て、その原本が宋版とは考えられない。本版には後掲本の如く永春の刻工名を削除せる後印本や修補の入った後刷本がある。森志二著録。

*同　（巻一・四）〔明初〕刊（巻二・三・五）〔南北朝〕刊〔室町後期〕修印　五冊

淡茶色表紙（二四・五×一五・七糎）。巻一（尾一丁のみ日本旧刊本）・巻四（尾三丁補写）は前掲元刊本の覆刻たる明初刊本で、左右双辺（二一・九×一三・八糎）有界十一行、注小字双行行廿八字、版心小黒口「韵幾フ　（丁付）」、稀に耳格がある。日本旧刊本の巻は、「日本永春刀」の刻工名を削った前掲版の後刷で補刻が多く入っている。「染井文庫／図書記」「多福文庫」の印あり、巻一末の木記の空格の箇所に「大亀山」と墨署されている。

*新彫改併五音集韻　一五巻　金韓道昭撰　元前至元二六年刊（琴台張仁）　六冊

淡香色表紙（二三・七×一六糎）、室町末近世初間筆の外題・目録外題あり。裏打補修を加う。首目の第次と題署下の如し。首に「己丑新彫改併五音集韻序」と題し、序末「旹崇慶元年歳在壬申姑洗朔日老先生姪男韓道昇謹誌」と署し、次に「真定府松水昌黎郡韓孝彦次男韓道昭改併重編／　男韓徳恩　姪韓徳恵　婿王徳珪　同詳定／琴台張仁開板」、次に「己丑新彫五音集韻序」と題し、末に「歳次。己丑長至日重刊」と署し、次に至る第三・四丁の二葉が欠丁となっていて、次に「新彫改併五音集韻

総目録」あり、尾に「至元己丑新彫改併五音集韻総目録終」と題し、次に「入冊検韻術曰」がある。本文首行低三格「新彫改併五音集韻上平声巻第一」、次行低三格「滹陽　松水　昌黎郡韓道昭改併重編」と題する。各巻の首・尾題は不同で、巻一と異るもの「改併五音集韻」(巻二尾・三首、四尾・六首尾・七首・八首尾・九首・十首・十五首)「己丑新彫改併五音集韻」(巻一尾・五首・十二尾)、「至元新彫改併五音集韻」(巻五尾・十二首)、「大元新雕改併五音集韻」(巻七尾・十一首)、「大朝新雕改併五音集韻」(巻九尾・十尾・十一尾・巻十四首)、「大安新彫改併五音集韻」(巻十三首尾・十四尾)、「崇慶重編改併五音集韻巻終」(巻十五尾)。巻一尾題の次に「昌黎諸門人友人同校正」の張道忠以下廿名四行の列名、また巻十五末にも「昌黎韓道昭門人」の中山派水史道敏以下の列名五行がある。本版は金崇慶刊本(故宮博物院蔵・旧北平図書館蔵零本)の重刊で、行款・字様共にそれに倣い、改修はあるが、ほゞ覆刻に近く、巻一の首題を三格低しているのは、崇慶版が「崇慶新彫改併……」と題しているのに倣って「崇慶」を「己丑」と改めるべきのが空格になったので、「大安」「崇慶」等の文字は原本の字を訂正し尽さずして残ったものである。左右双辺(二一・五×一四・四糎)有界十三行、注小字双行卅五字内外不等。版心白口(或は小黒口も交ゆ)、「韻幾(或は匀幾フ)(丁付)」、上象鼻に所々大小字数あり。印面やゝ磨滅し、少しく補写を交え、また欠葉がある。所々朱筆勾点と墨筆の書入がある。「浅野源氏／五萬巻楼／図書之記」「漱芳閣／新収記」「楳堂閲蔵」「向黄邸／珍蔵記」の印がある。次掲本と共に梜斎旧蔵の浅野梅堂手沢本にして、次掲本に両書に対する梅堂の手筆題跋が誌されている。本版と同版の東洋文庫蔵本も浅野梅堂旧蔵である。

＊改併五音類聚四声篇　一五巻　金韓道昭撰　元前至元二六年刊(張仁)　八冊

前本と対をなし同じ箱に入れてあって、表紙装訂外題墨書を同じうし、所々破損し裏打補修が加えられ、第一冊表紙見返に六朝通宝銭を搨摹せる紙を貼付。首目を巻第一として、本文は巻第二より始まる。首目の篇次題署は、冒頭「重編改併五音篇序」と題し、末に「旹泰和八年歳／在強圉単閼、律逢無射旹六日先生姪男韓道／昇謹誌」、その次に「兄曰道晧　第(弟)曰道昉　男曰徳恩　姪曰徳惠(同詳定)／趙州　荆璞同編／単州　張用　男曰張仁重開板印／添補篇海少闕字数石志良／第二巻牙音見溪二母凡五十九部総目録(総目録三字大字双行に跨る)」と続き、末に「改併五音四声篇総目巻終」(題首に魚尾の如き文様を冠す)と。次に「重編併部依三十六母再顕之図」(陰刻)あり、次に「改併五音類聚四声篇目巻第一」と題し、次に「新集背篇列部之字補添印行」あって「松水昌黎門人浚川寳慶進補添」と。次に「己丑重編雑部」を附して末に「己丑新集雑部巻終」と題する。本文首「至元重刊五音篇巻第二」(題首に魚尾を冠する)、第二行低五格「昌黎郡韓孝彦次男韓道昭改併」と題する。各巻の首・尾題不同にして、「改併五音類聚四声篇巻第幾」(巻二尾・五尾・六首・十

尾・十二首・十四尾）、「泰和五音新改併類聚四声篇巻第幾（巻三首尾・六尾・七首尾・九首尾・十首・十一首尾・十二尾・十三首・十五首）、「至元五音新改併類聚四声篇巻第幾」（巻四首尾）、「己丑五音新改併類聚四声篇巻第幾」（巻五首・八首尾・九尾・十四首）と題する。

本版も前掲本と同様に金崇慶刊元修版（故宮博物院・国立中央図書館〔零本〕・旧北京図書館〔残本〕蔵）の増補版で、行款・字様を同じうして、ほゞ覆刻の関係にある。少しく欠丁や破損の部分がある。双辺（二〇・八×一四・四糎）有界十三行、注小字双行。版心白口（或は小黒口）「篇幾　（丁付）」、上象鼻に所々大小字数、下象鼻に刻工名の刻されている所があるが、版心の部分が殆ど破損しているので、張・王等の外識読し難い。同版に国立中央図書館蔵本がある。前掲本と同じく浅野梅堂の蔵印があり、「玉巖」の小朱印が捺してあるので江戸後期の江戸の有名な唐本屋たる玉巖堂和泉屋金右衛門が取り扱った本であることがわかる。楊譜三59著録。巻末に次の梅堂手筆の題跋一丁を附綴する。

元版五音集韻十五巻五音類聚四声編十五巻金韓道昭著道昭字伯暉滹陽松／水人也集韻成于金崇慶元年壬申首載昭兄韓道昇序後有己丑重刊序而／不記年号并撰者名唯云歳次己丑長至日重刊其第三第四二葉佚脱第五／葉末有天宝十載辛卯序疑摭唐韻序揭于此者此間有真定府松水昌黎郡韓／孝彦次男韓道昭改併編男韓徳恩姪韓徳恵婿王徳珪同詳定琴台張仁開版等／題名目録後有入冊拾韻術図及校正人氏二十名題署皆係道昭門人第十五巻末尾附／記六書八体之目又題道昭弟男門人名字第五第七第九第十一第十二巻別以／至元大元大朝己丑之字而第十三第十四猶存大安新彫字依之此書原刻金大安／中而迨元至元二十六年己丑重刊者也如四声編者金泰和中所刊有八年戊辰道昇／序其末記曰兄曰道晧弟曰道昉男曰徳恩姪曰徳恵同詳定趙所荆璞同編単／州張用男曰張仁重開板印行及目録後附重編併部依三十六母韻再題之図金／寶慶補背篇列部之字一篇己丑重編雑部一篇此書亦至元中重刊者第五第／八第九第十四巻首有至元及己丑字洵為元初録本其字画整匀太近宋搨／而所欠紙質較麤黔耳天保甲辰秋得諸于求古楼旧蔵中按天禄琳琅／書目明版経部収此二書及重刊改併五音集韻十五巻曰目録前標題称至元／庚寅重刊目録後標題又云成化庚寅重刊頗疑目録所記年月前後何以／県殊則所標至元或沿元時刊本之旧也拠此等語似未見元槧足本者其／所言亦往々与此書不合然則彼所伝既経明人攙乱増删而非道昭之旧／明矣此書幸伝　皇国竟落余手豈可不珎儲葆愛哉且外標題籤／為韓人之書年暦之久又慮其糜蠹之難存也特為裱而装之以寿於世云／天保第十有五年竜集閼逢執除応鐘念有一日従五位下／中務少輔／浅野長祚胤卿父書於読未見書斎／蠹牖之下／（印）（印）（印）

＊古今韻会挙要　三〇巻附礼部韻略七音三十六母通攷一巻　元熊忠撰　〔元〕刊　三一冊

後補黄表紙（二七×一六・三糎）、襯紙を以て改装、元料紙

縦二三・五糎。序に初一頁その他に欠丁があるが、壬辰十月望日盧陵劉辰翁序及び丁酉日長至武易熊忠序あり、熊序の後に左の双辺木記がある。

　　案昨承　先師架閣黄公在軒先生委／刊古今韻会挙要凡三十巻古今字画／音義瞭然在目誠千百年間未睹之秘／也今繡諸梓三復讎校並無譌誤慮与／天下士大夫共之但是編係私著之文／与書肆所刊見成文籍不同竊恐嗜利／之徒改換名目節略翻刊纎毫争差致／誤学者已経　所属陳告乞行禁約外／収書君子伏幸／

　　藻鑑　　後　学　陳　案　謹白

次に「古今韻会挙要凡例」あり、その次行・三行に「昭武　黄公紹直翁編輯／昭武　熊忠子仲挙要」と署し、次に「礼部韻略七音三十六母通攷」を附し、以上を以て首目一冊をなす。本文首行「古今韻会挙要巻之一」と題する。左右双辺）一九・一×一二・三糎）有界八行、注小字双行行廿二字。大字は小字の約四字に当る。版心小黒口「韻幾巻　（丁付）」。早印美麗で、所所朱筆句点朱筆勾点朱引が附されている。「真乗院」等の印あり。同種の元版には書陵部・内閣文庫・静嘉堂文庫・大東急記念文庫（一部欠首目、一部巻廿五至卅の零本）・国立中央図書館（三部、二部は明修）・中央研究院歴史語言研究所・北京図書館本がある。本書は元末から明代に盛行したので、比較的伝存本が多く、明に入ってから覆元刊本や翻刻本が多数開板されている。

＊同　朝鮮旧刊　一〇冊

茶褐色朝鮮表紙（二四・五×一五・七糎）。首に元統乙亥（三年）冬孛术魯翀序の「序韻会挙要書考」、至順二年二月の余謙序、次に劉辰翁序あり、以下凡例・礼部韻略七音三十六字母通攷に至る首目の次第陳案の木記も前掲本に同じく、版式字様行款前掲元刊本に相似し、ほゞ覆刻に近い。左右双辺（一八・七×一二糎、一部単辺を混ゆ）有界八行、注小字双行廿二字。版心小黒口「韻幾巻　（丁付）」。かなり印面が磨滅している。「小島氏／図書記」「向黄邨／珍蔵印」等の印あり。

　　同　応永五年刊　一五冊

丹表紙（二三・四×一四・八糎）、表紙に「西荘文庫」（小津桂窓）の朱印を捺せる書票紙片が貼附さる。序目・巻首の第次題署体式款行全て前掲本に等しく、陳案の木記も移刻し、以上三本は相互に覆刻に近い関係にある。左右双辺（一九・三×一二・三糎）有界八行、注小字双行行廿二字。版心小黒口「韻幾巻　（丁付）」。序第十四葉版心下象鼻に「幹縁了孝」、同廿二葉版心下象鼻に「幹縁正忻」の陰刻があり、また巻一第十一丁の裏、巻廿一第八・九・十一丁、巻廿七第二丁等の下象鼻に「七郎」「七―」の刻が見え、また巻廿一の尾題後の墨釘の所に「石見四了修」の五字が刻されている。巻末刊記に

　　応永五歳姑洗日　幹縁藤氏　権僧都聖寿　重刊釈氏　一周

と。「日本洞上聯燈録」によれば聖寿は大隅国蒲生城主清種の子、大隅永興寺の開山という。東洋文庫・米沢市立図書館・陽明文庫・大東急記念文庫等比較的伝本が多い。この本は印面磨

滅した葉と印面鮮明の葉とが雑り、補刻が加っているか。「棟雩」「桂窓」「東京溜池霊／南街第一号／読杜艸堂乃／寺田弘業印記」「天下／無雙」「薩摩国鹿／児島寺田／盛業蔵書記」等の蔵印あり。楊譜三47著録。

前掲の朝鮮刊本とこの旧刊本とには、眉上或は欄外に校異を枠組を以て標記する所がある。旧刊本の方がその数が多く、その数廿一、そのうち九ケ所は朝鮮本は旧刊本の校異の通りに本文が作られてあって、校異の標記はない。朝鮮本の校異のあるのは三ケ所で、それも旧刊本と共通している。従って旧刊本にある他の九ケ所の校異は朝鮮本になく、本文は両者等しい。この校異は重刊の際になされたのか、或は底本が既にそうなっていたのか、筆者は元刊諸本の内容を比較精査していないので後考を俟つ。

同　三十巻　〔慶長〕刊　古活字有界(ロ)種本　一五冊

香色表紙大本。首に嘉靖十五年夏四月の張鯤序及び凡例あり。双辺（二一・五×一五・一糎）有界八行、注小字双行行廿三字。序から見て、明嘉靖十五年江西刊本による翻印である。本書の古活字版には他の有界(イ)種、無界本の三種がある。この本と同種の古活字版には他に大東急記念文庫・蓬左文庫（二部）・尊経閣文庫・小汀文庫蔵本があり、小汀文庫本には「右韻会一部慶長十五天暮春求之／西南院入寺秀弁春秋卅八歳」の識語があるので、本版の刊年を限定することができる。

史　部

正史類

史記　一三〇巻　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　張守節正義　〔慶長〕刊　古活字版（伝嵯峨本）　五〇冊

茶色地空押行成表紙（三〇・五×二二・三糎）。双辺（二三×一七・二糎）有界八行十七字、注小字双行。版心粗黒口「史記（小題）幾　（丁付）」。嵯峨本と伝えられる古活字版。全巻に亘り博士家点の系統をうけた朱点朱引墨訓点が附され、一本との校合注や旧点云々等の音義訓説も附記され、正義曰、索隠曰、黄氏日抄曰、困学記聞云、蘇子古史曰の如き抄録、或は師説曰、旧説曰、抄云（仮名注を含む）、蕉講云、幻雲講曰等の紀伝の博士家の説や五山の仮名抄を眉上に抄記する所が多い。巻一二八（亀策列伝第六八）の末に「本云亀策伝雖如旧本加点、未通義理、待精史学之人、以可究其深奥者也」と。此等の訓点並に書入注は王朝以来の紀伝の博士家の説や桃源等の五山の抄物等から移写せるものであろう。朱筆校字を記した附箋が少しく存するが、此は楊守敬の筆。楊譜四14著録。

同　零巻（存巻二九河渠書第七）　劉宋裴駰集解　天保二年影写　一冊

縹色表紙（二八・五×一七・三糎）。薄葉裴紙に摹写。界高十九糎界幅二・三糎。毎半葉六行各行十九字内外、注小字双

行。巻首「山東西」に始り、巻末「河渠書第七　史記廿九」と題し、次に「裏面合縫之処」として原本の紙背の合縫印記花押を写し、

右大臣藤原忠平公印

延喜二十年九月廿一日家牒所用

右一巻師海屋氏所蔵天保二年辛卯仲春上浣為／紫山先生騰於三緘堂南窓啼鳥睍睆読書伊唔之処／　浪華　邨井俊

と記す。この影鈔本の原本は現在神田喜一郎博士蔵平安鈔本（森志巻三著録、影印本あり）である。巻末一葉を補って左の守敬の手書題識（楊志補収）あり

史記河渠書一巻日本古鈔本

右巻子本河渠書残巻自山東西歳百餘萬石起至巻末止日本延喜二十年九月二十一日／家牒所用前一行署右大臣藤原忠平公印又下題／右一巻師海屋氏所蔵天保二年辛卯仲春上浣為紫山／先生騰於三緘堂南牕啼鳥睍睆読書咿唔之処浪華／邨井俊按延喜二十年当梁貞明六年此初写底本之／年也天保二年当道光十一年此覆影写之年也藤原／忠平後為左大臣又為関白卒於日本天暦三年当中国漢乾祐二／年其生平事蹟詳日本史此巻書法端整猶有唐人風格／集中筆誤之字甚多俗体別字如穿作穿砥作底穀作穀不計外／蒲坂作蒲反而水湍石水下有多字故鹵地作故悪地与溝洫志合／東至山嶺領不従山与古蘭亭叙合延道不作正道東郡間不衍流字与溝洫志合旰盱不作洋洋今本竊災錯。出古此本並作灾皆足訂今本之誤

「温故堂文庫」の印あり、守敬自筆校字が所々に書き入れさる。楊譜四9著録。

〔史記〕扁鵲公列伝　嘉永二年刊（存誠薬室）　覆南宋建安黄善夫刊本　一冊

尾題の次に藍筆を以て「嘉永辛亥仲夏廿九日句読一過尚真識」と。小島尚真が藍筆の句点及び朱引を附す。首に「小島氏／図書記」の印。

漢書　一〇〇巻　漢范固撰　唐顔師古注　寛永五年刊（洛陽本能寺前）　古活字版　五〇冊

後補紺表紙。双辺無界。毎半葉十行各行十七字注小字双行。版心大黒口「前漢（略小題）幾　（丁付）」。巻末刊記に「寛永第五戊辰暦菊月廿一日／洛陽本能寺前刊行焉」。巻末の朝鮮の鋳字跋によれば、この本は朝鮮宣徳三年活字版の翻印である。「小池／蔵書」の印の外に印文未詳の蔵印がある。朱点朱引墨訓点（附訓のない巻もあり）が書入され、また守敬が毛本と比讐せる朱筆校字の附箋が貼ってある。楊譜四15著録。

同　明崇禎一五年刊（虞山毛氏汲古閣）　一五冊

朱墨両様の書入あり。藝文志巻第十（巻卅）の末に、「溝洫藝文二志皆黄本校康熙乙未六月望日焯記／丁酉陽月以北宋小字本再校」の朱筆識語あり。宋本・汪本・何校本等による校合。また所々に元本との楊守敬の朱校附箋がある。「徽典／館／図書印」の印あり。

後漢書　一三〇巻　劉宋范曄撰　晋司馬彪撰志　唐李賢

注　梁劉昭注志　〔寛永初〕刊　古活字版　五〇冊

双辺有界九行、毎行十七字注小字双行。江戸前期の筆で朱点朱引墨筆訓点（附訓せざる巻もあり）を附し、眉上に「師説云」「家本」等の博士家説の書入が多く、また守敬が毛本と対校せる朱筆記入がある。「庭田／蔵書」の印あり。

同　明崇禎一六年刊（虞山毛氏汲古閣）　一〇冊

清人の元本との朱校書入、一部楊守敬の朱筆校字も加っている。

＊〔後漢書三国志注引書考〕〔岡本保孝〕撰　〔江戸末〕写　一冊

淡香色表紙判紙本。字面高さ十八・五糎。毎半葉十行。後漢書及び三国志の注に引用されたる書名を列記す。未刊。

＊三国志　六五巻　晉陳寿撰　劉宋裴松之注　〔宋紹興間衢州州学〕刊〔元明〕嘉靖八・九・一〇年遞修　二八冊

後補淡茶色表紙（二九・八×一九・三糎）。裏打補修が加えらる。首に大徳丙午朱天錫の跋があるが、此は元大徳九路本の跋であるから、別本のが誤綴されたものであろう。次に裴松之の上三国志注表及び目録があり、目録は首・次行「三国志目録上／晉平陽侯相陳寿撰」と題す。本文巻首「武帝紀第一　魏書国志一」と題する。列伝巻第十四巻末（この葉は嘉靖九年修版）に「右修職郎衢州録事参軍蔡宙校正兼監鏤板／右迪功郎衢州州学教授陸俊民校正」の両行の銜名がある。左右双辺（二〇・五×一四・五糎）有界十行、行十九字、注小字双行廿一乃至廿三字。版心白口「某志幾　（丁付）」。所々下鼻象に刻工名あり、上象鼻に所々嘉靖八・九・十年の補刻年記が見える。

南宋紹興年間衢州州学の刊版であるが、板木が元を経て、明南監に伝り、その間補修に次ぐ補修を加えて刷印された。この本には宋原刻の葉は無いと言ってよく、元初頃の補版が一部、大部分は元末明初間の版で、他は嘉靖で、同十年に至る。楊守敬の朱筆校字の附箋がある。「森／氏」の蔵印あり。

晉書　一三〇巻　唐房喬等奉勅編　明呉仲虚校　〔明〕刊（呉氏西爽堂）　海保元起手校本　三〇冊

淡香色表紙（二六×一六・七糎）。左右双辺（二〇・四×一三・八糎）有界十行、行廿字。版心白口「晉書幾　小題巻幾（丁付）」。首に黄汝亨序を冠し、本文首「帝紀第一　晉書一」、次行「唐太宗文皇帝　御撰」と署し、已下之に同じく、末題「小題第幾　晉書幾」と題する。目録及び毎巻末題の次に「呉氏西爽堂校刻」の一行を刻す。巻末音義を附刻。毎冊首に「留蠹書屋／儲蔵史編」（吉田篁墩）「曾根書庫」の印あり。全巻に亘って朱点朱引（藍筆句点を交ゆ）、宋本・元本・汲古閣本と対校せる万延一年より文久三年に亘る海保元起の校合書入が精密である。諸巻末の朱・墨・藍三様の校合識語次の如し。

（巻四〇）庚申仲春校読竹逕源元起　（四五）庚申後三月望校読竹逕散人源元起　（五〇）萬延紀元孟夏十日一過　（五

八）　萬延紀元季夏十二之夜元起　（五九）萬延紀元上章涒灘盛夏旬三斜陽下　（六〇）庚申季夏望源元起　（六一）萬延庚申六月廿日源元起　（六二）庚申初秋四日　（六四）庚申孟秋七夕之後二日　（六六）孟秋中元後四日　（六八）万延二年太簇上元夕源元起　（七一）文久紀元初夏念五　（七一）文久紀元初夏廿五　（七二）文久紀元夏初廿五　（七四）辛酉六月廿七日源竹逕　（七五）孟秋廿七昧爽　（七六）辛酉八月八日陰々将雨源元起　（七九）壬戌孟春十九日源元起（八〇）孟春廿二日起　（八一）壬戌春正月廿三日起　（八四）壬戌仲春朔　（八五）仲春朔　（八八）壬戌仲春廿六夜戌後　（八九）壬戌上巳　（九〇）上巳　（九二）壬戌暮春上巳後二日　（九三）壬戌初夏十七緑陰下校畢源元起　（九四）壬戌長夏十日　（九五）既望晡　（九七）壬戌六月十九日（九八）六月廿二日　（一〇〇）源竹逕校読時壬戌六月廿五日也、また元起とは別手の朱筆を以て「乙卯仲冬廿一日山上定保句読了」と。（一〇一）文久壬戌八月戊寅校完　（一〇二）壬戌八月晦　（一〇三）壬戌仲秋晦　（一〇四）壬戌仲秋晦　（一〇五）壬戌閏八月朔　（一〇六）壬戌閏朔　（一〇七）壬戌閏朔　（一〇九）壬戌閏八月初二　（一一〇）壬戌閏二　（一一一）壬戌閏三　（一一二）壬戌閏三　（一一四）癸亥正月十七日　（一一五）孟春十八　（一一六）十八日　（一一七）癸亥正月廿三夜　（一一八）仲春初五　（一一九）仲春初六　（一二一）癸亥二月十三日　（一二二）癸亥長夏廿日　（一二四）癸亥盛夏廿有三日凉風洒然／竹逕道人　（一二六）癸亥六月廿四日　（一二八）癸亥六月廿五　（一二九）六月廿五　（一三〇）歳癸亥長夏二十有五校完／竹逕居士源元起

第一冊表紙見返に楊守敬の識語ありて曰く、

此吉漢宦校本也／毎冊首有留蠹／書屋印記可証也／又按非也哉記末有源／元起校読記

楊志五・楊続譜著録。

周書　五〇巻　唐令狐徳棻奉勅編　〔宋紹興〕刊〔元明〕

嘉靖八・九・十年遞修　一二冊

首に後周書目録及び王安国等校上序言あり。本文巻首「紀第一（隔七格）周書一」、第二行低九格「令孤　徳棻　等撰」と題す。左右双辺（二二・二×一七・七糎）有界九行、行十八字。版心線黒口「周書紀幾　（丁付）」、所々上象鼻大小字数、下象鼻刻工名あり、また上象鼻に所々嘉靖の補刻年記あり。治平政和間眉山で刊行され、眉山七史或は宋蜀大字本と言われ、後南宋紹興年間眉山で再び重刊され、その板木が元を経て明南監に移伝され、元明の遞修を施して刷印が続けられた。従って宋元明三朝本とも云われる。この本には嘉靖八・九・十年の補修年記が刻され、宋原刻の箇所は無きに等しく、宋末・元・明の補修の版ばかりである。

隋書　零本（存巻一一―二八）　唐長孫無忌等奉勅編

〔元大徳間瑞州路〕刊明正徳嘉靖間南京国子監遞修

狩谷棭斎手校本　三冊

淡香色表紙（二九・六×一九・一糎）。双辺（二一・三×一五糎、一部左右双辺）有界十行、行廿二字。版心線黒口「志幾隋志幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数・補修年（正徳十年、嘉靖八・九・十年）、原刻板には路学・堯学等と刻され、下象鼻には刻工名がある。巻十五・十六の一部には墨筆の句点や朱引が附され、巻十六（律暦上）の眉上には狩谷棭斎が朱筆を以て校字を標記し、巻末に「文政十三年十一月晦読一過　棭斎望之」と朱記。「森氏開万／冊府之記」の印あり。

又　零本（存巻二八至巻三三）　六冊

後補濃紺表紙（二八・五×一九・二糎）。粘葉装。「森氏開万／冊府之記」の印あり。巻卅二・卅三（経籍志）にのみ藍筆を以て句点補字が加えてある。

編年類

資治通鑑　二九四巻　宋司馬光撰　元胡三省注　〔元〕刊（興文署）〔明〕修　一六〇冊

淡香色表紙（二六×一七・六糎）。首に胡三省の「新註資治通鑑序」あり、巻首「資治通鑑巻第一」、第二・三行低一格「朝散大夫右諫議大夫権御史中丞充理検使上護軍賜紫金魚袋臣司馬光奉／勅編集」、第四行低六格「後学天台胡三省　音註」と題する。司馬光の官位は巻によって異なる。双辺（二一・四×一四糎）有界十行、毎行廿字、注小字双行。版心線黒口、「通監幾　（丁付）」、上象鼻大小字数、下象鼻に刻工名を刻す。「多漢／居蔵」等の蔵印あり、所々朱句点が附されている。楊譜四31著録。

又　零本（存巻五一至五三）　〔元〕刊（〔興文署〕）

一冊

黒無地表紙（三二・一×一九・一糎）。巻五三の尾題の次に「宋版通鑑一本博古知今堂尾崎羅月蔵本也今玆有故買得秘蔵矣天保五甲午五月上浣（印）」（印文「林氏珍賞」）なる感得識語がある。尾崎雅嘉旧蔵本にして、この本には補刻の箇所がない。

続資治通鑑　零本（存前集巻一〇至一二）　宋李燾撰

〔元〕刊（〔雲衢張氏集義書堂〕）　一冊

茶色表紙（二四・三×一五・三糎）、裏打補修を加う。巻首「続資治通鑑巻之十（隔七格）前集（盛囲陰刻）」、次行低六格「朝散郎尚書礼部員外郎兼国史院編修官李燾経進」と題する。双辺（一九・五×一三・一糎）有界十五行、毎行廿四字。版心線黒口「宋鑑前幾　（丁付）」。朱点朱引が附され、巻十二の巻末に「明治二年己巳七月十九日読過了森約之巳礼父浮丘山人／時在柔甍福山城南医巫閭聯桂書院之東屠蘇」なる森約之の手識がある。「森／氏」の印あり。楊譜四30著録。（補記1参照）

別史類

*古今紀要　残本（存巻一―四、一七―一九）　宋黄震撰　〔元末明初間〕刊　四帖

後補紺表紙（二三×一五・六糎）、裏打補修を加え、折帖。序跋なく、巻首「古今紀要巻一」、第二行低八格「慈溪　黄

震　東癸」と題す。左右双辺（一九・三×一三・二糎）有界十行毎行廿字、注小字双行。版心白口、「紀要幾　（丁付）」。下象鼻に刻工名あれど、破損せる所多し。所々上左欄に耳格あり、朝代帝王名を題記す。各冊首に「安太史平叔」（陰刻）の蔵印あり、全巻に室町期の朱点朱引朱勾点が加えられている。本版は国立中央図書館蔵完本と同版のようである。この本の刻工名は黄子旻、葉寿、呉福、長寿、余長寿、余長、虞后、子中、六付、景舟、丘老、子亨、伯美、貞彦、潘劉、劉保、江子名、江同、宗文、貴全、彦正、彦和、呉中、兼雨、范彦、朱堯、虞亮、劉宣、沈彦、原良、徐田、汝敬、肖寄、景中、士通、士達、朱彦、王保、林安、付資、劉侍者、付名仲等で、此等の名は、遼史・金史、慈谿黄氏日鈔分類、唐文粋、西山先生真文忠公文章正宗等の元末或は明初刊本の刻工名と共通し、本版が元末明初間の刊にかゝることを示している。中央図書館蔵の「慈谿黄氏日鈔分類」とは刻工名も行款も一致し、本版は黄氏日鈔と同時に或はその附録として出版されたものか。楊続譜著録。

雑史類

国語　二一巻　呉韋昭注　明金李校　明嘉靖七年刊（呉郡金李沢遠堂）　六冊

淡黄色表紙。白綿紙本。首に韋昭の国語解叙あり、巻首「国語上第一　国語　韋氏解」と題す。左右双辺（二二・一×一五・三糎）有界十行、各行廿字、注小字双行。版心白口「国語幾　（丁付）」（序首丁下象鼻に「陸奎刻」と）。韋昭の国語解叙後題の次に「嘉靖戊子呉郡後学金李校刻于沢遠堂」の一行あり。本版は四部叢刊に影印さる。楊志五・楊譜四2著録。第一冊首に別紙一丁を附綴し、守敬が光緒十四年手書題識（楊志収）を左の如く記す。

此為明嘉靖戊子呉郡金李仿宋刊本韋／叙後有金李校刻于沢遠堂記中間宋／諱並欠筆故知原于宋本也按宋元／憲公序作国語補音取官私十五六本／参校今以此本校補音皆合則知此／即公序定本自明人穆文熙等刻国語以補／音注于当文之下時多謬誤而公序定／本並補音単行本皆乱自／　国朝黄堯圃士礼居刻天聖明道本／而公序本遂微不知明道本固有勝公序処而公序之得者十居六七即如／巻一昔我先王世后稷公序本無王字錢遵／王顧千里汪小米皆以明道本有此字為奇珎而許宗彦云／韋解于下先王不空始釈王字則此唯云先世可知明道本未必是公序本未必非今明道本有武昌書局重／刊而公序本竟如星鳳世有知言君子以此本／重刊与明道本並伝豈非合之両美　戊子四月宜都楊守敬記

〔国語〕補音　三巻　宋宋庠撰　〔江戸〕写　一冊

刷毛目表紙（二七・二×一九・七糎）。外題「国語補音　合三巻」。薄葉斐紙。字面高さ約十九糎。毎半葉九行各行廿字注小字双行。首に「江戸市野光／彦蔵書記」「弘前医官渋／江氏蔵書記」、尾に「林下／一人」（陰刻）の蔵印。楊志五著録。巻末に次の光緒十四年守敬の手書題識あり。

国語補音一巻／宋元憲作国語補音取官私所蔵十五六本参校得

多／失少自明人附刊入韋注中而単行本遂微自黄堯圃／刻明道本顧千里為札記汪小米為考異宋氏之書遂多／疵議伝世旧本唯見孔氏微波榭叢書中近日盱／眙呉氏又従孔本翻刻于成都末附錢保塘札記／称以明修旧刻本校孔本知孔本実従明本出／又以旧刻校正孔本数処今以照此本則与錢君所称旧本多合而錢君不言是明嘉靖正学書／院刊本豈錢君所拠本佚趙中一跋耶此本旧為市野光彦所蔵板尾有林下一人印後帰／渋江道純又入森立之手余従森立之得之　光緒戊子四月　守敬記（印）〔楊守敬印〕

戦国策　一〇巻　宋鮑彪校注　元呉師道重校　明正徳二年刊（宗文書堂）　翻元至正二五年平江路儒学刊本

巻三係鈔配　八冊

序目欠か。巻首・第二・三行「戦国策西周巻第一（以下低九格）縉雲鮑彪校注／東陽呉師道重校」と題す。双辺（一九・八×一二・五糎）有界十行各行廿一字注小字双行。版心粗黒口「戦国策巻之幾（丁付）」。巻十末に「平江路儒学正徐昭文校勘」と底本の校者名を残し、巻一尾題の次に「正徳丁卯孟冬／宗文書堂新刊」の双行木記がある。本版は元至正廿五年平江路儒学刊本に比するに、毎半葉一行毎行一字多いが、字様その他前者と相似する。朱点朱引を附し、朱・墨・藍筆を以て校字が首書され、巻末に「享保六年丑九月十三日句訖　□□（印）」の識語がある。第一冊首の森立之の手識に、「此本徂徠門人根本伯修遜志旧蔵也欄外／朱墨及藍筆並皆根氏自書巻四十六葉背八巻八葉面之類是也　源立之」と。「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森氏開万／冊府之記」等の印あり。森志三・楊譜四4著録。

戦国策譚概　一〇巻首目附録各一巻　宋鮑彪校注　元呉師道校注　明張文爐校輯　寛保元年刊（京・葛西市郎兵衛等）　九冊

朱引朱句点を附し、朱墨両様の校字を眉上に首書し、墨筆に「彦曰」と見ゆ。

貞観政要　一〇巻　唐呉兢撰　〔江戸〕伝写文化六年菅原長親写菅家本　山田以文校合移写本　一〇冊

黄色表紙（二六・九×一八・四糎）。字面高さ約廿・五糎。毎半葉九行、行十七字。朱筆の句点ヲコト点墨筆の訓点を附し、朱墨藍筆による諸古鈔本との校合の書入が周密である。首に通行今本になき呉兢の上貞観政要表があるが、呉兢序は欠く。巻首「貞観政要巻第一　史臣呉兢撰」と題し、毎巻題の次に子目あり、本文に接する。各巻の奥書左の如し。

（巻一）文化六年五月廿七日六月一日両日写功了　勘解由長官菅原長親

同年水無月祓日寓于青闈一校了

文化十四年春三月廿七日八日九日写校　細川隼人源利和

（以下朱筆）己卯乾月二十三夜校（以下藍筆）是歳夏五六日／覆校校字例南宋本用朱筆諸本／用青筆

（二）本云／手自校衆本勘本文択善合点了／三品李卩員外大卿菅判

建保四年五月十一日授男著作郎長貞了／大府卿菅為了

嘉禄元年八月九日候于九条前殿下且読判
貞応三年閏餘七月廿六日授男長成了／李部大卿判
安貞二年四月二日授男高長了／大府卿判
嘉禎四年五月一日授少子長明孫宗長等了／李部大卿判
仁治三年七月廿八日侍当今皇帝御読／大蔵卿兼式部大輔判
弘長二年三月二日授愚息清長了／李部大卿判
永仁五年十二月五日以家説重授正修上人了／従二位菅清長判
永仁七年三月十日以説授小童摩尼殊丸了（生年十二歳明玄判）
永禄三年四月終書功了／李部大卿菅長雅（花押）（花押朱記）（錦所藤輔卿以文校本云永禄本長雅卿朱印如此）（注記藍筆）
文化六年六月十九二十両日写功了
同年七月十日寓直之暇一校了昨日大風甚雨自辰到酉　案
（三）文化六年六月九日十一日両日写了
同年六月廿九日七月四日両日当直一校　案
（四）文化六年十一月三十日十二月十二夜写且校了　案
（五）文化六年六月十七日写七月十五日加点十六日加朱　案
（七）文化六年六月十二十三両日写功了
同年七月十二夜十五日一校十六十八両日加朱　案
（八）文化六年六月廿四廿五両日斎中裕写功
同年同月廿七日一校加朱此日当直
（九）本云／永仁四年丙申十月三日書写之訖／執筆宋人明道
永禄三年五月終書功了／李部大卿菅長雅
文化六年六月廿一日写
同年七月廿日寓直之暇一校加朱
（十）文化六年六月廿三日廿四両日斎中写
同月廿七日寓直之暇一校終　十巻四十篇　勾勘案
同十二年十月上澣寄与興田箕山生

この本は菅原長親（「案」は長親の花押）が菅家累代の家本を写して興田箕山に与えた本の重鈔で、菅家本と言われ、江戸時代末学者の間に比較的多く転写された。この祖本となった鎌倉鈔菅家本の残本（存巻四・五・六・九）は、現在斯道文庫に蔵されている。この本に加えられた諸旧鈔本・刊本との朱・墨・藍の校合書入は山田以文（通称阿波介、号は錦所。藤貞幹の門人、和学者）の校字の移写で、首に左の以文の「古本校合凡例」二丁が附されている。

古本校合凡例

八条右府本　二条院御点本　菅本　或本　南家本　異本　古本　一本　摺本　イ本　才本　家本　自本
永本（菅長雅卿親写本有永禄三年之奥書故称永本今為五条家蔵）　江家本（原本巻子本有匡衡朝臣奥書　故称江本）
本云／安元三年二月五日奉授主上既訖　正三位行宮内卿兼式部大輔播磨権守藤原朝臣永範
建久第五年九月二十一日詣三品李部大卿書閣読合畢有秘説等匠作員外少尹手藤原孝範
建保第四年夷則二十五日受厳訓訖　文章得業生経範
建長三年二月十日以家説授茂才明範既訖　三品李部大卿経範
建長六年三月二十日以家説授小男淳範既訖　三品李部大卿経

範

江家本奥書如左

本云／以累代秘説本奉授　聖上了尤可秘蔵也　寛弘三年三月五日　吏部大卿江判

朱云／寛弘九年閏七月念一日藤家本一校了　江匡衡

此一巻以江家旧巻（巻子本有匡衡奥書）伝写本校正訖称江本者是也餘巻今逸惜哉

以源容所（元寛）校本再校訖（此本有多福文庫印元和活版也）

以清国嘉慶戊午重鐫掃葉山房刻本再訂訖所称清本是也文政元年八月一日　阿波介藤原以文

この本と校合書入を含めて全く同系で以文の古本校合凡例を附し、松崎慊堂がさらに校合書入を加えた江戸写本を斯道文庫が有している。この本は書入の具合から見て、慊堂本からの重写ではないかと思われる。我が国博士家に伝った古鈔本は、現在通行の元戈直集論本とは分巻篇第字句の上で頗る異同出入が大きい。戈直本は自序に「嘗会萃衆本参互考訂章之不当分者合之不当合者分之」と述べる如く、頗る原形を変改したもので、我が国伝承の旧鈔本は漢土に亡んだ呉兢の原形を保持している。しかし近時原田種成氏の「貞観政要の研究」によれば、旧鈔本にも二種あり、龍谷大学写字台本や菅原為長が仮名貞観政要に用いた本が呉兢の初進本、この本等はその改訂の再進本ではないかと推定されている。「松田本生」「裕軒蔵書」「向黄邨／珍蔵印」の印あり。楊志五著録。

同　〔江戸末〕写　伝鈔文化六年菅原長親写菅家本　三冊

丹表紙（二三・五×一七・二糎）。字面高さ約廿・七糎。毎半葉九行、行十七字。朱筆句点ヲコト点墨筆訓点四声点が附され、巻一・二には古本・江本・南本・才本等との朱校字が旁記さる。前掲本と同じく、文化六年菅原長親が菅家累代の古写本を手写校合せる本の伝写で、各巻末の奥書全て前掲本に同じく、たゞその末に次の興田吉従（箕山）の跋文が写されている。

貞観政要十巻菅原氏所伝而従三位勘解由長官／菅原長親卿所親写也初吉従獲元徳年中菅氏文／章得業生款状於観智院住宝僧都愛蔵之長親卿／一見奇之介藤原以文而求之吉従深欽卿慕其祖之／意割愛奉呈焉卿大喜辱手書且賜以此書事詳／於其書牘中蓋政要之為書坊間所刻者係於戈直／所注縉紳学士家雖間有伝之者衍錯脱誤大紊其／真此編乃菅氏奕世所伝而出於参議為長卿所授／也巻首載呉兢上表蓋兢表独載於国字訳本而其／佗則未嘗見存之者況菅氏之令孫所親写而校訂／政要之真舎此編吾安適従焉吉従獲之不啻十朋／之亀十襲宝蔵以貽之永世焉長親卿手書別蔵于／家宜併考卿称清岡学業富贍最能文章嘗聞卿常／侍読于　皇太子頗有啓沃之功云実菅廟三十一／世之孫也文化十二乙亥正月興田吉従謹識

「不忍文庫」（屋代弘賢）「温故堂文庫」の印あり。森志三・楊志五著録。守敬が戈本と古本との篇第の異同及び校異を校勘せる

原稿用紙七丁を附綴す。この札記は楊志五の「貞観政要十巻古抄本」の条に収載されている。

同　（巻一・二）〔江戸〕影写南家鎌倉鈔本　（巻三以下）伝写文化六年菅原長親写菅家本　五冊

巻一・二の一冊と巻三以下の四冊との取合本。巻一・二は布目茶色表紙（二六×一八・九糎）、題簽に「貞観政要安元本」と。旧鈔巻子本を薄葉斐紙に影鈔。首に呉兢撰貞観政要序及び目録凡四十篇あり、本文首「貞観政要巻第一　史臣呉兢撰」、第二行「君道一　政体二」、第三行「君道第一」と題して本文に接属する。単辺（二二・一×一五糎）有界七行、行十七字。墨筆訓点を附し、音義校字を旁記、また才本等の校合を上欄に首書す。巻末に「古本貞観政要跋」と題し狩谷棭斎が次の奥書等を書写せる一葉が附してある。

本云／安元三年二月五日奉授　／主上既訖　正三位行宮内卿兼式部大輔播摩権守藤原朝臣永範

永久三年仲春二十五日点訖合証本等又加自点秘本也良兼

建久第五年九月廿一日詣三品李部大卿書閣読合早有秘説等／匠外員外少手尹藤孝範

建保第四年夷則廿五日受厳訓訖／文章得業生経範

嘉禄三年四月廿四日合二条院御本并八条左相府証本早／刑部権少輔経範

建長三年二月十日以家説授茂才明範既訖／三品李卜大卿経範

同六年三月二十日以家説授小男淳範既訖／三品吏卜大卿経範

以上の如く文章博士藤原南家奕世の伝授の奥書があり、次に臥雲日件録寛正四年五月の条から菅原為長が尼将軍政子の為に政要の和訳を作ったという記事を抄録してあり、他に紙背に政要関係のメモを記せる棭斎宛書簡の二通が添えてある。この影鈔本の原本は今巻一が宮内庁書陵部、巻二以下が穂久邇文庫に分蔵される鎌倉書写（巻三補写）の南家伝来本で、菅家本・摺本等との詳細なる校合（訓説についても）が附され、政要の完本としては最古の鈔本である。「森／氏」印あり。原本には政要序の前に、呉兢の上貞観政要表があるが、此には欠き、またヲコト点も写されていない。

巻三以下の四冊は丹表紙（二六・四×一九・五糎）。外題は棭斎筆。字面高さ約廿一糎。毎半葉九行、行十七字。前掲の文化六年菅原長親書写菅家本の重鈔で各巻奥書や墨訓点、朱ヲコト点（巻五・六・七・八・九のみ）も移写されている。「向黄邨／珍蔵印」の印あり。求古楼蔵として森志三、楊志五・楊譜四50著録。

同　元戈直注　元和九年刊（〔京〕忠田吉兵衛）　古活字版一〇冊

葡萄色表紙（二七・九×一九・五糎）。首に成化元年の御製貞観政要序、呉澄の貞観政要集論題辞、至順四年郭思貞序、戈直序、呉兢自序（附注）、集論諸儒姓氏、目録を冠する。即ち明成化元年内府刊本の翻印。双辺（二一・八×一五・三糎）有界七行、各行十七字、注小字双行。版心粗黒口、「貞観幾　（丁

付)」。巻末刊記の「元和九癸亥初冬吉辰」の下にある刊者名の箇所(「三条白鑞町忠田吉兵衛開板」)が切り取られている。朱点朱引墨訓点の書入あり。「探古室/図書記」等の印あり。本版は慶長五年刊伏見版の翻印である。

伝記類

*晏子春秋　八巻　〔江戸〕写〔影元〕　狩谷棭斎手沢

本　二冊

茶色空押行成表紙(二三・七×一六・八糎)。外題「影元本晏子春秋上(下)」(棭斎筆)。薄葉斐紙。襯紙補装。首に篇目及び劉向序あり。巻首、「晏子春秋内篇諫上第一凡二十五章」、次行列書篇目、次に「荘公矜勇力不顧行義晏子諫第一」と題する。字面高さ約一六・五糎。毎半葉九行各行十八字。朱筆句点を附し、少しく朱筆校字あり。この底本或は元刊本に非して明成化刊本か。「棭斎」「狩谷/望之」「湯島狩/谷氏求古楼/暴書記」の印あり。

同　存内篇六巻　〔江戸〕写　一冊

首に劉向序、末題に「晏子巻之三下」と。ほゞ前掲影鈔本と同系。天地双辺有界十行の印刷罫紙を使用(この印刷罫紙に非ざる別紙も混ゆ)、各行廿二字。朱・藍両筆の句点、眉上に朱・藍・墨筆を以て羣書治要その他の本との校注を標記する。「朝田家蔵書」(岸本由豆流)「井上/氏」の蔵印あり。森志三著録の「竹蔭書屋蔵根本遜志手書本」とは或はこの本か。同書の守敬書入には「根本遜志抄本今在飛青閣」と記す。

同　四巻　明黄之寀校　元文元年刊(植村藤右衛門等)

二冊

御覧・孫星衍本・盧文紹校正本等との校注書入多し。中に「弘按」と見ゆ。「掃葉山/房蔵」(東条琴台)「津山/氏図書記」の印あり。

又　二冊

藍筆句点朱筆声点を附し、朱筆校字書入あり、「虎曰」の書入多し。冢田大峯書入の移写か。「長嶋氏/蔵書」、題簽に「細井/蔵書」の印あり。

*晏子春秋音義補正附校譌　岡本保孝撰　〔江戸末〕写

一冊

茶色布目表紙(二四×一六・四糎)。字面高さ約十七・五糎。朱引藍筆句点を附す。未刊。「温古堂文庫」「小野氏/図書印」の蔵印。

*晏子春秋考　岡本保孝撰　〔江戸末〕写　二冊

前掲本と僚本。字面高さ約十九糎。首に文政戊子(十一年)三月岡本保孝識の自序あり。未刊。

*列女伝考　岡本保考輯　〔江戸末〕写　一冊

総内題なく、書名は外題による。栗皮表紙(二三・三×一六・三糎)。字面高さ約十九糎。毎半葉七行、行廿字。朱筆勾点句点朱引を附す。四庫全書総目提要以下各書の列女伝に関する記事を抄録列挙し、次にその伝本源委に関する書誌を輯し、清顧広圻撰列女伝攷証及び烈女伝補勘(以下薄葉紙別筆)を附す

る。未刊。「森氏開万／冊府之記」「中野／蔵書」の印あり。

＊五朝名臣言行録　前集一〇巻後集一四巻続集八巻別集二六巻外録一七巻　宋朱熹撰　李幼武続増　李衡校〔明前期建安書坊〕刊　後集巻六・七補鈔　続集巻一至巻四以日本天保十二年刊本配　二四冊

淡梅松色表紙（二三・七×一五・五糎）。裏打補修。首に宝祐戊午李居安叙・朱熹序、次に両行に跨って「五朝名臣言行録総目　前集」と題し、第二・三行に「晦庵先生朱熹　纂集／太平老圃李衡　校正」と署す。本文首行「五朝名臣言行録前集巻第一」（後集・続集には五朝を三朝或は皇朝に作るもあり）と題する。外集（外録）は首に景定辛酉（二年）趙崇餘序・道統伝授之図・新刊諸老先生道学統宗総図をおき、「皇朝道学名臣言行外録巻第一／（低九格）後学李幼武士英　纂集」と題する。左右双辺（一九・五×一二・五糎）有界十二行、行廿三字。版心小黒口「言行前幾　（丁付）」。下象鼻に所々刻工名あるが、殆ど破損して識読し難い。左欄外上に所々耳格あり、人名を題記。少しく補写を混ゆ。所々に朱筆圏点が附される。「妙覚寺常住」「仁寿山／書院記」（姫路藩校）「好古堂／図書記」（姫路藩老臣河合道臣）「飾磨県／官立公学／蔵書印」等の印。この本の欠本となっている続集の巻一至巻四の二冊は早くから分れたらしく、今斯道文庫の蔵となっている（蔵書印記も同じ）。

この本は惇の字等の欠画があり、また元版の風も遺すが、字様等から見て、宋末刊本を覆刻せる元刊本をさらに明前期に覆刻せる麻沙本と見るべきであろう。楊譜四38著録。

又　別録残本（存巻二至巻一三）　二冊

前掲本と同版。補鈔極めて多し。

同　前集一〇巻後集一四巻続集八巻別集一〇巻外集一二巻　〔明〕刊明正徳一三年建陽書肆修印　一二冊

双辺（一七・九×一三糎）有界十二行、行廿三字。版心粗黒口「五朝言行録　某集幾　（丁付）」。「宋名臣言行録総目　前集」の次に「晦庵先生朱熹纂集／正徳戊寅建陽書肆刊」と署し、別集の総目の次に「明溪李　幼武　士英纂集／後学安福張鰲山校正重刊」と題す。題名の「五朝」を「宋」に作る所もある。正徳以下の九字は追刻の入木らしく、刊刻はその前か。

近代名臣言行録　一〇巻　明徐咸撰　鄭曉校　〔明嘉靖〕刊（崔鼎）　二冊

首に嘉靖辛卯（十年）六月の徐咸の近代名臣言行録小序及び近代名臣総目あり、総目の題の次に「後学海塩徐咸纂集／後学海塩鄭曉校正／後学濠梁崔鼎梓行」と署し、本文初行「近代名臣言行録巻第一」と題する。単辺有界十二行、行廿三字。版心白口「言行録幾巻　（丁付）」。「好古堂／図書記」「仁寿山／書院記」「飾磨県／官立公学／蔵書印」の蔵印あり。

＊唐才子伝　一〇巻　元辛文房撰　〔南北朝〕刊　釈彭叔守仙手沢本　二冊

淡代赭色表紙（二七×二〇糎）。首に「唐才子伝目」あり、本文首「唐才子伝巻第一」、次行低十二格「西域　辛　文房

撰」と題する。左右双辺（二一・一×一五・三糎）有界十二行、行廿二字。版心粗黒口「才幾　（丁付）」。朱筆句点朱引の書入あり、巻十末題の後一行をおいて、「文安己巳六月十八日申刻於瑞松西窓朱点終」の朱筆識語がある。首に「善慧軒」の楕円形の黒印あり、即ち東福寺善慧軒の儒僧彭叔守仙（弘治元年寂、年六十六）の手沢本。但し右の朱筆識語は彭叔の筆ではない。他に「遵義黎／庶昌之印」あり。求古楼蔵として森志巻三、楊譜四35著録。巻首遊紙（後補）に光緒十四年の左の守敬の手筆題跋あり。

林天瀑輯佚存叢書有唐才子伝拠称以五山板印且称／其以元槧翻雕紙繆極少此本狩谷望之求古楼所蔵森／立之云蓋即五山板本余以所蔵日本他五山本照之信然然的是／日本人重写非以元槧繙雕如聞作聳若各作岩諸省字之類皆／係日本旧刻通行俗字可覆按也今以天瀑印本較此書則相異者／不下千字余初疑天瀑所拠或別一本後又得慶長活字本／則与此本全同知亦即従此本出而天瀑印本即係其臆改不尽／因活字排板多謬誤也此本亦略有誤字然視天瀑本高出天淵／矣儀氏指海叢書刊此書因天曝本顚倒錯乱以　四庫所輯／残本校之其両通者附注於下而不知其為林氏所改非辛氏原文／也　光緒戊子春守敬校注並記

大抵辛氏原文多古拙林氏所改則通暢近時矣守敬再記

本書は佚存書で、本旧刊本は伝存比較的少く内閣文庫・成簣堂文庫旧蔵（二部）・武田家（内藤湖南旧蔵）本が知られている。民国董康氏刊影印本がある。

同　〔元和寛永初間〕刊　古活字版　合一冊

丁子色艶出空押行成文様朝鮮表紙（二九×二〇・三糎）。単辺（二二・四×一五・九糎）無界十二行、行廿二字。版心粗黒口「才子巻幾　（丁付）」。朱点朱引が附さる。巻末守敬の識語に「此日本慶長活字板最為罕見森立之云／辛巳惺吾記（印）」と。

史鈔類

歴代帝王紹運図　宋諸葛深撰　日本闕名者増補　〔室町〕刊　一冊

後補淡縹色表紙（二四×一五・一糎）。首に熙寧九年仲冬月会稽郷貢進士虞云の原序がある。双辺（一八・九×一二・三糎）。版心線黒口「紹　（丁付）」。巻末の一葉を欠く。本書は三皇より以下歴代帝王の在位寿終等及び年号の表で、簡便な中国史便覧として我が国では愛用されたので、旧刊本に南北朝刊（覆宋）、その覆刻である南北朝後期刊の二種と、それに基いて、金及び元の順宗までを増補した室町中期頃の刊と思われる本版の三種がある。殷匡敬貞恒等の字が底本に倣って闕筆してある。原撰本は五代末で終っていたらしいが、南北朝刊第一次版は、底本の宋刊本が宋の光宗まで増補してあったのを、さらに寧宋より幼帝まで一葉を増補してある。欄上に我が国の年号を標記してあるのも増補と共に邦人の手になるものである。本版は江戸初頃まで板木が遺っていたらしく、伝本が比較的多い。この本はやゝ後印本である。「左京藤原／貞幹蔵書」「仁寿山荘」

「好古堂／図書記」「白川書院」等の蔵印あり。藤貞幹等旧蔵。

*東萊先生標註三国志詳節　二〇巻　宋呂祖謙節録

〔宋末元初間〕刊（〔劉氏静得書堂〕）　三冊

室町時代の淡丹表紙（一九・八×一二・八糎）。首に元嘉六年七月裴松之の上三国志註表、三国疆理之図、三国世系之図、三国紀年之図、目録あり。本文首行「東萊先生標註三国志詳節巻之一」と題する。左右双辺（一五・七×一〇・三糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。版心線黒口「三国幾　（丁付）」、左欄外上に耳格あり、篇名巻葉次数を刻す。玄朗弘殷匡胤恒禎貞徴讓署樹桓構溝慎惇敦燉等を欠画、寧宗以下は欠筆せず、欠筆謹厳ではない。史記詳節に「劉氏静得堂重刊十史書」の封面（本書のは「静得書堂（上横書）／東萊校証／三国志書」）を有する書陵部蔵十七史詳節合刻本と同版（内閣文庫本も同版）である。中央図書館蔵本（未見）も書影によるに同版らしい。同館宋本図録は欠画が光宗に止るので、紹熙間刊とするが、間々字様に元風を帯びる所が見られ、宋末元初間の麻沙坊本とみるべきであろう。室町期の朱筆句点圏点が附されている。「連塘」等の蔵印あり。森志三・楊続譜著録。

載記類

*東国史略　六巻　朝鮮闕名者撰　朝鮮旧刊　二冊

香色艶出空押卍繋ぎ文様朝鮮表紙（三二・三×二四糎）。序跋なく、巻頭「東国史略巻之一」と題す。単辺（二一・二×一四・八糎）有界十二行、行十九字、注小字双行。版心粗黒口「東国史略幾　（丁付）」。首に「養安院蔵書」印あり。下冊後表紙見返に守敬の「此書有明万暦丁巳刻本易其款式／頗有訛字又改称朝鮮史略是以後来／之国称蒙屢代之名矣」の手識あり。楊志六・楊譜四37著録。本書は檀箕より高麗に及ぶ編年体の通史で、李朝の太祖が権近等に命じて高麗朝の金富軾が輯せる「三国史」五十巻を改修して編纂せしめた「東国史略」二巻（今佚書となる）の増補改編と思われる。本書は守敬が言っている如く、明に伝って、万暦年間「朝鮮史略」と改題して上梓された。我が国の文政五年刊官版はその覆刻である。

*標題音註東国史略　一二巻　朝鮮柳希齢編注　〔朝鮮〕刊　古活字版　七冊

茶色艶出空押唐草文様朝鮮古表紙（三三・七×二一・三糎）。巻頭「標題音註東国史略巻之一／（低六格）菁川柳希齢　編註」と題する。左右双辺（二五・三×一七・二糎）有界十行、行十七字、注小字双行。版心白口「東国史略巻幾　（丁付）」。綱の条目を眉上に標記し、左欄外中央部に耳格あり、国名を題記する。巻十二巻末に欠葉あり、四十二丁に止る。「称意館／蔵書記」「吉家／氏蔵」等の印、各冊首に「介山松堂」の墨署あり。本書は戦国策に仿った国別体で、前掲本と同じく史臣論断を附し、文はほゞ前掲本と共通し、此は間々前者にはない金富軾の論説を引き、論説は本書の方がやゝ多い。守敬の言う如く前掲本の改編であろう。楊志六・楊譜四36著録。

時令類

玉燭宝典　一二巻（原欠巻九）　隋杜台卿撰　〔江戸末〕
写　六冊

紺表紙（三一×二一糎）。薄葉斐紙を用い、襯紙を挿む。字面高さ約二三・五糎。毎半葉九行、行廿字、注小字双行。漢土では佚書となった尊経閣文庫蔵鎌倉鈔本（昭和十八年刊影印本、古逸叢書所収模刻本あり）の摹写で、朱墨両様の守敬の校字書入あり、またこの校字を整理せる考異十丁を仮綴別帖として附してある。

地理類

新編方輿勝覧　七〇巻首目一巻　宋祝穆撰　〔宋末元初間建陽書坊〕刊　二〇冊

後補濃紺表紙（二四×一四・三糎）、襯紙を入れて改装。首に嘉熙己亥良月望日新安呂午の方輿勝覧序、嘉熙己亥仲冬既望建安祝穆和父書の自序、次に新編方輿勝覧目録あり。本文首「新編方輿勝覧巻之一」、次行「建安祝穆和父編」と題する。左右双辺（一七・二×一一・三糎）有界十四行、小字行廿三字。事要標出は大書両行に跨り、行十四字内外。版心線黒口「方幾　（丁付）」。左欄外上に耳格あり。慎字末画を欠くが、外に欠筆は殆ど見られない。所々僅かながら室町期の朱筆句点勾点圏点朱引を附し、また朱筆校字が書入されている。巻三の十三・十四丁その他に少しく補写を交える。「小島氏／図書記」「宇／学古」「尚質／之印」「臣／尚質」「学燈／真斎／読書」「俟宋」「向黄邨／珍蔵印」等の印あり。宝素堂蔵として森志三に著録、森志は「此本係太医和気氏旧蔵、冊皮有通仙院押字」と記すが、今は改装されて元表紙を失っている。楊志六・楊譜四61著録。

本書の撰編は登臨題詠者の便に供するのが主意で、作詩文用の地誌である。書陵部蔵「新編四六必用方輿勝覧」が祝穆原撰の嘉熙刊本と思われ、本版には後人の修補が入っていることは、楊守敬が

此本標題於浙西之厳州改称建徳府浙東路之温州改称瑞安府広西路之宜州改称慶遠府夔州路之忠州改称咸淳府按和父自序書成于嘉熙己亥而改厳温宜忠等州為府在咸淳元年相去三十六年其為後人改編可知書中亦多所増添非祝氏之旧然其所増亦皆拠方志旧記編入猶有知識者所為不似坊賈之羼乱妄作故亦可貴

と指摘する通りである。書陵部（三部）・静嘉堂文庫・尊経閣文庫・故宮博物院（昭仁殿旧蔵）・国立中央図書館蔵本はいずれも同版で、宋末元初間の建刊本である。故宮博物院・中央図書館の両目録は本版を宋咸淳三年建安祝氏刊と著録するが、本版には刊記なく、天禄琳琅その他著録の咸淳刊本と款行を同じくする所から、同版と速断したらしく、本版はそれより後出の刊行である。「北京図書館善本書目」には「宋咸淳三年呉堅劉震孫刻本」が著録され、同館蔵の元刻本四部は或は本版と同版であろうか。

朝鮮賦　明董越撰　朝鮮嘉靖十年跋刊　一冊

香色地朝鮮古表紙（三四×二三糎）。首に弘治三年欧陽鵬の

朝鮮賦引、尾に弘治三年王政の朝鮮賦後序並に嘉靖辛卯（十年）春永順太斗南の跋あり。本文巻初「朝鮮賦／（格低二）奉議大夫右春坊右庶子兼翰林侍講寧都董越撰／（格低六）賜進士文林郎知泰和県事右埭呉必顕刊行／（格低六）吉安府泰和県儒学訓導桂林王政校刊」と題する。双辺（二五・五×一六・九糎）有界八行、行十六字注小字双行。版心小黒口「朝鮮賦巻　（丁付）」。「松田／本生」「本生」の印あり。楊志十四著録。

職官類

大唐六典　三〇巻　唐玄宗撰　李林甫等奉勅注　明正徳一〇年序刊（蘇州・席書・李承勛）　六冊

紺色表紙（二七・三×一六糎）。白綿紙本。首に正徳乙亥（十年）王鏊の重刻唐六典序あり。本文首行「大唐六典三師三公尚書都省巻第一」、次行低一格「御撰」、第三・四行低二格「集賢院学士兵部尚書兼中書令修国史上柱国開国公臣李林甫等奉／勅注上」と題し、巻三十末に「紹興四年歳次甲寅七月戊甲朔／左文林郎充温州州学教授張希亮校正／右宣教郎知温州永嘉県主簿勧農公事詹棫題誌」と署する跋がある。左右双辺（一八・二×一二・八糎）有界十二行注小字双行。版心白口「唐六典巻幾（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。この本やや後刷。「蘿月庵」（尾崎雅嘉）、「小島氏／図書記」「尚浜／之印」「学／学古」の印あり。森志三著録。

歴代職源五十巻撮要　一巻　宋王益之撰　明治三年写　一冊

濃海老茶色表紙（二六・六×一九糎）。字面高さ約廿一・五糎。毎半葉九行、行廿字、注小字双行。朱引・墨訓点を附す。首に慶元二年十一月望日金華王益之の職源序あり、本文初行「歴代職源五十巻撮要第一　金華王益之等編」と題し、尾題「歴代職源巻第五十終」と。後表紙見返に次の朱筆書写奥書あり。

右職原以度会県校之蔵本謄写／時明治三年庚午秋七月／度会県校権教授松田混

楊志補・楊譜四54著録。左の楊守敬手書題跋（楊志補収）を附する。

書録解題職源五十巻大理司直金華王益之行甫撰亦簡牘／応用之書而専以今日見行官制為主蓋中興以後於旧制多／所併省故也然則原書毎条之後必多臚列歴代典故以備／簡牘之用此本首題撮要蓋删其類典而存其総綱攷／宋南渡官制者当以此書為詳実惺吾記（印）（印）（印）

本書は漢土に於ては既に佚し、我が国には鎌倉時代伝ったらしく、「普門院蔵書目」に十冊と記されているから、五十巻の完本であったようであるが、完本は我が国でも散逸し、たゞその撮要一巻の删抄写本が内閣文庫・神宮文庫に存する。続金華叢書所収本はこの楊氏本を底本としたものであろう。

同　〔江戸末〕写　二冊

刷毛目表紙。外題「宋職源乾（坤）」と。体式前者に同じ。字面高さ約廿一・五糎。毎半葉九行、行廿一字、注小字双行。墨筆訓点を附する。巻末に「諸官唐名要略」（四丁）「拾遺」（一

丁）「唐名抄此已下拠外記之本」（四丁）を附する。適園叢書所収本の底本か。

目録類

子略　四巻　宋高似孫撰　〔江戸〕影写宋刊本　一冊

本文共紙表紙（二三・四×一六糎）。薄葉斐紙を用い、襯紙を挿む。字面高さ約十九糎。毎半葉十二行、行廿字。首に子略序を冠し、本文初行「子略巻一」、次行「高氏　似孫　続古」と題する。内閣文庫蔵宋刊本の摹鈔本。

隷釈　二七巻　宋洪适撰　〔江戸〕写（影宋）　一一冊

黒色表紙（三一・五×二四・二糎）。薄葉斐紙。下小口に「影宋隷釈」と墨書。首に乾道三年正月四日の自序、次に隷釈目録、次に淳熙丙申（三年）息秘官山陰遂正之盤洲老人書の序あり、本文首行「隷釈巻第一」と題す。単辺（二〇・八×一五・一糎）有界十行、碑行廿字、跋低一格、注小字双行。版心白口「隷釈巻幾　（丁付）」。巻廿は別筆の補鈔。「森／氏」印。楊譜三52著録。

史評類

唐史論断　三巻附録一巻　宋孫甫撰　〔江戸〕写（伝鈔宋端平刊本）　一冊

縹色表紙（二六・五×一七・二糎）。守敬の筆で「旧鈔唐史論断」と外題。字面高さ十九・五糎。毎半葉九行、行廿一字。紹興廿七年南劒州州学刊本に基づく端平二年重刻本による伝鈔である。「小島氏／図書記」の印あり。

*十七史纂古今通要　一七巻　元胡一桂撰　元大徳六年序刊（巻一五至巻一八鈔補）　六冊

茶色表紙（二四×一五・四糎）。裏打補修を加う。首に大徳壬寅（六年）正月望日の江鶯序皮び大徳壬寅日長至の自序、次に目録・歴代帝王国都疆理総図・歴代伝授統系総図・歴代皇帝王伝授之図あり。本文初行「十七史纂古今通要巻之一」、次行低七格「新安前貢士胡一桂庭芳纂」と題する。尾題「十七史纂古今通要巻之幾」と。尾題の前に「男昌祖校正首注」と署す。左右双辺（一九・六×一二・四糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行。版心線黒口「通要幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数（欠くもあり）、下象鼻に刻工名、左欄外上部に耳格あり、王名を題記。第一冊には朱筆句点を附す。首に「金地院」「柴氏家／蔵図書」「柴氏万巻／楼蔵書記」「柴邦彦図書後／帰阿波国文庫／別蔵于江戸雀／林荘之万巻楼」等の印あり、また表紙に「栗山堂柴氏家蔵」の紙票を貼附。相国寺金地院・柴野栗山・阿波国文庫旧蔵。楊譜四32著録。

本版の刻工名は、蔡懋卿、懋卿、二（陰刻）、君祥、善楽、蔡善卿、善卿、王子清、王、劉子明、子明、趙継祖、継祖、蔡公権刊、公権、蔡全忠、全忠、蔡、虞震卿、震卿、丁輝祖、輝祖刊、祖、劉子全、子全、仲和刊、子回、子、徳昌、君仲、江善卿、伯王、江瑞郎、施復老、劉天穆、天穆、呉正山、正山、忠順、江等である。此等の刻工名の多くは他の大徳頃刊本にも見えるから、本版は序にある元大徳年間の刊と推定してよい。

北京図書館蔵（瞿氏旧蔵）元刻本は或は同版か。

子部

儒家類

孔子家語　一〇巻　魏王肅注　〔元和〕刊　古活字版　五冊

後補紺色表紙。首に王肅序、次に篇目あり、その末に「上官国材宅刊」の本刊記がある。本文首「孔家語巻第一」と題す。双辺（二一・三×一六糎）有界九行、行十八字、注小字双行。版心粗黒口「家語巻幾　（丁付）」。内閣文庫・大東急記念文庫・天理図書館・龍門文庫・岩瀬文庫・日光天海蔵等と同版。

荀子　二〇巻　唐楊倞注　延享二年刊（京・葛西市郎兵衛）　覆明世德堂本　一〇冊

大本。墨・朱・藍筆を以て、宋本・元本・纂図互注本・謝校本・閩本・世德堂原本等との校合を周密に書入し、「謝失校」との如き校勘に対する批評の案語もあり、中に「椒斎云」と見え、書入の筆蹟も椒斎のそれに似ている。或は椒斎書入の移写か。「福山岡西／氏蔵書記」の印あり。

又　一〇冊

大本。二手による朱・墨・藍の書入が加えられ、鵬斎（亀田）按・物茂卿云、澔按、簣山云、江先生按（澔按以下は殆ど第一冊にあるのみ）等、諸家の説を引き、又按と私説を混え、第二冊以下は増注云（久保愛増注）を引くことが多い。「穀堂／図書」の印あり。

荀子〔箋釈〕　二〇巻附校勘補遺一巻　唐楊倞注　清謝鏞箋釈　朝川鼎（善庵）校　文政十三年跋刊（平戸・維新館）　八冊

朱墨両様の校合書入あり、物云（荻生徂徠）、冢云（冢田大峰）等を引く。「水口蔵書」の印あり。

＊荀子考　岡本保孝撰　〔江戸末〕写　二冊

茶色表紙（二四×一六・二糎）。字面高さ約十八糎。毎半葉九行。朱点朱引を附す。外題「況斎先生荀子考」。未刊。「温故堂文庫」「小野氏／図書印」の印あり。

塩鉄論　一二巻　漢桓寛撰　明張之象注　〔明嘉靖三三年雲間張氏猗蘭堂〕刊　四冊

灰色表紙（二五・五×一五・八糎）。首に嘉靖癸丑（三十二年）の張之象自序及び目録あり、本文初「塩鉄論巻之一／漢汝南桓　寛撰／明雲間張之象註」と題す。左右双辺（一八×一三・三糎）有界九行、行十七字、注小字双行。版心線黒口「塩鉄論巻幾　（丁付）」。句点附刻。巻十二巻末葉の裏一頁が欠損しているので、「嘉靖甲寅春張氏猗蘭堂梓行」の木記を欠く。校字の附箋が所々貼附してあるが、邦人の筆蹟ではないようである。「八雲軒」（陰）「脇坂氏／淡路守」（陰）「藤亨」（円形陰）「安元」（脇坂安元）の印あり。

劉向新序　一〇巻　漢劉向撰　〔明嘉靖二六年序〕刊（何良俊刊説苑新序合刻本）　三冊

灰色表紙（二五・九×一八・二糎）。白綿紙本。首に目録・曾鞏校上記あり、本文初行「劉向新序巻第一」と題する。左右双辺（一九・三×一三・六糎）有界十行、行廿字。版心白口「新序巻幾　（丁付）」。「椒斎」「狩谷／望之」「湯島狩／谷氏求古楼／暴書記」「小／島」「燕超堂／書画記」印あり。朱筆句点が附され、第一冊前表紙見返に椒斎の朱筆による前漢書師古注よりの二行の抄録が存する。また第一冊に八行の朱筆書入があって、末に「右見呂氏春秋与此書所記有詳略異同因記巻後備参考云　惟寛識」と。森志四・楊譜六3著録。

＊新序考附羣書校補抄出　岡本保孝撰　〔江戸末〕写　一冊

淡茶色表紙（二三・七×一六・八糎）。字面高さ約十九糎。毎半葉九行。朱引・藍筆句点を附す。未刊。「温故堂文庫」「小野氏／図書印」の印あり。

劉向説苑　二〇巻　漢劉向撰　〔明嘉靖二六年序〕刊（何良俊刊説苑新序合刻本）　四冊

後補無地茶色表紙（二五×一六糎）。白綿紙本。首に曾鞏序・目録・劉向序あり、本文初「劉向説苑巻第一」と題す。左右双辺（一九・三×一三・七糎）有界十行、行廿字。版心白口「説苑巻幾　（丁付）」。巻頭にあるべき、嘉靖丁未八月朔東海何良俊撰の「重刻説苑新序序」を欠く。第一冊の一部に朱筆句点を附す。「青蓮／王府」「遺安／堂／之印」の印あり。

同　零本（存巻一至巻五、巻九・一〇）　〔明前期〕刊　一冊

後補淡茶色表紙（二三・四×一五糎）。裏打補修を加う。首に曾鞏序あり、本文首「劉向説苑巻第幾」と題する。双辺（一九・八×一二糎）有界十三行、行廿四字。版心線黒口「説苑幾　（丁付）」。欠丁極めて多く、朱点朱引藍筆声点の書入あり。「養安院蔵書」「弘前医官渋／江氏蔵書記」「天下／無双」「読杜／艸堂」等の蔵印あり。

＊説苑考附羣書拾補（説苑）　岡本保孝撰　〔江戸末〕写　五冊

茶色表紙（二四・一×一六・七糎）。字面高さ約十八糎。毎半葉十行、行廿字。朱引・藍筆句点を附す。「況斎先生説苑考」と外題。未刊。「温故堂文庫」「小野氏／図書印」の蔵印あり。

楊氏法言　一三巻附音義一巻　漢楊雄撰　晉李軌注（音義）宋闕名者撰　清嘉慶二三年江都秦氏石研斎刊　同治一一年維楊倪文林印　景宋治平監本　一冊

巻初一丁欠。楊守敬の朱筆校字書入眉上にあり。

纂図互註楊子法言　一〇巻　漢楊雄撰　晉李軌・唐柳宗元注　宋宋咸・呉秘・司馬光重添注　〔明前期建安書坊〕刊　覆元刊本　三冊

淡香色表紙（二三・四×一四・三糎）。裏打補修を加う。首に景祐三年宋咸の重広註揚子法言序、次に後記の刊語木記、次に景祐四年宋咸の進重広註揚子法言表、次に元豊四年司馬光の司馬温公揚子序、次に篇目及び揚図（渾儀図・五声十二律図）

あり、本文初行「纂図互註揚子法言巻第一」、第二・三行低二格「晉李軌唐柳宗元註／聖宋宋咸呉秘司馬光重添註」と題し、尾題は「揚子法言巻第幾」と。左右双辺（一八×一一・六糎）有界十一行、行廿一字、注文小字双行廿五字。版心粗黒口「揚幾（王幾）　（丁付）」。左欄外上に耳格あり、篇名を題記、欠く所もある。宋咸の序後（裏の葉）にある双辺木記の刊語に曰く、

本宅今将　監本　四／子纂図互註附入重言重／意精加校正玆無訛繆謄／作大字刊行務令学者得／以参考互相発明誠為益／之大也建安　謹咨

と。本版は宮内庁書陵部蔵元刊本の覆刻で、その元版も南宋建安書坊の覆刻らしく、南宋末から元明初と覆刻を重ねた建安書坊刊本である。懐仙楼蔵として森志四、楊譜五25著録。

徐幹中論　二巻　魏徐幹撰　明嘉靖四四年序刊（青州府・杜思）　二冊

茶色表紙（二二・六×一六・九糎）、楊守敬筆を以て「明嘉靖刊本中論」と外題。白綿紙本。首に曾鞏の徐幹中論序、嘉靖乙丑（四十四年）冬青州府知府四明杜思書の刻徐幹中論序、徐幹中論目録あり、目録後に宋紹興二十八年の石邦哲手校本を至治二年に得た旨を記せる元至治三年陸友の題記を存し、巻末に明弘治壬戌（十五年）六月之望前処士姑蘇都穆書の書新刻中論後あり。本文初行「徐幹中論巻之上　四明薛晨子熙校正」と題す。左右双辺（一六×一二糎）有界八行、行十六字。版心白口「中論上（下）　（丁付）」。楊守敬の朱筆校字書入を有し、冊の首尾に守敬の手書題跋があるが、首の方は破損して読むことを得ない。尾の跋文左の如し。

此本〔拠都太僕跋知〕為弘治壬戌呉県黄絞原刊／至嘉靖乙丑青州府知府四明杜思重刻／毎巻下又題四明薛晨子熙校正然書中／仍有墨丁数処蓋黄本原刻如斯耶明／程栄漢魏叢書本亦原于杜刻亦有空格至何允中重刻／広漢魏叢書則皆不欠字知為何氏臆補』

此為明弘治壬戌呉県黄絞原刊嘉靖乙丑青州知／府〇四明杜思重刻毎巻下又題四明薛晨子熙／校正然書中有墨丁数処当是黄本原刊如是／程栄漢魏叢書原于杜刻亦有空格（唯序文蓋□百之一也原本百上空一字程本遂緊接蓋字）至何允中重刻広漢魏叢書／則皆不欠（知為何氏所補）法象篇（夫以□□亡困補崩己二字貴験篇故憤□／則従則上補極字貴言篇可以観□而□遠補幽字藝紀篇青□材補纂字）余以纂書治要校之知為何氏臆補（貴験篇故憤□則従治要作故憤庫則木縦因知補極字之妄其他所補旨不可拠矣）近日金山銭氏校／刻此書頗称精審而亦沿何氏所補之謬／（鐘氏称以程栄本校不言程栄本有空格拠何本補故字）之非此本存世／則踪迹不可尋矣至原書本二〇／餘篇晁公武称李献民所見別本／尚有復三年制役二篇然曾南豊／所拠必校録者亦即此本則此二篇已佚／已久唯纂書治要所録中論十二篇其／〇末二篇的為復三年制役二篇之文此／（則カ）財唐初之本非此本所可比儗矣銭竹汀／先生於治要尚疑是偽書抑嘗於治／要所引漢魏諸書対校知今本脱誤／如此者甚多此豈作偽者所能臆造耶／附記於此　戊子四月宜都楊守敬

楊譜六5著録。四部叢刊所収本は本版の影印である。

帝範　二巻　唐太宗撰　唐闕名者注　〔江戸前期〕写

天正八年清原国賢本奥書本　一冊

栗皮表紙（二七・二×二〇糎）。単辺（一九・七×一六・二糎）有界七行、行十六字、注小字双行。二章まで朱筆句点朱引を附し、後は所々朱句点や僅に墨筆訓点が附されるにすぎない。巻末奥書次の如し

弘安九年七月廿九日墨点了同晦朱点了

寛治八年七月十六日於楊梅亭点了尤可秘蔵而已（本云）　藤永実

長寛二年正月廿八日　主上既訖　式部大輔藤原朝臣永範

承安元年七月廿四日　御読了此書奉授二代　聖主了家之重宝也　従三位行宮内卿兼式部大甫藤原朝臣永範

建久三年六月十六日　御読了此書継家蹤已及　聖主三代誠是家之秘本也　正四位下式部大甫藤原光範

文永十一年八月十六日以同本移点了　棟昌

同十二年三月二日以菅翰林在匡朝臣本見合之加点了是又二代御読本也参木左大弁棟昌（件本云）

承元二年四月廿三日書写了　菅原淳高

元仁二年三月廿五日侍　御読了　翰林学士菅原淳高（在良弟輔方第五代在嗣祖也）

弘長元年十二月十三日候　御読了藤家奉授　三皇南家又侍二代両家秘本吾道之重宝也　従三位菅原在章（淳高二男）

正嘉三年春二月十四日授吏部経断在守亭了　翰林学士菅（在判）

文永五年正月十九日授中宮少進在久了　更問少進菅在匡（淳高子）

弘安九年七月廿九日以南家之秘説授長老紂既了　虎賁郎将源（在判）

右奥書任本書写之了

文明十二年菊月従翰林学士長直朝臣被見此本予本紛失之間自重陽建筆五六日間書之　大卿菅（判）

同廿三日加朱墨点以他本重加校合者是也但於注朱墨共無点間追可加筆者也

同廿六日以相伝秘本校合之以朱点之以朱懸点分今日校合本之説也不可出窓下不可許外見耳　諫議大夫大府卿菅（判）

同十二年初冬十八日以海注山本校合之了　楽水（判）

元亀二三十以高辻黄門長雅卿之家本遂書功件奥書累代之秘本炳焉也但非无疑惑仍同四十七以万里亜相惟房卿旧本比校之違失太多注付了

天正八〻中旬雇或筆令写之同廿五日以朱墨点之右奥書等右兵衛兼右任本不違一字写之　少納言清原朝臣国賢（「右兵衛兼右」の五字は前条奥書の末句にあるべきが誤って混入）

即ち元亀二年吉田兼右が平安時代以来博士家相伝の点本を書写せる本（兼右手写原本は国学院大学図書館蔵）を、天正八年清原国賢が書写した本の転写で、神宮文庫・慶應義塾図書館蔵写本等と同種鈔本である。国賢が加えたと思われる傍注首書の書入も移写されている。「吉家氏蔵」「向黄邨／珍蔵印」の印あり。

臣軌　二巻　唐武后撰　王徳纂注　〔江戸前期〕写　天正八年清原枝賢本奥書本　一冊

前者と僚巻をなし、書写者も同じ。栗皮表紙。単辺有界七行、行十六字、注小字双行。本文に朱筆句点朱引朱ヲコト点墨筆訓点声点を附し、注にも朱点朱引墨筆訓点を附する所もある。巻末奥書に

本云旹建徳二年辛亥後秋上旬比ミ石川郡東条龍泉寺於尊満坊以清家文点如本不顧悪筆不憚後日比興或為稽古或為学文所致書写者也

同十月遂朱点了（此七字朱筆）桑門―筭判　生年五ミ才

本云元亀二年三月比以三条西亜相実澄卿秘本遂書功件本上帙旧本下巻新写也疑惑非一仍以右之奥書他本比校之改正之了

右兵衛督（花押）

以吉田右兵衛督卜部朝臣兼右本令書写畢　于時天正第二〔一当作八〕暦秋八月二十五〔一本作又〕六日宿雨半染山色浮雲更蔽月明感情非一矣　従三位清原朝臣枝賢六十一歳

同廿七日遂朱点了〔此八字朱筆〕

前本と同様元亀二年の吉田兼右書写点本（兼右手写原本は国学院大学図書館蔵）を、天正八年に清原枝賢（国賢の父）が書写せしめた本の転写で、神宮文庫・内閣文庫蔵写本と同種で、枝賢の書入と思われる校字等も移写してある。「吉家／氏蔵」「向黄邨／珍蔵印」の印あり。楊譜四又50裏著録。

*同　二巻　〔鎌倉末南北朝初間〕写　二冊

茶色元表紙（二四・五×一六・二糎）。元題簽「臣軌上(下)」。粘葉装。厚手斐・楮交漉紙。両面書。白界、界高二〇・五糎、界幅二・五糎。毎半葉五行、行十四字、注小字双行。朱筆の句点ヲコト点（紀伝点）・墨筆の訓点六声点濁点（○ᵒ）を附し、江説等の異訓や音義を行間に書入す。但し注文は無訓。巻初「臣軌序」、次行低一格「天后御撰」、第三行低二格「鄭州陽武県臣王徳纂注上」と題し、序に接して「臣軌上」と題し、次に篇目を標記して本文に接属する。この本はいかなる理由か、注文を欠く所があり、下巻はさ程でもないが、上巻には削略の箇所の方が多い。楊志補・楊譜四又50表著録。巻末に左の光緒十四年の守敬の手書題跋（楊志補収）あり。

臣軌二巻日本古鈔本

此書以寛文刻本根源為最古此本注中大有删削／然墨色如漆審其筆勢当為日本六七百年前／人所抄其原本不与寛文本同故巻首有鄭州／陽武県臣王徳纂注上十一字而寛文本無之案此／書別有天正間抄本亦有王徳纂注之文則知寛文／本脱也　光緒戊子四月　宜都楊守敬記

又按寛文本巻末有垂拱元年撰五字佚／存叢書因之阮文達遂有異議此本無此五字／豈寛文本為後人所竄入与　守敬再記

帝範・臣軌の附注本は有名な佚存書で、以上三部の詳細については楊志巻五並に拙稿「帝範臣軌源流考附校勘記」（「斯道文庫論集」第七輯収）参照。

大学衍義　四三巻　宋真徳秀撰　明弘治一五年序刊（江西）　一六冊

淡縹色表紙（二四×一四・五糎）。白綿紙本。首に弘治十五

年五月朔の江西等処提刑按察司副使奉勅提督学校無錫邵宝の西山真氏大学衍義重刻序、真徳秀自序、端平元年の徳秀の進大学衍義表、中書門下省時政記房申状・尚書省劄子、並に目録あり。本文首「大学衍義巻第一」と題し、各巻末題下校者名を署する。左右双辺（一六・五×一〇・七糎）有界十一行、行廿一字。注小字双行。版心粗黒口「幾　（丁付）」。印面にかなり磨滅の跡がある後印。朱墨両様の句点や校字の書入がある。「王堂／図書」等の印あり。

同　〔明嘉靖三八年跋〕刊（福建監察御史吉澄校刊）

六冊

淡縹色表紙（二五・九×一五・八糎）。首に徳秀自序並に目録あり、本文首行「大学衍義巻第一」と題する。単辺（一九・九×一三・四糎）有界十行、行廿字。版心白口「大学衍義巻幾（丁付）」。巻四十三末題の前に「巡按福建監察／御史吉澄校刊」なる双辺両行木記がある。本版は明丘濬撰大学衍義補一六〇巻と併せて福建に於て刊行された。

慈谿黄氏日鈔分類　九七巻（巻八一・八九・九二原欠）

〔明正徳十四年（書林龔氏）〕刊　二〇冊

渋引茶褐色表紙（二六・三×一五・二糎）。白綿紙本。首目及び巻一至巻六は江戸時代影鈔本を以て配補。双辺（一九・七×一二・五糎）有界十四行、行廿六字。版心上は白口、中・下は線黒口「黄氏日抄　（小題）幾巻　（丁付）」。「愛宕源通／直所求得／之書也」の蔵印。楊志七・楊譜続著録。

＊北溪先生性理字義　二巻　宋陳淳撰　〔元〕刊　二冊

後補紺色表紙（二一・五×一四糎）。裏打補修を加う。首に陳宓序及び目録あり、本文首大字両行に跨って「北溪先生性理字義巻之上」、尾題「北溪先生性理字義下巻終」と題する。双辺（一七×一一糎）有界十四行、行廿四字。版心線黒口「字義上（下）　（丁付）」。少し破損の箇所が往々存し、室町末近世初間の朱筆句点が附され、僅かながら墨訓点や校字が附されている。「三上氏／蔵書」「清和／源氏」等の蔵印あり。楊譜三51著録。この元版の所在は他に聞かず、字様に宋末建刊本の遺風あり、或は覆宋か。

兵家類

＊六韜　六巻　〔室町末近世初間〕写　松崎慊堂手沢本

一冊

後補紺表紙（二七・九×一九・八糎）。単辺（二二・九×一六・二糎）有界八行、行十四字。上欄層格あり、幅三・四糎。朱引朱筆勾点墨筆訓点、間々朱筆句点が附されている。首に「六韜序」と題して、施子美七書講義の序を附する。本文首「六韜巻之一」、尾題「六韜巻第六終」と題す。巻末に「甲午（天保五年）夏五十九日一読／羽老復」なる松崎慊堂の識語がある。楊譜五1著録。

＊孫子三巻附呉子二巻　〔室町末近世初間〕写　一冊

後補紺色表紙（二六・四×二〇糎）。単辺（二〇×一六・一糎）有界七行、行十六字。朱筆句点朱引墨筆訓点を附し、孫子の末

題下に「御本云／以唐本写之重校正直解了」と誌され、孫子には明劉寅撰七書直解との校字が旁記されている。「桉斎」「森氏開万／冊府之記」の印あり。

＊魏武帝註孫子　三巻　魏武帝注　天正八年写　一冊

淡灰色表紙（二七×一八糎）、外題「伝長老書魏武注孫子全」。厚手斐楮交漉紙、両面書。もと粘葉装、今包背装。単辺（二四・五×一五糎）有界八行、行十七字、注小字双行。墨筆訓点を附す。巻末書写奥書に、

于辰天正第八暦庚辰弥生廿八日宗伝書之白眼一笑云云

と。本文末に本文と別筆にて「索知之必索」の五字を記す。「法輪寺常住」「山城州西京妙心禅寺内西河院」「万／海」「迷／庵」「光／彦」「林下／一人」「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森／氏」「問津館」の蔵印あり。森志四・楊譜五6著録。森志の守敬書入本には「今在飛青閣森立之所贈」と。

又　楊守敬令影写　一冊

前掲本の影鈔。但し烏糸欄訓点等は写していない。

＊黄石公三略　三巻　元亀元年写　一冊

後補紺色表紙（二四×一九・四糎）。襯紙を入れ改装。元料紙はやゝ厚手の間似合紙。縦二三・四糎。単辺（一九・四×一四・九糎）有界九行、行廿字。朱筆句点朱引墨筆句点訓点を附し、振仮名に濁点があり、校字を旁記し、上層に少しく注の書入がある。前の遊紙の左下端に「制心源蔵主（花押）」の墨署名があり、巻末書写奥書に

元亀元年庚午八月七日制心源蔵主（花押）

染所持仕而三十郎殿へ出申／旨／文禄二年癸巳卯月廿二日源阿弥

右本清家以正本校正之者也

と。文禄二年云々の中間の三行は本文とは別筆で、その左右の奥書は本文と同筆である。元亀元年に制心源蔵主が書写し、後に文禄二年源阿弥が之を三十郎なる人に贈ったものと思われる。三十郎三慶なる名は室町末近世初の清家証本の重鈔本の奥書によく見え、清原国賢の門人である。前遊紙に「前漢張良遊下邳圯上有一老父衣褐云云」なる圯上の故事を述べた文が抄録され、本文巻頭「黄石公三略巻之上略」と題するが、「黄石公」の三字と「巻之」の二字には見せ消ちが附されている。「森／氏」「問津館」の蔵印あり、容安書院（渋江抽斎）蔵として森志四著録。

奥書に清家正本を以て之を校正すとある通り、元来書写してあった本文及び訓点を、清原宣賢点本（宣賢自筆三略秘抄本）によって、見せ消ちや塗沫の方法でかなり忠実に移写訂正してある。訂正もれの所から判断すると、元来この本は足利学校系写本に属し、東洋文庫・高知県立図書館蔵本と同種であった。従って所々足利学校本と宣賢本とが混在せる形になっている。詳細は拙稿「三略源流考附三略校勘記・擬定黄石公記佚文集」（「斯道文庫論集」第八輯収）参照。

＊素書註解　旧題□陳石撰　延宝五年写　一冊

渋引丁子色空押行成表紙（二七・八×二〇糎）。首に「素書註解并序　陳石」、巻末「黄石公素書一巻（謂之張良一巻書）」と題する。字面高さ約一九・五糎。毎半葉八行、行十四字、注小字双行。朱筆句点朱引墨筆訓点を附す。巻末書写奥書に、

于時延宝第五丁巳稔蜡月中旬以先考二敬所持本／謄書之　釈寿祥

と。

残儀兵的　旧題宋蘇軾撰　〔慶長〕刊　古活字版　一冊

後補紺色表紙（二五・八×一八・七糎）。首に「残儀兵的并序（隔六格）蘇子瞻」と題する序があって、本文に接属する。双辺（一八・二×一五・二糎）有界九行、行十六字、注小字双行。版心黒口「兵的　（丁付）」。龍門文庫蔵本と同版。「賀茂三手文庫」（陰刻）印あり。楊譜五35著録。

法家類

韓非子　二〇巻　闕名者注　芥川煥校点　延享三年刊

（京・唐本屋吉左衛門・丸屋市兵衛）　五冊

後補紺色表紙。大本。朱・墨・藍筆の校字書入あり。

洗寃録　宋宋慈撰　〔明末〕刊　一冊

茶色表紙（二五・八×一六糎）。単辺（二二・五×一二糎）有界十行、行廿八字。句点附刻。版心白口。後表紙見返に左の本書に関する梁衆庭立記聞からの抄録（尚真の筆蹟に非ず）と、その次に小島尚真の安政三年の左の識語が存する。

洗寃録、不知何人所作、今刻本不題姓名、曰、銭竹汀云、曾見宋槧本、朝散／大夫新除直秘閣湖南提刑充大使行府参議官宋慈恵父編、有／淳祐丁未嘉平節前十日自序、宋史藝文志不載、慈里居亦未／詳、官司検験、至今奉為金科玉律、但屢経翻刻、不免／後人増改、輟耕録記勘釘事、以為刱聞、此書已先有之矣（梁衆所輯、／庭立記聞、戊申晩春念二録）

此本不分巻数始条令終験状説凡五十四篇巻端自序題銜一与／竹汀之言符今行本分四巻以此校之篇第文句亦大不同益知／今本頗有後来増損而此尚存宋氏原第者但篇中間有依／平寃無寃二書附録者及巻首頒降新例六条並元代重脩／所増非宋氏之旧也丙辰小春十一日燈下書尚真

「小島氏／図書記」「尚浜／之印」「字／学古」の印あり。森志四著録。

農家類

斉民要術　一〇巻　後魏賈思勰撰　〔明万暦間〕刊

（海塩胡震亨刊秘冊彙函本）　小島尚質据宋本手校並題記　六冊

天保十二年小島尚質（宝素）が、嘉永四年に小島尚真（春沂）が金沢文庫本（鎌倉鈔本、蓬左文庫現蔵）と高山寺蔵宋刊本とを以てせる朱筆校合を書入、左の朱筆校合識語あり。

（巻一第十二丁版心）辛丑二月望前一日照金沢影宋本校／伊沢朴甫渋江道純同勘質

（巻末）辛丑二月望前一夕読案師古注文当是／後人妄添蛇足耳

（巻五巻初眉上）此春以日本高山寺／宋／本／較／宋本思勰二字小書

（巻五末）嘉永辛亥九月廿七日据宋本訂正誤脱宋本高山寺所蔵天聖／原刊本也尚真識

「小島氏／図書記」「江戸小／島氏八／世医師」「尚質／校読」「尚浜／之印」「字／学古」の印あり。

同　存三巻（巻一残首二葉・巻五・八）　〔江戸〕影写

高山寺蔵北宋刊本　一冊

淡香色表紙（二七・七×二〇糎）。薄葉紙、襯紙を挾む。字面高さ約二二・五糎。毎半葉八行、行十七字。注小字双行行廿五字。京都高山寺蔵北宋刊本（羅氏影印本あり）の影鈔本で、左の小島宝素の天保九年、天保十二年の識語あり。

（巻五末）著雍淹茂夏五二十七日夜手校畢弟子逢島債／対読

（巻八末）紹興甲子葛祐之刊此書後序有言曰／蓋此書乃天聖中崇文院板本／非朝廷要人不可得案斯刻通／字欠末筆審是天聖刊本也／辛丑花朝前一夕秉燭以識焉侯宋

観海堂亦他に同種影鈔本一部を蔵する。楊志七・楊譜四51 52著録。

農書　二二巻　元王禎撰　清乾隆刊　武英殿聚珍版　一〇冊

首に一葉を附綴して、左の守敬の手書題跋（楊志補収）あり

王禎農書典雅詳実斎民要／術之亜也惟武英殿聚珍本有之杭州福州重刊聚珍本均／不刻此本可謂無識余求之二十年／未得丙戌入都始以重値購之他／年有力必当重刻之〇〇〇五月廿三日守敬記（印）／此書所引齊民要術尚足訂秘冊彙函本之謬

医家類

＊新刊勿聴子俗解八十一難経　六巻図要一巻　明熊宗立撰　谷野一柏校点　天文五年刊（越前一乗谷・日下宗淳）翻明成化八年熊氏中和堂刊本　三冊

艶出代赭色表紙（二七×二一糎）。扉の表葉に扉絵があり、上端に右横書を以て、「鼇峯熊宗立俗解」と。裏葉は「経明素問疑難意／勿聴子俗解／八十一難経／詞発霊樞隠秘文」と題する。有界四行の封面となっている。首に正統戊午春正人日道軒敬識の序、次に「新編俗解八十一難経図要目録／（低八格）鼇峯勿聴子熊　宗立纂図」と題し、目録の末に「成化壬辰孟春良旦／鼇峯熊氏中和堂栞」なる両行の原木記があって、次に「新刊八十一難経纂図隠括」と題し、以下図要が続き、首目・図要を以て一巻一冊となし、その巻末に後掲の刊語一葉が附してある。本文初行「新刊勿聴子俗解八十一難経巻之一／（低一格）廬国秦越人著述／（低八格）鼇峯勿聴子　熊宗立俗解」と題する。単辺（二一・七×一六・七糎）無界十一行、行廿一字、注小字双行。句点附刻。版心白口、「難経巻幾　幾丁」。図要巻末の刊語に曰く、

越前州一乗谷之艮位一里許有／山曰高尾其麓有寺人号曰高／尾寺〻有堂安以医王善逝尊像／太守日下氏宗淳公俾一栢老人／校正熊宗立所解八十一難経之／文字句読而募工鏤梓以置於本堂蓋医国救民之意歟』　旹天文五年丙申九月釈尊藝

と。室町末近世初間頃の朱引朱墨両様の訓点の書入がある。各冊遊紙左下端に「重勝」の墨署、「不忍文庫」「小島氏／図書

記」「尚浜／之印」「字／学古」の印あり。

本版の校者一柏は入明の名医谷野一柏で、医の外に易等の外典も講じた。刊行者の宗淳は越前国主朝倉孝景の法号で、文藝に心をよせ朝倉家の城下一乗谷には当時清原宣賢を始め中央の文化人が招聘され、藝文の一中心地であった。従って本版は他の地方版の稚拙なるのと違って、撫刻精善料紙亦厚目の上質楮紙、堂々たる大型判である。本版は伝存比較的少く、布施巻太郎氏・尊経閣文庫（図要欠）・国立国会図書館（第三冊欠）・京都大学谷村文庫（図要）蔵本が知られている。

＊察病指南　三巻　宋施発撰　〔室町中期〕刊　一冊

後補茶褐色表紙（二九・一×一九・九糎）。裏打修補が加えられ、元料紙は紙幅二八・六糎。首に淳祐丙午趙崇賀序、淳祐乙巳趙与諗序、淳祐改元九月立冬後四日の施発自序、兼発売続易簡方論及び目録あり、目録の末に原本の題簽の覆刻と思われる。双辺の「察病指南全」の木記が刻されている。本文初行「察病指南巻上」と題し、巻下末題に続いて識語を刻し、王叔和脉訣論滑実弦緊四脉を引く。左右双辺（二二・三×一五・九糎）有界十行、行十九字、注小字双行。版心小黒口「察病指南　（丁付）」。丁数は序目とも通し番号で五十二丁。室町末近世初間の朱・墨両様の訓点の書入あり。「小島氏／図書記」「宝素堂」「尚浜／之印」「字／学古」の蔵印あり。森志七著録。

本版は嘗て川瀬一馬博士が発見して、安田文庫に入れ、今次の戦災で焼失したと思われる本と同版らしい。森志には「福井氏崇蘭館又蔵古刊本略与此本同」とあるが、同本は今所在不明で、安田文庫本は崇蘭館蔵本ではないというから、現在知られるのはこの一本のみである。

天文算法類

＊乗除通変筭法三巻続古摘奇筭法二巻田畝比類乗除捷法二巻　宋楊輝撰　朝鮮宣徳八年慶州府校刊　翻明洪武十一年余氏勤徳堂刊本　二冊

後補紺表紙。襯紙を挿む。上端に「古杭勤徳書堂」と横書し、「乗除通変筭宝　法筭取用本末／新刊（陰刻）宋楊輝筭法／続古摘奇筭法　田畝比類乗除捷法」と刻せる単辺有界の封面あり。首に徳祐元年・咸淳十年・徳祐元年の楊輝自序三通、次に乗除通変筭法目録、目録末に「洪武戊午冬至／勤徳書堂新刊」の双辺双行の原木記がある。本文首「筭法通変本末巻上／銭塘楊輝編集」と題するが各巻首尾題を異にし、「乗除通変筭宝巻上」（巻上末）、「乗除通変筭宝巻中」、「法筭取用本末巻下」の如し。次に「続古摘奇筭法目録」、目録末に「古杭余氏勤徳書堂刊行」の双辺原木記あり、本文首「続古摘筭法巻上／銭塘楊輝集」と題す。次に「田畝比類乗除捷法目録」、目録末「洪武戊午冬至／勤徳書堂新刊」の双辺原木記あり、本文首「田畝比類乗除捷法巻上／銭塘楊輝集」と題する。その巻末に朝鮮朴或跋あり、跋後に「宣徳八年癸丑五月日　慶州府校刊」の一行を刻して、その次に三十七人の刊板監刻人等官銜十五行がある。双辺（二二・五×一六・一糎）有界十六行、行廿五字、注小字。版心粗黒口「（筭法通変

上）（算要下）等　（丁付）」。楊志七著録。郁氏宜稼叢書本・鮑氏知不足斎叢書本等の現本はいずれも誤脱多く、且つ欠巻があり、この本最も楊氏の旧観を存すと云う。

術数類

太玄経　一〇巻附説玄・釈文各一巻　漢揚雄撰　晉范望解賛　（説玄）唐王涯撰　（釈文）〔宋林瑀撰〕　明嘉靖三年跋刊（郝梁校刊）　二冊

淡香色表紙（二四・二×一五糎）、白綿紙本。首に陸績述玄あり、本文初「太玄経第一／（低七格）晉范　望　叔明　解賛／（低七格）明郝　梁　子高　校刊」と題し、巻末に説玄五篇・太玄経釈文一巻を附刻し、次に嘉靖甲申春二月十有一日江都郝梁の跋あり。左右双辺（一七×一二糎）有界十行、行十八字、注小字双行。版心白口「太玄幾　（丁付）」。やゝ印面に磨滅の跡あり。「宝／経」（壺形）「敔安」（壺形）「養安院蔵書」「小島氏／図書記」「向黄邨／珍蔵印」の印あり、曲直瀬旧蔵本。森志巻四（図書刊行会本）に「朱懐仙楼亦蔵此本矣」の書入著録本。楊続譜著録。

校刊者郝梁の跋に「太玄経近世鮮有重刊者遂使後学聞玄之名而未見者十八九（中略）予得有宋善本於建業黄氏即令工刊之示不敢自私焉」と。即ち宋本に据る翻刊で、版式宋板に倣い、朱玄貞等に欠筆があるが、覆刻ではあるまい。国立故宮博物院善本書目・国立中央図書館善本書目共にこの本を「明嘉靖甲申（三年）郝梁万玉堂覆刊宋両浙茶塩司本」と著録するが、此は間違である。万玉堂刊本（四部叢刊に影印）はこの郝梁校刊本と字様相似するが、別版で、八行十七字、版心に万玉堂の三字がある。万玉堂版は説玄の末に「右廸功郎充両浙東路提挙茶塩司幹弁公事張寔校勘」の題署があって、その底本を明かにしている。この郝梁校刊本の底本となった宋本もそれと同じ本であったようである。

*霊棊経　旧題晉顔幼明注　劉宋何承天箋　〔南北朝末室町初間〕写　一冊

淡香色表紙（二六・五×一八糎）。裏打修補を加え、原料紙半葉（二四・四×一七糎）を巻子式に和紙に貼り、各半葉を折帖になし、くるみ表紙を添えて旋風葉風に改装。巻首「霊棊経／（低二格）晉襄城道人法味伝晉駕部郎中顔幼明注／（低二格）御史中丞何承天箋法琅（注カ）耶王灌著卦名」と題し、次に序引があって、本文に接続する。字面高さ約廿一糎、毎半葉六行、行十七字、注小字双行、所々墨訓点を附す。毎卦の旁に朱筆を以て赤曰某某と象名を注記し、また卦名の下に一二三等を朱筆注記し、天地人等を朱旁記する。此は「王灌著卦名」なるものであろうか。元表紙と思われる紙に新に貼附せる押紙に次の森約之の手識がある。

太平御覧七百二十六引異苑曰、十二棊卜、出自張文成、受法於黄／石公、行師用兵、万不失一、逮至東方朔、密以占衆事、自此以後／秘而不伝、晉寧康初、襄城寺法味道人忽見一老公、着黄／皮衣、竹筒盛此書、以授法味、無何失所在、遂

復流於也、／又引斉書曰、江謐出為鎮北長史東海大守、未発憂甚、乃以／霊碁経占卦、云、有客南来、金椀玉杯、上使御史大夫沈冲奏／謐前後罪、収付廷尉、賜死、果以金甕盛薬煬之、

文献通考二百二十巻曰、霊碁経二巻、晁氏曰、漢東方朔撰、又／云張良劉安未知孰是、顔幼明宋何承天注、有唐李遠叙、帰／来子以為黄石公書、豈謂以授張良者耶、按南史載客従南来／遺我良財宝貨珠璣金盌玉盃之繇則古之遺書也明矣、／凡百二十卦、皆有繇辞、

森約之案恐是晉法味道人所作、而偽託名于前賢耳、其序則／唐李遠作、其赤旁書即王灌所附、王灌蓋亦唐人、

余安政年間票記、今復浄書如此、明治己巳八月森約之養真礼父／時在桑西福山城南医巫閭博采薬室東軒、

「森／氏」「問津館」の蔵印あり。求古楼蔵として森志四、楊志七・楊譜五29著録。森志・楊志共に末に上党紫団山叟韓運休述の後序ありと記すが、今なく、その後に失われたか。我が国伝来の旧鈔本は一巻に作り、隋書経籍志と合致し、明劉誠意補解本系の通行二巻とはテキストを異にし、旧態を留める。首の序引及び後序は今本にない。たゞ旧鈔本と云っても米沢市立図書館・東京大学蔵本ともに室町末近世初間の鈔本であるから、本鈔本は現存古鈔本中の最古本と称すべきであろう。

五行大義　零本（存巻五）　隋蕭吉撰　〔江戸後期〕影写高野山三宝院蔵鎌倉宝治鈔本　一冊

茶色渋引表紙（二六・三×一七・七糎）。薄葉斐紙。字面高さ廿一糎。毎半葉七行、行廿字。朱筆句点が附さる。首に「五行大義巻第五」と題し、次に巻内篇目を列記し、本文に接す。巻末奥書に朱筆を以て「宝治二年九月中旬校点之／（花押）」と。次に左の書写奥書あり、

高野山門首無量寿院得仁持粘葉古本見貸因得鈔而蔵之／恨止一巻不得窺全巻為憾耳　観碁生題

漢士に於て夙に佚せる書で、高野山三宝院蔵鎌倉鈔本（昭和七年大阪高木氏刊影印本あり）の影鈔本。「小島氏／図書記」「尚質／私印」「学／古氏印」の蔵印あり。森志四・楊譜五33著録。

藝術類

書史会要　九巻補遺一巻　明陶宗儀撰　〔江戸〕写　四冊

茶色表紙。大本。字面高さ約廿一糎。毎半葉十行、行廿字。朱筆句点を附し、少しく朱筆訓点を加え、朱墨各々別筆の校字書入あり。この写本或は明洪武九年刊本の伝鈔か。「根津文庫」「向黄邨／珍蔵印」の印あり。

碣石調幽蘭譜　零本（存巻五）附琴左右手法・琴手法図・調琴法各一巻　撰者未詳　（附）荻生徂徠編校点　〔江戸〕写　一冊

淡茶色表紙（二六×一七・七糎）。字面高さ約一九・五糎。毎半葉九行、行廿字。墨筆訓点を附す。「森／氏」等の印あり。碣石調蘭譜は古佚書で、丘公（字は明、梁末の人）の作とも云

われ、琴譜である。漢土では早く佚したが、京都西加茂神光院に唐鈔一巻が伝えられ、古逸叢書に摸刻された。この本は神光院本の伝鈔で、徂徠が校点し、且つ附録の巻を編校したものである。

同　写　一冊

前掲本の影写。

琴譜　写　一冊

前々掲本の碣石調幽蘭の楚調云々以下の部分の影写。

雑家類

墨子　不分巻　明万暦五年刊　二冊

淡香空色押卍繋ぎ表紙（二五・五×一五・七糎）。襯紙を挿む。白綿紙本。首に丁丑夏日潛菴子の序あり。本文首行「墨子　墨家」と題す。双辺（二一・一×一四糎）有界十行、行廿字。版心白口「墨子　（丁付）」。上象鼻に「万暦五年刊」（一ケ所「万暦四年刊」）、下象鼻に刻工名及び大小字数が刻さる。朱筆句点を附し、少しく朱筆校字の書入あり、一ケ所「茂卿云」と見える。下冊後表紙見返に「文政十年丁亥六月　覇府微者小田巌句」の朱筆識語あり。この版は森志に「容安書院蔵」として著録されているが、蔵印から見て、此はそれとは別蔵本である。

同　六巻　明茅坤校閲　明万暦九年序刊（書林童思泉）

六冊

渋引丁子色朝鮮古表紙（二六・三×一五糎）。白綿紙本。封面あり、上欄に「爾来子書梓者／充肆矣第墨子／尚未印行本坊／近得宋本特懇／鹿門茅先生付／正讐加校刻竝／無訛贋誠藝林／奇璧也識者珎／之／書林童思泉識」と。下欄は「鹿門校刻／涵春楼原板／墨子全編」と。首に韓愈の読孟子、万暦辛巳の茅坤の新刻墨子序、陸弘祚の新刻墨子序、墨子目録あり、本文初「墨子巻之一／（低十格）帰安　茅坤　校閲」と題す。単辺（一九×一二・五糎）有界九行、行廿字。版心白口「墨子　巻幾（丁付）」。下象鼻に大小字数を刻する所あり、また序首には刻工名あり。「貞烈／後人」（太鼓形）「草間／逋隠」「庚午進／士丙子／秋文科」「遊戯／翰墨」「礪城人／宋象賢／徳求章」（以上韓人蔵印）、「養安院蔵書」「敔安」「小島氏／図書記」の印あり。森志四・楊志七・楊譜五11著録。

＊墨子校解　岳鸞仲鳳撰　弘化二年写（自筆）　七冊

黄色表紙（二四・五×一七・六糎）。書題簽に「猶龍堂墨子校解　巻幾」と。双辺（二一・一×一四・九糎）有界八行版心白口「晋斎蔵」の印刷野紙を使用。毎行廿字注小字双行、句点返点を附す。首に皇和弘化二年乙巳之歳武陽岳鸞撰の墨子校解序、墨子校解目録あり、目録の末に

按毛詩注正義及太平御覧引墨子備衝篇其他列／闕不可考之／皇和　武陽　岳鸞仲鳳一字来儀　校／弘化二年乙巳之歳余年六十七

と。本文は

墨子校解巻二　明嘉靖芝城銅活字本　清乾隆経訓堂墨沅校本

皇和　武陽　岳鸞仲鳳　集校解

と題し、巻末末題の前に

凡墨子篇章多残闕其所存之逸文捃拾羣書／以集録篇之末以備博覧而已。浅学之所都匱／如此矣其他諸書蓋有之。是彫虫之餘力矣／

皇化二年乙巳之歳余歳六十有七年有宿痾手痿／不レ能秉筆故楷法不正矣所校本許多不レ可計焉／　武陽　岳鸞　仲鳳一字来儀　著

と記す。著者岳鸞の伝は未詳。未刊本。「森氏開万／冊府之記」の蔵印あり。

＊墨子考　存下篇　〔岡本保孝撰ヵ〕〔江戸末〕写　一冊

黄色表紙（二三・五×一六・四糎）。字面高さ約一六・三糎。毎半葉九行、行十九字、注小字双行。標題は外題による。「経下」より始る、下巻のみか。諸葛氏云、大葛云、小葛云と、諸葛琴台・帰春父子の説を引くこと多し。未刊。

呂氏春秋　二六巻　漢高誘注　明嘉靖七年序刊（関中許宗魯）　六冊

後補淡香色表紙（二六・一×一五二・糎）。首に皇明嘉靖七年戊子九月九日関中許宗魯東侯謹序の刻呂氏春秋序、高誘序、総目あり、本文初「呂氏春秋第一（隔三格）高氏訓解」と題す。左右双辺（一七・六×一二・六糎）有界十行、行十八字、注小字双行。版心白口「呂氏春秋第幾　（丁付）」。下象鼻に刻工名あり。森志四・楊譜五22著録。

同　明宋邦乂・徐益孫校　〔江戸〕刊　五冊

墨筆書入眉上にあり、校訂並に同意の類文を先秦諸書に参照して引援し、朱筆を以て校注を旁記する。巻末に、

余此書ヲ披閲スルノ暇幸ニ葛〔西〕因是先生ノ説ヲ得テ遂段ニ／標出ス伝写ノ誤コレ有ルヘキモ亦考索ニ益アルヘシ今年／三月ヲ以テ創業シ四月ニシテ業ヲ卒フモノナリ／文化三年四月虚庵書

と誌す。「助教／館記」の印あり。

又　五冊

巻十二（第二冊）まで眉上に書入あり、前掲本の書入と出入あれど、ほゞ同じ。

同　清畢沅校〔江戸〕刊（福山・塩田屯）　覆清乾隆刊経訓堂本　五冊

校注及び注解の朱墨両様の書入あり、墨書に「善韶按」が度々見え、一ケ所春台云と。東涯の長子伊藤東所（善韶）書入の移写か。

＊淮南指迷　二巻　恩田仲任（蕙楼）撰　寛政二年写　一冊

半紙本。字面高さ約一九・五糎。毎半葉十一行、行十八字。巻首「淮南指迷／恩田仲任」と題す。句を摘録して、別行一格を低して簡潔な注を下す。巻末に「寛政二年秋八月九日終写功」と。未刊。著者は名は維周、字は仲任、号は蕙楼、字を以

て行わる。岡田新川の弟、尾張藩の儒官となり、兄弟尾府の連璧と称さる、文化十年歿、年七十一。

＊淮南子疏証二一巻淮南子疏証補遺・淮南子纂評・淮南子重言重意攷・淮南子音読出典考各一巻　岡本保孝撰　〔江戸末〕写　九冊

黄色表紙（二三×一六糎）。字面高さ約十六・五糎。毎半葉九行、行十九字。標題は外題による。末刊。「森／氏」印あり。

東観餘論　二巻附録一巻　宋黄伯思撰　〔明末〕刊　常熟毛氏汲古閣刊津逮秘書本　二冊

朱筆を以て「以篤寿仿宋本王氏書画苑本校」と首書。巻一初の方にのみ朱筆校字（少しく墨筆を混ゆ）あり。「孝経楼」（山本北山）、寺田盛業等の蔵印あり。

容斎随筆・続筆・三筆・四筆各一六巻五筆一〇巻　宋洪邁撰　〔明嘉靖〕刊　一四冊

左右双辺（一九・八×一三・一糎）有界九行、行十八字。版心白口「容斎幾筆　巻之幾　（丁付）」。各序目の部分及び三筆巻九至巻十六一冊補写、その他補写を混える部分がかなり多い。一筆の序に崇禎三年馬元調の序を補写するが、この本は版式より見て、嘉靖頃の刊であろう。朱筆句点朱引を附し、僅に墨筆の書入が存する。「安閑堂蔵書」等の印あり。楊譜六6著録。

＊緯略　一二巻　宋高似孫撰　〔江戸末明治初間〕写　六冊

紺表紙（二六・五×一八・八糎）。字面高さ約廿二糎、毎半葉十二行、行廿二字。巻六以下は薄葉斐紙を使用。首に高似孫自序あり、巻初「緯略巻一」、次行「高　似孫　続古集」と題する。朱筆校字書入あり、自序の末に「丙辰六日用旧写本伝校畢　江安傅増湘」の朱筆校字識語あり。楊志七・楊譜六8著録。守敬この写本を影宋本となす。

論衡　三〇巻　漢王充撰　明程栄校　〔明万暦〕刊　漢魏叢書本　五冊

朱筆句点を附す。楊守敬が宋本（宮内庁書陵部蔵）・明刊通津草堂本を以て、朱筆校字書入をなす。

羣書治要　五〇巻（巻四・一三・二〇原欠）　唐魏徴等奉勅編　〔元和二年〕刊　銅活字版　駿河版　四七冊

縹色表紙（二八×一九糎）。双辺（二〇・九×一五・五糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心黒口「羣書治要幾（丁付）」。徳川家康が慶長十二年駿河退隠後、金地院崇伝や林羅山に命じて、銅活字を以て開板の業をおこし、本書は元和二年正月十九日開版の命が下り、六月上旬に竣功した。世に駿河版と称される。

同　細井徳民等校　天明七年序刊（尾張国学蔵板）　二五冊

第一冊前副葉紙に楊守敬の次の手識あり。

此日本天明七年初印本／紙質之厚墨印之精可／謂無匹余所得狩谷望之／校本亦在其後也光緒癸未／楊守敬記於東京使館

＊又　狩谷棭斎手校本　四七冊

狩谷棭斎が文化丁卯四年に柴秋谷と或本（何本なるか未詳）と対校し、また文政元年に金沢文庫旧蔵鎌倉鈔本（当時幕府紅葉山文庫にあり、現在宮内庁書陵部蔵）との対校の校注を朱筆を以て眉上に標記し、また各冊尾に金沢文庫本の奥書を墨筆を以て移写してある。金沢文庫本奥書は引用を省略し、各巻末の棭斎の朱筆校合識語は左の如し。

（巻一）丁卯二月十八日与柴担人対校　棭斎望之　（二）丁卯二月十八日与柴担人対校」　文政紀元七月十八日以紅葉山庫宝蔵金沢古鈔巻子本与市野俊卿対校于近藤氏擁書楼上　狩谷望之　（三）文化四年春仲廿四日与柴秋谷対校　望之　（五）丁卯二月廿四日比讎畢」　文政元年七月廿日校第三第五両巻　望之　（六）丁卯二月廿四日校讎焉　（七）文化丁卯二月廿四日柴担人対校　望之」　文政戊寅七月廿二日与市野俊卿対校金沢古本　望之　（八）文化丁卯三月二日比校　望之　（九）文化四年三月二日与柴秋谷樵校讎焉」　文政紀元七月廿四日与市野迷庵光彦対校金沢本　（十）丁卯三月二日対校別本　狩谷望之　（十一）文化丁卯三月二日対読讎校了」　文政紀元七月廿六日校此巻教隆真人所写無有朱点旁訓望之識　（十二）丁卯三月二日与柴担人対校従第八巻至此望之」　文政元年八月廿日校　（十四）文化丁卯三月九日与柴担人比讎焉此日春懶不能多読止校此冊畢共遊観東叡之桜花棭斎」　文政元年八月廿日以金沢本校　（十五）与柴秋谷観東叡之桜花帰家校此冊丁卯三月九日清水後園落花霏々吉祥閣右花正開　望之（十六）丁卯三月廿四日与柴担人校此巻　望之」　文政元年八月廿二日校　望之　（十七）丁卯三月廿四日対校一本　望之（十八）三月廿四日与柴秋谷対校自十六巻至此巻　望之」　文政紀元八月廿四日校第十七第十八両巻　望之　（十九）文政紀元八月廿六日校　（廿一）文政紀元八月廿六日校　望之　（廿二）文政紀元八月廿八日校　望之　（廿三）文政紀元八月廿八日校合　（廿四）文化戊寅九月十一日対校　（廿五）文政元年九月十二日校　（廿六）文政元年九月十四日校　（廿七）文政元年九月十六日対校　（廿八）文化紀元季秋十八日校　望之　（廿九）文政紀元九月廿日校了　（卅）戊寅季秋廿二日校此巻

巻卅一より巻四十三の間は書入漸次少くなり、それも棭斎の筆蹟ではなく、棭斎の識語もない。但し巻卅五の清原の奥書の写は棭斎の筆のようである。巻四十四以下は書入がない。所々に棭斎とは別筆の朱墨の書入が僅かながら混っており、巻十四の廿六丁裏の墨筆書入には「寛按」の校字が見える。「森氏開万／冊府之記」の印あり。（補記2参照）

又　存巻二一　一冊

前掲本の棭斎手校書入が移写されている。棭斎書入を移写せる本は他にもあったらしく、「北京図書館善本書目」巻四には、この天明刊本の「失名臨狩谷望之校」の廿五冊が著録されている。斯道文庫には、森立之が明治十六年にこの対校注を半紙本二冊に輯せる「羣書治要校本」と題する近写本が架蔵さる。

紺珠集　一三巻　旧題宋朱勝非撰　〔江戸末明治初間〕写（影明天順刊本）　三冊

薄葉紙、襯紙を添う。字面高さ約廿一糎。毎半葉十二行、行廿四字。首に紹興丁巳王宗哲序・総目あり、巻初「紺珠集巻第一」と題す。巻末天順庚辰七月望後三日銭塘賀栄及び天順七年秋八月存有居士栄の両跋あり。朱筆校字あり。楊譜六44著録。

＊〔居家必要事類全集〕　零巻（存壬癸集二巻）　元不著撰人　〔元〕刊　一冊

後補茶色表紙（二一・八×一五・五糎）、破損多く、裏打補修を加う。毎巻首に目録あれど大部分欠損し、また欠葉多く、両巻とも首尾題等の前後の葉が不幸欠脱。左右双辺（一七・五×一一・二糎）有界十三行、行廿二字、注小字双行。版心線黒口「必要壬（丁）集　（丁付）」。大標目は両行に跨り、小標目は陰刻。少しく朱句点を附する所あり、巻末に「天保六年孟秋月重加背装楓園道人為予／手造倭宋志」と、小島宝素の識語あり。「小島氏／図書記」「小島／尚真」等の蔵印あり。森志四著録。本書の元槧本は他に所在を聞かない。

同　一〇集　〔明〕刊　巻一〇抄配　一〇冊

後補黒色表紙。白綿紙本。序跋なく、毎巻首に目録あり。毎巻初行「居家必用事類全集」、次行「某集」（陰刻）と題す。双辺（二一×一五・二糎）有界九行、行十六字。版心粗黒口「必要某集　（丁付）」。句点附刻、標目陰刻。「人見元／徳蔵書」等の印。森志四著録の聿脩堂蔵本と同版。

類書類

＊鵜玉集　存巻二二・一四　不著編人　〔江戸末明治初間〕写（伝鈔名古屋真福寺蔵天平十九年鈔本）　一冊

黄色空押行成表紙（二六・九×一八・八糎）。本文字面約廿一糎。毎半葉八行、行十七字内外。名古屋真福寺蔵天平十九年鈔本（巻十二末「〔用〕紙一十九張写天平十九年歳在丁亥秋七月日」、巻十四末「用紙一十六張天平十九年歳在丁亥三月写」の書写奥書あり）の重鈔本であるが、真福寺本から直接影写したのではない。首に鄭樵通志藝文略宋史藝文志より鵜玉集に関する記事の抄録あり、巻末に

今按不空三蔵表制集距天平十九年僅三十／余年挙也当時此方乏料紙思表制／摺写挙遙後年以此書中二冊宛／摺公料耳此書以表制集存裏面而／免散逸耳任追考記巻端云楳編／痛史

の跋や天保五年午正陽蛇人・天保五年四月楳塢老人等の跋がある。この本はそれからの重鈔である。

鵜玉集は日本国見在書目雑伝家に十五巻、鄭樵の通志に二十巻と著録された古佚書で、多くの逸事瑣聞を類別して輯録し、六朝末の編と推定されている。引書には今日伝わらない古佚書が少くなく、伝存書と雖もその引文は唐以前の旧形を遺しているから、校勘上極めて注目すべきである。その全文は古逸叢書に摸刻して収められ、また古典保存会の影印本がある。この本には楊守敬の朱墨両様の校字書入が加えられ、寺田望南等の蔵印がある。森志五参照。

*新板増広附音釈文千字文註　梁周興嗣撰　不著注人

〔南北朝〕刊　一冊

後補縹色表紙（二五・五×一五・五糎）。巻首初行「新板増広附音釈文千字文註」、次行「〇千字文梁員外散騎侍郎周興嗣次韻」、巻末「新板増広附音釈文註千／字文終」と題する。左右双辺（一七・五×一一・七糎、一部双辺を混ゆ）有界、大字五行、注文小字十行行廿字、版心白口「注一　（丁付）」。廿五―卅丁の下象鼻に「仲」の刻工名あり。注の引書名は或は圏で囲むか或は陰刻。朱筆の訓点振仮名清濁点を附す。本書が文字学習の初学啓蒙書たる性質上その振仮名と清濁点は詳細である。後表紙見返に「瑞乾家蔵」の墨署、「小島氏／図書記」「字／学古」「向黄邨／珍蔵印」の蔵印あり。森志二・楊譜三62著録。本版の伝存本は尠く、従来内閣文庫・東洋文庫蔵本が知られたのみ。

従来本旧刊本の注は注者名を著録していないが、佚存書と云われる五代梁李邏の撰とされている。しかし本邦伝承の李邏注と比するに、既に森志が「其注与前諸本不同疑宋元間人所撰」と指摘している如く、共通する所もあるが甚しく出入参錯があって、却て明内府刊本「千字文」（故宮博物院蔵）と一致し、李邏序も冠していない。我が国現存の李邏注の大部分も纂図附音増広（集註）等の冠称を有し、李邏注原撰の旧姿ではなく、後人の増删が加っていることは明かである。本版の注は蒙求の李翰旧注を宋の徐子光が改編増補せる如き類と目すべきであろう。千字文は元・明の間、蒙求註・胡曾註と併せ三註（附音増註等の冠称を有する）と称して合刻され、童蒙の学習書として行われ、我が国に於ても盛行した。この版も恐らく元本―現在発見されないが―の覆刻であろう。森志は「聞崇蘭館蔵元刊本恐是本所原」と推測している。旧刊の「重新点校附音増註蒙求」（応安七年陳孟栄刊）「新板増広附音釈音釈文胡曾詩註」は版式・字様に共通するものがあり、本版の版心に「注一」、胡曾詩のそれに「注二」と刻され、三本共に刻工名に「仲」の名が存するのは、三書が同じ頃出版され、底本は同じ三註合刻本（恐らく元刊本）であったことを物語るものである。明内府刊の千字文・蒙求・胡曾詩も同系統の三注本のテキストに原づくものであろう。

藝文類聚　一〇〇巻　唐欧陽詢編　〔明〕刊　覆明嘉靖六年呉郡陸采刊本　翻宋本　一二冊

縹色表紙。白綿紙本。首に浙江布政使司左参政天水胡讃宗序、欧陽詢原序及び目録あり、本文首行「藝文類聚巻第一」、次行「唐太子率更令弘文館学士欧陽詢撰」と題す。左右双辺（二一・九×一五糎）有界十四行、行廿八字。注小字双行。版心白口「藝文巻幾　（丁付）」、下象鼻に所々刻工名あり。この本やゝ後刷。「江戸市野光／彦蔵書記」「迷／庵」「林下／一人」「弘前医官渋／江氏蔵書記」「奚暇斎／読本記」（多紀元堅）の印あり。森志五・楊続譜著録。陸采刊本の覆刻。

初学記　三〇巻　唐徐堅等奉勅編　〔明嘉靖〕刊（九洲書屋）　覆錫山安国桂坡館刊本　一二冊

淡香色表紙（二五・七×一六・九糎）、外題楊守敬筆。首に嘉靖辛卯歳夏六月吉旦錫山秦金の重刊初学記序、紹興四年劉本の初学記序あって、次に「初学記目録／唐光禄大夫行右散騎常侍……徐堅等撰／大明嘉靖辛卯錫山安国重刊」と題し、目録がある。本文初「初学記巻第一／（低一格）光禄大夫行右散騎常侍集賢院学士副知院事東海郡開国公徐堅等奉／（低一格）勅撰（隔八格）錫山安国重刊」と題する。左右双辺（二〇・六×一五・三糎）有界九行、行十八字、注小字双行、行廿四字。版心白口「初学記巻幾（丁付）」、上象鼻に「九洲書屋」、下象鼻に刻工名を刻する。巻卅末は五丁補写、その他の巻末にも補写となっている所がある。宋・元本との対校の朱筆校字書入があるが、此は厳鉄橋の対校札記の移写であろう。「細川／家蔵」等の印あり。楊志十一・楊続譜著録。第一冊に印刷原稿用紙四丁を附綴して、守敬が「鉄橋漫稿」（嘉慶二十年七月五日厳可均書於治城山館）を写し、次に左の手書題記（楊志収と小異あり）を記す。

今世行初学記以安国本為最旧其書刊于明嘉／靖辛卯其本亦有二其一辺口書九洲書屋者安氏原刻即天禄琳琅所載本其一辺口書安桂坡館者覆安氏本也其書中墨釘一依安／氏而較多間或挖去則刻梓人之為書首秦金／序挖去郭禾二字嘉靖十三年甲午晉藩又／以安本重刊墨釘一仍其旧而少劉本一序有晉藩／刻書引又至万暦丁亥太学徐守銘又以安本覆／刻有茅鹿門序書中墨丁皆補刊有以所引原／書校補者有憑臆塡者又有陳大科刊本亦安／本之枝流也又有万暦丙午虎林沈宗培所刊巾箱／本前亦録鹿門序而截去近代錫山云云以下蓋借／名以行世也其書分為三十二巻毎類詩賦有拠／藝文類聚太平御覧増入者顧誤字差少蓋沈氏／以他書校改也古香斎本似以安国之巻第而拠／沈氏為底本然以厳鉄橋所挙宋本無不違異者／唯明嘉靖丁酉書林宗文堂所刊本劉本序後／有木記云近将監本是正訛謬重写雕鏤校讎精／細並無荒錯買書君子幸希詳鑒其三十巻後有／跋云初学記三十巻宋後刻于麻沙今歳書林鄭／逸叟再購以板其書上天下地明陽幽陰貴人賤物無不賅也経典史冊方言小説長賦短詩無不取也／門分類綴大且勤矣以鈔本而贋字残簡為多／献観於余余謝陋弗敢讎也敢求正于識奇字／記雑書如揚子雲鄭康成君子云時嘉靖丙申冬／壺雲子後跋其書題新刊初学記首巻有総／目毎巻無総目而於毎類下題目録出附首巻其／徐堅奉敕下有撰字劉本序形名不作刑名与／鉄橋説相応書中訛文奪字触目皆是知其／未以安本校改者按鉄橋言第二十五巻至三十／巻有二十餘翻与安本大異而未言在何類今略／校之則第二十五巻火類一葉半廿六巻弁類半葉／廿八巻李類柰類桃類桜桃類共八葉廿九巻狗／類一葉半三十巻雞類後半葉鷹類前半葉蝶蟬／螢三類共六葉鉄橋謂安氏所得係残本而其館／客郭禾輯補之今按安氏本非残欠乃漫漶不可弁／郭君因其不能弁以他書補之其能弁者仍夾置／其中然已大非東海之旧若非得宋本安能発其覆如此／本刊刻之草率縦有異同亦土苴視之矣今宋未／知尚在人間否厳氏校本亦未墨諸板則球図視之至其誤処宋本已然此更加劇非良集纂書不能校也癸未十月楊守敬記

拠森立之訪古志称其楓山官庫有北宋本余本／擬借出一校因帰期在邇故不及附記於此俟後之留／心古籍者

丁酉赴上海得帰安陸氏羣書校補乃知厳鉄／橋校本尚有伝校者惜陸氏但刻其校文近日川中／重刻本未拠其文改訂之也

守敬は右の如くこの九洲書屋刊本を以て安国初刻本、安桂坡館刊本を以てその覆刻と審定した。しかし無錫県志に「安国字民泰、富幾敵国、居膠山、因山治圃、植叢桂於後岡、延袤二里餘、因自号桂坡」とあれば、桂坡館本が安国校刊本の原刻で、九洲書屋刊はその覆刻とみるべきであろうか。

同　欠巻一至巻六　明嘉靖一三年刊（晉府虚益堂）　翻安国桂坡館刊本　一〇冊

艶出空押行成丹表紙（二五・八×一七・六糎）。白綿紙本。首巻欠につき序・跋・首題未詳。左右双辺（二〇・五×一五・四糎）有界九行、行十八字、注小字双行廿字。版心黒口「初学記巻幾　（丁付）」。但し各巻初の葉のみ白口にして、上象鼻に「晉府重刊」と刻す。「元／政」（陰刻、元政上人）「艸山瑞光蘭若」（上に「帝」と墨書）、「小島氏／図書記」の蔵印あり。森志五著録。

＊新刊初学記　三〇巻　唐徐堅等奉勅編　明嘉靖一五年跋刊（鄭氏宗文堂）　覆元至正一七年刊本　一〇冊

淡香色表紙（二二・二×一四糎）。首に紹興四年劉本序（「重刊大字初学記序」と題す）、序後に原木記を刻し、次に「新刊大字初学記目録」がある。本文首に「新刊初学記巻之一／（低三格）光禄大夫行右散騎常侍集賢院学士副知／（低三格）院事東海郡開国公徐堅等奉　敕撰」と題する。第卅巻末に嘉靖丙申（十五年）冬壺子後跋がある。単辺（一七・七×一二・四糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心白口「初学記　第幾巻　（丁付）」。原木記に曰く、

光禄大夫行右散騎常侍集賢／院学士副知院事東海郡開国／公徐堅等奉　／勅撰纂初学記一書近将監本／是正訛謬重写雕鏤校讎精細／並無荒錯買書君子幸希詳鑒／至正丁酉歳冬書林宗文堂刊行

この至正丁酉の「至正」を、どうしたことか森志・楊志、楊譜の書影模刻までが「嘉靖」と誤記し、従って爾来両志に据って論をなす者悉く誤りを踏襲するに至っている。宗文堂は鄭氏、元から明にかけて繁昌した建安の書肆である。壺雲子後跋に「初学記三十巻宋後刻于麻沙今歳書林鄭逸叟再購以板」とある。「再購以板」という意味であるが、宗文堂が嘗て出版した板木が他に渡っていたのを再び購入して出版するの意か、他の書坊が開板した板木を再び購っての意か、判然しない。この本は元麻沙刊本の版式字様であるが、二百年近い前の板木を使用した後刷とは思えないから、至正丁酉刊本を覆刻せる新板で、その原木記もそのまゝ覆し、たゞ書坊名が他の名であったのならば、そこのみを改めたものと思われる。巻一に「以明安国本校」の守敬の手校書入がある。森志巻五に「此本係市野光彦旧蔵」として著録されたのは果してこの本なるか否か。この本に

は光彦の蔵印がない。守敬の森志のその条への書入には「今蔵飛青閣」と。楊志十一・楊譜六23 24著録。第一冊に「鄰蘇園」の印刷罫紙二丁を附綴して、左の守敬の手書題識あり。

厳可均鉄橋漫稿称以孫淵如宋本初学記校明徐／守銘重刊安国本自廿五至三十巻凡二十二葉／与徐本大異因知国所得有闕葉其館客郭禾補／足者余所得九洲書屋本即安国原刻又有安桂坡／館本晉藩本徐守銘本陳大科本板式皆与安本同／別有〔沈〕許宗培本則有所竄入然以校廿五巻以下之／二十二葉無不相合知諸本縦有拠他書校改而皆／祖安本者也惟此本則与安国絶不相合今按二十／五巻火類一葉半廿六巻弁類半葉廿八巻李類奈／類桃類桜桃類共八葉廿九巻狗類一葉半三十巻／雞類後半葉麞類前半葉蟬類蝶螢三類共六葉与安／本大異知厳氏所指即此也厳氏謂安氏所得係残／本今按非残本乃漫漶太甚故以他文補之其中可／弁者仍夾置其中然已大失徐東海之旧若非得宋／本発其覆如此本之刊刻草率縦有異同亦土苴視／之矣今宋本未知尚在人間否厳氏校本亦未墨諸／版則此本当球図視之至其誤処宋本已然此更加／劇非哀集羣書不能校也以俟年略記于此（印）

＊白氏六帖事類集　存五巻（巻二二至巻二六）　唐白居易編　〔江戸〕影写天理図書館蔵宋紹興刊本　二冊

淡茶褐色表紙（二七・七×一九・八糎）外題「白氏六帖事類集上（下）」、この筆跡は椛斎風でその門流の筆である。薄葉斐紙に匡郭版心から虫損跡に至るまで忠実に影写してある。左右双辺（二一・九×一五・三糎）有界十三行。版心白口「帖十（十一）　（丁付）」。版心に大小字数、刻工名あり、宋諱の闕画は貞字に至る。原本には「金沢文庫」「船橋蔵書印」あり、京都福井氏崇蘭館蔵として有名であったが、現在天理図書館蔵。本書の宋版は静嘉堂文庫蔵北宋末刊本、天理図書館蔵別本、梅沢記念館蔵本があるが、この本はそれ等とは別版で他に同版の所在を聞かない。この本は影鈔本であるが、現在原本が虫損等で少しく欠損せる字がまだ残ってゐて識読できるので、影写本と雖も軽視し得ぬ一例である。森志五・楊譜六25著録。

＊蒙求　存巻上　唐李瀚撰並注　〔平安〕写　一冊

後補香色地布目表紙（二八・八×一九・二糎）、もと巻子装であったのを天地を少しく裁断し裏打補修を加えて冊子装に改装。元料紙の紙幅二八・一糎。破損の所がかなり存する。界高廿三・四糎、界幅二・六糎。毎行十七字内外、注文小字双行、行廿五字内外。墨筆のヲコト点・訓点・四声点濁点が精細に加えられ、始めの方に附された朱引朱筆振仮名は室町期頃の追記で、墨筆訓点も二手あり、一手は鎌倉期に下ると思われる。行間・眉上に校注音義注等の書入が存する。

首に李良表あり、表後に「天宝五年八月一日饒州刺史李良上表令国子司業陸善経為表表未行而良授晉事因寝」とあり。次に所謂李華序がある。但しこの本は李華の名を題さず、初行「蒙求本序　安平李瀚撰并注」と題して、「周易曰有童蒙求我」から始って、通行本に存するそれより前の文を録さず、また辞句

に出入がある。この本の序の題式と文義から考えて、通行の李華序は、この本に録されざる、所謂李華序の首より「不出巻知天下其蒙求哉」までが李華の序で、周易云々以下は李瀚の自序と推定すべきかと思うが、後考を俟つ。本文初行「蒙求上巻」、末「注蒙求上」と題し、「蔡邕倒屣」に止る。今本は三巻であるが、此は恐らく上下二巻に分ったのであろう。蒙求注は宋の徐子光注が出てから、李瀚注は旧注と云われ、次第に行れず漢土には亡滅した。我が国では中世期より、次掲の旧注に後人の刪補の入った附音増広古註本、次いで徐子光注が入り、並び行われ、旧注原撰本は漸く微になった。本抄本は不幸下巻を欠くが、蒙求附注本の最古本の地位を占め、唐鈔本の遺風を留め、旧注本の原形を示すのみならず、その古訓と仮名字体は国語資料としても洵に貴重である。宮内庁書陵部にはこの本の影鈔本があり、それには「此蒙求上巻一冊者弘仁之比渡候者歟左大史小槻敬義朝臣家本所書写也　寛政六年臘月　法眼謙宜」の識語が存する。「禰家／蔵書」の蔵印がある。楊志十一著録。

＊附音増広古註蒙求　三巻　唐李瀚撰並注　後人刪補

〔室町〕写　三冊

茶褐色表紙（二六×一六・三糎）。裏打補修を加う。序欠。単辺（一九・三×一二・二糎）有界七行、行廿字、注小字双行。層格を設け、その幅三・九糎。朱点朱引墨訓点を附し、書入甚だ周密（一部藍筆を混ゆ）で、往々押紙を補って書入が加えらる。注に私云と記す所あり、また注は仮名和文が多く、中に墨子悲絲楊朱泣岐の書入注中淮南子に対し「東井能代者ワイナンジトモ講セラレタリ又ハクワイナンジトモ也」とある。この東井は足利学校第六世の庠主で、足利学校では蒙求を講じた証拠があり、東井が庠主当時学校で写した鈔本（国会図書館蔵）も伝っている。この本も亦足利学校系と思われる。巻下の末題後二行を隔てゝ奥書があるが、墨で抹消してある。附箋に江戸末期の筆で「于旹天文廿×乙卯初龍下澣一日大貫興福禅寺於南窓下書早矣／丶丶年齢五旬」と記されているが、此がこの本の奥書を写したものか否かは明かでない。「向黄邨／珍蔵印」の印あり。楊志十一著録。「附音増広古註」の冠称を題する蒙求鈔本は室町時代に盛行し、恐らく前記の千字文・蒙求・胡曾詠詩の三註本に据ったものらしく、李瀚旧注に刪節を加え、間々徐子光補注を引いている。

＊標題徐状元補注蒙求　三巻　唐李瀚撰　宋徐子光補注

〔室町末〕写　三冊

後補紺色表紙（二七×二〇・二糎）。首に李華序・薦蒙求表（表下「光禄大夫行右散騎常侍臣徐賢等奉勅撰」と題す、その意不明）・子光序あり、巻首「標題徐状元補注蒙求巻上」、その下両行に「安平李瀚撰并註／徐子光　補註」と題する。字面高さ約廿一・五糎、毎半葉十一行、行廿字。正文大字二格を低し、朱筆○を冠し、注文改行大字。正文に朱引、注文に朱筆句点朱引勾点、墨筆訓点を附し、眉上行間に書入あり、書入には後筆の追記が加っている。首に「元樟」（本文同筆）「南豊」

（書入の後筆の手）の墨署名、「小島氏／図書記」「有馬氏／溯源堂／図書記」あり。森志五・楊志十一著録。

標題徐状元補注蒙求　三巻　唐李翰撰　宋徐子光注

〔元和寛永初間〕刊　古活字版　三冊

後補縹色表紙（二七・八×一九・二糎）。首に李良表・李華序・徐子光序、毎巻首に総目（蒙求正文）がある。巻初「標題徐状元補注蒙求」と題し、巻中下の首題及び各巻の尾題は「新刊徐状元補注蒙求」と。双辺（二三・五×一七糎）無界、毎半葉注文十四行、行廿字。正文大字両行に跨る。版心細黒口「蒙求巻上（中・下）　（丁付）」。注文に朱点朱引、少しく朱墨の校字や和文注があり、下巻には朱点朱引書入がない。楊志十一著録。

同　〔江戸前期〕刊寛永十二年印（中野市右衛門）　三冊

前掲古活字版の覆刻附訓本。朱点朱引を附し、書入周密。楊志十一著録。

事類賦　三〇巻　宋呉淑撰並注　明華麟祥校　〔明嘉靖〕刊（崇正書院）　翻宋　八冊

後補淡茶色表紙（二四・八×一七・五糎）。白綿紙本。首に紹興丙寅辺惇徳序・進注事類賦状・目録あり、巻首初行「事類賦巻之一」、第二・三行「宋博士渤海呉　淑　撰註／皇明都事錫山華麟祥校刊」と題する。巻末尾題の次に宋紹興丙寅右迪功郎特差監潭州南嶽廟辺惇徳以下三名並に皇明嘉靖壬辰常州府無錫県学生倪奉以下計十二名の校勘官銜あり、次に華雲の「刻事類賦叙」あり、叙中に曰く「嘉靖壬辰（十一年）冬十月郡公内江趙鶩州先生属家君刻宋光淑事類賦蔵郡斎（中略）六月朔興工十月竣事余家有宋刻善本云々」と。左右双辺（一九・三×一四・六糎）有界十二行、行廿字、注小字双行。版心白口「事類賦巻幾　（丁付）」、上象鼻に「崇正書院」と刻し、下象鼻刻工名あり。この本は宋紹興十六年両浙東路茶塩司刊本の翻刻で、この宋槧本は北京図書館に二部（一部は潘氏宝礼堂旧蔵）存する。「緑静堂／図書章」（杉山心斎）「子孫永保（上に横書）／雲煙家／蔵書記」「森氏開万／冊府之記」印あり。楊志十一著録。

故宮博物院蔵景陽宮旧蔵本はこの版と覆刻の関係にあり、ただ版心の上象鼻に「崇正書院」の刻なく、下象鼻に刻工名の外に大小字数がある。この両版いずれが華麟祥原刻本なるか後考を俟つ。守敬は楊志に華麟祥版の底本となった宋槧本について記述するが、果して真の宋槧本を見たか疑わしく、華麟祥重刊本によって記したらしく、また本版の著録についても、実際にこの本に即して見るに、少しく齟齬する所がある。

同　明嘉靖一二年序刊（開封郡斎・白石岩）　八冊

後補淡灰色表紙。白綿紙本。首に辺惇徳序・進注状（この次に惇徳等校勘官銜三行があるが、版心に「巻三十」とあれば、巻末にあるべきがこゝに誤綴されたもの）、次に甲午冬十一月朔の李濂の刻事類賦序、次に目録がある。本文巻首「事類賦巻之一」、次行「宋博士渤海呉淑撰註」と題する。巻末に嘉靖甲

午歳季春之吉祥符県儒学署教諭事挙人麻城陳全の刻事類賦後序あり。単辺（二〇×一四・四糎）有界十一行、行廿字、注小字双行。版心粗黒口「事類賦卷幾　（丁付）」。本版は華麟祥校刊本と版式・字様相似し、十二行を十一行に改め、首題の華麟祥校刊の一行を刪除して空行とする。楊志十一著録。寺田望南の蔵印あり。

太平御覽　一〇〇〇卷卷目一五卷太平御覽経史図書綱目一卷　宋李昉等奉勅編　享和三年影写宋慶元刊本　一〇〇冊

縹色表紙（二六・七×一九・六糎）。薄葉裴紙。字面高さ約二三・三糎。毎半葉十三行、行廿三字内外。金沢文庫旧蔵にして当時幕府の紅葉山文庫にあったが、現在宮内庁書陵部蔵たる宋慶元蜀刊本（四部叢刊に影印）の影鈔本で、目録巻十五に、「享和癸亥八月写字原田景行」の書写識語がある。「柴氏家／蔵図書」「柴邦彦図書後／帰阿波国文庫／別蔵于江戸崔／林荘之万巻楼」の印あり、柴野栗山・阿波国文庫旧蔵。楊志十一・楊譜六41 42著録。第一冊首に別紙四葉を附綴して、左の光緒九年の守敬手書題跋（楊志所収と小異）がある。

此太平御覽鈔本日本柴邦彦旧蔵／（邦彦為日本学士最有名饗序聞）行款悉如楓山官庫宋槧之／旧（楓山官庫者日本内府蔵書処）蓋影鈔也御覽一書明刊本多誤我／朝嘉慶間揚州鮑氏拠旧鈔本訂／正重刊始略可読顧其所得鈔本亦非／影宋精写亦不免有以近刻校改之／弊而世伝宋槧僅有残本（今在嘉興陸氏具黄堯圃旧蔵也）不及三之一固未足以訂全書也／日本文久初医官喜多村直寛拠（即原于楓山官庫本）／用活字板印行自巻一至巻五百六十二／巻属田口文之以所引各書勘正箋有／挙譌附毎類之後自五百六十三巻以／下則直寛即拠鮑本校改近日得／之市舶者遂以此為御覽善本余／来日本既得活字印本又得柴氏／此影鈔本乃知田口文之多臆改未足／依憑即如第一巻天部上挙譌云晉／書為天下主主清本作貞是也既上板／不及改故此出焉似田口所拠影宋本／作主無疑矣今観此本仍作貞則是作／主者田口上板時臆改也又天部下挙／譌云曾子曰単居離清本君作居今此／本仍作居則作君者亦非原本如是／是則此五百六十三巻為田口所乱者不少／矣余以為此書本於北斉脩文殿御覽／及唐代藝文類聚文思博要等書／而尤以脩文為藍本目録前所列徴／引書目多有唐宋藝文志所不載／者皆脩文之旧也且無論逸文秘冊／他無証験不能易一字即見存之書／近刻校改固属鹵莽即有各宋刻／対勘亦如隔雲霧蓋纂脩文御覽／時猶在宋以前数百年也惜此書巻帙／浩繁非大有力者不能精刻又非／好学深思心知其意者不能校訂／書此以俟庶幾旦暮遇之／光緒癸未秋八月宜都楊守敬記（印）

同　〔江戸〕伝写宋慶元刊本　二〇〇冊

茶色表紙（二六・八×一九・七糎）。薄葉裴紙。襯紙を入れる。改装の際天地少しく截断されたので、書入が切られている。字面高さ約廿三糎。毎半葉十三行。目録巻十と巻十五とに前掲本にある享和癸亥の原田景行の識語が写されているから、紅葉山文庫の宋刊本に直接拠ったのではなく、前掲本の重鈔で

あろう。校字書入がある。安政二年本書を木活字を以て刊行した喜田村直寛と田口文之の朱筆識語が次の如く存する。

（目録巻八）嘉永癸丑五月六日　直寛校　（目録巻十五）癸丑五月初九校

直寛

（巻一末）己未（安政六年）新正第四巳時閲了朝寒殊甚朱筆随呵

随結／此校昉於丙辰（安政三年）十月至丁巳年畢五百巻去年

八月以後続校／至今哉能得終也　文之記

前後妄意刪改全根白及不一而是殆失宋板之体今悉勘正／一照

旧様不敢妄改一字文久紀元五月朔校全了　直寛記

また巻末に左の森立之の手跋が存する。

右太平御覧影鈔宋本千巻五十二箇係狩谷望之旧蔵／後経渋江

全善曲直瀬正貞手而入喜多邨直寛架中／直寛活字刷印取原于

此本直寛隠遁後帰弟栗本／鯤蔵今玆余奉　君命将移居于西備

福山鯤知余之／渴望此書也割愛以為生別之程儀不耐感謝遂題

此／以為跋云慶應戊辰六月十二日枳翁森立之書於江戸城／北

駒米華他街之八九山房（印）（印）

此書原本即楓山御庫所蔵而自巻首至一百九十七巻係抄本／自

一百九十八巻至巻末為南宋慶元槧本毎巻有金沢／文庫印記則

為本庫旧物可知也初椒翁得鈔本数冊／文政間就楓山本令撰好

手補写全帙此本即是好手者誰如頼山陽／襄小島成斎知足是也

其他余所知士人不一而是則至今日／不可不最宝而重也立之再

録

立之の跋に云う如く、本写本は寄合書で、全巻にわたって朱句点が附され、少しく藍筆を混えた朱筆校字書入が存し、図書綱目の巻の一部（三ケ所）に椒斎の若書と思われる校字がある。第一冊の遊紙に「目録四ノ四オ半葉椒斎書又三ノ四ウ終行」の識語がある。「養安院蔵書」「森氏開万／冊府之記」の印あり。

重刊書叙指南　二〇巻　宋任広撰　明喬応午重校　慶安二年刊　三冊

序の末に左の楊守敬の手書題識がある。

四庫著録拠雍正三年金匱／刊本称此書自靖康板毀以来五／六百年若隠若顯不言明代有嘉／靖万暦二刻則此本流伝不広金／氏未之見提要亦未之見也今金氏／本亦罕見唯三原李錫齡惜陰／軒有刊本当従金氏本出也守敬記

海録砕事　二二巻　宋葉廷珪撰　明万暦二七年序刊（卓顕卿校刊）　一〇冊

後補紺色表紙（二六・六×一七糎）。首に武林何偉然晉生父撰の「叙海録砕事」、栖水卓顕卿寓庸父書於水一方の「水一方校定海録砕事序」、紹興十有九年冬十一月河陽傅自得安道叙の「海録砕事序」（末に「万暦己亥清和閏月呉郡銭允治書」の刻あり）、十九年五月二十七日左朝請大夫智泉州軍州主管学事葉廷珪序の自序がある。巻初「海録砕事巻一」、第二・三行「宋　翠巖葉廷珪嗣忠集著／明　入斎卓顕卿寓庸校刻」と題す。左右双辺（二〇・五×一三・三糎）有界十二行、行廿一字。版心白口「海録砕事巻幾　（丁付）」。第一冊初に少しく朱筆の句点圏点がある。「賜蘆文庫」「新宮城書蔵」等の印あり。

錦繡万花谷　前集後集続集各四〇巻別集三〇巻　宋不著撰人　〔明嘉靖〕刊　覆明嘉靖十五年錫山秦氏繡石書堂刊本　一四冊

淡香色表紙（二五・二×一六・六糎）。白綿紙本。首に淳熙十五年十月一日の序及び前集総目（毎集の首に総目あり）あり。巻首「錦繡万花谷前集巻之一」と題す。左右双辺（一八・八×一二・九糎）有界十二行、行廿一字、注小字双行。版心白口「巻之幾　（丁付）　前（後続別）」。序の葉の上象鼻にのみ「錦繡万花谷」の刻あり。小標目陰刻。宋本を翻刻せる明嘉靖十五年繡石書堂刊本を嘉靖年間に覆刻せる版である。序目にのみ会通館本に拠る朱筆校字の書入（守敬筆か）がある。「八雲軒」「藤亨」「脇坂氏／淡路守」「安元」「永井氏／蔵書」（陰刻）「向黄邨／珍蔵印」の印あり。楊志十一著録。

新編古今事文類聚　前集六〇巻後集五〇巻続集二八巻別集三二巻新集三六巻外集一五巻　宋祝穆撰　（新・外集）元富大用撰　〔明正徳〕刊　五〇冊

後補紺表紙（二四・五×一五・一糎）。首に淳祐丙午の自序、次に総目及び前集目録（毎集首に目録を附す）あり、本文首行「新編古今事文類聚前集巻之一」、第二行低十三格、「建安祝穆　和父編」と題し、新・外集は「新編古今事文類聚新集巻之一／南江　富　大用　時可編」と題する。双辺（一九×一二・七糎）有界十四行、行廿八字、注小字双行。版心粗黒口「事文某集幾巻　（丁付）」。版式から見て明正徳頃の刊であろう。所所少しく室町末近世初間の朱点朱引朱圏点墨筆訓点が附されている。「清源蔵書」や寺田盛業等の蔵印がある。楊譜六46 47著録。

又　配補明嘉靖四十年書林楊帰仁刊明後修本並抄配　四三冊

後補黄色表紙（二三・一×一五・二糎）。襯紙改装。前集巻一至巻六、続集巻廿四至巻廿八（巻廿三は補写）、外集巻十三至巻十五の三冊は、別種の明版で配補されている。その版は故宮博物院蔵（景陽宮旧蔵）の嘉靖四十年書林楊帰仁刊本と同版であるが、修補が加った版である。また外集は補写である。この配補本は巻首の第二・三行が十三格を低して「建安　祝　穆　和　父　編集／知建陽県事南海　鄒可張　訂刻」と題され、単辺（一九・七×一二・六糎）有界十四行、行廿八字。

所々室町期の朱点朱引朱圏点が書入さる。前集巻七の題下に朱筆を以て「文禄第四乙未小春十五日加朱点」、前集巻十二巻末に「以雪樵和尚之御本加朱点　釈正□（花押）」の墨筆識語がある。雪樵和尚とは建仁寺の詩僧雪嶺永瑾（樵庵の号あり）であろうか。古印あれどうすれて印文識読できず、他に「井上／氏」等の印あり。

＊類編秘府図書画一元亀　乙部零本（存巻八六至巻九〇）　宋不著撰人　〔宋建安余仁仲万巻堂〕刊　一冊

後補紺表紙（二三・五×一五・七糎）。裏打補修を加う。元料紙紙幅二二・五糎。巻首「類編秘府図書画一元亀乙部巻之

幾」、尾題「元亀乙部巻之幾」と題す。左右双辺（一八・四×一二・九糎）有界十五行、行廿五字、注小字。眉上に頭書（行三字）あり。版心線黒口「元乙集幾　（丁付）」。上象鼻に所々大小字数を刻し、欄外左の耳格（匡郭なし）に小目を題記す。「向黄邨／珍蔵印」「読杜／艸堂」の印あり。楊譜六45著録。楊守敬は楊譜に誌して曰く、

右宋槧画一元亀残本旧為狩谷望之所蔵自乙部巻八十六至巻九十共為一冊其書以経史子文集図記分類撮録止於唐代当為宋人所撰各家皆不著録唯明文淵閣書目有之亦残闕之本余又得丁部巻二十一至二十四鈔本一冊有金沢文庫印記

と。本書は門・目が極めて細分されている点に特徴のある宋の類書であるが、中国には滅び、我が国にその残本が伝存した。部によって書名の冠称が違い、伝存本とその所在は次の通り、

類編秘府図書画一元亀　甲部巻二一至六二、七四至一〇〇（大東急記念文庫）

同　乙部巻一至八（東急）　巻一六至二〇　巻二一至三一（東洋文庫）　巻七六至八〇（宮内庁書陵部）　巻八六至九〇（故宮博物院楊氏観海堂）

太学新編画一元亀　丙部巻三至六、一一至二〇、三一至四〇、四六至五〇、六一至六五、八一至八五（書陵）　巻六〇至九九（東急）

類編羣書画一元亀　甲部巻七至一三（東洋）　丁部巻七至一〇、二一至三五、四一至四五、五一至六六（書陵）

甲・乙両部と丙・丁両部とは行款に少異があり、前者が毎頁十五行で、後者が十三行で、丙部のみは巻末に「仁仲校正訖」「国学進士余仁仲校正」「仁仲比校訖」の校刊の語があるから、本版は建安の余仁仲万巻堂の刊刻であることがわかる。本版の闕筆は厳格ではなく、長沢規矩也博士の「大東急記念文庫貴重書解題」第一巻によれば、

宋諱の闕筆は一定しないが、丙部に光宗の諱「敦」字を闕いてゐるところ（巻八一、第六葉、第三行）があり、次の寧宗の「郭」字を闕いてゐない（巻九九、第五葉、裏第三行）ところがあるから、光宗・寧宗間の刊本であらう。それは、一方で、余仁仲万巻堂に、光宗の紹熙二年（一一九一）刊行の春秋公羊経伝解詁、同四年刊行の春秋穀梁伝、寧宗の慶元三年（一一九七）刊行の重修事原（物）紀原があることと符合する。

と。宮内庁書陵部の十八冊には「金沢文庫」の印記がある。他の諸本には金沢文庫の印記がなく、右の如く今分蔵されているが、元来は東福寺の霊雲院にあったものが流出したのである。両者同版ではあるが各々伝来を別にする。本書には稀に写本があり、陽明文庫は甲部八十三巻乙部九十五巻四十冊の写本を有する。本書の引用書には少しく佚書を含む等注目すべきものがある。この巻八十六から九十に至る五巻の所収門は巻八六射御門（九丁）巻八七旌節門（九丁）　巻八八・八九兵制門（各九丁）　巻九〇将帥門（七丁）である。

類編羣書画一元亀　丁部零本（存巻二一至二四）

宋不著撰人　〔江戸〕伝写宋建安余仁仲万卷堂刊本
一冊

淡香色表紙（二七・二×一九糎）。字面高さ約一九・五糎。毎半葉八行、行十六字。上記の金沢文庫旧蔵の宮内庁書陵部現蔵宋刊本の写しで、影鈔ではないが、「金沢文庫」印は影写し、「楽亭文庫」「白河」「桑名」の印あり、松平楽翁旧蔵本。楊志十一著録。

＊新編翰苑新書　存前集巻四至巻一一・巻五〇至巻七〇
後集上巻一一至巻一九後集下巻一至巻三外集巻六至巻一〇　宋不著撰人　〔宋末建陽書坊〕刊　七冊

渋引茶褐色表紙（二三・五×一五・二糎）。裏打補修を加う。巻首「新編翰苑新書巻之幾」と題す。左右双辺（一七・八×一一・八糎）有界十六行、行廿二字、注小字双行。大字は二行に跨り、部門名は三行を併せ大書、小目名は墨囲陰刻。版心白口「幾フ　（丁付）」、左欄外耳格あり、標目を題記す。玄・朗・匡・貞・慎・敦等の字に闕筆があるが、闕画は厳謹ではなく、欠かざるものが多い。宋末建陽書坊の刊刻であろう。所々欠丁や破損がある。僅かながら朱引朱点朱圏点が書入さる。「椿／庭」「小島氏／図書記」「読杜／艸堂」の印あり。森志五・楊譜六5著録。この本に欠けている後集上巻一至巻十一と総目目録の一冊（崇蘭館旧蔵）が京都市所有となり現在京都国立博物館に寄託されている。北京図書館に前集巻三十九至四十六の八巻の宋刊本（周氏旧蔵）が蔵されるが、同版か否か未詳。

＊韻府羣玉　二〇巻　元陰時夫編陰中夫注　〔元至元二八年東山秀岩書堂〕刊　一〇冊

後補紺色表紙（二四×一五・三糎）。首に滕賓序、至大庚戌の姚雲序、趙孟頫序、大徳丁未の陰竹埜序、延祐改元甲寅秋郷試後五日の陰中夫序、陰時夫自序、次に増修韻府羣玉凡例、韻府羣玉該載事目、韻府羣玉目録（目録第三、葉表去声十三巻「五未」より二葉補写）がある。本文巻首「韻府羣玉巻之一　上平声（墨囲陰刻）／晩学陰時夫勁弦　編輯／新呉陰中夫復春　編註」と題する。双辺（二〇・七×一二・七糎）有界十行、注小字双行、行廿九字。版心小黒口「匀玉幾　（丁付）」。補写となっている目録第三葉裏の丁に「戊申春東山／秀岩書堂刊」の双辺両行木記が影写されてある。戊申は至元廿八年即ち明洪武元年に当り、この秀岩書堂刊本は天理図書館・京大人文科学研究所・日光天海蔵・黒羽の雲巌寺に蔵される。この本は天理図書館本と比較するに同版である。当時の建安坊肆版の字書韻書の多くが、先行刊本の覆刻であったと同様に、本版も元元統二年梅溪書院刊本のほゞ覆刻で、たゞ略体字に変えている所が多い。室町期の朱点朱点が附され、書入が多い。尾題下に「桂芳」の墨署名がある。楊志四・楊譜三48著録。

又　一〇冊

後補紺表紙（二四×一五・五糎）。前掲本と同版、この方少しく後印か。前者と同様に目録の三丁以下の二丁を欠き、補写していない。所々朱句点を附し、押紙を貼って書入が加えてあ

る。毎冊首に「桂心寺常住」の墨署、円形印の上に「屹布衲」の墨署名、「浅野源氏／五万巻楼／図書之記」「彤函翠蘊」等の蔵印あり。第一冊首に別紙を補って、次の守敬の手書題跋がある。

此書与流俗甚有出入与／四庫著録本亦不相応余別有跋／詳著之　守敬記（印）

*新増説文韻府羣玉　二〇巻　元陰時夫編陰中夫注　後人増補　元至正一六年刊（劉氏日新堂）　一〇冊

首に韻府羣玉序（諸氏の序前掲本に同じ）、次に韻府羣玉目録、韻府羣玉凡例（凡例の末に後記の刊記あり）、韻府羣玉事類総目がある。本文初「新増説文韻府羣玉巻之一　上平声（墨囲陰刻）」と題し、第二・三行の題署前掲本に同じ。双辺（二〇・八×一三・三糎）有界十一行、行廿九字、注文小字双行。版心細黒口「匀玉幾　（丁付）」。凡例末の双辺木記は

瑞陽陰君所編韻府羣玉以事繫／韻以韻摘事乃韻書而兼類書也／検閲便益観者無不称善本堂今／将元本重加校正毎字音切下／続増許氏説文以明之間有事未／備者以補之韻書之編誠為尽美／矣敬刻梓行嘉与四方学者共之／至正丙申莫春劉氏日新堂謹白

巻一末に刊記の如きものを剜去せる跡がある。本版は注末に説文を刪節増補し、後の明版は此を襲沿している。第一冊のみは殆ど全巻、他は所々に朱引朱圏点が附されている。この本はかなり後刷に属する。同版本に京都大学附属図書館（谷村文庫）・龍谷大学図書館蔵・成簣堂旧蔵本がある。楊譜三49著録。

新増直音説文韻府羣玉　二〇巻　元陰時夫編陰中夫注　後人増補　〔明前期〕刊〔明〕修　八冊

序なく、首に韻府羣玉事類総目及び韻府羣玉目録あり、本文首行「新増直音説文韻府羣玉巻之一　上平声（墨囲陰刻）」と題し、第二・三行の題署は前掲本に同じ。双辺（二〇・五×一二・九糎）有界十一行、行廿九字。注小字双行。版心粗黒口「匀玉幾フ　（丁付）」。本版は頗る印面磨滅せる葉が所々交り、それは大部分を占める新しい彫板と字様を異にし、巻六の末尾に「劉氏日〔新〕書堂□□」の木記の刷りが僅に遺っている。この古い版刻の部分は、前掲の至正十六年日新堂刊本に比し、粗笨な覆刻の関係にあって、明前期の刻梓であろう。本書は前掲の新増説文本に比し、毎韻の首に一格を低して「新増」と標して直音をおくが、以下はほゞ旧板と同じく、従って旧板の毎韻の初行はこの本に於ては増補の部分のつぎ、即ちその裏の丁か次丁表の三行目から始まることになっている。そこで旧版の板木の使用できる部分はそのまゝ流用したものと思われる。この本の大部分を占める板刻は正徳以後嘉靖前であろう。所々室町頃の朱筆の句点圏点が附されている。（補記3参照）

新増説文韻府羣玉　二〇巻　元陰時夫編陰中夫注　明王元貞増校　〔明万暦〕刊（金陵徐智）　七冊

後補茶褐色表紙。首に万暦庚寅（十八年）夏日五嶽山人沔陽陳文燭玉叔撰の韻府羣玉序、次の韻府羣玉の諸序は前々掲諸本

に同じく、次に韻府羣玉凡例及び韻府羣玉目録がある。本文初「新増説文韻府羣玉巻之一　上平声（墨囲）／晩学　陰　時夫　頸弦　編輯／新呉　陰　中夫　復春編註／秣陵　王　元貞　孟起　校正」と題する。左右双辺（二一・一×一三・五糎）有界十一行、行廿二字、注小字双行。版心白口「韻府羣玉　巻之幾　（丁付）」。首の陳文燭序の末に「金陵徐智督刊」、凡例の末に「金陵徐智督刻」の刊記がある。「阿波国文庫」の印あり。

新編事文類聚翰墨全書　存甲集一二巻乙集九巻丙集一一巻（欠丁集）戊集一三巻（欠巻五至巻九）己集七巻庚集存巻一九至巻二四辛集一〇巻壬集一二巻癸集一一巻后集（欠甲集）乙集三巻（「聖朝混一方輿勝覧」欠巻下）丙集一二巻（欠丁集）戊集九巻　元劉応李編

〔元〕刊　補配〔明前期〕刊本　二〇冊

後補紺表紙（一八・八×一一・八糎）。首に大徳之十有一年前進士考亭熊禾非父序（写刻）、事文類聚翰墨全書総目、新編事文類聚翰墨全書甲集目録（毎集首に目録あり）がある。本文首「新編事文類聚翰墨全書甲集巻之一（両行に跨る）／（低五格）前郷貢進士省軒劉　応李　希泌　編」と題する。双辺（一五・三×一〇糎）有界十二行（文類は十四行）、行廿四字。版心小黒口「啓甲幾（門名目名乙幾フ）　（丁付）」の如し。壬集に封面があり、上端「事文類聚」と横書、その下に有界四行「。名列四民之版。／（壬集刻）（陰）士農工賈／翰墨全書／。道行万世之公。」と。元刊の部分は、甲集巻一―四、丙集、后丙集で、他は全て行款版式は同じであるが、字様を異にし、明前期の雕刻にかゝる。この本は次の三種の取り合せ本である。即ち元末刻の部分は「翰墨大全」と題する静嘉堂・中央図書館蔵元刊本とほぼ覆刻の関係にあり、一部にかなり印面が磨滅している所が見られる。明刊の部分の壬集のみは静嘉堂・書陵部蔵本と同版で、無刊記の両本は従来元刊とされているが、字様が明初風で、明正統十一年翠巖精舎刊の刊記を有する内閣文庫本（後刷に非ず）と同版である。他の明刊の巻は米沢市立図書館・大東急文庫蔵本と同版で、米沢本には序後「正統元年丙辰／善敬書堂新刊」の刊記がある。東急本は早印美麗であるが、刊記のある巻を欠く。この両種の明版も相互に忠実な覆刻の関係にある。恐らく後者が先行か。所々朱筆圏点の書入がある。「平原／趙璞」「高／巌」等の蔵印あり。楊志十一著録。

聯新事備詩学大成　三〇巻　元林禎撰　〔南北朝〕刊

覆元至正十五年翠巖精舎刊本　巻二八至巻三〇補配明初刊本　一〇冊

後補紫色表紙（二三・五×一四・九糎）。襯紙改装。首に詩学大成綱目（末に「至正乙未孟春翠巖精舎新刊」の原刊記あり、巻一末にもあり）、至正己丑（九年）の朱文霆序、次に「聯新事備詩学大成目録／後学三山林禎　編集」と題する目録があり、末に後記の原木記が刻さる。巻首「聯新事備詩学大成巻之一」と題する。双辺（一九・八×一二・四糎、序目左右双辺）有界十二行、注小字双行、行廿五字。版心線黒口「詩学幾　（丁

付)」。巻一の首葉表欄外右下端等に「善祥」等の刻工名の附刻があるが、殆ど薄くかすれた如き刷りである。目録末の双辺原木記に

旧刊詩学如大成繁而且冗叢珠珍／珠囊等編簡而又略蓋両病焉本堂／是編則去諸家之疵而集諸家之粋／於叙事故事総名之以事類撫唐宋／名賢佳句而削去重復采皇元羣英／謦聯而増広新奇視前刊実為明備／敬用鋟梓以広其伝収書君子幸鑒／至正乙未孟春翠巖精舎謹誌

と。巻廿八至巻卅の一冊は行款を同うする明初刊本を以て配補さる。所々朱点朱引朱圏点の書入がある。本旧刊本の底本となった至正十五年翠巖精舎刊本は大東急記念文庫に蔵さる。

*類編古今事林羣書一覧　前集・後集・続集・新集・重集各一〇巻（欠別集・外集・支集）　元何士信編

〔元建陽書坊〕刊　一〇冊

淡茶色表紙（一六・九×一一・三糎）、巾箱本。書外題は小島宝素の筆か。首に著雍閹茂菊節後二日書の何士信自序、類編古今事林群書一覧綱目（前・後・続・別・外・新・重・支集）、次に類編古今事林羣書一覧目録（前集）がある（毎集首に目録あり）。本文首行は大字両行に跨って「類編古今事林羣書一覧巻一　前集（墨囲陰刻）」第二行「建安古梅何　士信　君実　編集」と題する。首尾題中或は「類編古今広記書林一覧」（前集巻一尾、巻三・四・五の首尾、巻六首、巻七・九の尾、巻十首尾）、或は「類編古今事林広記群書一覧」（後集巻一尾）と題する所もある。左右双辺（一三・九×九・二糎）有界十三行、行廿四字、注小字双行。門標目は両行どり、目標目や引用書名は墨囲陰刻、版心線黒口「覧前幾　（丁付）」。後集は地理部方輿紀要にして、目録末に「江北諸路紀要目今編集陸続板行」の陰刻木記一行が刻されている。「宗／知」「宗／和」（鼎形）「小島氏／図書記」等の蔵印あり。森志五著録。本書は他に所在を聞かず、諸家目に著録を見ないが、たゞ「文淵閣書目」巻十一に「羣書一覧一部十冊闕」と録されているのが、本書に該当するのであろうか。この書は前集天文から始って支集譬喩に至る三十八門に分かれる。

*新編排韻増広事類氏族大全　一〇巻　不著撰人〔元〕

刊（玉融堂）　六冊

渋引茶褐色表紙（二六・三×一五・七糎）。書題簽に「氏族排韻幾」と署し、別に目録外題を貼附。裏打補修を加う。扉あり、上欄に「玉融書堂」と横書し、「増広事類／氏族大全」と両行に大書し、中央の界に「排」「韻」の二字が刻してある。首に新編排韻増広事類氏族大全綱目及び氏族目録があって一冊をなす。本文巻首「新編排韻増広事類氏族大全巻之一」（二行どり）と題し、末題には「排韻事類氏族大全」、或は「増広事類氏族大全」と題するのもある。左右双辺（二〇・一×一二・六糎）有界廿行、行廿七字、標目大字二行どり。版心線黒口「氏族幾　（丁付）」。朱筆句点朱引あり、往々朱筆を以て訓点が附してある。題簽下「青松」の墨署名があり、即ち清原国賢手沢

本。「清原」「秀／相」（清原秀相）「藍川家蔵」の印あり。楊譜六49著録。

本版は宮内庁書陵部蔵元槧本（玉融書堂の封面はない）と同版であって、故宮博物院別蔵（昭仁殿旧蔵）・静嘉堂文庫蔵元末刊本は版式を異にする別版（有界十七行廿八字）である。

＊同　一〇集　〔南北朝〕刊　四冊

淡香色表紙（二四×一四・四糎）。首の綱目欠丁。巻初「新編排韻増広事類氏族大全　甲集（墨囲陰刻）」と題する。左右双辺（一八・六×一二糎）有界十六行、行廿七字。版心線黒口「甲　（丁付）」。朱点朱引朱圏点が附され、所々押紙を補って、諸書よりの抄録を以て本文の記事を補った朱墨両様の書入がある。巻末尾題下の墨釘の箇所の上に朱筆を以て「正長元年十月二日／塗朱了也／是年応永三十五改元――」と記せる識語がある。「巣□」「□昌院」等の古印あり。本旧刊本には同版ではあるが、㈠巻末尾題下が墨釘のまゝになっている無刊記本（初印）、㈡その墨釘の所に「明徳　癸酉八月開板円成」の刊記を追刻せる後印本、㈢何故か再び明徳の刊記を剜去せる、さらに後印の三種がある。此はその初印に属する。この版は数を以て分巻せず、十干を以て分ち、版式字様共に静嘉堂・故宮博物院蔵（楊氏本に非ざる）元刊本の系統で、その覆刻の如く見えるが彼は十七行、此は一六行である。国立中央図書館蔵元刊本は同元刊本の十七行を十六行に変えて覆刻せる版である。目録には元刊と著録されているが、未見であるから、確言できぬが、書影から察すれば明の覆元刊本の如く思われる。この本はこの中央図書館本系に基づく覆刻と思われる。たゞこの版の方が中央図書館本よりも、元槧の字様の特色をとゞめている。楊志十一著録。

修辞指南　二〇巻　明浦南金編　明嘉靖三六年刊（安仁劉麟五楽堂）　一〇冊

白表紙（二五・三×一六・五糎）。白綿紙本。首に安仁劉麟書の修辞指南序（序中に「今年丁巳夏六月命工刻于家塾」と）、修辞指南凡例、修辞指南目録あり。本文巻初「修辞指南巻第一／（低七格）皇明国史監助教東海浦南金編次」と題する。毎末題下「丁巳歳仲冬朔吉／呉曜写完唐誥刻」（巻廿）の如く鈔者・刻工名を刻し、巻末に嘉靖丁巳臘月廿有四日海浜浦南金著の後序を附する。左右双辺（一八・三×一二・五糎）有界九行、行十八字、注小字双行。版心白口「修辞指南巻幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に「五楽堂」の刻がある。

全相二十四孝詩選　題唐郭子儀撰（〔元郭居敬〕撰）
慶長六年写　一冊

後補紺色表紙（二六×一九・四糎）。字面高さ約廿二糎。毎半葉九行、行廿字、注小字双行。巻初「全相二十四孝詩選　中書令郭子儀考」と題し、大舜以下廿四人について、一人一首の五言絶句の詩を賛し、次にその略伝を附記。巻末に「慶長六天辛丑肖何行年甲子而摩老眼而書之」の書写識語がある。朱筆の句点朱引勾点墨筆の訓点を附し、行間に注の書入があり、所々押

紙を補って書入が加えられている。

この本は成簣堂文庫旧蔵天正十六年鈔本と同じく撰者を「郭子儀考」と題するが、子儀は唐人で、本書は唐人の作とは思われない。此は仮託で、実は「続文献通考」巻七一の解説や、また本書の他の諸本に題されている如く、元の郭居敬の撰編と考えるべきであろう。書題冠称の「全相」とは上欄が挿絵下欄が本文となっている、元明間に行われた帯図俗本である。本書の元明刊本は殆ど伝存しないと言ってよいほどであるが、長沢規矩也博士は嘗て上海の書店で、「全相二十四孝詩選」「延平尤溪郭居敬撰」と題する、毎頁上図下本文の元刊本を見たと記しておられる（「書誌学」十六巻二号「元明編刊の故事集について」）。また郭居敬撰「新刊全相二十四孝詩選」と題する龍谷大学図書館蔵室町写本の巻末には「旹嘉靖廿五乙巳年刊」の原刊記が移写してある。我が国では本書は室町中期以後教訓書として読まれ、室町から近世初に至る写本が数部伝存している。題名から察せられる如く元・明刊全相本に由来するものであるが、伝存旧鈔本は龍谷大学・斯道文庫蔵本を除いては、この本の如く、挿画を省いてある。二十四孝詩選は江戸時代に入ってからは、庶民教訓書として盛行し、和訳注釈つきや御伽草子本に至るまで種々の形の刊本が出版された。本により廿四人の人名・次序にも多少の出入異同が見られる。

小説家類

世説新語　六巻　劉宋劉義慶撰　梁劉孝標注　明呉中珩・黄之寀校　明嘉靖一四年刊（呉郡袁氏嘉趣堂）　四冊

茶色表紙（二五×一五・六糎）。首に袁褧撰の刻世説新語序及び世説新語目録あり、本文巻首「世説新語巻一／宋劉義慶撰／梁劉孝標注／明呉中珩校（巻二以下黄之寀校）」と題す。双辺（一九・五×一三糎）有界九行、行十八字、注小字双行。版心白口「世説新語　巻幾　（丁付）」。下象鼻に大小字数あり。

同　八巻　明王世貞批点浚瀛初校　明万暦一四年刊（余碧泉）　四冊

後補紺色表紙（二五・五×一五・二糎）。首に万暦庚辰（八年）の王世懋の世説新語序、袁褧の刻世説新語序、世説新語篇目あり、本文巻首「世説新語巻之一／宋劉義慶撰／梁劉孝標注／明王世貞批点／後学凌瀛初校」と題す。左右双辺（一九・三×一二糎）有界九行、行廿字、注小字双行。句点を附刻。王世貞の批語を首書。版心線黒口「世説新語　巻之幾　（丁付）」、下象鼻に刻工名・大小字数を刻する所あり。巻八末尾題の前に、「万暦丙戌孟春／余碧泉重繡梓」の蓮牌木記がある。巻四まで朱・藍両様の句点、巻三まで二手の朱筆校字（特に宋本との対校）の書入があり、一部は市野迷庵の筆、大部分は渋江抽斎の筆のようである。「江戸市野光／彦蔵書記」「迷菴」「林下／一人」「弘前医官渋／江氏蔵書記」「奚暇斎／読本記」等の印あり。

李卓吾批点世説新語補　二〇巻　明何良俊編王世貞删定
王世懋批釈李贄批点張文柱校注　元禄七年刊（京・林九兵衛）　八冊

諸書よりの抄録を以て記事を補い、或は校字の標記旁記、或は押紙を以てする等の書入甚だ周密にして、巻二末に「文化二乙丑年二月念五日一校畢」の識語あり。

唐世説新語　一三巻　唐劉肅撰　明王世貞校　明万暦三一年序刊（潘玄度）　二冊

後補縹色空押行成表紙（二六・七×一七・三糎）。封面あり、「校刻中秘書／玉峯青霞館重摹宋板／唐世説新語」と。首に万暦癸卯（三十一年）馮夢禎撰唐世説新語序、元和丁亥劉肅の唐世説新語序、目録あり。巻初「唐世説新語巻之一　瑯邪王世貞校」と題し、巻末に総論を附す。単辺（二一・五×一三・五糎）有界八行、行廿字。版心白口「唐世説巻幾　（丁付）」。楊志八著録。首に印刷罫紙に記せる光緒九年の守敬の左の手書題識一丁を附綴する。

大東新語十三巻新唐志注云元和中江／都主簿〔劉肅撰三字欠カ〕此本為馮夢禎序潘元度刻結／銜題登仕郎前守江州潯陽県主簿疑／唐志為伝写之誤唯自唐以下諸家著／録皆称大唐新語此本劉肅自序首題唐／世説新語序文中亦有世説二字最為謬妄／馮序又称是弇州校定竊意開元之元美皆／一時之傑未必至此当是潘氏子所為巻首／標玉峯青霞館重摹宋板今以稗海本／校之則互有訛字各為正訂其有二本並誤／者則拠広記等書校之至政能第八標目此／本亦誤刻于第四巻持法篇韋陟条尾而以／第五巻忠烈篇為第八与稗海本同唯巻首／自序及巻末総論一篇為稗海本所無或是／従宋本出耳光緒癸巳春暮春宜都楊守／敬記于鄰蘇園

開元天宝遺事　三巻　五代王仁裕撰　〔元和〕刊　古活字版　一冊

香色表紙（二七・三×一九・六糎）。首に自序・標目・目録を冠し、巻首「開元天宝遺事」と題し、巻末に「此書所載明皇時事最詳至一話言一行事後人文人間所引大抵出於此書者多矣紹定戊子刊之桐江学官小陰陸子適書之」の原刊語がある。双辺（二二・七×一六・九糎）無界十三行、行廿字。版心粗黒口「遺事巻上（中・下）　（丁付）」。伝存本少く東洋文庫・龍門文庫・神田喜一郎氏蔵本が知られる。「大雅蔵書」「森氏開万／冊府之記」「多福文庫」「函碕文庫」（田崎仲舒）等の印あり。楊続譜著録。

同　〔江戸〕写　一冊

縹色表紙（二六・六×一七・九糎）。字面高さ廿一糎。毎半葉十二行、行廿字。体式前掲本に同じく、陸子適跋巻末にあり。朱点朱引墨訓点が附される。巻末に左の文政三年の小島宝素及び明治三年の小島春澳（朱筆）の識語がある。

右開元天宝遺事三巻為尚古堂蔵本／庚辰小春乞而得之坊本欠陸跋是従／宋槧善本伝鈔者宜須珍惜也質誌

唐代叢書所収本无自序陸跋巻不分上下軆裁自下而文字互有得失／此本所非者多属誤写　家君為宋槧善本伝鈔者真不

誣／明治庚午秋日校了書葉湾生尚絅

朱筆校字書入（尚絅筆）あり。森志五著録。森志は宝素の識語により「従宋刻伝鈔者」となすが、宋本より直接写したのではなく、前掲古活字本或は寛永十六年刊本からの伝鈔であろう。「小島氏／図書記」の印あり。

孤樹裒談　存首六巻　明李默撰　〔明〕刊　三冊

後補紺色表紙（二五・七×一六糎）。首に孤樹裒談引用書目をおく。巻初「孤樹裒談巻之一」と題す。単辺（一九・二×一三・八糎）有界十三行、行廿四字。版心白口「巻幾（丁付）」、下象鼻に巻二「乙」巻三「丙」と刻する所あり。版式字様甚だ稚拙。墨筆校字の書入あり。「吉家／氏蔵」「善葊／図書」「楽我小／室珍蔵」「善庵三十／年精力／所聚」の印あり、朝川善庵手沢本。

＊搜神記考　岡本保孝撰　〔江戸末〕写　一冊

水色表紙（二三×一六・三糎）。字面高さ約十八・五糎。毎半葉九行、行廿一字。注文小字双行。内題なく、書名外題による。未刊。静嘉堂文庫に自筆稿本あり。

王子年拾遺記　一〇巻　秦王嘉撰　梁蕭綺編録　明嘉靖一三年跋刊（呉郡顧氏世徳堂）　二冊

後補縹色表紙（二五×一五・五糎）、外題「拾遺記仍宋本下」は森立之筆。白綿紙本。首に蕭綺録の王子年拾遺記目録を冠し、その末に「顧氏世／徳堂刊」の木記あり。巻首・第二行「王子年拾遺記巻第一／蕭綺　序録」と題し、三行以下蕭綺序、序後庖犧等の子目あり、後再び春皇庖犧の条目を題して本文に入る。毎巻首に子目を列し、後に条目を再び題する。巻末に後序及び嘉靖甲午春三月東滄居士呉郡顧春識の跋あり。左右双辺（一七・四×一二糎）有界十行、行十八字。版心白口「拾遺幾（丁付）」。朱筆句点朱引の書入あり。「東石黄氏／蔵書籍印」「森／氏」「間津館」の印あり。楊志八・楊譜六15 16著録。首に印刷罫紙四丁を附綴し、守敬の光緒九年の左の手書題跋（楊志収）あり。

仿北宋本王子年拾遺記毎半葉十行行十八字／前有総目本書首題王子年拾遺記巻／第一次行題蕭綺序録三行以下蕭綺序序／後庖犧神農黄帝少昊高陽高辛／唐堯虞舜八子目目後再題春皇庖犧条／目以下毎巻皆先子目後条目蓋猶唐人巻／軸本之式篇中殷譲弘禎轅五字欠筆／字体端雅蓋北宋精本也漢魏叢書／刻此本刪其毎巻子目而以蕭綺序置巻／一之前已大失古式秘書廿一種亦然邇来／崇文書局又従叢書翻刻而訛謬尤甚／如漢明帝陰貴人叢書本誤陰為／因局本亦仍之又如始皇起雲明台宋／本自為一条秘書本亦同叢書本因前／条字抵行末不便跳行局本遂連上為一／条而不顧文之不相続吁官刻局書草／率乃爾承学者将何取則焉

又按胡応麟二酉綴遺謂即蕭綺所作／託名子年其語似是然隋唐並有王子／年拾遺録三巻又有蕭綺王子年拾遺／記十巻拠蕭綺序録称子年原書十九巻残／欠綺捜拾為一十巻則隋唐志所載之三巻／必仍是子年原書而無蕭綺巻中録論之文／但又残欠只存

三巻耳胡氏説故為高論以／矜其具眼而不校隋唐志三巻之録失之／目睫也

又按此本雖原于北宋而以太平広記所引校／之則此遠不逮焉雖其中有両通者亦有／広記奪誤者然細校其文字則彼所拠者／当是唐人所遺如周成王泥離国条視日月／以知方国所向広記引上文有或泛巨水四字漢／成帝飛燕条帝以翠纓結飛燕之裾／広記引此下有遊倦乃返飛燕後漸見疎／常怨恚曰云云今本裾下即接怨曰不可通／矣魏明帝昆明国条宮人相嘲曰不服辟／寒金那得君王心広記引此下有不服辟／寒鈿那得君王憐二句蜀周羣条蜀人／謂之後聖広記引止其下白猿云云自相／駁詰必後人識語蕭綺所録百無一真其／迂誕豈独此条又晉武帝条何必木偶／於心識乎文義難解広記引作何必木之／偶而無心識者乎此皆明ミ脱誤其他異同／以数百計周霊王昆昭台一条脱百餘字／別詳札記

又按此書次第条目多無義例往往有／数事合為一条者広記分引之是也然／不敢謂蕭氏原書必無不合如晉文焚／林不与師曠相儷乃置周霊王之前以魯／僖標目劉向校書不置漢成之後乃擠／於郭況賈逵間魏任城明帝之朝而載建／安三年胥徒国献沈明石鶏魏帝為陳留／王之歳而云太始四年頻斯国来朝皆／時代乖迕条理莫知仍不能不以断爛為辞矣／光緒癸巳三月宜都楊守敬記

（印）

右の題識は楊志に「王子年拾遺記明翻北宋本」と題して収められ、今所掲のこの本についての題跋は楊志にはその次に「王子年拾遺記十巻明嘉靖甲午（仿）防宋本」と題し収められてあるが、その原稿はこの本に附綴されていない。

異疾志　唐段成式撰　安政二年小島瞻淇写（唐代叢書本）

小島尚真加点手校　一冊

渋引香色表紙（二七・六×一九糎）。字面高さ約十七・五糎。毎半葉九行、行廿字。朱点朱引を附す。「小島氏／図書記」「尚真／精読」の印あり。末題下に小島尚真の次の朱筆識語あり。

乙卯臘月仮医学本俾弟瞻淇謄録／原本従清王文誥唐代叢書所摘出／也是月十一日対校一過併句逗尚真

＊冥報記　三巻　唐唐臨撰　〔江戸末〕影写三縁山蔵平安鈔本　一冊

水色表紙（二六・八×一九・二糎）。題簽には上に「東叡山文庫」と小字横書し、「冥報記上中下　全」と、その上に「森氏開万／冊府之記」の印をおす。薄葉斐紙、襯紙を入れてある。上下単線、その幅二三・七糎。毎半葉七行、行十七乃至十八字内外。原本は巻子本であろう。巻初「冥報記巻上　吏部尚書唐臨撰」、巻末「冥報記下」と題し、末題の次行に「一交了」の識語が署してある。少しく朱句点朱引、墨訓点振仮名が加えてある。首尾の遊び紙と扉に、森立之が朱・墨両筆を以て、見在書目・両唐志・旧唐書列伝より本書に関する記事の抄録、立之案の私説、朱筆の訓説・奇字の抜書を記す。扉の裏の識語（立之の筆に非ず）に、

三縁山会下徹定寮ノ古本ヲ以テ摸写ス寮ノ本ハ保元／時代ノ写本ニテ古色実ニキクスヘキ巻本ナリ但シ巻初四十／三行旧

闕タルヲ近世栂尾高山寺ノ本ヲ以テ補写スト云

冥報記ノ「ハ唐書藝文志ニ出ツ然レトモ唐山ニハ絶テ／伝ハラサルヘシ今現ニ存スル処ハ高山寺本トコノ元本／トヲ限リニテ其他世ニアル「ヲ聞ス奇世ノ珍書ト云ヘシ（新小説十九オ「立之朱書追記」）

と。巻末に左の立之の朱筆手跋あり。

此書真是李唐之遺巻見存上中下三巻而新／旧唐志倶云二巻見在書目云十巻恐一訛書中／文字六朝俗字甚多其傍訓仮字亦有古体可取徴／者但展転伝写誤字不尠今於字傍朱書聊以愚／見攷正之後之読此書者或再攷以正之則幸甚矣／明治丙子第三月初八日古稀翁枳園（印）（印）（印）

立之の朱筆校字が書入されている。「貫主大王令旨／東叡山開山堂蔵本／不可漫出門外」「東叡山開山堂／司職真如院十／有四世蓮華金／剛義厳収蔵之」「発願徧羅和漢典籍／蔵之文庫以報四恩／後司職之人若有補／遺時以聞焉義厳記」、「森／氏」の印あり。この本は東叡山寛永寺が三縁山増上寺徹定寮の鈔本を影写したものである。森志六・楊志八・楊譜六17 18著録。

本書は唐の唐臨が諸人の冥報（仏縁）による応報因果の説話を集輯せる書。旧唐書の藝文志史部雑伝類及び列伝（唐臨伝）、新唐志子部小説家類、宋志子部家類は並に二巻と著録するが、その後の書目に著録がなく、亡逸に帰したようである。我が国には古く伝り、見在書目雑伝家に十巻と著録され、我が国の現存旧鈔本は高山寺蔵唐人鈔本（影印本あり）、尊経閣文庫蔵長治二年鈔本（影印本あり）、知恩院蔵旧鈔本並にこの三縁山蔵旧鈔本で、その他にはペリオの燉煌本に百五十七行の零巻が発見されている。三縁山本は森志に三縁山某院蔵と著録されているのみで、その後その本を見た人を聞かない。今この本の識語によれば、鵜養徹定の寮にあった由で、徹定が後に知恩院に移った時、多くの典籍が知恩院に転じているから、内容から見ても三縁山本が今の知恩院本ではないかと想像するが、未だ確認するに至らない。我が国の伝承本は夫々出入の異同はあるが、いずれも三巻で、唐志等の二巻ともまた見在書目録の十巻とも巻数が合わない。楊守敬は法苑珠林及び太平広記が本書を引用するものに、この本（三縁山本・知恩院本は高山寺・尊経閣本に比し所収説話が少い）に存しないものがあり（その逆もあるが）、且つ珠林に冥報拾遺の書名が見える所から推定して、三巻本は日本釈子の節鈔で、冥報記六巻冥報拾遺四巻計十巻が原巻数で、両唐志本伝二巻に作るは皆誤写であると断定した。此に対し内藤湖南は影印高山寺本の跋中に三巻本が原形で十巻本はその増補と推定した。

又　〔明治〕影写　一冊

後補紺表紙（二六・三×一八・五糎）、薄葉紙襯紙装。前掲本の摹写であるが、たゞ天地の単辺や訓点等は写さず、原文のみを移写し、たゞ前の護葉紙の立之の抄録及び朱筆手跋は臨写してある。

＊又　〔明治〕影写　一冊

紺表紙（三三×二三・五糎）。前々掲本の影写である。原訓

点や立之の手跋等は写さないが、護葉紙の立之の抄録と立之が本文中に書入た朱筆校字は移写してある。守敬が本文中に朱墨両筆を以て広記珠林等との校字を書入し、首尾の護葉紙に「法苑珠林対冥報記」の対照表、「冥報拾遺」の表を書入している。此等書入は訪書志所収札記のもとになったものである。

太平広記　五〇〇巻目録一〇巻　宋李昉等奉勅編　明許自昌校　〔明〕刊　二四冊

濃茶褐色艶出空押行成表紙（二六・九×一六・七糎）。封面あり、「呉郡重校／霏玉軒蔵板／太平広記」、その左欄外に小字で「閶門書林黄敬池発行」と刻されている。首に太平広記表、嘉靖丙寅の談愷序、太平広記引用書目、太平広記目録がある。目録題の第二行李昉、第三行談愷校刊、第四行唐詩同校の官銜題署がある。本文巻初「太平広記巻第一　神僊一／明長洲許自昌玄祐甫校」と題す。左右双辺（二二・三×一四糎）有界十二行、行廿四字。版心白口「太平広記　巻之幾　（丁付）」、下象鼻に大小字数のある所もある。所々朱句点、少しく守敬の校字書入がある。太平広記引用書目に別紙二葉を補って守敬が「太平広記引用書目補」を追記し、また目録の題下に出典書名が書入てある。本書目補は楊志中に録されている。本版は嘉靖丙寅（四五年）序刊談愷校刻本に拠って長洲の許自昌が校刊せる本で談愷原刊本ではない。この本は少しく後刷である。「稽古館蔵」「文化／乙丑」の印あり。楊志八著録。

虞初志　存首四巻　不著編人　〔明嘉靖〕刊　四冊

淡茶色表紙（二四・五×一六糎）。外題「虞初志一（一四）」（狩谷棭斎筆）。畳紙の一端と思われる厚紙一枚に棭斎の筆で毎巻所収書の目次が記されてある。白綿紙本。左右双辺（一五・五×一一糎）有界八行、行十五字。版心白口「書名　（丁付）」。「棭斎」（方形と円形二顆）「狩谷／望之」（二顆）「字／卿雲」「湯島狩／谷氏求古楼／暴書記」「読杜／艸堂」等の印あり。

博物誌　一〇巻　旧題晉張華撰　天保元年小島尚質写（伝鈔清嘉慶刊士礼居黄氏刊景宋連江葉氏本）　一冊

小島宝素の藍筆句点、朱筆校字の書入あり、巻尾に左の宝素の朱筆識語あり。

庚寅中秋日直宿於　柳営夜半腹痛至暁吐瀉／頓覚疲極乗轎退出明日稍快扶病読半巻十／八日哺読完併加校語小島質記于宝素堂中

巻末に嘉慶九年黄丕烈後跋の追写が附され、その末に次の宝素の朱筆識語あり。

天保六年孟夏据昌平庠蔵本補此一頁初二行手鈔時有／客至友人渋江籀斎為予代書

唐段少卿酉陽雜俎　前集二〇巻続集一〇巻　唐段成式撰　明李雲鵠校　明万暦三六年序刊　六冊

水色表紙（二六・八×一七糎）。外題楊守敬筆。首に万暦戊申（三十六年）李雲鵠の刻酉陽雜俎序、嘉定癸未鄧復応の酉陽雜俎序、趙琦美の酉陽雜俎序、次に目録あり。本文巻初「唐段少卿酉陽雜俎前集巻之一／唐　太常少卿臨淄柯古段成式　撰／

明　四川道監察御史内郷李雲鶴　校」と題し、巻末に続集跋を附する。単辺（二〇・三×一三・三糎）有界十行、行廿一字。版心白口「酉前幾　（丁付）」。「勿折角勿巻脳勿以／墨汚勿令鼠齧勿唾／幅揭勿爪字抑勿跨／帙或作枕勿不如奉／師教勿粥市及借人／勿違命為不孝必端／野父顕以嘱児元徽」等の蔵印あり。楊志八・楊譜六19著録。巻首に印刷罫紙三葉を附綴して、光緒九年の守敬手書の左の題識あり、

酉陽雑俎二十巻続集十巻愛日／精廬蔵書志尚有元刊本酉陽／雑俎前集至続集則無聞焉胡応／麟二酉綴遺称雑俎於太平広／記鈔出続記俟好事刻之故稗海／有前集無続集而毛氏津逮秘書／亦無続集通行本有続集然不云得之応麟此本係／明李雲鶴刊本蓋従趙琦美本入／雕有琦美序一篇言此書端末甚／詳蓋前集従宋本校録続集亦／従宋本増補前有嘉定癸未鄧／復序蓋為続集作然則続集為／趙琦美所校定非応麟手琦／美以収蔵鑒定鳴一代所謂清常／老人者是也其語必不誣　提要疑／続集従太平広記鈔出何以得其／六篇之目意応麟以意為今閲此／書乃知続集本亦宋刻但不免有／脱佚琦美亦有増補耳又　提要云段氏自序凡三十篇為二十巻／今自忠孝至肉攫部凡二十九篇尚／闕其一遂疑語資篇後当有破蝕／録一篇今以此本校稗海本第四巻／禍兆之下此本有物革一篇蓋稗海／禍兆篇共十条此以前四条為禍兆／而以後六条為物革観後六条皆言／物変並無禍患則此本標篇必非／臆度暇日当合津逮本并校之／光緒癸巳春三月宜都楊守敬記（印）

続博物志　一〇巻　宋李石撰　朝鮮〔嘉靖間〕刊　二冊

後補渋引茶褐色表紙（二八・六×一七・七糎）。巻首「続博物志巻第一／（格低七）前都官員外郎隴西李　石撰」と題し、巻末に門人廸功郎眉山簿黄公泰の跋及び明弘治乙丑三月工部主事姑蘇都穆記の後記を附し、「続博物志巻第十」の末題下に「開化庠生方衛謹録」の八字を刻する。双辺（二〇・三×一三・八糎）有界十行、行十八字。版心細黒口「続物巻幾　（丁付）」。この本の紙の一部に具注暦や文書（嘉靖三十二年の年記を有するものあり）の反故紙の紙背を利用して印刷したのが混っている。前表紙見返に渋江抽斎が本書に関する書誌を記した抄録がある。「養安院蔵書」「栽安」「弘前医官渋／江氏蔵書記」等の印あり。楊続譜著録。

釈家類

*大毗盧遮那成仏神変加持経　存巻一　唐釈善無畏訳釈

一行筆　〔平安後期〕写　一冊

後補白無地表紙（二三×一五糎）。粘葉装。厚手裴紙、両面書。白界を施し、界高一七・七糎、界幅一・九糎。毎半葉六行、行十四字。朱筆ヲコト点、墨筆の返点振仮名（別手の朱筆も混ゆ）四声点濁点を附し、朱墨両様の音義校注（イ本との）等の書入あり。巻初第一行「大毗盧遮那・成仏神変（ヲテ）・加持（ルル）経・巻第一」、第二行「入真言門一住心（ルニ）品第一」と題し、末題「大毗盧遮那成仏経巻第一」の次に「右大唐中天竺国三蔵輸彼迦羅□善無畏訳（沙門一行筆）」と題する。次にいずれも本文とは別筆で、三条各

亦異筆なる左の奥書あり、

正暦三年歳次九月廿一日於天台千光院実相房点广祚／阿闍梨為令法久住被伝授之実相房御本□□（朱筆、この朱筆は本文中に見える朱筆書入と同筆）

嘉保三年六月十九日以壇林房／御本移点了

長承四年四月廿日奉随大宝房／法橋御房奉交了一日内墨点彼御房／御本也　宮僧都御本云云

次に「伝領完済」「又伝領賢瑜」の伝領識語がある。

＊景徳伝燈録　零本（存巻一〇至一二、巻一九至二一）

宋釈道原撰　元延祐三年刊（湖州禅幽菴）　二冊

後補茶褐色表紙（二七・八×一七糎）。虫損多く、裏打補修を加う。毎巻首に目録あり、正文に接す。左右双辺（二二×一五・二糎）有界十三行、行廿三乃至廿九字不等、注小字双行。行四十乃至四十二字。版心線黒口「伝第幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名（なき所もあり）がある。殆ど毎巻末に次の篆文雙行の木記がある。

（十巻）二二明苾蒭希渭命工／刻梓厳之禅幽龕（十一）延祐三季刻梓于／湖州道場亶幽庵　（十二）延祐丙辰重栞于湖／州道場幽禅之菴　（十三）除饉男希渭佑倡衣／鉢重刊于禅幽精舎（楷書）（十四）明苾蒭希渭命工／刻梓于湖州禅幽庵（楷書）

版心は欠損多いが、識読できる刻工名は、仁、文、鄭、古、陳仲刊、月、周、余、鄭仁刊、楊、朱文刊、朝、葉、陳、佑、朱、葉埜、王、胡等である。室町期の朱点朱引墨訓点が附されてある。首に「山門天海蔵」の墨署、「小林氏／□□」等の印あり。本版の伝存本は他には東洋文庫・国立中央図書館（巻廿二至廿四配補宋刊）蔵本の外は零本で、成簣堂旧蔵（巻一・二）・浅草寺（巻四）・京都大学附属図書館谷村文庫（巻一四・廿九）がある。本書の五山版は本版の覆刻である。

＊万僧問答景徳伝燈全録　零本（存巻一・二・五・六）

宋釈道原撰　元香山円智居士抄　〔元〕刊（古建香山円智居士）　二冊

後補縹色表紙（二一・五×一三・二糎）。虫損多く、裏打補修を加う。巻一の前半が欠けているので、序目未詳。その他欠丁が多い。巻二初「新刊万僧問答景徳伝燈全録巻之二（両行に跨る）／（以下三行低五格）福州東禅慧空大師蔵本／古汴景徳道原大師纂集／古建香山円智居士抄刊」（巻五・六は「新刊」の二字なく、題下「振」（黒囲陰刻）の刻あり）と題する。左右双辺（一七・六×一一・四糎）有界十一行、行廿一字。版心線黒口「彖幾（丁付）」。室町期の朱点朱引が附されている。景徳伝燈録の抜抄俗本で、他に本版の所在を聞かない。毎冊初に「河島延福禅寺」の横書或は縦書の墨署がある。楊譜十一16著録。

禅苑蒙求　三巻　金釈志明撰　金釈徳諫注　〔近世初〕

写　一冊

後補紺色表紙（三〇・二×二一・四糎）。初に「禅苑瑤林注巻上／燕京大万寿寺　無諍　徳諫　注／少林楽真子　志明　撰」と題して原序あり、次に乙卯年（金明昌六年）二月二日龍山居士の「雪堂和尚注禅苑瑤林引」、正大乙酉（二年）臘前五日樗軒

居士の序、正大三年正月廿六日閑居云の引があり、巻下巻末に崇瑞謹白の跋を附する。本文首「禅苑蒙求巻之上」と題す。単辺（二三・一×一七・九糎）有界八行、行十八字、注小字双行。朱点朱引墨筆訓点が加えらる。

本書は蒙求の体に倣って、禅林の典故を列したもので、楊守敬が「按明蔵目録不載此書当時或以為初学所設不録或以未見其本不録（中略）亦内典逸書之一種也」と言っている如く、漢土に伝本を聞かざるようであるが、我が国では室町以来行われ、室町鈔本あり、江戸時代に入って寛永・寛文九年刊本がある。楊志十六参照。

法苑珠林　一〇〇巻　唐釈道世撰　元和七年至寛永元年刊（常明寺宗存）　古活字版　三〇冊

後補紺色表紙（二七×二二糎）。首に李儼の法苑珠林序（題下「杜」の千字文函号の刻あり）を冠し、巻首「法苑珠林巻第一　西明寺沙門釈道世撰」と題し、毎巻首に子目を列して正文に接続する。単辺（二一・六×一八・九糎）無界十行、行十七字。版心粗黒口「法苑珠林巻幾　（丁付）」。本版は伊勢常明寺の宗存が慶長元和間に伊勢皇大神宮への一切経奉献開板の大願を立てゝ開版せる刊経の一つであって、巻一・二・九・一六・二四・三一・三五・三六・四七・六一・七〇・七一・七九・八七・九二・九六の各巻を除き、毎巻末（稀に前）に刊記がある。それを刊記の文章の体に類別して左に掲げる、初出の巻の文を掲げて、以下同文は月日のみを記す。

（巻3）伊勢太神宮一切経本願常明寺宗存敬梓／元和九癸亥年九月十二日　（5）潤八月二十二日　（6）十二月十三日
（7）八月二十九日　（8）五月三日　（12）五月二十九日
（14）十一月二十三日　（15）三月二十四日（19）十二月二十三日　（20）四月二十六日　（51）十一月二十二日
（60）六月八日　（84）三月十四日　（94）三月十日
（4前）元和九癸亥年十月十九日／伊勢太神宮一切経本願常明寺宗存敬梓　（10）九月二十一日　（11）元和七年辛酉九月二十三日／伊勢太神宮一切経本願常明寺宗存敬梓　（21）九月十五日　（22）十月吉祥日　（89）十一吉日
（13）伊勢太神宮一切経本願常明寺宗存敬梓／元和八壬戌年十月二十八日　（34）十月十八日　（49）十二月十三日
（64）十二月二十八日
（17）元和十年甲子弥生下旬／伊勢太神宮一切経本願常明寺宗存敬梓　（25）四月十八日　（26）四月十五日　（27）四月二十九日（28）四月二十日　（29）四月九日　（30）三月十六日　（32）二月二十三日　（58）三月一日
（18）伊勢太神宮一切経本願常明寺宗存敬梓／元和十甲子年二月九日　（23）四月二日　（33）五月二十四日　（39）二月十九日　（72）二月十七日　（75）三月十一日　（76）三月八日
（37）伊勢太神宮一切経本願常明寺宗存敬梓／寛永元年甲子六月十二日　（38）六月十五日　（40）七月二日　（41）六月

二十三日　(42) 六月二十九日　(43) 六月二十六日
(44) 七月十日　(45) 七月八日　(46) 七月二十二日
(48) 七月二十二日　(50) 七月二十二日　(52) 八月十一日　(53) 八月九日　(54) 八月六日　(55) 八月一日
(56) 八月十六日　(57) 九月朔日　(59) 八月二十八日
(63) 九月二十七日　(64) 九月十九日　(65) 九月二十三日　(66) 九月十一日　(67) 十月五日　(68) 十月四日
(73) 十月十七日　(74) 十月二十二日　(77) 十一月三日
(78) 十一月二十八日　(80) 十一月三日　(81) 十一月十一日　(83) 十一月十三日　(85) 十一月十四日　(86) 十一月二十八日　(90) 十一月二十八日　(93) 十二月二十六日
(95) 十二月四日　(97) 十二月十六日（伊勢太神宮云々の一行なし）　(98) 十二月十一日　(99) 十二月十一日
(100) 十二月二十七日
(62) 元和八壬戌年二月二十九日／伊勢太神宮一切経本願常明寺宗存敬梓　(82) 六月二十六（ママ）　(88) 三月二十四日
(91) 二月時正

巻次に随って組版したのではなく、この年月日を辿れば、当時の活字印刷がどの程度の日時を要したかがほゞ想像できる。本版は他に宮内庁書陵部・叡山文庫・日光天海蔵・成簀堂文庫旧蔵本がある。「出雲／寺庫」「敬海蔵」の印あり。

一切経音義　二六巻　唐釈元応撰　〔江戸前期〕刊　鉄眼一切経版　八冊

大本。朱筆校字書入あり。また別に楊守敬の朱筆校字の書入もあり。森志六・楊志四参照。

一切経音義　一〇〇巻　唐釈慧琳撰　元文二・三年刊（江戸・獅谷白蓮社）　二五冊

大本。巻十四まで楊守敬の朱筆校字書入あり。「松本氏／図書印」「勝鹿文庫」等の印あり。森志六・楊志四著録。首に印刷罫紙三丁を附綴、左の守敬の手書題識（楊志収）あり。

唐沙門慧琳一切音義百巻余初至日／本有島田蕃根者持以来贈展閲之／知非元応書譬喜無似拠宋高僧／伝称周顕徳中中国已無此本又行瑃／伝亦称慧琳音義不伝此本従高麗蔵本翻出原本為胡蝶装余曾于日本／東京三縁山寺見之字大如銭然亦多訛／字按唐人景審原序称此書取音于韻／英考声切韻而以説文玉篇字林字統／古今正字文字典説開元文字音義七家／字書釈誼七書不該百氏咸討今就此書／覆審如張戩考声集訓古今正字文字典／説文字釈要等書幷隋唐志所不載又如武／玄之韻詮陳庭堅韻英諸葛顥桂苑／珠叢雖見於箸録家而他書亦罕徴引／又如引説文則声義並載引玉篇則多／野王按語引国語則賈逵注引孟子則／劉熙注此外佚文秘籍不可勝記誠小／学之淵藪藝林之鴻宝此書出遂覚段／茂堂王懐祖任子田沈匏廬諸先生之／撰述皆有不全不備之憾初得此書即／勧黎公使刻之以費繁而止厥後中江／李眉生廉使欲刻之已措資矣会余／差満将帰遂輟議然此書譌謬奪誤／触目皆是其未佚者固当検原書一一／対勘其已佚者亦必参合諸書審視裁／択可両存者仍之別為札記顕然訛誤者直

改之／然必守以不校〻之況一一為之詳記勢必如／岑建功之刻輿地紀勝其札記反多／于本書唯茲事体大非博極羣／書心有識別者不得妄下雌黄海内深／識之士何能共聚一堂商確從違所為／撫卷太息恐年歳之不我与也／（以下上欄にあり「既思直改之説甚難能任此者海内能有幾人不如所両存者仍之顕然訛誤者改之皆為之札記）／光緒甲申四月宜都楊守敬記（印）

此書他日若有重刻者先即所引／諸書無論已佚未佚各訂一冊尽為／録出一可校異同一可輯佚書倘不／為此毎読一条翻検一条既難分任又費／時日且不能旁参互証　七月六日守敬再記

翻訳名義集　七巻　宋釈法雲撰　〔元和寛永初間〕刊

古活字版　七冊

後補紺色表紙（二七・五×一九・五糎）。首に宋紹興丁丑唯心居士周敦義述の翻釈名義序、法雲序、大徳五年普洽記の蘇州景徳寺普潤大師行業記あり、本文巻初「翻訳名義集一／（低四格）姑蘇景徳寺普潤大師　法雲　編」と題す。単辺（二二・五×一五・七糎）有界六行、行廿字（界内に小字双行に印す）。版心粗黒口「翻訳幾　（丁付）」。本書には従来慶長中刊単辺有界五行廿字本、元和中刊単辺有界五行廿字本、寛永刊双辺有界六行廿字本の三種の古活字版が知られているが、本版はそれ等と別版で、「古活字版之研究」未著録。

＊翻訳名義集目安　釈行智編　〔文政〕写　一冊

水色布目表紙（二七・五×一四・四糎）。字面高さ約廿・五糎。毎半葉十二行。首に「文政六年癸未秋七月廿二日／効梵学士沙門行智誌之」と誌せる「翻訳名義集凡例」、次に目録並に翻名索引があり、本文首「翻訳名義集目安／効梵書院蔵本　行智纂集」と題し、巻末に右梵名凡一千百三十餘言と記して、末題の下に「文政戊子（十一年）春　大静弇蔵」の朱筆識語あり。凡例中に曰く、

此書ハ本梵語検尋ノ為ニ纂ム事仮初ニ出テ早率ニ成ル梵語ノ部ニハ遺漏無シト云ヘトモ翻名索引ニ至テハ定デ脱漏多カルベシ改写ノ時追テ加フベキナリ

と。五十音順に配列。行智は江戸浅草福井町銀杏八幡の修験者、字は慧日、円明院と号し、「悉曇字記真釈」「仮名遣古意」等の著あり。本書は未刊。本書の写本は国会図書館・静嘉堂文庫・龍門文庫にも存する。

道家類

老子鬳斎口義　二巻　宋林希逸撰　〔明前期〕刊　二冊

後補縹色表紙（三一・五×二〇糎）、裏打補修が加えられ、元料紙の紙幅は三〇・五糎。首に林希逸の老子鬳斎口義発題を冠し、本文首二行「老子鬳斎口義上／（低七格）鬳斎　林　希逸」と題する。左右双辺（二〇・四×一四・六糎）有界十行、行十八字、注低一格大字。版心白口（僅ながら線黒口を交ゆ）、「老子口又上（下）　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。室町期の朱点朱引墨訓点が附され、眉上にも書入がある。「釈氏／東沢」「杉垣篋／珍蔵記」の印あり。

同　朝鮮旧刊　一冊

後補黒色表紙（二八・二×一七・三糎）。首に希逸の発題を冠し、巻首・第二行に「老子虚斎口義上／（低十一格）虚斎　林　希逸」と題す。双辺（二一・六×一四・八糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行。版心細黒口「老子上（下）　（丁付）」。版式稚拙で、所々墨釘がある。森志五・楊続譜著録の容安書院蔵朝鮮国刊本と同版らしいが、蔵書印が違うから、別蔵本であろう。

林子道徳経釈略　六巻　明林兆恩撰　明万暦一六年序刊

二冊

茶色表紙（二五・三×一五・五糎）。首に万暦戊子臘日七十二叟子谷子と署する「林子道徳経釈略自序」あり、巻首「林子（隔八格）門人王興重閲」、第二行低一格、「道徳経釈略巻一（隔四格）陳標校正」、第三行低二格「第一章（隔七格）游天騏命梓」（校正者・命梓者名は毎巻違る）と題す。双辺（一八・五×一三・五糎）有界九行、行十七字、注低一格大字。句点附刻。版心白口「道徳経釈略　巻幾　（丁付）」、巻一―三の首葉の下象鼻にのみ「魏泗」「魏六」の刻工名あり。自序末に曰く、「余初読道徳経、憮然而無知也、近二三年来、稍有所悟、漫撰通徳経釈略、以就正諸有道之君子云」と。「読杜／艸堂」等の印あり。

列子　八巻　晉張湛注　清光緒二年刊（浙江書局翻刊明世徳堂本）　二冊

元本・林本（口義）・韓本その他との朱墨両様の校注書入が加えられ、書入者は凡そ三手。校注中（巻八・一オ）に「信恬按」と伊沢蘭軒の説を引くのが見える。

列子虚斎口義　二巻　宋林希逸撰　〔明〕刊〔明〕修

二冊

茶色表紙（二六・六×一六・六糎）。白綿紙本。巻上・下とも首葉を欠く。左右双辺（一八・二×一二・七糎）有界十行、行十八字、注低一格大字。版心白口「列子巻上（下）　（丁付）」。下象鼻に刻工名ある所が多いが、補版にはない。印面磨滅の葉が混り、弘治嘉靖間の版に万暦頃補修を加えたものか。朱点朱引、始めの数葉にのみ墨訓点が加えてある。巻尾に藍筆を以て「元治元甲子歳四月十五日於浅草之書房得之／静斎」の識語がある。

荘子南華真経　零本（存雑篇）　〔明万暦〕刊（吉藩崇徳書院）　一冊

後補紫色表紙（二八・八×一七・五糎）。白綿紙本。無注本。巻初第一行「荘子南華真経雑篇」、第二行低三格「庚桑楚第二十三（以首事名篇）」と題する。双辺（二一・三×一五・三糎）有界十一行、行廿二字。上に層格を設け、幅一糎。版心白口「崇徳書院　荘子雑篇　（丁付）」。下象鼻に刻工名あり。「堯刊」の名多し。吉藩崇徳書院の明万暦六年序刊二十家子書の一つ。朱筆句点、墨筆書入あり、巻末に「乾隆乙卯閏二月取焦氏荘子翼本校閲一過思亭」の識語あり。

荘子　零本（存庚桑第廿三・外物第廿六・寓言第廿七）

晉郭象注　〔江戸〕摹写高山寺蔵鎌倉鈔本　三巻

本文共紙表紙、薄葉斐紙を用い、裏打を加う。紙幅卅四糎、巻子装。字面高さ約廿三糎。行十七字。京都高山寺蔵鎌倉鈔本雑篇存七巻（昭和五・六年東方文化学院影印）のうち三巻の影写で、庚桑篇末に「課児沂照旧差審校（花押）」の小島宝素の識語があり、森志巻五に「是本往歳小島学古入京時展閲一過後得伝録雑篇庚桑第廿三外物第廿六寓言第廿七凡三巻」と誌された本に該当する。しかし宝素の識語が影写であるから、この本は宝素の入手せる摹鈔本そのものでなく、それに基づいた重鈔であろう。高山寺本はもと粟田青蓮院所蔵、十五巻あったと言われる。この旧鈔本は今本と異同極めて多く、一篇を一巻となし、七録・釈文著録と一致し、李唐以前六朝旧鈔の古体を存する。森志五・楊志七著録。ちなみに、森志は粟田青蓮院蔵荘子外篇刻意第十五の天平旧鈔本一巻を著録し、「模本蔵在宝素堂」と記している。この原本・影鈔本は共に今所在未詳で、守敬はこの条に「宝素本帰飛青閣」と書入ているが、観海堂蔵本中にはその模本は存しない。

＊纂図互註南華真経　一〇巻　晉郭象注　唐陸徳明音義

〔明初〕刊（覆元麻沙刊本）　五冊

後補紫色表紙（二三・九×一四・五糎）。襯紙裏打。首に郭象序、荘子太極説・周子太極図、南華真経篇目あり。巻初第一行「纂図互註南華真経巻第一」、第二行低二格、「晉郭　象子玄註　唐陸徳明音義」と題する。左右双辺（一八・五×一一・六糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行、行廿五字。版心細黒口『荘幾フ（荘幾）　（丁付）』、中縫或は下象鼻に刻工名（黒口に陰刻もあり）。左欄外に耳格あり、小題巻数を題記。朱筆句点が附され、少しく校字の書入が存する。「本法寺蔵」「弘前医官渋／江氏蔵書記」や寺田望南の蔵印あり。求古楼蔵として森志五、楊譜五13著録。刻工名に張輝刊、范啓名、劉三刊、福得、唐、文、景亨、余以正刊、朱、才刊、犬、文富、文豈刊、好九刊、九、付華、二、二二、昇宗、道通、友、保、生、謝寿刊等あり。本版は中央図書館本（未見）の書影によるに、共に同版らしく、故宮博物院善本目録と同じく元刊とするが、森志の「攷板式蓋明初閩中依元板重彫者」の鑑定に従うべきであろう。楊譜五13著録。

＊同　零本（存巻八）　〔室町末近世初間〕写　一冊

後補紺色表紙（三一・二×一九糎）。巻初「纂図互註南華真経巻之八／荘子雑篇庚桑楚第二十三音義曰以人名篇」と題する。単辺（一九・二×一三・七糎）無界、毎半葉十一行、行廿四字、注小字双行。訓点なし。「小島氏／図書記」の印。

重刻南華真経　一〇巻　晉郭象注　服部元喬校千葉玄之

読補　天明三年刊（江戸・山崎金兵衛、京・植村藤右

衛門等）　一〇冊

朱墨両筆の注の書入多し。次の識語あり。

（第一冊序末）天保十四癸卯閏九日二日発会」　弘化戊申三

月ヨリ再読（朱筆）

（巻一末）嘉永戊申二月ヨリ十二月廿四日／再読畢佐氏一年ノ講義只此ノ

一冊子也 対坐一笑（朱筆）

（巻十末）弘化二乙巳六月十二日夜雪翁講義畢（朱筆）

句解南華真経　一〇巻附新添荘子十論一巻　宋林希逸撰

（附）李士表撰　〔慶長〕刊　古活字七行本　一〇冊

後補紺色表紙（二七・四×一九・四糎）。首に句解南華真経目録、景定二年の林同序、希逸の発題、穆陵宸翰あり、本文巻首「句解南華真経巻之一／（低八格）鬳斎林　希逸」と題し、巻末に、景定元年の林経徳の荘子後序、景定二年の徐霖景の跋、次に「新添荘子十論／教授李士表述」と題して、十論を附する。双辺（二一×一四・九糎）有界七行、行十七字、注小字双行。版心粗黒口「荘子幾　（丁付）」。「十輪院」等の蔵印あり。楊譜五15著録。

鐫南華真経三註大全　二一巻（欠巻二〇・二一）　明陳懿典輯　〔明万暦二一年〕刊（閩書林自新斎余良木）

九冊

茶色表紙（二四×一四糎）。序目や其他に補写がある。首に南華三註大全序、鬳斎口義原序、南華真経目録あり、巻首三行に大字を以て「鐫南華真経三註大全巻之一／（低二格）澂秀水　会魁陳懿典輯／（低二格）閩書林　自新余良木梓」と題す。末題等に冠称を「新鐫」と題するのもある。単辺（一六×一二糎）有界十行、行十七字、注低一格大字、疏文小字双行。層格を設け、その幅四・五糎、有界廿行、行八乃至十字。版心白口「増補南華三註　巻之幾小題　（丁付）」、巻一首・巻十九下象鼻に「自新斎」と刻する。近世初の朱筆句点・墨訓点の書入が巻十二まで附さる。「温故／堂蔵」の印あり。

文子　二巻　明万暦五年刊　二冊

茶色表紙（二五・六×一六・三糎）。首に丁丑夏日潜菴子志の序あり。巻初「文子上（隔十二格）道家一」と題す。双辺（二〇・七×一四・一糎）有界十行、行廿一字。版心白口「万暦五年刊文子上（下）　（丁付）」、下象鼻に刻工名及び大小字数あり。楊志補・楊譜五9著録。表紙見返に光緒十四年の守敬の手書題識次の如くあり。

戊子五月楊守敬記／明万暦五年刊本文子二巻首有潜菴子序称得墨／希子所蔵徐霊府註本因彙刻之然僅／存文子正文其徐注則皆刪之可惜也丁／丑夏日潜菴子志未詳其人四庫提要称此／書有明道潜堂刊本未知誰為後先然以纘／義所列異同則此本与道潜本多合又銭氏守／山閣叢書拠雲笈七籤九十一巻引九守篇与此分／篇迥異知宋本尚不誤然則序称従霊府本出恐未然

三元参賛延寿書　五巻　元李鵬飛撰　朝鮮正統三年刊

（全州府）　一冊

後補紺色表紙（三〇×一九・五糎）。首に至元辛卯（元前至元廿八年）菊月吉旦九華澄心老人李鵬飛序の三元参賛延寿書序、目録、次に人説一篇あり、本文初「三元参賛延寿書巻之一」と題す。双辺（二〇・八×一五・八糎）有界十二行、行廿五字、注小字双行。版心粗黒口「書　（丁付）」、葉次は通し数。巻末に「皇明正統参年歳次戊午孟秋重刊于全州□」（全州

の下の字は印刷がすれて判読し難いが、全州府）の刊記あり。朱筆句点勾点を附す。内閣文庫にこの版による江戸写本あり、尊経閣文庫蔵朝鮮刊本は同版。楊続譜著録。

集　類

楚辞類

楚辞後語　六巻　宋朱熹撰　〔元末〕刊　覆元天暦三年陳忠甫宅刊本　一冊

淡香色表紙（二三・五×一五糎）。裏打補修が加えられている。首に楚辞後語目録あり。本文巻首「楚辞後語巻第一」と題する。単辺（一九・八×一二・一糎）有界十一行、行廿字。版心線黒口「後語幾　（丁付）」、往々大小字数が刻さる。かなり後印で、所々朱引が附され、巻三の第七・八丁補写。目録末に「天暦庚午孟夏／陳忠甫宅新刊」の木記のある内閣文庫蔵本（国立中央図書館にも架蔵）と比較すると、この本には刊記がなく、両本は相互にかなり忠実な覆刻の関係にあり、この本の方が後刻であろう。勿論この版も集註八巻弁証二巻と共に鏤梓されたと思われる。外題下に「青松」の墨署あり、清原国賢旧蔵本、「船橋蔵書」「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森／氏」「読杜／艸堂」の印あり。

別集類

陳思王集　四巻　魏曹植撰　〔明嘉靖〕刊　二冊

茶色表紙（二四・五×一六糎）。白綿紙本。巻首「陳思王集巻一」と題す。左右双辺（一七・五×一二・一糎）有界十行、行十八字。版心白口「陳集幾　（丁付）」。寺田望南等の蔵印あり。楊志十四著録。

陸士衡文集　七巻　晋陸機撰　〔明嘉靖〕刊　一冊

茶色表紙（二三・六×一五糎）。包背装。首に慶元庚申（六月）徐民瞻序あり。本文首「陸士衡文集巻第一／（低四格）晉平原内史呉郡陸　機　士衡」と題し、次に毎巻所収目次を列する。左右双辺（一七・五×一二・一糎）有界十行、行十八字。版心白口「陸子衡巻幾　（丁付）」。「向黄邨／珍蔵印」あり。楊譜十2著録。

江文通集　四巻　梁江淹撰　〔明嘉靖〕刊　二冊

茶色表紙（二四・五×一六糎）。白綿紙本。巻首「江文通集巻一」と題する。左右双辺（一八×一二糎）有界十行、行十八字。版心白口「江集幾　（丁付）」。寺田望南等の蔵印あり。以上三部版式を同うし、刊行者が同一なることが推察される。

庾子山集　一六巻総釈一巻　北周庾信撰　清倪璠注

〔清〕刊（崇岫堂）　六冊

首に守敬の左の手書題識（楊志補収）あり、

四庫提要称魯玉銭塘人康熙乙酉挙人／官内閣中書舎人是編以呉兆宜所箋庾／開府集合衆手以成之頗傷漏略乃詳攷／諸史云云今観／此書題辞及後跋皆不／著年月大抵此書之刻在康熙末年／呉注之刻則在康熙戊辰魯玉不容不見呉本／而魯玉書首僅載張溥一序並不及有呉／注本又似未見呉注者近日葉／廷琯吹

綱録議魯玉哀江南賦注楚老相逢／泣将何及引漢書両龔事与情事不合不如／呉兆宜注引列子燕人生長于楚云云今按／呉注哀江南賦是諸家集成此書失注出典者当不止此一／条

類選註釈駱丞全集　四巻　唐駱賓王撰　明顧従敬類選陳継儒注陳仁錫参訂　〔明万暦〕刊　四冊

茶色表紙（二五×一五・七糎）。首に睦庵居士湯賓尹の駱侍御文集補註の序、駱賓王の事伝、新刊駱丞集註目録あり。本文巻首より第四行に「類選註釈駱丞全集巻之一／上海顧従敬類選／雲間陳継儒註釈／呉郡陳仁錫参訂」と題す。単辺（二一・二×一三・四糎）有界九行、行廿字。注小字双行。版心白口「駱丞集註　巻之幾　（丁付）」。

寒山子詩集一巻附豊干拾得詩一巻　唐釈寒山撰　（附）釈豊刊・釈拾得撰　〔江戸〕影写宋淳熙刊本　一冊

森志に姫路河合元昇蔵と著録され、現在宮内庁書陵部の架蔵となっている宋槧本（島田翰校訂本、影印本あり）を影鈔せる薄葉斐紙本。「小島氏／図書記」「侯／宋」（壺形）等の蔵印あり。

*分類補註李太白詩　二五巻（首目・巻一補鈔）　唐李白撰　宋楊齊賢集注　元蕭士贇補注　〔元末明初間〕刊　覆元至大三年余氏勤有書堂刊本　八冊

淡香色表紙（二三・五×二〇糎）。首目・巻一は摹写であるが、元刊本によったのではなく、蕭士贇序を欠く。毎巻首尾「分類補註李太白詩巻之幾」と題す。双辺（一九・七×一二・七糎）有界十二行、行廿字。注小字双行、行廿六字。版心線黒口「李詩註巻幾　（丁付）」。巻廿五末題の次に或は刊記があったかと思われる部分が切りとってある。所々朱点朱引、僅かながら朱筆返点が附される。この本を楊守敬や故宮博物院善本書目は元至大三年余氏勤有堂刊本と録するが、宮内庁書陵部・静嘉堂文庫等蔵の同本と比較するに、その覆刻であって、静嘉堂文庫蔵の残本元刊本と同版である。この本は印面にやゝ磨滅が見られ、刷印は明に下るか。「読杜／艸堂」等の印あり。楊志補著録。巻二首に別紙一葉を附綴して光緒十四年の左の守敬の手書題跋（楊志補収）がある。

此即建安余氏勤有堂原刊本其／目録末有余氏篆文木記此本欠目録及第一／巻余得之寺田弘拋森立之訪古志有／楓山官庫本巻末有至大庚戌余志安刊／于勤有堂記此本巻末将木記挖去不知何／故案楊蕭二家皆只注李詩不注其文故／愛日精廬蔵書志及楓山官庫皆只詩二十五巻即明許自昌刊本亦然／唯明郭雲鵬本有三十巻然自／二十六巻以下皆題呉会郭雲鵬編次則／知附雑文五巻出郭手也　四庫提要／著録為三十巻不知後五巻出何人且疑／是楊蕭所為蓋未見此元刊本也／光緒戊子五月十一日守敬記

同　〔明〕刊　一〇冊

茶色表紙（二四・八×一五糎）。首に至元辛卯（前至元廿八年）簫士贇（ママ）の序（首二丁欠）及び目録があり、目録末に木記の匡郭のみが刻されている。本文初・二・三行に「分類補註李太

白詩巻之一／(低六格)春陵陽斉賢子見　集註／(低六格)章貢蕭士贇粹(マヽ)可　補註」と題する。単辺（一九・四×一二・六糎）有界十二行、行廿字、注小字双行、行廿六字。巻廿五は第廿二丁まであって、以下の廿三葉を欠く。朱句点朱圏点の書入が僅かに附さる。本版は前掲本の系統で、版式はその甚だ粗雑な覆刻に似ているが、直接の覆刻ではなく、国立中央図書館蔵本（未見、元至大四年建安余氏勤有堂刊本と著録するが、書影から察するに、明かに勤有堂刊本ではなく、前掲の覆勤有堂刊本より更に版式が崩れた、明に入った同本の覆刻本）に基いた覆刻と思われる。両本ともに巻一の題署の「粹可」が「粹」に誤刻さる。但しこの本は文字が略体に変えられているものが多い。「備前河本／氏蔵書記」「小房／李山」「子孫／永保」（陰刻）等の印あり。楊志補著録。首に別紙を補って左の楊守敬の手書題識（楊志補収）あり。

此為明中葉重刊元建安余氏勤／有堂本目録末空格即勤／有堂木記翻刻者挖除耳巻首／蕭士贇一序自郭雲鵬玉几／山人許自昌刻本皆逸去近日海／昌蔣光煦東湖叢記始從／元刊本録出此本序亦有残欠／拠元刊本補録之　守敬

郭雲鵬本玉几山人雕刻雖佳然／刪除注文過甚玉几山人及許自昌本／亦略有刪除非蕭氏原書／固当以此本為拠也（以下この本の蕭序の首の欠葉の部分を補写）

同　三〇巻（詩二五巻雑文五巻）　（文）明郭雲鵬編

明嘉靖二二年刊（呉会郭雲鵬宝善堂）　六冊

茶色表紙（二七・五×一六・七糎）。白綿紙本。首に唐李陽冰撰唐翰林李太白詩序、宋咸平元年楽史述別集序、李華撰故翰林学士李公墓誌并序、劉全白撰唐翰林李君碑記、宋敏求題後序、曾鞏後序、次に目録あり、目録末に「嘉靖癸卯／春元日宝／善堂梓行」の篆書単辺木記がある。本文第一より第四行に、「分類補註李太白詩巻之一／(以下低五格)春陵楊斉賢子見集註／章貢蕭士贇粹可補註／呉会後学郭雲鵬校刻」と題し、巻末「類次李太白文巻之三十終」と題し、次に雲鵬の重刻李翰林集後跋を附す。左右双辺（二〇×一三糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心白口「李集巻幾　（丁付）」。朱点朱引、少しく墨筆訓点が附さる。本書は楊蕭二注の過半を刪削して徐禎卿の説を増す。四部叢刊に影印さる。楊志十六・楊志補著録。首に左の守敬の手書題識（楊志補収）あり。

此本為明嘉靖癸卯呉人郭雲鵬刊／按元刊楊蕭補注本只詩廿五巻無雑／文此并雑文為三十巻観巻末雲鵬自／跋知係雲鵬所為　天禄琳琅載此本／欠雲鵬跋遂疑雲鵬為書賈誤也／守敬記

同　二五巻附唐翰林李太白年譜一巻　（年譜）明蒲仲邕編　明嘉靖二五年刊（玉几山人校刊）一二冊

茶色表紙（二五・五×一六・五糎）。首に重刊序（首一頁欠）、李陽冰序、楽史後序、劉全白撰唐翰林李君碑記、宋敏求後序、曾鞏序、元豊二年毛漸校正題唐翰林李太白詩序、蕭士贇の序例、蒲仲邕編唐翰林李太白年譜、次に目録あり。本文巻首より第四行に、「分類補註李太白詩巻之一／(低一格)古賦八首　春陵

楊斉賢子見集註／(低七格)章貢蕭士贇粹可補註／(低五格)大明嘉靖丙午玉几山人校」と題す。双辺（二一・一×一一・九糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心白口「李集巻幾　（丁付）」。楊志補著録。首に左の守敬の手書題識（楊志補収）あり、

此本為明嘉靖丙午玉几山人校刊巻首有重刊序後于郭雲鵬刊本三年板式与郭本／同而注文但略有刪節不如郭本之甚亦僅有詩二十五／巻不刻雑文後来許自昌刊本即従此本出也

同　明許自昌校　〔明万暦三〇年序〕刊　六冊

淡縹色空押行成表紙（二六×一六糎）。首目ほぼ前掲本に同じ。本文巻首より第四行に「分類補註李太白詩巻之一／(低八格)春陵楊斉賢子見集註／(低八格)章貢蕭士贇粹可補註／(低七格)明長洲許自昌玄祐甫校」と題す。左右双辺（二一・五×一四糎）有界九行、行廿字、注小字双行。版心白口「李詩補註　巻幾　（丁付）」。楊志補著録。首冊見返に光緒十四年の左の守敬の手書題跋（蓋志補収）あり。

明長洲許自昌刊本許君好刻古書／此蓋合工部集同刊者以楊蕭元／刊本照之注文亦多刪略蓋原于／嘉靖丙午玉几山人刊本也／戊子守敬対校記

但しこの本は首目に欠丁があり、年譜の前の万暦壬寅立秋日呉門許自昌題の「刻李杜全集小引」を欠いている。本版は集千家註杜工部詩集と併せて開版されたものである。

＊集千家註批点杜工部詩集　二〇巻文集二巻年譜一巻

附録一巻　唐杜甫撰　宋劉辰翁評点　元高楚芳編輯

注　〔元〕刊　二三帖

後補漆塗板表紙。題簽の「元槧元印杜工部集」は楊守敬筆。一丁毎に匡郭内のみを厚紙の台紙（三〇×二一・一糎）に貼って、折帖に改装さる。首に大徳癸卯（七年）冬廬陵劉将孫尚友の序、杜工部年譜、次に「集千家註批点杜工部詩集目録／須溪先生劉会孟評点」と題する目録があって、以上一冊をなし、次に元稹の唐杜工部墓誌銘以下の伝記遺事を輯し「集千家註批点杜工部集附録」と題して一冊をなす。本文巻首・第二行に「集千家註批点杜工部詩集巻之一／(低八格)須溪先生劉　会孟　評点」と題する。殆ど毎巻末題の次に「杜工部詩巻之幾補遺」と題して補遺を附す。文集は首に「集千家註批点杜工部文集目録／須溪先生劉会孟評点」と題する目録あり、本文首行「杜工部文集巻之一」と題する。左右双辺（二〇・五×一二・八糎）有界十三行、行廿三字、注小字双行。版心線黒口「杜詩（或は杜）幾　（丁付）」。全巻に室町期の朱筆の句点朱引訓点が附され、所々墨筆の書入が存する。注文は多く朱点朱引のみ。この本早印にして印面極めて清爽。寺田望南の蔵印あり。楊志十四・楊譜十910著録。首に光緒九年の守敬の左の手書題識あり。

元槧元印本集千家注杜詩二十巻文集／二巻首有元大徳癸卯劉将孫序次／目録前題須溪先生劉会孟評点／次附録各家序跋及須溪評論次年譜／以下唯巻一題会孟評点餘巻幷無之／拠将孫序(将孫係会孟之子)知此本為高楚／芳所編蓋楚芳刪次各家之注而附以／会孟評点也其詩亦分年編次而与魯／訔黄鶴本皆不合明代白易

山人金鸞／許自昌等所刻皆從之出而幷遺劉将孫序遂／不知其編此本者為何人竹垞竟謂出／之蔡夢弼尤失考矣　四庫著録本但称前載王洙王安石胡宗愈蔡夢弼四／序知其所見亦明刊本蓋此四序原在附／録中明刊本删存此四序並劉会孟総／評十一則亦尽删之篇中評語竟不題／会孟之名皆庸妄人所為　提要引／宋犖謂杜詩評点自劉辰翁始劉本／無注元大徳間有高楚芳者删存諸／注以劉評附之此本疑楚芳所編也是則／　国朝唯宋牧仲得見此本（天禄琳瑯所収／亦白易山人本）／今又二百餘年余始従日本得之以印／証牧仲之説亦一快也　光緒癸未秋七月／宜都楊守敬記於東京使館（印）

又　一二冊

淡香色表紙（二五・五×一五・四糎）。裏打補修を加う。前掲本と同版であるが、少しくそれより後刷にして、但し年譜を文集と合綴し、附録を目録の次において、首目一冊となす。全巻に室町期の朱点朱引墨訓点が附され、諸書よりの抄録や注記の書入が存する。寺田望南等の蔵印あり。

集千家註杜工部詩集　二〇巻文集二巻附録一巻　唐杜甫撰　〔元高楚芳輯注編〕　明明易山人校　明嘉靖一五年刊（明易山人）　一二冊

香色表紙（二六・六×一六・三糎）。白綿紙本。首に王洙撰杜工部詩史旧集序、王安石撰杜工部詩後集序、胡宗愈撰成都草堂詩碑記、蔡夢弼撰杜工部草堂詩箋跋、並に目録あり。本文首・第二行「集千家註杜工部詩集巻之一／（低五格）大明嘉靖丙申明易山人校刻」と題す。文集は首に「集千家註杜工部文集目録」をおき、本文首「杜工部文集巻之一」と題し、巻二末題の次に「集千家註杜工部詩集附録」を附する。双辺（二一・八×一三糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心白口「杜集巻幾　（丁付）」、下象鼻に刻工名あり。全巻に朱句点が附さる。「沼樹／図書」「尾張浅／井氏記」「黄絹／幼婦」や寺田望南等の蔵印あり。

表制集　六巻　唐釈不空撰　釈円照編　慶安三年刊（中野小左衛門）　六冊

大本。楊志十四著録。

元次山集　一二巻　唐元結撰　清黄又・黄晟校　文政四年刊（官版）　四冊

大本。楊守敬による唐文粋・文苑英華との対校書入あり、且つ首に文粋・文苑英華所収目次を記せる別紙を附綴する。「掃葉山／房蔵書」等の印あり。

須溪先生校本韋蘇集　一〇巻拾遺一巻　唐韋応物撰　宝永三年刊（駒井五良兵衛・并河次郎兵衛・村上勘助）　二冊

大本。巻一に楊守敬の宋本との校合書入あり。楊志十四著録。

唐陸宣公集　制誥一〇巻奏草七巻奏議七巻合二四巻　唐陸贄撰　明嘉靖二七年序刊（秀水沈伯咸西清書舎）　五冊

茶色表紙（二六・五×一六糎）。白綿紙本。首に嘉靖二十七

年沈伯咸撰陸宣公文集叙、嘉靖辛酉胡松撰読宣公奏議説、元祐八年進読奏議劉子、権徳輿撰唐陸宣公翰苑集叙、並に目録あり。本文巻首「唐陸宣公制誥巻之一」と題す。左右双辺（一九×一三糎）有界九行、行十八字。版心白口「制誥幾　（丁付）」。江戸後期の朱筆校字書入あり。寺田望南等の蔵印あり。

*五百家註音辯昌黎先生文集　四〇巻　唐韓愈撰　〔宋魏仲挙編〕　〔南北朝〕〔元和〕刊　二〇冊

香色表紙（二六・七×一九・四糎）。裏打補修を加え、改装の際天地を裁ったので、首書の書入の上端がきられている。巻首「五百家註音辯昌黎先生文集巻第一」と題し、序目や撰者名の題署がない。末題には「新刊五百家注音辯昌黎先生文集」「韓文」「五百家註韓文」と題するのもある。左右双辺（二一・九×一七・二糎）無界（有界僅に混ゆ）、毎半葉十行、行約十六乃至十九字不等、注小字双行、行廿三字。版心小黒口「韓文幾　（丁付）」。本版は後掲の嘉慶元年兪良甫刊の「新刊五百家註音辯柳先生文集」と版式字様を同じくし、両集が揃いで出版されるのが、元明坊肆版の習慣であったから、この版も嘉慶前後の同じ頃に兪良甫によって刊行されたものと推定されている。この本には補刻が加っている。巻卅九首一葉補写。室町期の朱筆の句点朱引訓点が附され、行間眉上に書入注（仮名注もかなり多く混ゆ）があり、外に時代の下る別手の校字注も加っている。「大／通」「江戸市野光／彦蔵書記」「小島氏／図書記」の印あり。楊譜十12著録。

同　〔元和〕刊　古活字版　一五冊

香色艶出空押行成表紙（二八・八×二一糎）。外題に「韓文公全集幾」と署し、右に目録外題を貼附。巻首「五百家註音辯昌黎先生文集巻第一」と題し、前掲の旧刊本の翻印である。双辺（一九・七×一二・一糎）無界九行、行十七字、注小字双行、版心粗黒口「韓文幾　（丁付）」。朱筆句点朱引（墨筆句点も混ゆ）墨筆訓点（多くは返点のみ）が附されている。「伊沢氏／酌源堂／図書記」「松本氏／暴書印」「勝鹿文庫」の印あり。楊譜十13著録。

増広註釈音辯唐柳先生集　四三巻別集二巻外集二巻附録一巻　唐柳宗元撰　宋童宗説注釈張敦頤音辯潘緯音義　〔明〕刊〔明〕修　五冊

香色地草花文様表紙（二四・七×一五・六糎）。首に乾道三年陸之淵の柳文音義序、劉禹錫の唐柳先生文集序、増広註釈音辯唐柳先生集諸賢姓氏、増広註釈音辯唐柳先生集目録あり。巻首より第四行にかけて、「増広註釈音辯唐柳先生集巻之一／（以下七格低）南城先生童宗説註釈／新安先生張敦頤音辯／雲間先生潘緯音義」と題する。外集の次に附録一巻を附す。双辺（一八・一×一二・二糎）有界十三行、行廿三字、注小字双行。版心粗黒口「柳又幾　（丁付）」、修補刻には下象鼻に陰刻の刻工名あるが、原刻には殆どない。本版は印面磨滅せる原刻と新しい補修の刻とが混り、巻廿七までは全て修補の刻であるが、巻廿七の末一葉と巻廿八・廿九の両巻は全て原刻の葉で、以下は混在

する。本書は宋末から明中期に至る間建陽の諸書坊に於て、韓文と共に、幾種もの版が続刊され、その全てが覆刻と遞修の方法を重ねた為に、諸版行款版式を殆ど同じうしてその関係が極めて複雑で、その異同が識別し難い。斯道文庫にこの本と行款を同じうする元刊明印本を蔵し、またその覆刻版も有する。後者には諸賢姓氏の末に「正統戊辰（十三年）善敬堂刊」の刊記があり、この正統刊記本と同版には故宮博物院蔵十六冊・十二冊本（諸賢姓氏の葉欠）、中央図書館蔵八冊本（未見、書影によるに同版）、四部叢刊本があり、従来いずれも元刊本とされているが、最初の方は元刊のかなり忠実な覆刻の為に版式字様に元刊か明刊かの区別がつき難いが、後に行くに従って明風が濃厚になって行く。斯道文庫本はかなり後の刷印にかゝり、善敬堂の刊記は追刻の疑いがある。四部叢刊本・中央図書館本にはこの刊記がない。この本の原刻の部分はこの明前期覆元刊本をさらに覆刻した本で、極めて粗笨な刻であるが、まだ元の字様の面影をとゞめている。しかしこの修補となるとさらに覆刻しただけに、元風からは遠く離れ、その字様版式から察するに、恐らく正徳頃の雕板にかゝると思われる。所々朱点朱引朱圏点が書入さる。楊譜十16著録。

*新刊五百家註音辯唐柳先生文集　四五巻　唐柳宗元撰
〔宋魏仲挙編〕　嘉慶元年兪良甫刊　一四冊

後補茶色表紙（二八×二〇・六糎）。裏打補修を加え、原料紙幅二七糎。首に新刊五百家註音辯唐柳先生序伝碑記紀あり。目録を欠く。巻首「新刊五百家註音辯唐柳先生文集巻第一」と題するのみで、撰者名の題署なし。左右双辺（二〇・二×一七糎）有界十行、行十八字、注小字双行、行廿三字。版心粗黒口「柳文幾　（丁付）」。第四十五巻末、末題の前に左の木記がある筈であるが、この本は巻廿五全巻と巻四五の末二丁が補写となっている。

祖在唐山福州境界／福建行省興化路莆田／県仁徳里台諫坊住人／兪良甫久住　／日本京城阜近幾年労／鹿至今喜成矣／歳次丁卯仲秋印題

即ち元より帰化せる刻工兪良甫の刊刻になるものである。室町期の朱筆の句点朱引墨筆訓点や所々朱筆ヲコト点、朱訓点、或は藍筆圏点も加えられ、訓点は一手ではなく、且つ注や校合の書入も入っている。楊譜十14著録。

*文集　存巻三・四（新楽府上下）　唐白居易撰　〔近世初〕摹写　一冊

丹表紙（二七・二×二〇・七糎）。題簽に「白氏文集巻第三」と題し、「増島氏／暴書記」の朱印をおす。字面高さ約一九・五糎。毎半葉九行、行十三字。所々朱句点朱引墨筆の訓点六声点濁点（○○混用）を附し、イ本との校字注を眉上行間に書入、また江戸後期の朱筆校字の書入がある。旧鈔本の摹写と思われ、恐らく祖本にはヲコト点が指してあったのを、此は省いたものであろう。この本は宋以後のテキストとは異る、我が国に旧く伝承せる李唐の旧形を伝え、訓亦古訓である。巻首「文集巻三

新楽府上并序諷諭三」、第二行低一格「雑言凡二十首　大原白居易」と題署す。我が国では新楽府が特に愛誦されたので、文集の巻三・四のみを書写せる旧鈔本が多く、此は決して文集の零本ではない。「増島氏／暴書記」の印あり、増島蘭園旧蔵。竹陰書屋蔵として森志六著録。

*又　〔江戸末〕影写　一冊

縹色表紙、薄葉裲紙、襯紙をはさむ。前掲本の臨写。但し江戸期の朱校字は前掲本のそれと同筆らしいが、多少の出入が見られる。扉に「古文摹写／白氏文集　三四」と題する。「新宮城書蔵」の印あり。

*長恨歌伝・長恨歌・琵琶行附野馬台詩　唐白居易撰（歌伝）唐陳鴻撰（野馬台）旧題梁釈宝誌撰〔闕名者注〕〔室町〕写　一冊

本文共紙表紙（二七×一九・五糎）。外題に「長恨歌琵琶行野馬台」可敬」と。単辺（一九・八×一三・八糎）無界、毎半葉九行、行廿字、注小字双行、行廿乃至廿二字。層格を設け、幅五糎。朱点朱引墨筆訓点を附し、上眉行間・護葉紙に書入注（和文注を含む）精密。この四種合写の室町鈔本は比較的伝存本が多い。各篇に附された注の撰者名は明かでないが、恐らく邦人の作と云われている。

*樊川文集夾註　存巻一・二　唐杜牧撰〔朝鮮徐居正〕注　朝鮮旧刊　二冊

丹表紙（二六・九×一七・五糎）。序目なく、巻初第一・二行に「樊川文集巻第一　夾註／（低五格半）中書舎人杜　牧字牧之」と題し、次行低一格小字双行を以て新唐書本伝を引載し、次に目録を列して本文に接属し、末題の次に添註を附する。双辺（二一・二×一三・三糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心細黒口「川巻幾　（丁付）」。森志六・楊志十四・楊譜十18著録。森志に曰く「此本板式陋劣然彷彿存古本之体」と。又楊志に曰く「注頗詳贍巻末又附添注注中引北宋人詩話説部又引唐十道志春秋後語廣志等書甚多知其得見原書非従販鬻而出当為南宋人也自来著録家無道及者豈即朝鮮人所撰与惜所存僅二巻不得詳証之耳森立之訪古志称為宝素堂旧蔵顧無小島印記当是偶未鈐押耳」と。守敬はこの注の作者を朝鮮人に非ずと推測しているが、此には疑念がある。

成簣堂文庫本（未見）は四巻外集一巻の完本で、「成簣堂善本書目」によれば、

朝鮮古刊本。無序。首行題「樊川文集巻第一」、題下に「夾注」、次行に「中書舎人杜牧字牧之」とありて、以下伝本を載す。単辺。八行大字十五六字。注文双行二十二至四字。巻一末「永楽十四年丙申二月日公州開板」二末「乙未年公山開板」、外集末には「永楽十四年二月　日忠清道公州開板」の一行及び申槩等列銜、校正・書写・監考・刻手の名竝に永楽十四年通訓大夫知寧山郡事兼勧農兵馬団練使杞溪兪顕の跋あり。此書板式古拙、加うるに伝本頗る少し。羅振玉本書に識して、注内に佚書多きことゝ、元明の際朝鮮人の撰に出づる

書なること〻を云へり。版心小黒口、両魚尾間に川巻幾とあり、丁数との間に多く刻工の名を存す。蘇峰随筆参照。

と。成簣堂本とこの本とは明かに別版で、この本も古拙であるが、恐らくこの永楽十四年公州刊本に基いた翻刻と思われる。また夾注の作者を推測せしめる一資料が「古鮮冊府」（第三冊一四二九頁）にある。同書は「杜樊川集唐杜牧著　朝鮮徐居正註」と標して、

杜樊川集　雑文四巻　雑誌二巻

徐公居正註是時　而其外集八十餘首不与焉　又難処闕之　可謂時見一班者（車天輅五山説林　会本六〇一丁）

と録して、この注の撰者を徐居正としている。後記の「精選唐宋千家聯珠詩格」（朝鮮刊）の注の作者もその本の跋によれば、この徐居正の原撰たることが記されている。従うべきであろうか。本書の蓬左文庫・内閣文庫・京大人文科学研究所・北京図書館蔵朝鮮刊本は完本で、皆文集夾註四巻外集夾註一巻に作る。

樊川文集　二〇巻外集一巻別集一巻　唐杜牧撰　清光緒二二年刊（成都楊寿昌）　用宜都楊氏景日本楓山文庫蔵宋刊本景刊　六冊

守敬が書手をして楓山官庫本を影摹せしめた鈔本を底本とせるもので、守敬は北宋本と言っているが、実は明刊覆宋で、現在宮内庁書陵部に架蔵される。守敬の手校書入が存する。楊志補参照。

唐劉蛻集　六巻　唐劉蛻撰　明呉馡編　明崇禎一六年序刊（閩中黄燁然）　一冊

後補縹色空押亀甲繫ぎ表紙（二五×一五糎）。首に崇禎癸未（十六年）黄燁然の劉蛻集序、呉馡の刻唐劉蛻集紀事、次に「明黄燁然黄也剛同編輯」と題署する唐劉蛻集目録がある。本文巻首「唐劉蛻集第一巻」と題す。双辺（一七・一×一一・六糎）無界、毎半葉七行、行十六字。版心辺欄なく、「劉蛻集幾巻（丁付）」。天啓四年呉馡問青堂刊本に比するに、その覆刻に近い。巻末に次の小野鶴山の識語あり。

余得劉蛻集以読而愛之／其筆端鼓舞宛転太／奇者亦有常山之蛇勢／乎余謂与韓柳同轍而不媿之矣一読而夫心胷快活者乎丙辰之歳長至／子半吹燈而書／鶴山老人（印、印文「宜卿」）

鶴山は若林強斎の門人で小浜藩に仕えた小野鶴山（明和七年歿）と間違われやすいが、この小野鶴山は人見竹洞（卜幽軒の姪、人見氏本姓は小野氏、名は節、字は宜卿、鶴山とも号し、幕府の儒官、元禄元年歿）である。また巻末本文末句下の小島瞻淇の朱筆識語に「拠海保漁村有読本句逗卒業朱圏別于先儒也／時乙未仲冬廿有七日瞻淇誌」と。「小野節／家蔵書」「宜爾／子孫」（陰刻）「小島氏／図書記」「葆素／所蔵」「葆素堂／蔵鶩／人秘笈」「向黄邨／珍蔵印」等の印あり。森志六・楊志十四・楊志補・楊続譜著録。守敬の文粋との対校書入あり。前表紙見返に光緒十三年の次の守敬の朱筆手書題識（楊志補収）が存する。

是書　四庫著録称文泉子一巻明崇禎庚辰閩人韓錫所編此則／香城呉馡所輯云原本得之于桑悦天啓甲子呉緋又重加搜輯者也至崇／禎癸未閩中黄燁然又為之補綴重刊合孫可之集行世按黄本／後于韓錫本四年同為閩人顧不知先有韓本今韓本流伝亦／少僅有別下斎重刊本余架上無韓本未知与此本異同若何／他日当得韓本一校之　此本根源於文粋文苑故篇中亦以／二書校異同而脱誤復不少

劉本長沙人故文冢銘自題甚明他書皆拠其流寓著録非也守敬光緒丁亥丙月

又按明崇禎時烏程閔斎伋亦刻此集名日拾遺集惜未見士礼居有之

孫可之文集　一〇巻　唐孫樵撰　明黄燁然校　〔明崇禎〕刊（黄燁然）　一冊

茶表紙（二四・九×一四・九糎）。首に正徳丁丑王鏊の序、中和四年孫樵自序、「明黄燁然也剛全編輯」と署する目録あり。本文首「孫可之文集巻第一」と題す。双辺（一七×一一・五糎）無界、毎半葉七行、行十六字。版心辺欄なく、「孫樵集幾巻　（丁付）」。前掲唐劉蛻集と同時に上梓された思われ、またこの本も天啓刊呉氏問青堂刻本と款式を同うし、殆どその覆刻と言ってよいが、僅少の差異が見られる。巻末に左の小島宝素及び瞻淇の朱筆手識がある。

天保甲辰夏読完句以朱圈蓋別　先儒句／読也質識

据海保漁村翁読本与広瀬仁卿仝校第七巻已下旧无／句逗今亦以圈点別之於先／儒云　安政六季十月朔也葆素／後人瞻淇

朱筆の句点圈点が附され、また楊守敬の唐文粋との対校書入も存する。森志六・楊志十四・楊志補・楊続譜著録。「小野節／家蔵書」「「宜爾／子孫」「小島氏／図書記」「葆素／所蔵」「葆素堂／蔵驚／人秘籍」「向黄邨／珍蔵印」等の印あり。前表紙見返に次の守敬の朱筆手書題識（楊志補収）あり。

此本蓋従王済本重刊者顧澗蘋跋宋本称龍多／山録樵起辛而遊洎甲而休又刻武侯碑陰云独謂武侯／治于燕夷皆仍済之之誤未能訂正余嘗以文粋／所載樵文十篇校之此本尤多脱誤然勝於汲古本／遠矣覩樵自序前不標孫可之文集序題銜在序／後猶是旧式異于妄改者也　光緒丁亥守敬記

また後表紙見返に

此本為小島尚質所蔵見森立之経籍／訪古志蓋彼土無宋本因不得不以此／為秘書

新板増広附音釈文胡曾詩註　三巻　唐胡曾撰　宋胡元質注　〔江戸前期〕写　一冊

茶色刷毛目表紙（二七・六×一九・二糎）。字面高さ約廿二・五糎。毎半葉十四行、行廿字。注文低一格。朱点朱引を附す。款式内容通行〔寛永〕刊本に同じ、その写しか。「弘文学士院」「小島氏／図書記」「函崎庫印」あり。森志六著録。巻末に左の識語あり。

寛政八年辰六月八日拝領之／中嶋常足

天保七年十一月於浅草駒形堂側骨董舗／購得之　田沢周任（印）

唐皮日休文藪（皮子文藪）　一〇巻　唐皮日休撰　明許自昌校　享和二年刊（官版）　三冊

大本。楊守敬が朱墨両筆を以て唐文粋・文苑英華等の所収詩と対校せる書入周密。「宋」の符号も見える。又遺詩を別紙に採輯して附綴する。

和靖先生詩集　二巻　宋林逋撰　貞享三年刊（京・茨木多左衛門）　一冊

大本。江戸時代の朱筆圏点、朱墨両様の句点や校字の書入があり、また遺詩を眉上に補録する。「掃葉山／房蔵書」（東条琴台）「館氏石香斎／珍蔵図書記」（館柳湾）「読杜／艸堂」の印あり。楊志十四著録。

欧陽文忠公全集　一三五巻　宋欧陽修撰　明嘉靖三四年序刊（江西藩司陳珊）〔明〕修　二四冊

淡茶色表紙（二五・五×一六・五糎）。原題簽「欧陽文忠公全集第幾」。首に嘉靖三十四年陳珊の重校刊欧陽文忠公全集序、天順六年銭溥序、天順五年彭勗序、周必大序、元祐六年蘇軾撰居士集序（附校記）、次に像賛並に欧陽文忠公全集総目がある。本文首「欧陽文忠公全集巻一」と題し、毎巻首に目録あり。左右双辺（二〇・一×一三・五糎）有界十行、行廿字。版心白口「欧文忠公全集巻幾　（丁付）」、下象鼻に刻工名・鈔写名あり。少しく補刻あり、朱墨批の書入が存する。

欧陽文忠公集　一五三巻附録六巻　宋欧陽修撰　周必大編　〔明〕刊　二四冊

原装茶色表紙（二六・七×一七・一糎）、原題簽「欧陽文忠公全集幾（所収目）」。首に周必大序、元祐六年蘇軾撰居士集序、集古録序、像賛・欧陽公本伝、廬陵欧陽文忠公年譜、欧陽文忠公全集総目、居士集目録あり。本文巻首「居士集巻第一　欧陽文忠公集一」と題す。毎巻末題後に編校年月・編校者名・校異を附す。双辺（一九・五×一二・二糎）有界十行、行廿字。版心白口「欧文巻幾（丁付）」。

欧陽先生文粋　二〇巻首一巻遺粋一〇巻　宋欧陽修撰陳亮編　（遺粋）明郭雲鵬編　明嘉靖二六年刊（呉会郭氏宝善堂）　二〇冊

首に元祐六年蘇軾撰六一居士文集序、欧陽文忠公本伝、韓琦撰欧陽文忠公墓誌銘（以上一冊）、蘇子瞻祭欧文忠公文（附諸家祭文）、本伝（重複）、蘇轍撰欧陽文忠公神道碑、祭文（重複）、欧陽先生文粋標目（以上一冊）、神道碑（重複）、墓誌鏡（重複）（以上一冊）がある。以上の如く首目三冊には重複がある。本文首「欧陽先生文粋巻第一」と題する。左右双辺（一七・三×一三・七糎）有界十一行、行廿一字。版心白口「欧陽文粋巻幾（丁付）」。巻廿末題の次に乾道癸巳九月朔陳道書の後序を附し、また「呉会郭雲鵬校／勘刊於宝善堂」の木記がある。遺粋は首に欧陽先生遺粋標目あり、本文初「欧陽先生遺粋巻第一」と題す。単辺有界十一行、行廿一字。版心白口「欧陽遺粋巻幾

（丁付）」。巻末に「呉郭雲鵬／選輯所梓」の木記あり。

蘇老泉全集　一六巻　宋蘇洵撰　〔江戸前期〕写　二冊

丹表紙（二六×一六・八糎）。字面高さ約廿・八糎。毎半葉十行、行十九字。明刊本の伝鈔であろう。「平安堀氏／時習斎蔵」「堀印／正修」「小島氏／図書記」「尚真／私印」等の印あり、堀南湖・小島宝素等旧蔵。後表紙見返に「南雲散人家蔵」の朱筆あり。楊譜十28著録。

＊王荆文公詩　五〇巻首目年譜一巻　宋王安石撰　李壁注劉辰翁評点　朝鮮刊　旧活字版　翻元大徳刊本

一〇冊

渋引丁子色古朝鮮表紙（二九・二×一八・八糎）、表紙裏張に朝鮮旧活字版三体詩註の故紙を使用。首に大徳丙午中秋龍門母逢辰序、大徳辛丑冬劉辰翁嗣子将孫序、王荆公年譜、王荆公詩目録あり、以上首目一冊をなす。この本は本文に入る前に、張宗松乾隆刊本によって、嘉定七年魏了翁序、張宗松重刊王荆公詩箋注略例、王荆文公詩補遺等を薄葉斐紙に臨写して合綴する。本文首・二・三行に「王荆文公詩巻之一／（低十格）鴈湖　李壁　箋註／（低十格）須溪　劉　辰翁　評点」と題す。左右双辺（二二・八×一四・八糎、双辺も混ゆ）有界十一行、行廿一字、注小字双行。圏点附刻。版心細黒口「王文公詩巻幾　（丁付）」。元大徳刊本からの翻印であろう、行款も一致している。「慈昭院」（相国寺塔頭）「梅熟軒」（相国寺塔頭）「仁正妻長昭／黄雪書屋清／玩秘筐之記」（市橋長昭）「賜蘆文庫」（新見正路）「新宮城書蔵」（水野忠央）「向黄邨／珍蔵印」の蔵印があり、蔵印はないが森志には求古楼狩谷棭斎蔵と録し、かくの如く幕末の蔵書家として名声錚錚たる各名家の手を経たのも珍しい。森志六・楊志十四・楊譜十27著録。

東坡先生全集　七五巻　宋蘇軾撰　明陳明卿訂正　〔明末〕刊（文盛堂）　三一冊

封面に「陳明卿太史訂正／蘇文忠公全集／文盛堂蔵□」と刻す。首に呉門頂撰刻坡文忠公全集叙及び東坡先生全集目録あり、巻初首行「東坡先生全集巻之一」と題する。左右双辺有界、毎半葉十行、行十九字。版心白口「東坡全集巻之幾　（丁付）」。

＊増刊校正王状元集註分類東坡先生詩　二五巻（欠巻五・六）附東坡紀年録一巻　宋蘇軾撰　旧題王十朋集注劉辰翁批点　（紀年録）傅藻編　〔元〕刊（廬陵・書坊）　一三冊

後補丹表紙（二六×一七・七糎）。匡郭内のみを切って、別紙に貼附して改装。首目以下の如し。巻初の第一・二行「増刊校正百家註東坡先生詩序／（低八格）状元王公　十朋　亀齢譔」と題し、次に趙夔序、次に「増刊校正王状元集註分類東坡先生詩姓氏／（低五格）状元王公　十朋　亀齢　纂集」と題し、この姓氏の末、尾題の前に「廬陵□□□／□書堂新刊」（□空格）の両行双辺木記がある。次に「東坡紀年録／（低十一格）偃溪傅　藻　編纂」と題し、次に「増刊校正王状元集註分類東坡先生詩目録」

あり。本文初・二・三行に「増刊校正王状元集註分類東坡先生詩巻之一／(低三)宋礼部尚書端明殿学士兼侍読学士贈太師謚文忠公蘇軾／(低一格)紀行　詩九十二種　廬陵須溪劉辰翁批点」と題す。各巻書題或は首四字を欠き、或は先生を欠き、又諸家注とのみ題し、或は註を注に作るもある。双辺（二〇・一×一二・六糎）有界十二行、行廿一字、注小字双行。行廿六字。批点附刻。版心細黒口「坡詩巻幾　（丁付）」。巻廿五の末一葉欠。室町期の朱点朱引、各々別手の朱墨両様の訓点書入が存する。「養谷／堂蔵」「向黄邨／珍蔵印」等の印あり。楊譜十19著録。刊記の「廬陵」の下三字には挖去の跡があるから、廬陵の某書堂刊本の覆刻ではなく、書堂名を削った修刷本であろう。同版には米沢市立図書館・旧成簣堂文庫・国立中央図書館蔵本がある。

＊又　（欠首目）　二四冊

後補紺色表紙（二七・七×二一糎）。原料紙（二四・一×一五糎）より大きい紙を以て裏打。室町期の朱点朱引、朱墨両様の訓点が附され、欄外・行間・遊紙・押紙に、諸書の抄録や五山諸家の諸説の注の書入が周密で、中に脛云（瑞溪周鳳の挫説）刻楮子云（瑞溪）、岩師曰、講云等が見え、私云と自説を記す所も多く、仮名抄の引載も存する。「森氏開万／冊府之記」等の印あり。

同　（欠巻九・一〇）　朝鮮刊　一三冊

渋引縹色表紙（二九・五×二一糎）、包背装、但し今紙縒で綴じて補強さる。首目体式前掲本と同じであるが、紀年録が目録の次におかれる。本文初より第三行に、「増刊校正王状元集註分類東坡先生詩巻之一／(低三)宋礼部尚書端明殿学士兼侍読学士贈太師謚文忠公蘇軾／(低八)廬陵須溪劉辰翁批点」と題する。単辺（二三・七×一七糎）有界十行、行十七字、注小字双行。批点附刻。版心白口「坡詩幾　（丁付）」。寺田望南等の蔵印あり。

山谷内集詩註二〇巻首目一巻外集詩註一七巻首目一巻別集詩註二巻　宋黄庭堅撰　任淵注　（外集）史容注　（別集）史季温注　朝鮮刊　旧活字版　一五冊

渋引丁子色朝鮮古表紙（三四×二一・五糎）、裏張に古刊の故紙を使用。首に紹定壬辰山谷の子黄埒序（補鈔あり）、政辛卯の黄陳詩集註序、紹興乙亥の許尹叙、次に「山谷内集詩註目録年譜附」あり。本文巻初第一・二行に「山谷内集詩註巻第一／(低八)天社任淵　子淵註」と題す。外集は首に嘉定六年銭文子の「蒲室史氏註山谷外集詩序」及び「山谷外集詩註目録年譜附／青神史容」あり、本文初・二行に「山谷外集詩註巻第一／(低十)青神史　容　註」と題す。別集は首に「山谷別集詩註目録／青神史季温註」あり、本文首行「山谷別集詩註巻上」と題す。双辺（二五・一×一七・一糎）有界十行、行十七字、注小字双行。版心白口「山谷某集幾　（丁付）」。少しく補写あり。内集巻三まで室町末近世初間の朱点朱引墨筆訓点が附され、書入がある。「養安院蔵書」「向黄邨／珍蔵印」等の印あり。森志六・楊志十四・楊譜十36著録。

后山詩註　一二巻　宋陳師道撰　任淵注　元禄三年刊
（京・茨木多左衛門）　四冊
楊志十四著録。
淮海先生文粋　一四巻　宋秦観撰　伝宋陳同甫編　清銭謙益校　〔江戸〕写　伝鈔明崇禎六年新安胡潜武林刊
蘇門六君子文粋本　二冊
後補紺色表紙（二四×一七糎）。字面高さ約十八・三糎。毎半葉九行、行十九字。朱筆句点を附す。楊志十四著録。
宗忠簡公集　六巻　宋宗沢撰　明熊人霖校　〔江戸〕写
伝鈔明崇禎中熊人霖校刊本　二冊
縹色空押行成表紙（二七×一八・五糎）。字面高さ約廿糎。毎半葉九行、行廿字。朱墨両様の句点を附す。首に崇禎庚辰熊人霖の宗忠簡公文集序、凡例、目録、次に原序、万暦乙巳の張維枢の重刻序、伝及び附録がある。巻初「宗忠簡公集巻之一／明進賢熊人霖伯甘詮訂」と題す。次の朱筆識語がある。
按簡明目録称為八巻而今此本為六巻則不知巻中文章同異何如也録以俟他日得／善本球記
（巻末一）文政己丑冬仲十一日捧読一過宮本球記
（巻末六）文政庚寅四月書捧読畢宮本球記通計百二十四頁／（墨筆）天保庚子九月念四不息氏自謄
宮本球は篁村の弟、名は元球、号は茶村、常陸の人、業を山本北山に受け、水戸藩に仕えた。朱筆校字及び醒斎按の藍筆校字の書入も存する。楊志十四著録。

誠斎集　存四二巻（江湖集七巻荆溪集五巻西帰集二巻南海集四巻朝天集六巻江西道院集二巻朝天続集四巻江東集五巻退休集七巻）　宋楊万里撰　楊長孺編　〔江戸〕写　伝鈔宋刊本　一五冊
縹色表紙（二七×一八糎）。見返に「楊誠斎集／省堂蔵」と記す。左右双辺（一七・三×一二・九糎）有界十行、版心白口「誠斎集　巻幾」の印刷罫紙を使用するが、巻卅六以下は印刷罫紙ではなく同様の烏糸欄罫紙。毎行十六字。巻首に「誠斎集巻第一／廬陵楊万里廷秀」と題し、毎巻末に「嘉定元年春三月男長孺　編定／端平元年夏五月門人羅茂良　校正」の記名があり、巻四九二の巻末に
文化元甲子秋七月廿四日校正句読卒業／楠軒僧宣典
の識語がある。本鈔本は、建仁寺福聚院旧蔵で今宮内庁書陵部架蔵の宋刊本（一百四十三巻目四巻）の詩集の部の伝鈔本で、所々校字を眉上に標記してある。或は出版せんとした版下書かとも思われる。誠斎集の中で、建仁寺の天章禅師の校訂で東宮勧読録（慶応四年刊）・千慮策（安政五年刊）が刊行されている。天章と宣典とは関係ありそうであるが、明かでなく、後考を俟つ。寺田望南等の蔵印あり。楊志十四・楊譜十48著録。
*名公妙選陸放翁詩集　存前集一〇巻　宋陸游撰　羅椅選　〔南北朝〕刊　一冊
後補縹色表紙（二三・五×一四・九糎）。首に大徳辛丑季夏日適孫愨百拝謹識の序、次に「名公妙選陸放翁詩集目録

前集（墨囲陰刻）／放翁　陸　游　務観　撰／澗谷　羅椅　子遠　選」と題する目録あり。本文巻初・二・三行に「名公妙選陸放翁詩集巻之一　前集（墨囲陰刻）／（以下低六格）放翁陸　游　務観　撰／澗谷羅　椅　子遠　選」と題する。巻二以下は第二・三行の撰編者名題署なく、且つ書名の冠称が巻二以下皆「澗谷精選」に作り、末題は巻二が「澗谷妙選」、他は巻一を除き「澗谷精選」となっている。左右双辺（一八・一×一一・一糎）有界十行、行廿字。批圏点附刻。版心小黒口「陸游前幾（或は陸寺放幾フ、陸放寺幾、詩前幾、陸之）（丁付）」。巻十（第四・五丁）に「伯寿」、巻七（第二・五・六・八丁）に「伯」の刻工名がある。伯寿は兪良甫・陳孟栄等と同じく元末我が国に来朝せる刻工である。本旧刊本は後集八巻（劉辰翁選）と共に刊行されたもので、伝存本極めて尠く、小汀利得氏・龍門文庫（後集巻五至八の零本）蔵本が知られるのみである。首に「真乗禅院」等の印あり。楊譜十49著録。首遊紙に光緒十四年の守敬の左の手書題識がある。

四庫著録放翁詩選有前後／集前集十巻羅椅所選後集／八巻劉辰翁所選又附別集／一巻則取瀛奎律髓所録詩／以補両家之遺者此為日本旧／刻的是拠元刊本重翻毎巻／標題下有前集字様則知原本／亦必有後集而残失之也提要称／此選取去不苟今観所録多沈鬱／之作故当為攷翁別開生面也／戊子四月守敬記

篇中於五律七律五絶七絶拠目但云五言八句四句七言八包四句不称律詩絶句

晞髪集　八巻附録二巻首目一巻　宋謝翱撰　明張蔚然・徐勉校　〔江戸〕写　伝鈔明万暦四六年郭鳴琳跋刊本　四冊

茶色表紙（二六×一五・六糎）。字面高さ廿糎。毎半葉九行、行十八字。朱筆句点を附す。首目を第一冊とし、巻初題署第三・四行に「明邑令張蔚然／邑人徐勉訂」、第五行「邑人郭鳴琳校」と署し、巻末に万暦歳在戊午初夏望日邑後学郭鳴琳謹跋の重刻晞髪集跋がある。巻末に本文と同手の朱筆識語に「正徳癸巳駟春日挑原一校点朱了」と。楊守敬の陸大業本との対校朱筆校字の書入が存する。楊志十四著録。巻末に守敬の光緒十一年の左の手書題識がある。

右徐興公勉所輯謝翱晞髪集万暦戊午張蔚然刊本／按興公以博洽名一世所著筆精至今為士林宝重此集蓋／拠万暦繆氏刊本重訂者巻中所載序跋有弘治間儲／巏本嘉靖間程煦本万暦間凌琯本然則謝集在明代已四五刻矣至／国朝平湖陸大業刻此集但拠抄本及万暦時歙人張氏刊本（此刊本有外集新集称為謝公降乱之作非蔚然本也）其巻端校語又有所謂／坊本者不知所指為程凌諸本否也今以陸本校此本／則此本多出智者寺一首小華陽亭一首過臨安／故宮一首雨中怨一首然見陸氏不見興公此本今／陸氏刊本亦不多見世有好事者合此本与陸本／重為校刊尤為表章遺民之要事也／光緒乙酉七月四日楊守敬記

淵穎呉先生集　一二巻附録一巻　元呉萊撰　明宋濂編　明嘉靖元年序刊（杭州・祝鑾）　四冊

茶色表紙（二七・五×一六・二糎）。白綿紙本。首に嘉靖元

年祝鑾の重刻淵顕先生集序、至正十二年胡翰序、劉基序、胡煦序、陳衍磐生記の跋（補写）、目録あり、目録の次に男呉士諤跋を附し、跋後に「金華後学宋璲謄写」と署する。本文巻初「淵顕呉先生集巻之一（隔五格）門人金華宋濂編」と題す。左右双辺（一七・七×一一・八糎）有界十一行、行廿二字。版心白口「淵顕集巻第幾　（丁付）」、丁数の下に刻工名を有する葉あり。元至正年間宋璲写刻本の覆刻で、四部叢刊本はこの嘉靖刊本の影印。「七十二／蓮峰／中人」（陰刻）等の印あり。楊志十四・楊続譜著録。

＊雪廬藁　元釈克新撰　〔南北朝〕刊　一冊

後補丹表紙（二二・三×一四糎）。首の至正甲辰周伯琦温翁序（三丁）欠。巻首・第二行に「雪廬藁／（低七格）江左外史番易釈克新仲銘」と題し、末題「雪藁藁詩終（隔七格）嵯峨印行」と署す。双辺（一七・一×一一・六糎）有界十行、行十八字。版心白口「雪廬藁詩（或は「雪」或は「雪廬藁」）　（丁付）」、本文二十二丁。末題下の「嵯峨印行」の四字は、「五山版之研究」によれば、「天龍寺（或は臨川寺）関係の開版を意味する」と。室町期の朱点朱引朱圏点が附されている。「斎」（墨印）等の蔵印あり。この旧刊本の伝存は極めて稀少で、他に内閣文庫蔵本（巻末一葉補写）と建仁寺両足院蔵本（序欠）との二部のみが知られる。

総集類

＊文選　存巻一　梁蕭統編　楊守敬令摹写鎌倉旧鈔本

一冊

後補淡茶色表紙（二八・六×二二・二糎）。字面高さ約廿二糎、毎半葉六行、行十三字。この本は森志に温故堂蔵として著録された鎌倉旧鈔巻子本の影鈔本で、この原本は森立之を経て守敬が入手する所となったが、後に如何なる理由か手離され、後転じて我が国にもどって、今上野家の蔵に帰している。首に顕慶三年李善の文選注表及び昭明太子文選序あり、序後本文に接し、巻首「文選巻第一賦甲」、次行「京都上　班孟堅両都賦二首并序」、第三行「張平子西京賦一首」と題し、巻末一行を隔てゝ「文選第一」と題する。墨筆の訓点六声点濁点（ｏ）を附すること詳細で、行間眉上には音義注校語や李善・五臣注その他よりの抄録の書入注も移写されているが、原本のヲコト点と紙背注は移写されていない。

この本は注がないが、李善注表を首に冠しているので、森志は「蓋即就李本単録出本文者」となしたのに対し、守敬は之を非とする。即ち善注本は六十巻であるが、此は三十巻の旧形で、本文の字尽くが必しも善注本と合わぬものがあり、傍記首書の校語にも善注との対校を含んでいる。「蓋日本鈔古書往往載後来之箋注序文如孝経本是明皇初注本而載元行冲孝経疏序其他経書経注本又往往載孔達顕之疏於欄格上蓋為便於講読也鈔此本者固原于未注本而善注本已通故亦以冠之也」と。森志六・楊志十二著録。首に次掲本の題跋である楊志所収「古鈔文選残本二十巻」の版下書二丁が附綴してある。故宮博物院善本書目はこの

本を次掲の無注本室町鈔本に併せ配補しているが、此は別々にすべきである。

*同　残本存二〇巻（欠巻一―四、一一―一四、一七・一八）〔室町初〕写　一〇冊

香色表紙（二八・五×二二糎）。裏打補修を加う。字面高さ約廿五糎。毎半葉八行、行十七字。巻首「文選巻第五賦戊梁昭明太子撰」と題し、毎巻次行以下目を列して本文に接属する。末題「文選巻第幾畢」と。朱点朱引朱ヲコト点（紀伝点、巻五・六及び廿六・冊の後半のみ）墨筆の訓点四声点濁点を附し、訓には所謂文選訓みが多く、異訓を別記し、校注音義注や善注五臣注等よりの引載書入がある。書入は巻五・六が詳しく、他は少く、校注旁記には「イ作」「或本」「本无」「才本」「五本」「善本」等の符号が見える。巻五・六には守敬の朱墨の校字書入も入っている。毎冊題簽に「文選幾」と題し、右に所収目次を記し、巻十九・廿の冊の題簽下に「青松」の墨署あり、即ち清原国賢の手沢本たることを示し、「和学講談所」「新宮城書蔵」の印あり。楊志十二・楊譜九3著録。この本は無注三十巻本の残本にして、守敬曰く、

此無注三十巻本蓋従古鈔巻子本出并非従五臣善注本略出何以知其然若従善注出必仍六十巻若従五臣出其中文字必与五臣合今細校之乃同善注者十之七八同五臣十之二三亦有絶不与二本相同（中略）字大如銭必従古巻抽出也今中土単行善注原本已不可得尚何論崇賢以前其中土俗字不堪縷挙然正惟其如此以深信其為六朝之遺

文選　六〇巻　梁蕭統編　唐李善注　〔明〕刊　覆弘治元年唐藩刊本　一六冊

茶色表紙（二七×一六・五糎）。首に唐李崇賢上文選注表、呂延祚進五臣集注文選表、昭明太子撰文選表、余璆序、次に文選目録がある。本文巻初第一行「文選巻第一」、第二行低一格「梁昭明太子選」、第三行低八格第四行低九格を以て「唐文林郎守太守右内率府録事参／軍事崇賢館直学士臣李善注上」、第五行（低八格）、六行（低十格）に「奉政大夫同知池州路総管府事張／伯顔助率重刊」と題す。双辺（二一・六×一四・二糎）有界十行、行廿二字、注小字双行。版心粗黒口「文選幾（丁付）」。下象鼻に陰刻の刻工名が所々ある。本版は、明弘治元年唐王府が元の池州路総管府事張伯顔が宋淳熙尤延之貴池刊本を翻刻せる版を、さらに覆刻せる版で、一見唐藩本と見分けがつき難いので、諸目録に唐藩刊として録されている。斯道文庫へ寄託の坦堂文庫には唐藩本の覆刻本があり、両本は共に唐藩本の覆刻であるが、夫々別版で、この本の方が唐藩原刻本に近い雕刻である。共に唐藩本にある首の成化廿三年の重刊文選序、末の弘治元年の跋重刊文選後がない。首冊表紙見返に左の朱筆識語が記されている。

鄧汝高所蔵書其首巻印章乃何雪漁筆也中間披閲或用圈／点皆不終編而罷豈鄧公有此踈嬾耶抑諸郎狡獪乎当汝／高督学雲南時曾以此書与世説刻行置学宮中不知尚在／否吾郡此書不多得

故雖残弊亦強留之／崇禎六年午日磬生識

その次に守敬の手識ありて、「按磬生閩中陳衍字也著有漢詔疏選／守敬記」と。朱筆句点及び藍筆句点（巻十六まで、渋江抽斎筆か）が附され、巻一には朱筆を以て古訓の訓点が書入され、抽斎の筆蹟に似ている。「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森氏」「雲煙家蔵書記」等の印がある。

同　明嘉靖二年刊（金台汪諒）　覆元張伯顔刊本　二〇冊

首に嘉靖癸未李廷相の雕文選引、昭明太子文選序、李善の唐李崇賢上文選注表、呂延祚進五臣集注文選表、文選目録がある。本文首「文選巻第一」、第二行低二格「梁昭明太子選」、第三・四行低三格「唐文林郎守太子右内率府録事参軍崇賢館直学士臣李善注上／奉政大夫同知池州路総管府事張伯顔助率重刊」と題する。単辺（二〇・二×一三糎）有界十行、行廿一字、注小字双行。版心白口「文幾巻　（丁付）」。巻一本文首葉下象鼻に「九華呉清氏刀筆」の刻あり、所々上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名がある。本版は張伯顔本の忠実精善なる覆刻と言われる。巻首の目録の裏葉に金台書鋪汪諒近刻古書目録を掲げ、その末に「嘉靖元年十二月望日金台汪諒古板校正新刊」の一行があるのが、この本は欠いている。この本と同様に、この葉を欠く伝本が多いのは、之を故為に削除して元刊本と見せかける為であったかもしれぬ。巻六十末題の次に「拠序亦翻宋本胠不及汲古閣本也」との守敬の手識あり。

文選　六〇巻（欠巻二六・二七、三六―四一、四四・四五、五〇―五二、五五以下）　唐五臣并李善注　朝鮮刊　旧活字版　二一冊

淡丁子色艶出空押行成表紙（三二・五×二一糎）。首に梁昭明太子撰五臣并李善注の文選序、進五臣集注文選表、目録（中途より補写）あり、本文初・二行「文選巻第一／（格低三）梁昭明太子撰　五臣并李善注」と題する。双辺（二五×一七糎）有界十行、行十七字、注小字双行。版心粗黒口「文選幾　（丁付）」。句点の書入あり。「平氏／江白」、「西備福山藩／塩田屯私記」、「森氏開万／冊府之記」の印あり。森志六・楊続譜著録。

六家文選　六〇巻　唐李善等六臣注　〔明〕刊　翻明嘉靖二八年呉郡袁氏嘉趣堂覆宋刊本　三一冊

茶色表紙（三一・五×一九・三糎）。白綿紙本。首に昭明太子文選序、李善上表、進集注文選表、次に六家文選目録（標題の次に本文首題と同じ撰人名題署あり）がある。本文巻首第一―三行に「六家文選巻第一／（以下低二格）梁昭明太子蕭統撰／唐李善呂延済劉良張銑李周翰呂向註／皇明（以下十二格白釘）重刊」と題す。単辺（二二・九×一六・三糎）有界十行、行十八字、注小字双行、行廿六字。版心白口「文選巻之幾　（丁付）」、下象鼻に大小字数刻工名あり。巻末に嘉靖己酉の袁燮嘉趣堂の刊記を補写する。本版は精善なる覆宋本として有名な袁氏嘉趣堂本の覆刻で、原本の十一行を十行に減じ、巻初題署の皇明以下十二格を白釘（或は剜去か）にして、袁氏の跋刊記がなく、恐らく

万暦頃の翻刊と思われ、撫刻甚だ劣る。しかし往々袁氏原刻本と誤認されていることが多い。この本所々補写あり、朱筆校字及び楊守敬の古鈔本等との対校書入が存する。

又　二〇冊

茶色表紙。前の方に朱点朱引が附され、また僅かながら朱筆校字書入が存し、補写を少しく混える。「麟峰」「師聖／友賢」等、他に寺田望南の蔵印あり。

又　二〇冊

茶表紙。朱点朱引が附され、巻十までは古訓による墨訓点が加えられ（注文にはなし）、校字或は注の書入がある。「善得館蔵書記」等の印あり。

＊文館詞林　零本存九巻（巻一五六・一五七・一五八・三四七・四五三・四五七・四五九・六七〇・六九一）

唐許敬宗編　〔江戸末〕小林辰写　七冊

栗皮色布目表紙（二六・五×一八・八糎）。漢土に於ては夙に失われた文館詞林一千巻のうち、弘文鈔本の残巻が人に知られず高野山に伝存していたが、その零巻が江戸後期民間に流出し、吉田篁墩・藤貞幹・橋本経亮・屋代弘賢・狩谷棭斎等の目にとまって、俄に学界に喧伝され、その後その残存本の所在の捜訪が進められ、幕末明治初までに高野山に廿数巻在ることが知られるに至った。幕末、大和五条の古書金石の研究家小林辰は、元禄宝永間に高野山補陀洛院の学僧義剛が高野山如意輪寺に蔵せる弘仁鈔本を書写した本（転写本か）を入手し、それを紹介し、且つ「新刻文館詞林零本総目」と題して、伝存三十巻の巻第を掲げて、他の佚存書と共に、その刊行予定を「文館詞林考証」と題する小冊子を以て嘉永四年上梓した。しかし本書以下佚存書の刊行は一冊も行なわれずして、辰は間もなく歿した。この辰の目録がその後の本書調査の基礎となり、楊守敬が古逸叢書に本書を収めた際その跋に附した「小林辰所得元禄間鈔本文館詞林目録」は、辰の目録を基礎とし、守敬が柏木探古の注記と自ら知り得たる所を併せて注記せるものである。辰はその嘉永四年五月識の「新刻文館詞林序」に、「余頃得此書古写本三十巻於骨董店其後云元禄十四年辛巳秋以如意輪寺蔵本写訖高野山沙門某其本間有誤字脱文三十巻中残闕殆半余乃欲就如意輪寺新校之」と称し、義剛本が三十巻ある如く記した。しかし現存の義剛本は存十五巻で、辰の所言と合わず、三十巻の中には現在も所在未詳の巻があり、辰の獲た本が事実三十巻であったか否かは明治初より疑念が挿まれ、辰の目録三十巻は辰の獲得せる本が三十巻あったわけでなく、それまでの諸学者の研究や伝聞によって辰が知り得た限りの巻次数を列挙するにすぎぬもので、その所在を確実につきとめて記したものでないことは、森鹿三教授の論考や筆者が既に考証せる通りである。この本から見て辰の入手せる義剛本は、その残本であったらしい。

この本は二種の取り合せ本で、一は巻一五六、巻四五三、巻六七〇、巻六九一の四冊で、字面高さ約十九・三糎、毎半葉十二行、行廿六字。他の諸義剛本と同様活字体の如き書体の細字本

で、巻一五六・四五三・六九一の巻首には許敬宗の銜名題署の次に「大日本　小林辰伯蛟校」の題署がある。他の巻一五七、巻一五八・四五九・三四七、巻四五七の三冊は字面高さ約廿一糎、毎半葉十行、行廿字。巻四五七の巻末に「辛亥七月星夕写竟　辰記」とあるから、嘉永四年如意輪寺に行って写したらしい。義剛の本奥書左の如し。

（巻一五六）元禄十三年六月念日以如意輪寺本写訖　義剛

（巻四五三）元禄十三年庚辰七月二十八日以高野山如意輪寺所蔵古写本写了　沙門義剛

巻一五八・三四七は義剛がまだ写していなかった巻であるから、辰が如意輪寺に行って、弘仁鈔本から書写したものであろう。また巻一五七・四五九・四五七は義剛本に義剛の奥書があるのが、記してないのは此も如意輪に赴いて弘仁鈔本から写した為であろう。たゞ巻六九一にあるべき筈の義剛の奥書がないのは如何なるわけであろうか。両種とも全巻にわたって、楊守敬の朱校字が首書されている。

*同　存六巻（巻四五七・四一四・一五二・三四六、巻六六五・六六九）〔明治〕影写義剛本　二冊

茶色表紙（二三・八×一二・七糎）。薄葉紙。襯紙を入れてある。字面高さ約十九糎。毎半葉十二行、行廿六字。義剛本の影写本。朱筆句点が附され、朱筆校字が周密。楊守敬の筆か。守敬が前掲本にない義剛本の巻を写さしめたものであろうか。以上と合せても義剛本の巻六九五・六九九の両巻を欠くが、この両巻は既に弘仁鈔本の影鈔本や佚存叢書が知られていたので、影写しなかったのかもしれない。義剛の本奥書次の如し。

（巻四五七）元禄十四年七月以如意輪寺本写訖

（巻三四六）宝永元年甲申四月十五日写

（巻六六五）儀鳳二年五月十日書手呂神福写

元禄十七年甲申三月晦日改元宝永元年孟夏二十／日以如意輪寺所蔵古本写畢其本是唐人所書而冷／然院御書也　沙門義剛

以上文館詞林については「影印弘仁文館詞林」（昭和四十四年刊）収拙稿「文館詞林考」参照。

古文苑　二一巻　不著編人　宋章樵注　〔明嘉靖〕刊

覆明成化十八年張世用翻宋本　一〇冊

茶色表紙（二五・七×一七・五糎）、外題楊守敬筆。白綿紙本。首に紹定壬辰章樵序及び目録あり。本文巻首「古文苑巻第一」と題し、次に毎巻目録あり。単辺（一九・五×一四・五糎）有界十行、行十八字、注小字双行。版心白口「古文苑巻幾（丁付）」。全巻に亘って狩谷棭斎が藍筆を以て句点を附し、各巻末に次の文化九年の藍筆手識あり。

（巻一・三・五）文化壬申七月十二日読望之　（七）壬七月十三日読望之　（九）壬申七月十三日読棭斎望之　（十一）七月十四読望之　（十三）壬申七月十四日読望之　（十五）壬申七月十四日読棭斎望之　（十八）壬申中元日読望之　（廿一）文化壬申七月既望読畢棭斎狩谷望之

本版は明嘉靖万暦間に、明成化十八年張世用刊翻宋本をさらに

覆刻せるものである。第一冊見返に訪古志の本書の解題を写せる押紙を貼附してある。「必端堂／図書記」「島／範／之印」「島範／家図／書記」「島範／家蔵／万巻」「松屏書庫」「宝宋／閣／珍賞」「勿折角勿巻脳勿以／墨汚勿令鼠齧勿唾／幅掲勿爪字抔勿跨／帙或作枕勿不如奉／師教勿粥市及借人／勿違命為不孝必端／野父顕以嘱児元徽」「椒斎」「狩谷／望之」（陰刻）「湯島狩／谷氏求古楼／暴書記」「向黄邨／珍蔵印」の印記あり。森志六・楊譜九24著録。

＊文粹　一〇〇巻首目一巻　宋姚鉉編　〔元末明初間〕刊　首目・巻一―七補配〔明〕刊本　二〇冊

淡香色表紙（二六・三×一六・七糎）、題簽に「宋槧唐文粹嘉永庚戌重装（印）第幾」と、印文「楳堂」（浅野梅堂）。裏打補修が加えられ、原料紙の紙幅廿四・二糎。補配本は四冊、縹色表紙、白綿紙本。首目・巻一は明刊の補配であるから、著録を省略す。巻初第一・二行「文粹巻第幾　（小題）幾　摠幾首／（低約十四格）呉興姚　鉉　纂」と題し、毎巻次に子目を列して本文に接する。「唐賢文粹」（巻八七、八九、九二―九五）或は「唐文粹」（巻九〇）と題するもある。左右双辺（一九×一三・六糎）有界十五行、行廿五字（巻四四上は行廿字）。版心線黒口「文卒幾　（丁付）」、下象鼻に刻工名あり。配補本は「重校正唐文粹」と題し、単辺或は左右双辺有界十四行廿五字、版心白口「文粹幾　（丁付）」、下象鼻に刻工名あるが、印面すれて識読し難い所が多い。刻工名は、宗文、陳彦和、良三、范彦従、江子名、貴全、劉伯史、陳彦正、彦正、六晏、呉中、丘老、六付、原良、詹現、劉保、劉宗、劉貫、子、虞亮、虞子記、虞子得、江垕、士通、劉景中、景中、余長寿、長寿、付名仲、九尚、志道、了呉、黄保、黄喧、江同、劉侍者、陳魯、士、汝敬、士達、虞天孟、虞付其、薛水尚、陳劉其、劉本、黄子晏、子晏、劉子晏、孟尤、黄孟九、肖寄、子中、玄保、徐子中、呉福、葉寿、孟惇、虞孟惇、付資、林安、王、章貞□、黄、妮伯美、伯美、劉伯安、陳厚、呉中、劉伏、玄宝、劉宣、六仲、虞厚、李、妮名、詹叟、六彦、付彦成、彦成、月寿、周寿、范通、虞子得、苑彦、朱、沈右、徐田、良、黄彦、劉伯安、羅六、張名遠、劉伏、六行、陳旻、潘留、景舟、彦良、甫劉、堯朱、孟隆、黄孟尤（龍カ）、徐子達、呉原、黄子高、子高等である。所々朱点朱引が附され、第一百巻末に市野迷庵の左の手識あり。

唐文粹百巻第一冊第二冊欠見存十六冊右鎮山禅／師之蔵書其題禅師所自書表粧古色可愛也審其一版式字方而平不如元本毎字欹覓帯行体者也／定為宋本麗刻向書肆齋此書予見而愛之友人／秋谷（横山氏名達弥）已買而収之幾秋谷病卒遺命貽予為／其同好也予深感友義之切云鎮山諱宗純慶元間有／名之高僧嘗跋覆元本玉篇者伝見延宝伝燈録／文化十四年歳在旋蒙赤奮若夏六月市野光彦／書於青帰書屋西軒下（印）〔光彦〕（印）〔林一人〕

この版の字様は元建陽刊本のそれと些少違っているので、或は宋版或は元版或は明版と諸家の審定がまちまちである。しかしその版刻字様は元より明に至る推移過程を示し、元風を一方

に帯びると共に、一面に明の様式が多く現われ、全体としては明風が勝っている。本版の刻工名が、元至正年間の刊と思われる遼史・金史、元刊慈谿黄氏日抄分類（国立中央図書館蔵、未見）、後掲の西山先生真文忠公文章正宗等の刻工名と共通とする者が多い。本版の刻工名中二名（汝敬・張名遠）は元延祐中饒州路学刊「文献通考」の刻工名中に見える。延祐の頃若かった刻工は明初にはまだ生存が可能で、この本は版式全体から見て、元末よりは寧ろ明初の刊にかゝると目すべきであろうか。この本には少しく修補が加っている。補配の明刊本は明嘉靖三年姑蘇徐焴刊本を覆刻せる版である。「江戸市野光／彦蔵書記」「銭嵐卿／賞識」「浅野源氏／五万巻楼／図書之記」「宝宋／閣／珍賞」「楳堂閲蔵」「浅野／氏章」「子孫／之昌」「向黄邨／珍蔵印」の印あり。森志六・楊譜九27著録。（補記4参照）

文鑑　一五〇巻　宋呂祖謙奉勅編　明天順八年刊（厳州府張永）後修　翻宋本　五二冊

後補紺色表紙（二四・五×一五・八糎）。白綿紙本。首目に欠丁が多く、巻頭にあるべき天順八年商輅の新刊宋文鑑序を欠き、次の「□朝文鑑」（朝」の上一格白釘、墨囲大字両行どり）と題する繳進文鑑劄子・謝賜銀絹除直秘閣表から存する、その末に、匡郭のみで中の文字が空になっている刊記がある。次に「新雕　朝文鑑総目」（大字両行どり）、次に「新雕　朝文鑑目録上（中・下）」（次・三・四行祖謙の銜官題署）がある。本文巻初「　文鑑巻第一」（文の上二格白釘、第二・三行低二格「朝奉郎行秘書省著作佐郎兼国史院編修官兼権礼部郎官臣呂祖謙奉／聖旨銓次」と題し、毎巻次に目次を列して本文に接属する。左右双辺（一九・四×一二・六糎）有界十三行、行廿一字。版心粗黒口「文鑑幾　（丁付）」。少しく宋諱の欠筆が見られる。この本は巻末の跋文を欠き、少しく修補を混える。「出石城／弘道館／図書記」「中村敬宇／蔵書之記」の印あり。楊志十三・楊譜九27著録。（楊譜書影はこの版のそれと思われるが、たゞ書題の「文鑑」の上の二空格を「皇朝」に作ってある）。天順八年の商輅序はこの本が厳州府で開板された由来を述べた中で

近時提督浙学憲副張和節之偶得是書以示厳郡太守張永邵齡邵齡欣然命工重鋟諸梓以広其伝其間題識仍旧款目無改則以摹本番刻弗別繕写懼謬誤也

と、旧を改めず、その通りに摹刻したと述べている。この本の書題はもと「皇朝文鑑」と作ってあったのを、皇朝の二字を挖去したまゝにして摹刻してあるが、末題等に「皇朝」或は「朝」の字が挖削されずにそのまゝ残った所もある。商輅序から察するに此は本版が削ったのではなく本版の底本がその通りであったと考えるべきで――たゞ表後の木記が空字になっているのは、底本既に挖去してあったのか、或は本版の摸刻の際に空字にしたのかもしれぬ――、この所から察するに、底本は恐らく宋末刊元修本であったのであろう。本版はその覆刻と思われるが、その原本の伝存は知られていない。

同　明天順八年（厳州府）刊弘治一七年修（厳州府胡詔）　一八冊

茶色表紙（二四・七×一四糎）。白綿紙本。首に弘治甲子（十七年）七月胡拱辰の宋文鑑序、天順八年商輅の新刊宋文鑑序、以下の首目及び本文巻初体式前掲本に同じ。進文鑑劄子・総目を欠く。巻末の跋は一丁のみを存して以下欠。本版は胡拱辰の序によれば、厳郡太守胡詔が前掲の天順八年刊本を修補刊行したものである。修補と言っても、大部分が原刻を覆刻せる新雕で、原刻の箇所は甚だ少ない。書題の「文鑑」の上の空格を「宋朝」とうめた箇所もある。

宋文鑑　一五〇巻　宋呂祖謙奉勅編　明嘉靖八年序刊（晉藩志道堂養徳書院）　四〇冊

後補紺色表紙（三〇×一八糎）。白綿紙本。首に嘉靖五年晉藩志道堂書于勅賜養徳書院の重刊宋文鑑序、嘉靖八年歳在己丑七月吉旦晉王知烊稽首頓首謹書の序、周必大奉聖旨撰宋文鑑序、以下首目次序体式前掲本に同じ。本文初「宋文鑑巻第一」と題し、第二・三行祖謙銜官体式前掲本に同じ。巻末に嘉靖七年龍集戊子夏六月之吉晉藩養徳書院識の刻宋文鑑後序を附する。左右双辺（一九・五×一二・四糎）有界十三行、行廿一字。本版は前掲厳州府刊本のほゞ覆刻に近い版式で、たゞ書名を悉く「宋文鑑」に改めてある。「惜陰亭」等の印あり。

＊西山先生真文忠公文章正宗　零本（存巻一・二、二三・二四）　宋真徳秀編　〔元末明初〕刊　覆宋　二冊

後補黒色表紙（二三・四×一四・八糎）。首目は目録の第二葉以下を除き、補写で、明正徳崔銑序があるから、明正徳十五年馬卿山西刊本に据る写で、この版の首目そのものに基づく補鈔とは看做れない。本文巻首「西山先生真文忠公文章正宗巻第一」と題する。左右双辺（一八・四×一二・三糎）有界十行、行廿一字。批圏点句点附刻。版心線黒口「文幾　（丁付）」。下象鼻に下記の刻工名あり。士達、劉子和、士通、虞圭、虞子徳、劉子名、虞子奇、丘老、虞亮、羅六、原良、子高、景舟、劉周、汝敬、黄孟尤、伯美、景中、呉原礼、張名遠、仏林、十五、肖寄、仲材、安平、劉復、妮名、虞子徳、劉貫、劉宣、虞江、保、龍付、詹現、張永茂、劉八、林安、付名仲、劉伯安、黄以実、達彦、丘子名、江子名、黄全、達魚品、虞名彦、徐彦正、六晏、付資等。此等刻工名は殆ど前掲「文粋」と共通する者が多い。従ってこの本は元末明初の刊にかゝり、又一部闕画が見え、恐らく宋末刊本の覆刻であろう。中央図書館蔵本（未見、存六巻）は南宋末刊と録されているが、同館の宋本図録によれば、刻工名はこの本と一致し、書影によっても、この本と同版らしく、その本の巻末には「国学正奏名蔡公亮校正」の一行ありと、この本の巻末は末題後に挖去の痕跡らしいものが残っているから、その修印本であるまいか。また同館蔵元刊本二四巻四八冊（未見）は、同館の「金元本図録」の書影によれば、静嘉堂文庫蔵本（目録に元刊明修）と同版である。

刻工名なく、字様槧法より見て、明かに元刊に非ずして、この本を覆刻せる明刊本である。

所々朱筆句点が附され、「湯島狩／谷氏求古楼／暴書記」「小島氏／図書記」の印あり。森志六・楊譜九29著録。たゞ森志には廿四巻の完本と録され、楊譜には「南宋槧文章正宗飛青閣蔵本」と注記されている。

同　二六巻　宋真徳秀編　明唐順之批点　〔明嘉靖隆慶間〕刊　八冊

縹色表紙（二四・八×一四・七糎）。序の首三丁欠。次に綱目及び目録あり。本文巻首「西山先生真文忠公文章正宗巻第一」、第二行「辞命一（隔十一格）荆川唐順之批点」と題す。末題或は「西山先生真文忠公唐荆川批点文章正宗」或は「唐会元批点西山先生真文忠公文章正宗」と題するもあり。巻廿六は十三丁にとゞまって、已下欠葉。単辺（一八・七×一二・五糎）有界十行、行廿一字、注小字双行。批点附刻。版心白口「唐荆川批点文章正宗巻幾　（丁付）」。朱点朱引圏点の書入あり。楊志十三・楊志補著録（二跋同文）。巻首に左の守敬手書題識（楊志収）の別紙を附綴する。

此本不記刊行年月望其字体蓋即在／嘉隆間亦無荆川序跋毎巻第二行題荆川唐順之／批点中縫亦題唐荆川批点文章正宗目録／毎篇上或作〇或作丶或作直監或幷〇丶無之書中毎篇／題上或著一二字如第一巻第一篇／批転折二字第二篇批一転字第三四篇批一直字欄外／眉上間批数字文中著圏点処甚少皆批郤／導竅要言不煩明代書估好仮託名人批評以射／利（関斎汲所刊朱墨本大抵多偽託）此則的出荆川手筆故閣／百詩潜邱劄記極称之邇来学文者喜読古文／家緒論紛紛刻帰方評点史記独此書流伝甚／少雖明刻固当珍惜之矣　所圏点至二十二巻止其二十三巻後詩歌則無一字之評／荆川本以古文名世故只論文筆而韻語非所長／遂不置一辞然則視今人之強不知以為己知者天淵矣

増註唐賢三体詩法　三巻　宋周弼編　元釈円至注斐庾増注　〔室町初〕刊　三冊

後補紺表紙（二六・七×一八・三糎）。匡郭内のみを切りとって別紙に貼附して改装。序の首三丁補写。首に至大二年斐庾序、虚叟序、唐三体詩註綱目、図、至大二年斐庾の咨目、諸家集註唐詩三体家法諸例、唐世家紀年、三体集一百六十七人がある。本文巻首より第四行に、「増註唐賢絶句三体詩法巻之一／（以下低八格）汝陽周弼伯弼選／高安釈円至天隠註／東嘉斐庾季昌増註」と題する。左右双辺（二〇・八×一四・七糎）有界十行、行廿二字。版心線黒口「幾　（丁付）」。室町期の朱点朱引墨訓点（朱筆も混ゆ）が附され、少しく注の書入も存する。所々室町期の補写あり。

本版は刊記はないが、この本の覆刻たる明応三年刊三体詩法の刊語に「明応甲寅之秋新板畢工矣先是旧刻之在京師者散失于丁亥之乱以故捐貲刊行焉置板於万年広徳云　葉巣子敬誌」とあり、この本は応仁の乱にその板木が散失した版に該当するものと推定されている。伝本少く、大東急記念文庫・東洋文庫・静

嘉堂文庫本がある。森志六・楊譜九22著録。

同　〔室町末〕刊　覆明応三年刊阿佐井野版　三冊

後補紺色表紙（二七・二×一九・四糎）。首目書題体式前掲本に同じ。左右双辺（二〇・四×一四・八糎）有界十行、行廿二字、注小字双行。版心線黒口「幾　（丁付）」。前掲本の板木が応仁の乱で焼けたので、葉巣子（相国寺の光源和尚）がそれを明応三年覆刻再刊したが、その後その板木が泉州に流伝して来たのを堺の阿佐井野宗禎が購入して、陰刻の刊語を追刻して刷ったのが所謂阿佐井野版である。それをさらに巻末の両刊記もそのまゝ覆刻したのが本版である。但しこの本は巻末の刊記の葉を欠く。室町末近世初間の朱点朱引墨訓点が附される。序に朝鮮本との江戸後期の校合書入があり、斐庚序の冒頭欄外に「朝鮮国原刊本不載此序蓋偶逸之也」、紫陽山虚叟方回序の左旁に「朝鮮国原刊本紫上有大徳九年乙巳九月初六日十一字此本删之不知何謂」と記し、又その年記の臨写が貼附してある。この朝鮮本とは森志著録の朝鮮正統元年刊本を指し、同様の記事が森志にも見えている。「小島氏／図書記」等の蔵印あり、森志六著録。

西漢文鑑　二一巻　宋陳鑑編　明弘治一五年序刊　翻宋八冊

茶色表紙（二八・三×一六・八糎）。白綿紙本。首に端平甲午陳鑑原序、弘治十五年邵宝の重刊西漢文鑑序、目録あり。本文巻首・第二行「西漢文鑑巻之一／（低五格）石壁野人陳鑑編」と題する。単辺（一八・一×一二・四糎）有界九行、行十八字、注小字双行。邵宝によれば、この本宋本の翻刻にして、東漢文鑑と共に刻せりという。巻廿一は廿一丁にとゞまって、以下欠葉。「内府／蔵書」等の印あり。

畳山先生批点文章規範　七巻　宋謝枋得編　嘉永六年刊（官版）　覆元刊本　三冊

楊志十三・楊譜九36著録。

＊精選唐宋千家聯珠詩格　二〇巻　宋于済・蔡正孫同編　朝鮮徐居正増注安琛等補削　朝鮮弘治一五年跋刊　一〇冊

後補紺色表紙（三一・八×二一糎）。首に蔡正孫序、大徳己亥王淵済序、于済序、次に「精選唐宋千家聯珠詩格総目」（目録題の次に本文巻初と同様の編者題署あり）がある。本文第一・二・三行「精選唐宋千家聯珠詩格巻之一／（以下低六格）番易默斎于済徳夫／建安蒙斎蔡正孫粋然」編集（編集の二字は両行の中間）」と題し、巻末に弘治壬戌夏竹溪安琛子称書于合浦楽閑堂之存心軒の跋を附する。単辺（約二四・五×一六・五糎）有界九行、行十七字、注小字双行。批点附刻。版心粗黒口「聯珠詩幾　（丁付）」。「増註」を墨囲陰刻を以て標して、原注と区別する。安琛跋によれば、朝鮮成化廿一年徐居正が増註を作り、頗る詳密であった、後七年成宗が安琛及び成俔・蔡寿・権健・申従・護就徐に命じて重ねて補削を加えしめ、之を鋳字印を用いて印行したが広く頒布できなかった。その後自分が合浦にあった時合浦鶏林尹の

慎承福判官がその普及を図って新に開板すると。

我が国では本書は既に南北朝に刊行され、室町江戸時代を通じて盛行し、江戸時代最も行なわれたのはこの増註本である。この和刻本に数種あるが、最も早い寛永初刊本（寛永九年村上平楽寺版はその後印、共に伝存本稀少）は朝鮮本の覆刻と思われ、この弘治跋刊本と行款を同じうし、字様も多少似ているが、その底本はこの版ではなく、或はこの跋に云う先行の鋳字印本であろうか。しかし寛永版及び以降の和刻本のいずれもこの後跋を欠いているので、この増註が朝鮮に於ける編纂であることは殆ど知られていない。本書の五山版では原注が題と詩との間に小字単行を以て附されている。此が原形であろう。この本は初めの方にのみ朱筆句点の書入がある。「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森氏開万／冊府之記」「遵義黎／庶昌之印」の印あり。楊志十三・楊譜九21著録。

唐詩鼓吹　一〇巻　金元好問編　元郝天挺注　朝鮮刊
旧活字版　四冊

艶出丁子色地空押行成文様朝鮮古表紙（三〇・五×一九・五糎）。題簽に「唐詩鼓吹翠香処蔵書」と墨書し、右下端に「翠香荘珍玩」の墨署あり。料紙は普通の朝鮮紙ではなく、竹糸系の唐紙を使用する。首に姚燧の註唐詩鼓吹序あり。本文第一・二行「唐詩鼓吹巻第一／（低四格）資善大夫中書左丞郝天挺　註」と題する。双辺（二二×一四・八糎）有界九行、行十七字、注小字双行。版心粗黒口「唐詩幾　（丁付）」。「養安院蔵書」「森氏開万／冊府之記」等の印あり。楊志十三・楊譜九38著録。

*瀛奎律髓　四九巻　元方回編　明龍遵叙校　朝鮮成化十一年跋刊　覆明成化三年紫陽書院刊本　一〇冊

後補香色地空押亀甲繋ぎ表紙（二五・五×一五・六糎）、本書の江戸刊本の印刷題簽を貼附。首に至元癸未方回原序あり、その末に「成化三年仲春吉／日紫陽書院刊行」なる原刊記の木記が移刻され、次に目録がある。本文巻首「瀛奎律髓巻之一」と題し、第四十九巻末に成化三年の皆春居士（龍遵叙）識の跋及び成化十一年三月上澣守府尹通政大夫南原尹孝孫有慶謹跋の跋が附され、それぞれ開板の経緯を叙する。双辺（二〇・一×一二・五糎）有界十行、行廿一字、注小字双行。批点附刻。版心粗黒口「律髓巻幾　（丁付）」。巻廿八―卅五補写。「松屏書庫」等の蔵印あり。楊志十三著録。

皇元風雅　前集後集各六巻　元傅習采集　孫存吾編類
徳書堂刊本　四冊

後補淡香色表紙（二二×一三・七糎）。首に至元二年邵菴道入虞集伯生題辞の序及び皇元風雅羣英姓氏あり。本文巻首大字両行に跨って「皇元風雅巻之一（隔五格）前集（墨囲陰刻）」、第二・三・四行に「盱江梅谷傅習　説卿　采集／儒学学正孫存吾　如山　編類／奎章学士虞集　伯生　校選」と題す。後集は首に至元二年盱江南臆謝升孫子順父序及び皇元朝野群英姓氏後集があって、その末に左の原刊語の木記が移刻してある。

本堂今求名公詩篇随得即刊難以人／品齒爵為序四方吟壇士友幸勿責其／錯綜之編倘有佳章毋惜附示庶無滄／海遺珠之嘆云

古杭勤徳書堂謹咨

本文首大字両行に跨って「皇元風雅巻之一（隔五格）後集（盈囲陰刻）」、第二・三行に「儒学学正孫存吾　如山　編類／奎章学士虞集伯生　校選」と題する。左右双辺（一六・六×一一・七糎）有界十三行、行廿一字。版心線黒口「前（後）幾　（丁付）」。巻一の九裏、十・十一・十二の表の欄外下端に元より来朝の刻工名たる「陳伯寿」或は「伯寿」の刻がある。室町期の朱引朱圏点が附され、各冊尾に「天明八年歳次戊申仲夏月（印）（印）（印）」の墨書がある。「慈照寺」等の印あり。本書旧刊本には相互に覆刻の関係にある（或は原本を同じうするので結果に於てそうなったのかもしれぬが）二版あり、一はこの伯寿の刻工名がない。共に伝存本少く、この伯寿刻本には内閣文庫（有欠）・東洋文庫・宮内庁書陵部・両足院（後集）本が知られる。楊譜九40・楊続譜著録。

唐音　存二巻（唐詩始音一巻・唐詩正音巻一上下）　元楊士弘編　〔明前期〕刊　覆元　二冊

後補淡空色表紙（二二・七×一五糎）。裏打補修あり。首に虞集の唐音序、至正四年楊士弘の唐音名氏并序、唐音凡例、唐詩始音目録（目録題の次行「襄城楊士弘編次」と題す）がある。本文巻首「唐詩始音巻之一」と題す。正音は首に目録（目録題の次行始音同様の題署）あり、本文巻首「唐詩正音巻之一上」と題する。双辺（一七・三×一二糎）有界十行、行十八字。版心線黒口「始音（唐音）幾　（丁付）」。国立中央図書館蔵本（未見、元至正四年刊と著録）の書影と比較するに、覆刻の関係にある。「宝宋／閣／珍蔵」「向黄邨／珍蔵印」の印あり。楊譜九39著録。

唐音輯註　存唐詩正音輯註巻二―六・唐音遺響集註巻一―五　元楊士弘編　明張震注　〔明〕刊　五冊

茶色艶出行成表紙（二二×一三・四糎）。白綿紙本。正音・遺響共に巻初・二・三行「唐詩正音輯註巻之二（唐音遺響集註巻之一上）／（以下低六格）襄城　楊士弘　伯謙　編次／新淦　張震　文亮　輯註」と題す。遺響の「集註」を「輯註」に作る巻もある。単辺（一七・九×一一・五糎）有界十行、行十八字、注小字双行。批点附刻。版心白口「唐音（遺音或は遺享）幾　（丁付）」。明正徳年間頃の刊行であろう。楊志十三著録。

選詩〔補註〕八巻選詩補遺二巻選詩続編四巻（風雅翼）元劉履編並注　〔明〕刊　七冊

後補水色地卍繋葡萄文様表紙（二四・六×一五・二糎）。首に天順庚辰履素道人の重刊風雅翼序、至正廿三年戴良の風雅翼序、至正廿一年謝肅の選詩補註序、至正乙巳夏時の選詩補註序、選詩補註目録あり。本文巻首「選詩巻第一」、第二行「上虞劉　履補註」と題す。補遺・続編共に首に目録あり、巻首「選詩補遺巻上」、「選詩続編巻第一」と題し、第二行の題署は選詩補註に同じ。左右双辺（一八・九×一二・六糎）有界十

行、行十九字。版心白口「補註（補遺、続篇）幾　（丁付）」。弘治正徳間頃の刊であろう。「栽安院」「雲煙家／蔵書記」の印あり。

＊皇明詩選　二〇巻　明沈巽編集　顧禄校選　〔明初〕刊　二冊

後補茶褐色表紙（一九×一五・六糎）。首に洪武卅年曹孔章序、季翔の皇明詩選序、詩人姓氏あり。本文巻首・第二・三行に「皇明詩選巻第一／（以下低三格）呉（隔八格）興沈巽士称編集／文林郎前太常典簿呉郡顧禄謹中校選」と題す。巻末に張羽の「筆封書陸文宝手巻」並に洪武三十年歳丁丑十一月既望呉興後学沈巽識の跋を附す。双辺（一六・八×一一・九糎）有界十三行、行廿字。版心線黒口「巻幾　（丁付）」。所々朱筆句点が附さる。少しく欠丁あり。この本伝存稀少。「□□退蔵院」の蔵印あり。退蔵院は妙心寺の塔頭か。

古楽苑　五二巻衍録四巻目二巻前巻一巻　明梅鼎祚編　呂胤昌校閲　〔江戸〕写　一〇冊

縹色布目表紙（二七・四×一八・七糎）。首に汪道昆序、凡例、総目あり、総目題の次に「西呉梅鼎祚補正／東越呂胤昌校閲」と題署。字面約廿・五糎。毎半葉十行、行廿一字、注小字双行。題簽並に本文の筆蹟狩谷棭斎に似ている。楊守敬の校字書入が少しく加っている。四庫全書提要の本書の条を書写せる別紙二葉が附してある。楊志十三著録。

＊東文粋　存巻一・二　〔朝鮮金宗直編〕　朝鮮刊　二冊

丁子色地空押亀甲繋唐草文様古朝鮮表紙（三一×一九糎）。巻首「東文粋巻之一」と題す。双辺或は左右双辺（二一・五×一四・五糎）有界九行、行十七字。版心白口「東文粋幾　（丁付）」。朝鮮人の文の総集、内閣文庫・蓬左文庫・日光天海蔵の蔵本に十巻の完本あり、その巻末弘治元年申従濩の跋文によれば、秘閣の初稿に宗直が増削を加えて完成すと。「養安院蔵書」等の蔵印あり。

詩文評類

＊詩人玉屑　二一巻　宋魏慶之編　〔南北朝〕刊　（首六巻無跋本已下有跋本）　一〇冊

後補縹色表紙（二三・七×一五・五糎）。襯紙を入れ改装。首に淳祐甲辰黄昇序及び詩人玉屑門目あり。巻首「詩人玉屑巻之一」と題す。双辺或は左右双辺（一八・六×一二・一、巻七以下左右双辺）有界十一行、行廿一字。門標題は大字両行に跨る。版心線黒口「玉屑（玉）幾　（丁付）」、左上欄外に耳格（匡郭なし）ありて門名を題す。本書旧刊本には二種の版あり、相互に覆刻の関係にあるが、㈠は巻末に跋文なく、㈡は巻末に本云／玆書一部批点句読畢胸臆之決錯謬多焉／後学之君子望正之耳　／正中改元臘月下澣　洗心子　玄恵誌の玄恵批点の本奥書がある。また㈠は廿巻なるのに比し㈡は廿一巻に作り、中興詞話・詩餘が内容多く、巻廿一の首題が前頁（即ち巻廿末裏の白紙）の末尾にある。第一種が先行と推定さ

れている。本版は宋或は元版の覆刻と推定されているが、事実国立中央図書館蔵元刊覆宋本（未見）の書影と比較するに、覆刻の関係にある。この本は巻六までが第一種の無跋本に属し、巻七已下が第二種の有跋本に属する取り合せである。しかしこの補配は近時なされたのではないことは、全巻を通して加えられた室町末近世初間の朱筆の句点朱引・訓点や毎冊首の所有識語の筆跡が同手であることから判明する。江戸期の墨筆書入も僅かながら交っている。本版の伝存は甚だ稀覯で、無跋本に成簀堂文庫旧蔵・小汀利得氏、有跋本に京都大学・東洋文庫・三井家旧蔵本が存する。各冊首に「近江州野洲郡播磨田郷帰耕院常住也心誓置之全部惣計十冊内」の墨書、「久昌院／蔵書」「杉垣篝／珍蔵記」の蔵印あり。

同　二〇巻　〔明〕刊（古松堂）　一〇冊

茶色表紙（二四×一五糎）。封面あり、「宋板重雕／詩人玉屑／古松堂蔵板」と刻す。首に淳祐甲辰黄昇序及び詩人玉屑目録あり。本文巻首「詩人玉屑巻之一」と題し、分類標題は大字両行に跨る。双辺（一八・五×一二・二糎）有界十一行、行廿一字。巻十一以下は単辺。版心線黒口「玉屑巻幾　（丁付）」。朱筆校字の書入が少しある。前掲旧刊本や中央図書館蔵元刊本と行款・版式を同じくし、字様もほゞ相似し、対面に宋板重雕とあるが、果して宋板に基づくか、或は元版に据れるか詳かではないが、祖を同じうするようである。たゞ此は首の門目を目録に改め、「詩弁第二」の如く分類標題大字の下に「第幾」の番号を附する。明嘉靖頃の刊か。

国書

篆隷萬象名義　三〇巻　釈空海編　〔江戸〕摹写高山寺蔵永久二年鈔本　八冊

紺色表紙、大本。「永久二年六月以敦文王之本書写之了」（原本第六帖末）の奥書を有する高山寺蔵本（崇文叢書中に影印される）の摹写で、巻末に左の屋代弘賢の跋がある。

弘賢嘗読弘法大師作書目録有篆隷萬象名義／卅巻而不知其存亡余固勤于小学求之有年于茲／矣享和元年冬稲山秋月二公以写本見寄云原本／蔵于山城国高山寺其部首始一終亥一依説文／玉篇至於音訓与二書互有出入不知当時拠何／書数十年聞其名而不得見者一旦獲之吾不忍／文庫之栄莫加焉十襲以蔵源弘賢踴躍歓喜識

しかしこの跋は弘賢自筆ではない。従ってこの本は高山寺本からの直接の影写ではなく、弘賢本に基づく転写であることが判明する。

本書は我が国最初の字書で、上に大篆、中に隷書（今の楷書）を大書し、下段に漢字を以て反切釈義を記す。但し大篆を冠する字は僅かである。文字の順序・数・反切・解釈殆ど玉篇と同じくし、その要を採ったものであるが、間々玉篇と異なる音、玉篇にない独特の釈義を施す所もある。多少の出入を見るが、殆ど玉篇の抜萃と称してよい。顧野王原撰玉篇は現在伝存しない

ので、玉篇全巻の旧形を知る上には無二の貴重資料である。現存本は高山寺蔵本のみで、僅か存する写本も皆その伝鈔本である。第一冊始め少しく守敬の朱墨の校字がある。楊志四著録。首に光緒九年の左の守敬の手書題識（楊志収）二葉を附綴する。

篆隷萬象名義三十巻日本東大寺沙門大／僧都空海撰空海入唐求法兼善詞翰帰／後遂為日本聞人之冠今世彼国所伝仮字母／即空海所創造也此書蓋拠顧野王玉篇為／本而以一篆一隷配之隷即今之真楷書　其注文則如大広／益本但挙訓詁不載所引経典唯所載篆書／毎部中或有或無当是鈔胥省之又自巻首至面／部分析為十二巻而総目則仍顧氏原巻此不可／解今古鈔原巻子本尚在高山寺余曾於紙幣／局見之原巻雖古亦非空海親筆此蓋従彼／伝鈔本也按野王玉篇一乱於孫強再乱於／陳彭年其原本遂不可尋余曾得古鈔／巻子本玉篇残本四巻刻之古逸叢書中可以窺見顧氏真面目然亦只存十之一今以此書与四残／巻校之則毎部所隷之字一一相合絶無増損淺／乱之弊且全部無一残欠其可宝当出玉篇／四残巻之上蓋広益本雖刪顧氏所引経典／而要義尚存況経典義訓為顧氏原書所／遺者正復不少唯顧氏上承説文其所増入之字／皆有根拠而其隷字次第亦多与説文相合／其有不合者正足与今本説文互相証験則此／中之原流升降有関於小学者匪浅況空海／所存義訓較広益本亦為稍詳　顧氏原書於常／用之字往往列四五義広益本概存二三義而已　若拠此書刪其篆文刻之直当一／部顧氏原本玉篇可矣唯抄此書者草率／之極其／中奪誤満紙是此則不能不有待／深於小学者理董焉光緒癸未秋八月宜都／楊守敬記于東京使館（印）丁未十二月呉県王仁俊叚読于存古学堂（印）

又　〔江戸〕影写高山寺蔵本　六冊

襯紙を入れた薄葉紙大本。同じく弘賢跋もあり、弘賢本よりの影写本。「森氏開万／冊府之記」の印あり。

又　零本（存巻一五之下至一八）　〔江戸〕影写高山寺本　一冊

巻十八の「鑿」の字の注までを存する。楊守敬は以上三部の外にも守敬が影鈔せしめたらしい一本を有し、此は後掲の如く、今中央図書館に蔵され、前掲と少しく異る手書題識が附してある。

新撰字鏡　一二巻　釈昌住撰　〔明治初〕影写天治元年鈔本　一二冊

襯紙を入れた薄葉紙持大本。元来法隆寺にあったのが民間に流出し、博物館を経て今宮内庁書陵部に蔵される天治元年書写本（巻一書写奥書に「天治元年甲辰五月下旬書写之畢／法隆寺一切経書写之次為字決諸人各一巻書写之中／此巻是五師静因之分以曚筆所写耳」と。大正五年刊影印本あり）の影写である。黒川春村・内藤広前の次の識語がある。

（巻一末）安政二年二月念二日以禿筆摸写了　藤原春村

（巻五末）安政第四天歳次丁巳端午前一日謄写了　藤原春村

同年十月廿二日以春村本謄写畢　藤原朝臣広前

（巻六末）安政四年十二月十日摸写了／藤原朝臣広前

本書は広前摸写本に据った影写である。恐らく楊守敬が重写せしめたのであろう。新撰字鏡は昌泰年間に成立せる、現存我が国最古の漢和字典である。古訓の国語資料としての重要性は言うまでもないが、本書の字音注釈は玄応の一切経音義、切韻、玉篇等の大陸古字書韻書を引載し、此等の書は既に佚亡或は現本はその旧形を失っているので、本書は漢籍校勘資料としても貴重である。

又　〔明治初〕影鈔天治元年鈔本　一二冊

襯紙を挿んだ薄葉紙持大本。楊守敬が命じて前掲本により影写せしめた本であろう。春村・広前の識語あり。楊志四著録。首に楊志所収文と異同の多い左の光緒九年の守敬の手書題識あり。守敬がこの本をさらに影写せしめた副本が中央図書館に蔵され、それには左とはやゝ異る手跋が附されている。

新撰字鏡十二巻／日本僧昌住撰（原序中不出昌住之名然日本別有刪削本及／墨書一覧皆題昌住撰当別有著／録之書可拠也）　自天部至連部凡一百六十部共二万九百四十餘字／其分部不依説文玉篇次第而各以類従其有偏旁上下／左右之不同者亦為分之如火部居左者為第八居下者為／第九人部居上者為第十居左者為第十一蓋特以便尋／検無深意也其注毎字収羅義訓最為広博拠其自序大抵本応玄一切経音義及玉篇切韻為主而又／旁採諸字書以増益之其有東倭音訓者亦間為坿入其／正俗等字有出於集韻龍龕手鑑之外者所列古文亦有／出於説文玉篇之外者蓋昌住生当日本右文之時多見古小／学書不第玉篇切韻皆顧陸原本此亦訓詁之淵藪藝林／之鴻宝也余初従書肆得影鈔本五巻（一四五六七）驚喜無似惜其／不全偏訪諸蔵書家亦絶少伝鈔本後知其原書在博物館／中者一也因託東友為鈔之久之不得端緒余以為有此奇書而不得鈔／伝辜負此次訪書之名私心必欲得当而後快後商之森立之／迺為□諾諸司書者使鈔胥就其餘鈔之閲半年而後成蓋非／余堅忍不輟則不能之亦非森君好古夙成楽此不疲不肯担之／也蓋森君毎見余鈔録其国古書則拍手称快似亦嫌当今少／知己而楽得異邦之有同心已光緒癸未正月

又按此書有以漢文訓詁釈為倭訓者又有刪削成一冊者並載／昌住原序其実非原書也此又従余影鈔本過録蓋欲多存数本於世　守敬記

同（節略本）　文化二年鶴岡冬蔭写　一冊

大本。巻末に「文化二年十月　鶴岡冬蔭写之」の書写奥書あり。和訓を附した字のみを拾輯した本である。たゞ天治本とは出入があるので、別種本に基づいた抜萃と推測されている。享和刊本・墨書類従本がある。「観瀾」の印あり。

＊聖徳太子伝　零本（存巻一五）　不著撰人　正保二年信蓮社行誉写　一冊

丹表紙（二七・三×一九糎）。料紙はやゝ厚手楮紙で、四辺に燼餘の跡がある。字面高さ約廿一糎。毎半葉九行、各行字数不等。折り目（桂）に「太子十五　（丁付）　行誉書之」の墨書があり、巻末書写奥書に

正保二年八月十五日書之畢／仏法最初上宮聖徳尊恩徳報謝／筆者并持主／信蓮社行誉

と。本書は「聖徳太子伝暦」を核として増潤を加えて行った、中世時代の聖徳太子伝たる「聖徳太子伝宝物集」や「聖徳太子伝拾遺抄」等と結構を同じくする。先行書類を集成して和漢天竺の故事古歌説話を附会せる詳細な記事を含み、真名体に近い仮名交り文を以て記述さる。未刊にして写本で伝えられ、叡山文庫天海蔵の享徳三・四年写本十三帖合五冊、山田忠雄氏蔵室町写本十八冊、その明治摹写たる内閣文庫蔵本十八冊が知られるのみである。この本は太子卅六歳より四十歳に至る巻で、内容は山田氏本にほゞ合するが、たゞ文章が真名体に近い。拙稿「室町以前成立聖徳太子伝記類書誌」（昭和四十六年刊「聖徳太子論集」収）参照。

＊醍醐寺古文書・倭漢年代暦　〔江戸〕影写　一冊

墨流表紙（三二・三×二二糎）。薄葉紙。字面高さ約廿六糎。年代暦は太古より第五代懿徳天皇に至る。

＊職源本抄　一〇巻附職員令神祇令愚註草藁八巻　壺井義知撰　〔江戸〕写　一八冊

茶色墨流草花文様表紙（二八×二〇・五糎）。字面高さ約廿糎。毎半葉九行、行十七字、注小字双行、頭注あり。巻一は題簽を欠くが、巻二以下「職源本抄　二従大政官至右大臣壺井安左衛門源義知鶴翁先生抄周俊筆」とほぼ同じ題簽が貼ってある。北畠親房の「職源抄」と令の注釈である。故実家義知の職源抄の注には刊本もあるが、此はそれとは別種の未刊本。職員令第六の巻末に次の跋がある。

夫在レ官者不レ深二於古之事一則処レ事而不レ能三為／レ之折一衷一也蓋古代之事汪一洋而非二有一職一者不／レ能レ探二其梗一概一予嘗憂焉壺一井一氏義一知夙耽二于／古一捜コ猟此一書一正二刀一刁之一誤一講一求評一隲蓋有レ年／矣就レ中官位職一員二令則此一書之綱一領也而／考一正益一精矣読一者得二其要一則此一書之旨自粲／然矣頃乞三予跋一団一辞不レ措於レ是乎書／享保甲辰嘉平月近衛権少将藤原隆英識

漢土著述人名録　八巻　編者未詳　〔江戸末〕写　八冊

半紙本。封面に「不許発行／漢土著述人名録／伝写家蔵」と記す。清聖祖仁皇帝以下清朝皇帝を首におき、以下人名をイロハ順に配列して、各の著書巻数を記す。「森／氏」の印あり。

＊医籍考　存巻三七―七七　丹波（多紀）元胤撰　〔江戸〕写　一一冊

紺色表紙（二三・五×一七糎）。左右双辺（一八×一三・二糎）有界十一行、版心白口（下象鼻に「聿修堂」と）の印刷罫紙使用。行廿四字、解題文は低一格。朱句点朱引を附す。本書は八十巻、累世幕府の医官たる多紀元胤が父元簡の志を継ぎ、多紀家累代の蘊蓄を承けて編纂せる医書解題にして、九類に分って千百年の古医書の存逸淵源流派を一目瞭然たらしめ、義例詳密援拠精覈、漢籍医書解題としては今以て此を凌駕するものなしと評される。この本は前半と尾を欠き、方論十四―方論五十二・史伝（巻七六）・運気（巻七七）の残本であるが、多紀家聿修堂の罫紙に記され、附箋や添削の書入が多い所から見て、草稿本と思われる。

医籍考　二巻　仙鶴堂輯　文化一一年写　二冊

半紙本。巻初「医籍考巻之上　仙鶴堂輯」と題す。巻末書写奥書に「文化十一甲戌年季春晦写了／章」と。太古・秦に始って、王朝毎に医籍の書名撰者巻数を著録し、「相曰」として注を標記し、下に朱○印を冠する所あり、「○望三英先生明医小史已下以朱圏印点」（朱筆）と。末に「薛己二十四種」等の叢書や清刊本、「京都仁和寺蔵書医籍録」「同寺易書天門書」「出雲大社蔵書」「和書目録古書之分記于此到天正年間以下則不可枚挙」を掲ぐ。

＊医籍著録　小島尚真撰　写（自筆）　二冊

縹色表紙（一九×一二・七糎）。左右双辺（一二・四×九糎）有界九行細黒口の印刷罫紙使用。巻初「医籍著録／樫蔭生尚真叙」と題す。素問以下諸医籍の刊本写本について、随時筆録して行った手控か。下冊の後半は白紙のまゝになっている。

座右筆記　小島尚真撰　弘化三年写（自筆）　一冊

茶色表紙（一六×一一・三糎）。左右双辺（一二×八・二糎）有界七行白口の藍刷罫紙使用。巻首「座右筆記丙午正月樫蔭生尚真」と題す。医・書籍に関する雑記帖。「樫蔭／之」の印あり。

＊古京遺文　二巻　狩谷望之編　写（自筆草稿）　二冊

茶色表紙（二三・七×一六・五糎）。外題「古京遺文上（下）」は狩谷棭斎筆。単辺（一八・九×一二・九糎）有界九行白口の印刷罫紙使用。毎行廿字、注小字双行。朱墨両様の増削の書入が多く、草稿本である。我が国金石学上空前の名著と云われる本書には文政元年の自序があるが、その後も修補が続けられた。この本には自序がなく、それ以前の草稿であろう。自筆本と称されるものに、静嘉堂文庫・東京博物館・穂久邇文庫の蔵本がある。伝写本にも夫々出入が見られるのは、棭斎が改稿続補を重ねていたので、それが夫々の階次で別々に伝抄されたからである。「弘前医官渋／江氏蔵書記」の印あり。

同　〔江戸〕写　一冊

刷毛目表紙（二七・五×一七・五糎）。字面高さ約十八糎。毎半葉十行、行廿字。前掲本と出入があり、この本も定稿前の稿本の転写であろう。目録後「法隆寺金剛仏冊八躰中」の条の末に「按望之僅認高屋大先之記而以為金不原始焉然尚／先是者在同寺嗚呼卒忽乎／源正宣録」の書入がある。楊守敬の朱墨両様の校字（恐らく前掲本によるものか）の書入が存する。

本朝鐘銘抄　編者未詳　〔江戸末〕写　六冊

半紙本。書名題簽による。山城国七十九（第一冊―四）鎌倉外地方四十三（第五・六冊）の鐘銘を輯む。

＊史略歌論　撰者未詳　〔室町〕写　四冊

淡香色表紙（二四・五×一九・四糎）。料紙は唐紙。字面高さ約廿・五糎。毎半葉十行、行廿三字、注小字双行、行卅一字。朱句点及び朱筆書入あり、また朱墨両筆を以て添削する所あって、稿本の如く見える。書名は内題なく、外題による。本書は首に「楚漢歌凡五年」と題し、項羽より始って、「南宋九主歌論得百五十」と、南宋に止る。歴代皇帝毎に「歌曰」として史詩を掲げ、史実を注記する。恐らく邦人の編になると思われるが、他に類本を聞かない。

*〔九代記〕　撰者未詳　〔江戸〕写　一四冊

茶色墨流布目表紙（二〇・八×一四・五糎）。字面高さ約十六・五糎。毎半葉十行行十八字、注小字双行。第十四冊末に右自醍醐至後一条院之記於相州／鎌倉求出之経年月々日終書写／功早／弘長癸亥十二月三日　信盛の摹写体の本奥書がある。少しく朱校書入があり、第三冊末に「元禄十四年十一月一校早」の朱筆識語がある。醍醐天皇より後一条院に至る九代に亘る編年体史。静嘉堂蔵写本（九代帝王記）・書陵部蔵写本（九代略記）等と同種。「温故斎蔵書」（窪田清音）「結城／家蔵」「会輔堂／秘書記」等の印あり。

〔体源抄〕一三巻（欠巻一・四・五・八上・九）　豊原統秋撰　〔江戸前期〕写　一五冊

縹色表紙（二二・八×一五・八糎）。字面高さ約十九糎。毎半葉七行。朱筆句点を附す。外題「日本楽譜」。内題なし。雅楽の書で、巻十三末に自跋あり、本書撰述の趣旨を述べた末に「永正第九暦壬申林鐘中旬撰終早／正四位下行前筑後守豊原朝臣統秋判在六十三歳」と署す。本書は日本古典全集に翻印あり。

前言百首　編者未詳　〔江戸〕写　一冊

本文共紙表紙（一八・二×二〇・五糎）。仮綴。単辺（二一・四×一五・二糎）有界十二行白口「〇一枝堂蔵書」の印刷罫紙使用。行廿字、注小字双行。全九丁。巻首「前言百首」と題し、次に

名可破也、而不可奪堅、丹可磨也、而不可奪赤呂氏春秋、第十二之六葉左、誠廉

の如く、教訓の句百首を諸書より輯録する。

抄書　〔江戸〕写　二冊

半紙本。やゝ厚手布目間似合紙。袋綴。首に「南畝秀言　太田翁所著」と題し、以下種々の書からの抄録と雑記書留とから成る。

瓦舎亭雑鈔　六巻〔江戸〕写　六冊

半紙本。本文共紙表紙。初の方首は医書の抜書、次に「瓦舎亭雑抄目録」を附し、種々の項目につき諸漢籍より抄録す。

*古文書彙　〔江戸〕影写　一冊

刷毛目表紙（三二・五×二二・二糎）。薄葉斐紙に襯紙をはさむ。奈良時代の文書の影鈔で、東大寺の文書集か。「小山田文庫」の印あり。

*幼学指南鈔　編者未詳　存巻三・四、九、一三・一四、一七・一八、卅、巻次未詳三冊　〔平安末〕写　一〇冊

淡丁子色後補覆表紙（二四・二×一四糎）。粘葉装。元表紙は濃茶褐色或は縹色表紙（巻卅）で、左に題簽があった跡が残っている。料紙は雲母飛雲入り薄鼠色厚手斐紙。両面書。白界を施し、界高廿・三糎、界幅一・七糎。天に一線を引き、その幅一糎。毎半葉七行、行十五乃至十六字、注小字双行。寄合書で、所々朱点朱引が附され、本文は標目の字より一格を低する、即ち天の線の下に記されている。この本は不幸破損が多い。毎冊初に目次を附す。

本書は平安朝に編纂された類書であるが、諸古目録に著録を見ない。ほゞ初学記その他の類書に倣って部類を立て、注は諸漢籍より引用輯集する。楊守敬曰く「毎条有題所引古書至六朝而止細核之蓋従徐堅初学記鈔出而其文字則遠勝今本」と。確に初学記による所多いか、守敬が抄出というのは行きすぎで、その他の類書も参考にしてかなり独自の編纂をなしている。残念ながら全巻が伝わらず、この掲出本の存巻は

巻三（歳時部上下）　巻四（地部上中）　巻九（人部四、末欠）　巻十三（官職上、末欠）　巻十四（理政部）　巻十七（居処部）　巻十八（産業部）　巻卅（鱗介部・虫豸部、末欠、後半に天の部の残葉が誤綴さる）　巻次未詳三冊（宝貨部下、衣服部、音楽部）

巻卅の元表紙の右端に「卅一冊之内」という墨書があるので、本書は三十巻卅一冊であったと思われる。本書の他の伝存本はいずれもこの本の僚巻で、左の如く分蔵されている。

大東急記念文庫蔵（巻二、五、一九、二三、二五）　竹柏園旧蔵（巻八）　梅沢記念館蔵（巻一六）　保阪家旧蔵（巻二七）　成簣堂文庫旧蔵（巻二八）

現存本全てを合せても、まだ三分の一強の欠巻があり、この平安鈔本以外には伝鈔本も発見されず、刊本も存しないので、未だ学界で利用されていない類書である。この本の巻十四・十七の巻末に「覚瑜」の墨署が存する。楊志十一著録。

＊仲文章　〔江戸〕影写鎌倉旧鈔本　一冊

丹表紙（三〇・二×二一糎）。薄葉斐紙に影写、原本は鎌倉写巻子本であろう。界高十四・七糎、界幅二・七糎。毎半葉六行、行十五字内外。首に「孝養第一　学業第二　農業第三　貴賤第四　吏民第五　礼法第六　同心第七」の目次を列して本文に接続する。末に「仲文章一巻」と題する。通行の続羣書類従本は首が欠けているので、完具のこの本は摸本ながら、原鈔本の所在が不明であるだけに貴重である。通行本は首が欠けていたので、第一篇の篇題が不明であったが、「孝養」であることが判明する。また第七篇の「同心」は類従本は「金友篇」となっている。「小島氏／図書記」「向黄邨／珍蔵記」の印あり。楊続譜著録。

類聚名義抄　仏・法・僧各三巻　〔江戸〕影写観智院本　一〇冊

表紙外題・扉題字・目録外題共に狩谷棭斎の筆蹟。棭斎が東寺観智院蔵（現在天理図書館蔵）平安鈔本（影印本あり）を影写せしめたものであろう。棭斎の筆らしい藍筆の圏点が附されている。楊志一著録。

＊和名類聚抄　五巻　源順撰　天保一〇年写　五冊

淡香色地縞表紙（二四×一六・六糎）。単辺（二一×一四糎）無界、毎半葉七行、行十七字、注小字双行。毎巻末「天文丙午天」の本奥書あり、また次の奥書を存する。

（巻一末）部立次第甚混混雑ス今之板本可参考

誂全宗書之　天文丙午天

天保十亥年八月八日
（巻五末）誂伊舞上人書之／天文丙午天
今本巻第二十終トアリ慶安元戊子霜月
寛保癸亥夏五月中弦於皇都書肆得之／皇龢桑門東総陽香取郡／鏑木邨法印快賢伴題
此旧写本文楼天成翁所蔵也今写於燈火之下／時天保十乙亥歳秋望日中浣行年六十六翁／金山六復書
与流布和名抄并一本之写本校合加朱畢
今本・板本・一本・古本等との朱墨の校異書入がある。この本の内容は十巻本と同じく、たゞ五巻に併せたにすぎない。椹斎の「箋注倭名類聚抄」に所謂下総本に該当する。「仔嶋／蔵書」の印あり。首に明治十六年四月印刷局長得能良介撰の「校刻和名類聚抄箋注序」（森立之筆）一葉を合綴する。

＊同　〔江戸後期〕写　五冊

茶褐色表紙（二七×一九・三糎）。字面高さ約廿三糎。毎半葉七行、行十七字。注小字双行。朱振仮名を附す。各巻末奥書は、巻五末の寛保快賢伴題まで前掲本に同じく次に
右五巻者於芙蓉店求之不可出／閫外者也／嘉永二年四月十二日　穂積重年
とある。前掲本と同種で、校異書入も殆ど同じであるが、僅かながら出入があり、此は朱筆で振仮名をふる所がある。前掲本は或はこの本による重写か。楊守敬の書入も少しく加っている。「花迺家文庫」（堀直格）「文字楼蔵」「呆存蔵書」の印あり。守敬はこの本を底本として清光緒卅二年（明治卅九年）の序を附して攸県龍研仙をして翻刻せしめた。しかしその本はこの五巻の分巻を十巻本に従って十巻に改めている。

＊桑家漢語抄　一〇巻　伝楊梅顕直撰　〔江戸〕写　一冊

紺表紙（二八×二〇・三糎）。字面高さ約廿一糎。毎半葉八行、行十六字、注低一格。巻末本奥書に
右十巻之秘者楊梅大納言顕直卿之漢／語抄也今度之秘録撰集之勅写之／天正六年乙亥三月下旬／清給事中／洞霞老人書之
と。天正の本奥書本は比較的伝存が多い。本書は「楊氏漢語抄」とも言われ、天文以下の部門別による漢名詞の注である。

〔八代集〕　合一四〇巻　〔江戸前期〕写　一四冊

梨地色緞子表紙、枡形本。厚手裴紙、両面書、綴葉装。毎半葉十行。所謂嫁入本。

連歌秘伝集（連歌至宝集）　里村紹巴撰　〔近世初〕写　一冊

後補空色表紙（二二・七×一六・九糎）。やゝ厚手間似合紙。字面高さ約十八・五糎。毎半葉九行。所々朱句点を附す。内題なく、書題簽に「連歌秘伝集（法橋紹巴自筆）　完」と題するが、紹巴自筆ではない。この本は「連歌至宝集」と題される書で、巻末の跋の末に「天つ正しき十とせの三か一の秋のはしめにしるすもの也　法橋紹巴」と識してあるのは、明智光秀を憚って慶長と改めぬ旧形を示している。

*和漢朗詠集　二巻　〔藤原公任編〕　〔室町〕写　二巻

表紙欠。巻子装。料紙は雲母入銀箔をまく厚手斐紙、紙幅廿六・八糎。上・下夫々筆者を異にするが、紙質・書写時代はほゞ同じ。「和漢朗詠集上（下）」と題し、毎書題の次に目次を列して本文に接属する。上巻は春より冬、下巻は雑。上巻は字面高さ約廿・四糎。漢詩は行十四字、和歌は字数不同。注小字双行。朱ヲコト点（墨点のみ）、墨筆の訓点・四声点・濁点（。゜）を附す。下巻は天地に横線を一条づゝ引き、その間に写す、その間の高さ廿・九糎。墨筆の訓点、朱筆の六声点・濁点を附するが、ヲコト点はない。中間三張は別手の後の補写で、朱筆の訓点が附されてある。

*日本国現報善悪霊異記三巻附日本霊異記攷証三巻　釈景戒撰　狩谷望之校並攷証　狩谷望之自筆稿　六冊

後補紺色表紙（二八・五×二〇・五糎）。薄葉斐紙（原料紙の高さ二七・四糎）、襯紙をはさんで改装。狩谷棭斎が、上巻を高野山金剛三昧院蔵本、中・下巻を尾張真福寺蔵本を以て底本となし、校訂を加えた校本は、文化十三年二月の自跋を附し、羣書類従中に収入刊行され、その攷証は文政四年江戸の書肆万笈堂から発行された。この本はその草稿である。

校本霊異記は字面高さ十九・五糎。毎半葉十行、行廿字。棭斎の朱墨両様の句点訓点、藍筆の圏点、朱墨両様の校字注の書入が甚だ周密である。巻下の本文は棭斎が書写せしめた他筆である。上巻の元表紙見返に「文化辛末（八年）七月再読」（朱筆）「辛末十二月十二日再読」、巻上末に「再校了／卅一丁」、中巻元表紙見返に「丙寅（文化三年）十月七日再読□」（朱）「戊辰（文化五年）九月」、巻末に「己巳（文化六年）三月十九日校了／四十二丁」の棭斎の手識が存する。

攷証は字面高さ約十九糎。毎半葉十行、行廿字、注小字双行。下巻本文は他筆。朱墨両様の増删の加筆が眉上行間に繁夥。上巻末に「与浄書本対校　文化丙子（十三年）閏八月再勘望之」「再稿了」（朱）と識し、毎元表紙に「第三／不用（朱）／上（中・下）巻攷証」と題署。一部は他人をして書写せしめているから、この前に草稿があった筈であり、外題に「第三」の朱筆が見え、以下の稿本の外題に「第六」までの番号が朱筆で附してあるのは、この稿本が第三次たることを示していると思われるが、次掲稿本に対し、今便宜上仮にこの稿本を第一次稿本とする。

*日本霊異記攷証　三巻　狩谷望之撰　第二次稿　三冊

やゝ厚手斐紙と薄手を交え、襯紙を挿んで改装。装訂行款前者に同じ。本文は大部分他人をして書写せしめているが、その筆蹟は棭斎流。朱墨両様の棭斎自筆の加筆訂正が極めて精密で、切り張りが多い。外題に「霊異記上巻攷証（第四（朱））」「中巻攷証（第四（朱））中書」「下巻攷証（第四（朱））中書」と題し、下巻末に次の文化十三年の識語がある。

予校始于寛政十三年于今経十六寒暑此中喪親産／子人事百端

或罹疾病為医所棄然卒業於今日多々／可謂幸也　狩望

＊同　第三次稿　三冊

薄手斐紙。装訂行款前掲本に同じ。増删の書入が多い。外題に「霊異記上巻（第五朱）攷証中清書」「霊異記考証中巻廿六丁」「下巻攷証中清書（朱）　廿九丁」と題し、上巻末に左の識語あり。

攷証都合六　九十葉三々「卒卒講

攷証　詮八十　盤余宮　丁丑観　閑会

校了　神武　六月十日浄書立筆

＊同　存巻上　第四次稿　一冊

装訂行款前掲本に同じ。増删訂正の書入多し。外題に「霊異（第六朱）記上巻考証卅一丁」と。巻末に「文政己卯（二年）除夜重校畢望之」の朱筆識語あり。本書は不朽の名著と評されるが、桛翁稿を改めることと数次、なお硃筆止むことなし。大東急記念文庫に蔵さる攷証の刊本にはなお桛翁補訂の硃筆が見える。慎密の至れる、たゞたゞ驚汗畏敬あるのみ。

霊異記訓釈分音　編者未詳　〔江戸〕写　一冊

半紙本。霊異記の訓を五十音順に抄録せる索引。末に「文化丁丑四月七日」と。

＊雑録簿　〔室町〕写　一帖

淡緑色地に金泥唐草文様表紙（二九・七×二〇・五糎）。折帖。紙背は享徳三年具注暦。表面は字面高さ約廿九糎。毎半折の行数字数不等。仁和寺門跡歴代の履歴を記す。寛平法皇に始り、後中御室（後鳳峨院御子性助）に至り、以下欠。

阿叉羅帖　五巻（欠巻五）　〔釈宗淵編〕　〔天保八年西来寺〕刊　四帖

折帖（二九・三×一五・二糎）。この本は第五帖を欠く。第五帖の巻末に「天保八丁酉年刻龍宝山西来寺／用達所（洞津地頭領所豊住書）舗」の刊記がある。法隆寺・高貴寺を始め諸寺院所蔵の多羅葉梵文及び梵字経の書影を摸刻し、経名・筆者名等を注記する。伝存本が尠い。

＊遍照発揮性霊集　続共一〇巻　釈空海撰　釈真済編（続）釈済暹編　〔室町末〕写　一〇冊

丁子色高野表紙（二七・四×一八・五糎）。首に真済序あり、本文巻首「遍照発揮性霊集巻第一　大遍照金剛和尚ノ文ッ」と題す。「続遍照発揮性霊集補闕抄巻第十」の末題の次に「此集第八以来零落年久仍拾先聖／義言補三軸闕文于時康暦三年仲冬／上旬愚昧苾芻済暹記」の跋あり。単辺（一九・五×一五糎）有界七行、行十四字。層格を設け、その幅四・三糎。墨筆訓点振仮名を附し、和文を含む注の書入が層格行間に記さる。表紙右下端に「順雙房／覚秀」の墨署名あり、また「和学講談所」の蔵印を有す。

＊同　釈印融分句　〔室町〕刊　高野版　一〇冊

原装丁子色高野表紙（二六・七×一八・七糎）。用紙は厚手楮の高野紙。首に真済序あり、本文巻首「遍照発揮性霊集巻第一（大遍照金剛和尚文）」と題し、第二行以下毎巻目次を列して本文に接属する。第二行目次下端に「印融記之」と題す。巻二のみ「性霊集

文筆私抄第二　印融記之」と題する。巻末済暹跋なし。室町期の朱引・朱四声点・濁点（゜）・連声符・音訓連符、墨筆の訓点を附すること精密にして、和注を含む注の書入が行間眉上に存する。書入はほゞ二手よりなる。表紙右下端に「乗甚房」、毎冊尾に「伊賀古山／実慶」の墨署名がある。

＊柳汴文藁　三巻（欠巻下）　多紀（丹波）元胤撰　〔江戸〕写　一冊

縹色表紙（二三・七×一六・七糎）。双辺（一七・二×一一・八糎）有界十行版心白口「聿修堂蔵」と刻する印刷罫紙使用。行廿四字。朱点朱引を附す。首に「柳汴文藁目録」あり、本文初「柳汴文藁巻上／東都　丹波元胤紹翁」と題する。巻末に「天保甲辰歳季秋初六日於柳北之医庠校読／不肖元佶誌」の朱筆識語あり。幕府の医官多紀元胤の文集で、元胤は元簡の長子、字は奕禧（或は奕祺）、一の字は紹翁、文政十年卅九歳にて歿。この本は目録に上中下附録と録するが、巻中に止って、以下がない。

本朝文粋　一四巻首目一巻　藤原明衡編　堀正意校　寛永六年刊（京・田中長左衛門）　古活字版　一五冊

丹表紙大本。寛永六年林羅山及び堀杏菴の「新刊本朝文粋序」と目録とを以て首目一冊をなし、巻末寛永六年那波道円の「新刊本朝文粋跋」あり。双辺（二二・三×一六・七糎）有界九行、行十八字。版心粗黒口「本朝文粋巻幾　（丁付）」。巻一末に「于時寛永六己巳暦卯月吉旦／玉屋町　田中長左衛門刊之（印）」、巻十四末道円跋の次に「玉屋町　田中長左衛門開板（印）」の刊記を有する。朱点朱引、古訓による朱筆ヲコト点、墨筆の訓点（朱筆も混ゆ）四声点濁点が附され、イ本との校字書入も存する。楊統譜著録。

＊文鏡秘府論　存東（論対）・西（論病、末欠）　釈空海撰　〔鎌倉〕写　一冊

後補縹色表紙（二五・五×一六糎）。粘葉装。厚手斐楮交漉紙に両面書。白界を施し、界高廿一・七糎、界幅二糎。毎半葉七行、行十七字。巻首「文鏡秘府論　東」、第二行四格を低して「金剛峯寺禅念沙門遍照金剛撰」と題する。西の巻は「廿三日落節」の「又詠春詩曰」に止って、以下を欠く。この東・西の巻は通行本の巻三・五に当る。扉に「文鏡秘府論古鈔零本二巻／此亦狩谷望之所蔵有棭斎印記」と墨書。「棭斎」の蔵印あり。楊志十五・楊譜十54著録。

国立中央図書館蔵日本旧鈔・日本旧刊・日本人手沢善本解題

中央図書館蔵本の今次調査本の中から、日本人の写になる漢籍旧鈔本、日本旧刊本・古活字版、日本人の手識書入を有する善本の類を選んで解題を加えて附録とする。同館は和刻本をかなり蔵するが、大部分省略した。配列は同館善本書目増訂本の順による。

周易　六巻　魏王弼注　清楊守敬令影写室町鈔本　三冊

紺色表紙（三一・六×二二糎）。字面高さ廿・五糎。毎半葉九行、行十七字、巻五・六は八行十六字。守敬が前掲の観海堂蔵室町鈔本を薄葉紙に影鈔せしめた本で、たゞ朱筆ヲコト点墨筆訓点や書入は移写していない。楊志補著録。既に引載した光緒十八年守敬の手書題識（楊志補収）が巻初に附綴してある。

古文尚書　一三巻　旧題漢孔安国伝　清楊守敬令影写室町鈔本　四冊

紺色表紙特大本。前掲の観海堂蔵室町鈔本五冊（「智福山法輪寺」の蔵印あり）の影鈔本で、但し上五経正義表（附注）・尚書正義序等の第一冊は省き、また訓点書入等は写していない。守敬の朱筆校字書入あり。楊志補著録。首に光緒十八年の守敬の左の手書題書（楊志補所収文と小異）二葉を附綴する。

旧抄本古文尚書十三巻毎半葉九行行二十字装為四冊毎／冊首有智福山法輪寺印冊尾有有（マヽ）以荷包印界欄上節／録孔疏（此本未摹）篇中古字俗字甚多与山井鼎攷文所載古本合而与薛季宣古文訓／又多異按釈文序録云尚書之字本為隷古既是／隷写古文則不全為古字今宋斉旧本及徐李等音／所有古字蓋亦無幾穿鑿之徒務欲立異依傍字／部改変経文疑惑後生不可写用蓋指此等書也陸／氏之説其果与否尚待詳攷然因此可知此為唐初旧／籍（如允蠲百工注蠲理又則能信理百官皆以治作／理避唐高宗諱其為唐人之遺無疑）其中為長興／以下板本所奪誤者藉以訂正不少如山井鼎物観等所／校出者是也然亦有板本不誤而攷文所称反誤者今以／此本覆校之有応有不応迺知山井鼎物観所見之／二本偶有伝録之差非古本尽如是也如舜典詩／言志注謂詩／言志以導之攷文云古本無謂字此本則有／謂字陟方乃死注三十徴庸攷文云古本庸作用此本仍作庸／凡寿一百一十二歳也攷文云古本歳作載此本仍作歳咎繇謨／降水敝予注水性流下攷文云古本性作惟此本仍作性克／勤于邦注卑其宮室攷文云古本宮作居此本仍作宮益／稷予思日孜〻注奉承臣功而已攷文云古本承作成此仍作承／惟慢遊是好注攷文云古本無惟字此本有惟字（全書此類甚多別詳札記）／又有山井鼎物観所漏校而甚有関於経義者如堯典／定朔方日幽都注北称朔亦称幽宋以後皆誤幽為方／遂以方有北訓不可通父頑母嚚象傲注心不測徳義之経為／頑岳本此下有口不道忠信之言為嚚九字此本無之按上文嚚／訟可乎注言不忠信為嚚既釈嚚字故此処不再釈岳本非也／大禹謨万邦咸寧注則賢才在位天下安寧也岳本脱寧／字非也奉詞伐辠注詞謂不敬各本作恭此因避宋諱改攷／文失校（此類亦多別詳札記）大抵日本古鈔本注文之末毎多虚字有不可／通者山井鼎一一校録阮文達校刊記詆之或者遂疑古本為贋／本不可信不知皆非也唐以前古書皆鈔写本此因鈔書者以注／文雙行排写有時先未校算字数至次行餘空太多遂増虚／字以整斉之別無意義故注文多虚字而経文無有也至宋代／刊本盛行此等皆刊落然亦有沿襲旧鈔本未剷／除尽浄者如宋槧元応一切経音義是也此唯余蔵宋槧有之明南北蔵本亦然別詳札記即如此書咎繇謨寛曰粲九句七句注脚皆有也字／唯柔而立彊而誼二句無也字以此二句或六字或八字皆両行雙斉／不煩増字也幷記於此以釈来者之惑光緒壬辰春楊守敬記（印）

毛詩　二〇巻　漢毛亨伝　鄭玄箋　清楊守敬令影写室町鈔本　一〇冊

紺色表紙大本。襯紙を挾んだ薄様斐紙。前掲の観海堂蔵室町時代釈宗訓書写本（狩谷棭斎旧蔵）を楊守敬が影写せしめた副本で、訓点書入等は写していない。巻六まで守敬の朱墨両様の校字附箋がある。但し第一冊に多いが、他は少い。楊志補著録。首に光緒十八年の守敬の左の手書題記（楊志補所収文と小異あり）二葉を附綴する。

古鈔本毛詩鄭箋二十巻首題毛詩巻第一次行周南関雎詁訓伝第一毛詩国風鄭氏箋欵式与山井鼎攷／文所載合第十巻末有経注字数第二十巻末有篇数章／数句数字数毎半葉九行行二十字界長六寸強幅四寸六分／毎紙有層格内抄音義及正義（此重写不摹層格）巻尾記四国／与州宇和之庄多田長寿寺宗訓書巻首有龍□碧□／二印此森立之訪古志所載云是求古楼蔵今以此本照／之一一相合毎巻首有棭斎印狩谷望之号也棭斎／蔵書名求古楼日本文政間学人之最其蔵書之富／又過於官庫読森立之訪古志足見一班按山井／鼎攷文所載足利学所蔵古本皆称是隋唐之／遺独毛詩所拠本多衍文誤字顧千里遂謂其／古本是采正義釈文而作而於其絶佳者亦多略／之此本則与山井鼎所記多不合則知攷文第拠足利／学所蔵非日本古本尽如斯也第以国風周南一篇校／之其不相応者已不下数十処如関雎箋云古本作后／妃之徳無不和諧荇接余也云余下有采字楽必／作也云作上有皆字葛覃序后妃在父母家云古本／母下有之字伝濩煮之也云無之字王后織元紞織上有親字命婦成祭無成字未知将所適将下有有〻字／乃能整治之云無之字我見教告上有言字告我以適人／之道適上有嫁字（此尤非是）巻耳箋必有醉而失礼者云無／而字伝石山載土曰砠云山下有之字樛木序而無疾妬／之心焉云焉作也伝本（宋）之下曲曰樛云本枝下曲曰樛螽斯／伝振振仁厚也云厚下有児字桃夭序国無鰥民也云民／下有焉字灼灼其華云華下有也字（此尤非）兎罝箋皆以禦難也云／皆下有所字有武力可任為将帥之徳云無可字罝（免罝）免之／人云下有賢者二字（此亦非）芣苢薄言襭之云襭作擷伝袺／執衽也云袺下有者字漢広箋紂時淫風云下有大行／二字伝喬上竦也云喬下有木字箋将不至也云不下有敢／字尤翹翹然者云尤下有長字汝墳箋弃我而死亡云無而字麟趾箋無以過也云過下有有字（尤非）凡此攷文所記此本／皆不相応而皆以此本為長惜山井鼎未之見也然則日本／古本自五山板本外当以此本為正因使書手伝録一通以原／字既過小又草率遂有原本不誤而書手伝写誤者今／為圏正之善読者当不以為嫌也光緒壬辰春楊守敬記（印）

同　〔慶長〕刊　古活字第二種(イ)種本　五冊

双辺有界八行、行十七字、注小字双行。版心小黒口「毛詩幾（丁付）」。朱ヲコト点（巻三まで）朱句点朱引、墨筆の訓点声点（朱訓も混ゆ）、注文には朱句点のみが附さる。「日野西／家蔵書」の印あり。

礼記　二〇巻　漢鄭玄注　清楊守敬令影写室町鈔本　一〇冊

大本。薄葉斐紙に前掲観海堂蔵室町鈔本を影写せしめた副

本、前例と同じく訓点や書入は省いてある。第一冊に少しく守敬の校字書入がある。外題の「新写古鈔本礼記幾」は守敬手書。楊志補著録。首にこの本の原本の所で引載した光緒十八年の守敬の手書題識二葉が附してある。

同　存首一〇巻　〔慶長〕刊　古活字第一種本　五冊

艶出茶褐色空押行成表紙大本。双辺（二二・五×一六・七糎）有界八行、行十八字、注小字双行。版心黒口「礼記巻之幾（丁付）」。江戸期の藍筆句点、墨筆訓点、少しく朱筆振仮名（別筆）を附し、行間に音義反切注、上欄に正義その他の抄録の書入がある。少しく別手の朱筆書入も加っている。

春秋経伝集解　三〇巻　晉杜預撰　清楊守敬合影写金沢文庫旧蔵鎌倉旧鈔巻子本　三〇冊

既述の如く、観海堂にも影鈔本二部が蔵される、金沢文庫旧蔵宮内庁書陵部現蔵北条実時等手写清原教隆等加点鎌倉旧鈔本の影写本である。水色表紙（三二・七×二二・五糎）、襤紙を夾んだ薄葉斐紙に影写。字面高さ約廿三・五糎。毎半葉六行、行十二字、注小字双行。ヲコト点訓点は写さないが、朱墨の原校字は移写。守敬の校字書入が少しく存し、次の識語がある。

（巻十八尾）光緒癸未借日本楓山官庫所蔵／駿府古鈔巻子本屬鈔／胥影覆手校一過十一月九日／守敬記（紫筆）

影鈔巻子本左伝第十八／校過（印〔鴻宝〕〔経学〕）（印〔韓昊〕〔史学〕）（別筆）

（巻廿六尾）光緒癸未借楓山官庫本影抄／手校一過　惺吾（紫筆）

影鈔巻子本左伝第廿六／校正（二字朱筆）（印〔韓昊〕〔史学〕）（別筆）「徳福／鴻宝／斎周／氏珍／蔵書」「韓昊／史学」「鴻宝／経学」「福楼書／巻之宝」等の印あり。首に光緒八年の左の守敬の手書題識四（楊志補収）葉を附綴する。

旧読山井鼎七経孟子考文各経皆有古鈔／本唯左伝経注本注疏本皆只拠足利学所／蔵宋槧因疑日本左伝無古鈔本及得／小島学古留真譜中有摹本第□巻首葉／字大如銭迥異日本諸鈔本問之森立之乃云／此書全部三十巻是古鈔巻軸本蔵楓山官庫為吾日本古鈔経籍之冠山井鼎等／未之見也余因託書記官厳谷脩於楓山庫／中検之復書乃云無此書深為悵惘故余／譜中刻第巻□首一葉以為幟志而森立／之力称断無遺失理且道卅巻共一櫝為／格□五幷告其櫝之長短尺寸使厳谷再検／之久之乃得且許仮我一月読計全書卅／巻無一字残損紙質堅韌如硬黄紙背亦／有校記日本所謂奥書也均是未標本各巻／後有建長中越後守実時参河守教隆文永／中清原俊隆正嘉中清原直隆弘安中左近／衛将監頭時跋皆係親筆題署（森立之云）又有／延久保延仁平久寿応保長寛嘉応治承／養和寿永元歴建保承久延応各記第三／十巻末有応永十六年八月一日覧了跋毎巻有金／沢文庫印篇中朱墨校記其称才ナ才无者／謂宋槧摺本之有無也才即摺字ナ即有字其称／乍某者乍即作字也皆校書者省筆余以為／此絶書僅有奇書不可不伝録之迺雇書手十餘人窮日夜之力影摹之又以其筆／法奇古摹鈔未能神似毎巻雙鉤首一葉／及巻後題字以存真面凡一月而成其中文字多／与陸氏釈文所称一本合蓋六朝旧籍非／唐

以後所可比勘其経伝之異於唐石経／者且数百字其注文之異於宋槧者不可勝紀／明以下俗刻更無矣今略標数条如昭廿七／年伝夫鄢将師矯之命以滅三族三族国之／良也自唐石経以下皆不畳三族二字文義不足／得謂非脱文乎（日本又有唐人書昭廿七年左伝一巻亦／畳三族二字其巻蔵高山寺余於紙幣局見之）其注文如荘十九年伝刑猶不忘納君于／善注言愛君明非臣法也楚臣能尽其忠愛所／以興自岳本以下皆脱下臣字不可通矣又如桓九／年伝夷戎師前後擊之尽殪注為三部伏兵／祝聃帥勇而無剛者先犯戎而速奔以過二伏兵至／後伏兵伏兵起戎還走祝聃反逐之云云宋以下刻／本過皆作偶又不畳二字最為謬誤蓋祝聃引／戎師過二伏兵而戎尚不知遇伏至後伏兵之処伏兵／尽起戎始知遇伏而還走若至二伏兵即相遇則／必鬬安能引至後伏兵処乎畳伏兵二字情景如絵／蓋三伏兵幷起也若夫死而賜謚等要義皆絶／勝俗本全書朱墨校具在細意詳考知為／六代旧伝無疑其中亦間有鈔胥奪誤深識／者自能弁之亦無事曲徇余嘗謂拠今／所得日本七経古鈔本重校一過当勝山井／鼎此其一徴也光緒壬午夏六月宜都／楊守敬記于東京使館（印）

光緒癸巳三月庚寅楊氏帰於鴻宝斎（印）

同　〔慶長〕刊　古活字第二種異植字本　一五冊

後補紺色表紙（二三・四×二〇・三糎）。裏打補修あり。双辺（二〇・二×一五・九糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心黒口「左氏幾　（丁付）」。巻五第廿四丁及び巻廿四第五丁補写。この本「古活字版之研究」に言う第二種本中の(イ)(ロ)とは別の異植字版である。(ハ)種本は高木文庫旧蔵一本があるのみで、その所在が今不明なのでこの版が或は(ハ)種に属するか、或は別種か未だ確認するに至らない。江戸初の朱点朱引墨訓点四声点濁点（朱筆訓点も混ゆ）、巻八以下には朱ヲコト点（明経点）が附され、校字注釈等の書入があり、少しく家本の説の注も存する。清家点の移写であろう。巻十末に前掲の金沢文庫旧蔵鈔本の奥書を影写せる薄葉紙が貼附さる。「伊沢氏／酌源堂／図書記」（伊沢蘭軒）「保寿庵」（陰刻）「古山」（壺形）「桐城蕭穆／紅籍図記」等の印あり。

同　安政三年刊（田辺氏蔵版）　覆岳珂本　清楊守敬手校本　一五冊

巻初眉上に楊守敬の「光緒九年冬借日本秘／閣古鈔本校原本毎行／十二字寛八分半高／截尺六寸一分強毎紙十／六行注夾行写」の朱筆識語があり、全巻に亘って金沢文庫本との朱筆校字を欄外行間に書入し、その巻首奥書の摹鈔を毎巻末に貼附してある。「益田／之印」「益田蔵」の印あり。

論語　一〇巻　魏何晏集解　〔室町初〕刊　正平版無跋本　五冊

今中央図書館が管理し、故宮博物院内に保管されている旧北平図書館蔵本。灰色地絹表紙（二七・五×二〇・四糎）を附し、元料紙（紙幅約二六・二糎）をやゝ厚手の台紙に貼って、粘葉装に改装されている。上記の観海堂本と同版の、所謂正平版無跋本である。朱点朱引朱勾点墨訓点が附され、「善慧軒」「守仙」（陰刻）の蔵印が鈐され、東福寺の彭叔守仙の手沢本

である。巻二巻末の副葉に左の識語がある。

本書元持主東福寺山内住瓢菴守仙／大和尚永正年間十三丙子云云二十七載／天文十壬寅五十三齢

己酉秋遊京都若林書肆得正平論語木板一方書賈出此対照一〻符合以其索僄過昂置之庚／戌春重遊此肆詢之尚在遂持帰改為胡蝶装／古味盎然洵可珍之秘笈也　潜山題記（印）

（中略、以下以上と別筆）

右之墨附紙数。本書ノ如キ奥書年号共／不記本旧板ノ説。我家蔵スル正平板四拾張壱枚本書ト引合／正平板疑なきもの也／明治四拾有二己酉二月末日記

景祐天竺字源　七巻（欠巻七）　宋釈惟浄等撰　〔江戸〕

写　伝鈔高山寺旧蔵平安鈔本　三冊

後補濃藍色表紙（二七・五×一九・二糎）。薄葉斐紙本。襯紙を夾んで改装。字面高さ約廿二糎。毎半葉九行、行十六乃至十七字。寄合書。前掲の観海堂本と同じく、高山寺旧蔵で今宮内庁書陵部蔵平安鈔本六軸（巻七欠）の重鈔本。「□華頂／入信院／蔵書」「町田／久成」「楡／生」の印あり。

新撰字鏡　一二巻　釈昌住撰　清楊守敬令影写天治元年鈔本　一二冊

紺色表紙（三六×二六糎）。前掲の観海堂蔵の影天治元年鈔本を春村・広前の奥書ともにさらに影写せしめた本である。第一冊首に楊守敬の左の光緒八年の手書題識（観海堂本の題記と異り、楊志収の文とほゞ一致）三葉が附してある。

影古鈔本新撰字鏡十二巻日本僧昌住撰原序中不出昌住之名然日本別有刪削注文之本及墓書一覧皆題為昌住撰当別有著録之書可拠序称昌泰中撰／成此書実中国唐昭宗光化元年也其書自天／部至連字凡一百六十部共二万九百四十餘字／分部不依説文玉篇次第而亦各以類従其／有偏旁上下左右之不同者亦為分之如火部／居左者為第八居下者為第九人部居上者／為第十居左者為第十一蓋特以便尋／検無他義例也其注収羅義訓最為／広博拠其自序大抵本釈応玄一切経／音義及玉篇切韻為主而又／旁採諸字書以増／益之其有東倭義訓亦間為附入今為勘之／其正俗等字有出於集韻龍龕手鑑之外／者所列古文亦有出於説文玉篇之外者蓋昌住／当日本右文之時多見古小学書観見在書目可証／不第玉篇切韻皆顧陸原本也余初従／書肆得影鈔本五巻一四五六七驚喜無似／惜其不全偏訪諸蔵書家亦絶無伝鈔／本詢之森立之乃知原本在博物館中因局長／町田久成使鈔胥就其館影写之町田云第二／第四両冊原為鈴鹿氏所蔵餘十冊為浪速／井上氏所蔵両家皆／欲合併為全書而皆不肯割町田為局長時勧両家均納博／物館於是始為全書毎巻有法隆寺／印蓋此寺為日本古時名刹多蔵古／書余所得古鈔本多有此印首巻末有天治元年／甲辰五月下旬書写之畢当宋宣和六年題記餘巻或有或無又云法隆寺一切経書／写之次為字決諸人各一巻書写之中此巻是五師静因之分以（朦）筆所写了蓋十／二巻為十二人所書余嘗赴博物館親／見原書用単紙堅滑異常両面書／写日本古写仏経多両面書写筆法各自奇古惜鈔／者尚未能似之迺別摹第一冊第一葉／以存原書真面目焉／光緒壬午秋八月宜都楊守敬記／于東京使館（印）

篆隷萬象名義　三〇巻　釈空海撰　清楊守敬今影写高山寺蔵永久二年鈔本　六冊

紺色表紙大本。前掲観海堂の影高山寺蔵永久二年鈔本（屋代弘賢奥書附）を楊守敬がさらに影写せしめた本である。楊印の外に「子／瑜」「逧圃／収蔵」等の印あり。首に守敬の左の手書題記三葉が附綴してある。

篆隷萬象名義三十巻日本東大寺／沙門大僧都空海撰空海入唐求法／兼善詞翰帰後遂為日本聞人之冠／今世彼国所伝仮字即空海所創／造也此書蓋拠顧野王玉篇為本／而一篆一隷配之（隷即今之楷書）其注文則如大／広益本但挙訓詁不載所引経典／唯所載篆書毎部中或有或無当／是鈔胥省之又自巻首至面部分析為十／二巻而総目則仍顧氏原巻此不可解／今古鈔原巻子本尚存高山寺余曾於／紙幣局見之原巻雖古亦非空海親／筆此蓋従彼伝鈔也按野王玉篇／一乱於孫強再乱於陳彭年其原本／遂不可尋余曾得古鈔巻子本玉篇残本／四巻刻之古逸叢書中可以窺見／顧氏真面目然亦只存十分之一今以此書／与四残巻校之則毎部所隷之字一一相合／絶無増損淩乱之弊且全部無一残／欠其可宝当出玉篇四残巻之上蓋／広益本雖删顧氏所引経典而要義／尚存況経典義訓為顧氏原書所遺者／正復不少惟顧氏上承説文其所増入之字／皆有根拠而其隷字次第亦多与説文／相合其有不合者正足与今本説文互相／証験（王三之以今本玉篇校説文惜不見此）則此中之原流升／降有関於小学者甚鉅況空海所存／義訓較広益本亦為稍詳（顧氏原書／於常用之字往往列四五義／広益本概存二三義而已）若拠此書删其篆／文刻之直当一部顧氏原本玉篇可矣／然此惟殷茂堂厳鉄橋王貫三諸／人能解之拔渉藩籬但知搜索／逸書如任大椿輩恐未必知之餘／無論矣惜抄此書者草率之極其／中奪誤満紙皆是此則不能不有待於深於小学者理董焉光緒癸未／秋八月宜都楊守敬記于東京使館（印）

＊史記　存巻二夏本紀　漢司馬撰撰　劉宋裴駰集解　宝治二年安倍時貞写　一巻

表紙なし。巻子本。料紙は斐紙、紙幅廿三・六糎。夏本紀の首を欠き、正文「陸行乗車水行乗船泥行乗橇」の注文「作蔡駰案孟康曰」に始まり、以下巻末までを存し、末一行を隔てゝ「夏本紀第二　史記二」と題する。界高廿三・六糎、界幅二・七糎。毎行十三字、注小字双行、行廿字内外。朱筆の句点ヲコト点（星点）、墨筆の訓点四声点濁点（○。）が附され、墨筆振仮名にはやゝ時代の下る別手も含まれている。但し注文は無点。少し朱筆を混えた音義反切校合注（イ・才との）が行間や眉上に存し、振仮名には所々声点が附される。紙背に主として司馬貞索隠より引用せる勘注が記さる。巻末尾題後一行を隔てて、次の奥書を存する。

文和三年応鐘廿七日　読合畢

復三　　大監物惟宗守俊

宝治二年五月三日書写了／同五日移点了太史大丞あへ時貞／（一交了又校或証本了）（朱筆）

建長八年七月卅日受管家之説了／匠作少尹あへ為貞

本云
桑門良暁給此書三字之点改直了／以索隠史記加裏書了
菅家淳高
読了　管在時
承久第二歳無射初六日受厳訓了／菅原亀丸
嘉禄年中以菅説読了　在御判
仁治三年四月十三日受厳訓了／菅原在匡
弘安十一年蕤賓八日受家訓了／隠陽大属あへ有雄
正安二年無射廿五日受庭訓了／主殿権助安倍重章

宝治二年奥書が本文同筆、他は別筆。その中で建長八年云々以下仁治三年云々までが同筆で為貞の筆。他は全て夫々別筆。以上の奥書によれば、宝治二年（一二四八）安倍時貞が書写移点し、建長八年（一二五六）安倍為貞が菅家の説を受伝して移写書入、その参照の菅家証本は桑門良暁から淳高（建長二年薨、年七十五）・在匡へと伝授された本である。この本は弘安十一年（一二八八）有雄、正安二年（一三〇〇）重章に伝えられ、その後安倍家を離れたらしく、文和三年（一三五四）惟宗守俊が読合識語を附したものである。

この本は森志巻三に「旧鈔巻子本　求古楼蔵」として著録された本で、木村正辞手書森志（大東急記念文庫蔵）には正辞が「此本為鈴木氏蔵」と注記しているから、椛斎の有を離れて、幕末明治初に鈴木真年に渡っていたらしい。しかしその後杳としてその行方が明かならず、たゞ大東急記念文庫蔵古活字版史記に森立之がこの本によって校字を注し、奥書を移写してあったので、その概要をほゞ推察し得たのみであった。こゝにその所在を明かにし、その全貌を明かになし得ることは洵に喜ばしい。この本は高山寺蔵平安末鈔本夏本紀とテキストの系統をほゞ同じくし、六朝唐写本の遺風を承けて、今本を訂正する所が多く、その異同は立之校注によって校勘せる水沢利忠氏著「史記会注考証校補」参照。「張継／之印」の蔵印があり、章炳麟の手書題記の別紙が添附されている。楊譜四678著録。

＊史記　一三〇巻（欠世家一・二）　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　張守節正義　〔慶長元和間〕刊　古活字無界九行本　五〇冊

褐色表紙（二八・七×二一・三糎）。双辺（二二×一六・八糎）無界、毎半葉九行、行十七字、注小字双行。版心粗黒口「史記　（小題）幾　（丁付）」。朱点朱引、朱墨両様の訓点（注文は朱点朱引のみ）が附され、朱・墨・藍筆による校異・注釈・訓説の書入が甚だ周密に施され、此等の書入は博士家点本や五山禅林の抄物（蕉雨抄云等と見ゆ）、張守節正義、評林本の注や諸古小学書類、玉海等からの抄録から成り、清岡（菅原）長親（輝忠男、実は五条為俊の末子、式部大輔正三位、文政四年薨、年五十）が施したものである。しかし長親がそれ等を自ら抄録したのではなく、次掲本を始め他の古活字版にも慶長以来類似の書入がなされているから、それ等を移写したものであろう。列伝六八末の「亀策伝雖如旧本加点末通義理云々」の識語は前掲の観海堂古活字版にも、次掲本にも移写されている。

第一冊末に「本云善清－江匡－橘直－巳上三説並存」等の凡例が見える。各巻末の長親の奥書次の如し。

(第一冊後表紙見返)寛政八年十月十三日辰剋与平重慶対読一過于時従四位大行式部権大輔兼大内記菅原長親／(朱)同九年六月五日与左京権大夫藤原資善対読自補史至堯紀同日更与坂野玄秀対読／(朱)同月八日与資善資同及右馬頭長公朝臣対読自舜記至述賛及下禹貢始／(朱)文政三年四月二日授師徳了先是授聴長朝臣了

(本紀第二冊)(朱)文政二年四月廿九日授正三位通理卿了式部大輔菅原長親／(朱)同三年四月十三日授江俊迪了／同年同月十九日侍御会読了

(同三)寛政八年十月十三日辰半刻与平重慶対読一過(朱)同九年六月十四日授清思斎与左京権大資善／朝臣右馬頭長公朝臣従五位下聴麿対読一過(墨)文化十一年七月一日授近江権介実達朝臣同年十月／授侍従隆敬朝臣東宮学士聴長朝臣及男長材及慶定等了

(同四)寛政八年十月十三日巳剋至同半剋同月十五日午刻至同半刻与平重慶対読一過／同九年六月十八日及同月廿二日与右馬頭長公朝臣及左京権大夫資善従五位下資同対読一過／(朱)文化十一年七月九日授近江権介実達朝臣(墨)同十三年八月六日授右兵衛佐治資朝臣了

(同五)寛政八年十月十五日午半剋至未剋与平重慶対読一過／文化十一年十月授近江権介実達朝臣侍従隆敬朝臣東宮学士聴長朝臣男長材及慶定等了／同十二年五月十四日授大江俊迪了勘解由長官菅原長親／同十三年八月七日授右兵衛佐治資朝臣了同十四年六月四日授下邑直幸了于時式部大輔／(朱)文化二年三月六日授正三位通理卿左羽林有言朝臣了

(六同)寛政八年十月十五日亥剋素読一過／文化十二年十一月八日授大江俊迪了先是授近江権介実達侍従隆敬学士聴長等朝臣了勾勘宰／(朱)文政二年三月六日授正三位侍従通理卿左少将有言朝臣了于時式部大輔

(七同)寛政八年十月十五日亥下剋素読一過文化十一年八月授実達朝臣早

(八同)寛政八年十月十五日夜子半剋素読一過至丑剋文化十一年九月二日授近江権介実達朝臣訖／(朱)文政三年八月七日授博士聴長侍従以長両朝臣了

(九同)寛政八年十月十六日卯剋素読一過／文政二年十月十六日候御会読了　式部大輔菅原長親

(十同)文政二年十月十八夜与助教中原師徳対校一過式部大輔菅原長親／寛政八年十月十六日辰剋素読一過

(表第一冊)文政二年十月廿六日与祭酒長材一校　式部大輔菅原長親／同月廿七日候御会読了

(同二)文政二年十月廿七日候御会読了式部大輔菅原長親

(同四)文政二年十月廿四日与男長材対読于時陰雨滂沱雷鳴　式部大輔菅原長親／同月廿七日候御会読了

(八書第一冊)文化十二年八月廿四日授近江権介実達朝臣／文政二年十一月二日与長材一校　式部大輔菅原長親

(同二)文化十二年九月三日授近江権介実達朝臣
(同三)文化十二年九月三日授近江権介実達朝臣　勾勘宰／文政三年二月一校了吏部長親
(同五)文化十二年十月授近江権介実達朝臣了　勾勘菅長観／同年授侍従聰長朝臣了／(朱)文政二年後四月廿日授羽林有言朝臣了　吏部菅宰／(朱)同三年三月廿八日与長材対校／(朱)同年四月十日候　主上御会読了
(世家第一冊)(朱)文政二年閏四月二日授正三位通理卿了　菅長親／同三年五月一日校
(同五)文政三年七月十五日一校　式部大輔菅原長親
(同七)(朱)寛政五年冬十二月九日於摟霞館与式部大輔対読／正五位下行大内記菅原長親
(同八)寛政五年冬十二月九日於摟霞館与式部大輔大学頭／対読一過　正五位下行大内記長親
(同十)文政三年九月二十日候御会読訖　式部大輔菅原長親
(列伝第一冊)文化十四年五月十九日授侍従隆敬朝臣了于時式部大輔正三位／寛政五年冬十月五日与式部大輔対読一過／正五位下行大内記菅原長親／同七年四月七日一過于時従四位下同年五月十二日与左中将公則朝臣散位公燕素読一過／同年七月五日戌剋授伍胥伝于公燕
(同)寛政五年冬十月与式部大輔周防権介対読一過／正五位下行大内記菅原親長／同七年五月十二日申半剋与左中将公則朝臣散位公燕素読一過于時従四位下／(朱)同八年六月九未下剋自秦見斉王慶吊章以下授美作権介公燕由半剋終于時式部大輔兼大内記
(列伝第十)寛政七年五月十二日酉上剋与左中将公則朝臣散位公燕素読一過／(朱)同八年六月二十四日美作権介公燕来授此伝酉下剋也式部大内記菅原長親
(同十一)(朱)寛政八年七月廿四日自酉半剋与美作権介公燕対読式部権大輔菅原長親
(同十二)(朱)寛政八年七月廿九日戌剋授美作権介公燕大内記長親
(同十三)寛政五年冬十月五日与勘解由長官式部大輔大学頭周防権介対読一過　正五位下大内記菅原長親／(朱)同八年八月二十四日夜美作権介公燕来授此伝于時従四位下兼式部権大輔
(同十四)(朱)寛政八年九月六日戌剋美作権介公燕来授此両伝式部権大輔大内記長親
(同十五)寛政八年九月七日酉半剋与美州員外別駕藤公燕対読一過式部権大輔菅原長親／文政四年三月十日侍御会読　式部大輔長親
(同十六)寛政八年九月十九日戌剋与美作権介燕公対読式部権大輔菅原長親
(同十七)寛政八年九月二十四日酉半剋美作権介公燕来因授此伝大内記長親
(同十八)寛政五年冬十月五日与勘解由長官式部大輔／大学頭対読一過　正五位下行大内記菅原長親／同八年九月二十九日戌剋与美作権介公燕対読于時従四位下行式部権大輔兼大内記

(九同十)寛政十年六月四日与美作権介公燕対読一過
(廿同)文政四年三月廿一日候御会読了　式部大輔菅原長親／寛政五年冬十月五日従卯一点至酉下剋与勘解由長官式部大輔／大学頭対読於伯夷列伝至此伝一過正五位下行大内記菅原長親
(二同廿)寛政五年冬十月九日　於摟霞館従卯一点　至酉下剋与勘解由／長官式部大輔大学頭周防権介唐橋散位対読一過／正五位下行大内記菅原長親／同十年六月十日与権介対読一過
(三同廿)寛政十年六月十四日与作介対読
(五同廿)寛政五年冬十月九日於摟霞館従卯一点至酉下剋与式部大輔大学頭／周防権介唐橋散位対読一過　正五位下行大内記長親／同十年七月十一日与美作権介藤公燕朝臣対読　于時従四位上式部権大輔／文化十四年十二月八日授左兵衛督永雅卿了
(八同廿)寛政五年冬十月九日於摟霞館与式部大輔大学頭周防権介唐橋／散位対読一過　正五位下行大内記菅原長親／寛政六年六月二十六日再読之時炎熱甚同十年七月廿九日与美作権介公燕対／読于時従四位上式部権大輔
(卅同)(朱)寛政十年八月十九日授作州
(二同卅)寛政五年冬十月九日従卯一点至酉下剋与式部大輔大学頭周防／権介唐橋散位対読一過　正五位下行大内記菅原長親／同六年七月二十六日於窓下読之(朱)同十年九月四日与花作州対読于時従四位上式部権大輔
(三同卅)寛政十年九月十一日与作州対読
(五同卅)寛政十年九月十四日授作州
(六同卅)寛政五年冬十月九日於摟霞館従卯一点至酉下剋与式部大輔大学／頭周防権介唐橋散位対読一過正五位下行大内記菅原長親／同六年六月二十六日於窓下読之(朱)同十年九月廿四日授作州／文政四年五月十一日候御会読了式部大輔菅原長親
(八同卅)寛政十年三月六日看読一過従四位上行式部権大輔菅原長親
(九同卅)寛政五年冬十月九日於摟霞館与式部大輔大学頭周防権介唐橋散／位対読一過(従卯一点至酉下剋従廉頗伝至此伝)正五位下行大内記菅原長親
(一同四)寛政五年冬十月九日於摟霞館従卯一点至酉下剋与式部／大輔大学頭周防権介唐橋散位対読一過／正五位下行大内記菅原長親／同六年六月二十六日於燈下読之従巳剋半至丑剋始自刺客伝終此伝
(五同四)(朱)文政二年九月十九日授男長材了　式部大輔長親／同四年八月二日侍御会読了
(九同四)寛政十一年四月廿九日授美作権介公燕
(六同五)文政四年九月十二日一過
(七同五)寛政八年正月十九日素読一過于時従四位下大内記菅原長親／文化十三年四月廿二日授近江権介実達朝臣了于時正三位勘解由長官／文政四年九月十六日授助教師徳了　于時式部大輔／(朱)同月廿六日候御会読了
(一同六)(朱)寛政五年冬十月二十日於摟霞館従(ヤ)申半剋与式部大

輔大学頭／唐橋散位対読一過　正五位下行大内記長親／同八年正月十八日午一点素読一過于時従四位下　文化九年十月八夜於燈下看読一過于時正三位勘解由長官

(同六四)寛政八年正月□甲子素読一過未半刻于時従四位下大内記長親

(同六八)(朱)文化十四年四月三日授大内記聰長朝臣了　長親

(同七〇)(朱)寛政五年冬十月十九日於摟霞館従申半刻至子刻与式部大輔大学頭／対読一過　正五位下行大内記菅原長親

文化十四年四月五日授侍従博士聰長朝臣了于時正三位式部大輔／先日之授近江権介実達朝臣了

文政二年二月十一日授正五位下寿房早／同年十一月十八日授大学頭長材早

「子孫永保」「菅原／長親」（陰刻）「清岡／蔵書／記」「希世／有文」の印あり。「静盦漢籍解題長編」一著録。

＊又　一三〇巻　五〇冊

淡香色布目表紙。前掲本と同版の古活字本。朱点朱引墨訓点を附し、校字（他本、古、才、イ等との）音義訓説（家本点師説等）等の書入周密にして、前掲本の書入と共通する所があり、博士家点本と五山の抄物（蕉講幻雲その他）、正義、評林本から採る所が多い。注に引載の書に黄氏日抄、胡曰、続文章規範注、集覧、韻会、史略注、鶴林玉露、十九史略注、胡三省、方輿勝覧、祖庭古史等が見える。恐らく博士家本を承けた五山僧の書入の累積であろう。この本に移写された次の奥書によれば、桃源の史記抄と並んで室町時代史記講義の双璧と称された史記幻雲抄の著者たる建仁寺の月舟寿桂（号は幻雲）の本を摸写せる。東福寺善慧軒の彭叔守仙の本によって加点書入したという。此等書入は室町時代の史記の書入と共通する所が多い。しかし次の奥書によって、その出自が明かにされているのは甚だ注目すべきである。（慶長十一年の奥書は成簀堂旧蔵古活字版史記にも存する）

(巻三二末)慶長十一丁未秋八月以東福善恵軒之本新加朱墨倭点者也

(巻六六末)慶長十三丁未夷則自咨日、以下所レ摸二幻雲師之本一之善恵翁之本上、而加朱之句読、墨之和点、又抄書于其上、豈不忻然乎、

隷釈　存首二一巻　宋洪适撰　〔江戸〕写　伝鈔元泰定二年寧国路儒学刊本　七冊

大本。毎巻末に「泰定乙丑寧国路儒学重刊」の原刊記がある。「備前河本／氏蔵書記」「河本／儼印」「子／恭氏」（河本立軒）「要斎／珍蔵」（細野要斎）の印あり。

＊忠経集註詳解　旧題漢馬融撰鄭玄注　明余昌年訂　天和三年刊　山井幹六（清溪）手校注　一冊

大本。首に宣徳甲寅韓陽序あり。所謂書棚本で、層格は「御覧頒行忠経解」と題して、首注をのせ、末題を「御覧頒行忠経集註詳解終」と題し、刊記に「天和三年／癸亥仲秋刊」と。山井清溪が、巻初の「明潭陽　余昌年訂」の題署を抹消して、「日本東豫後学山井幹六校補」と訂し、注・訓点・首注等を朱墨や胡粉を以て消し、新に「補」と標して自注を書入す。

*畢校呂覧補正　二六巻　松皐円（蒲坂青荘）撰　〔江戸〕写　六冊

淡茶色表紙（二八・三×一七・八糎）。左右双辺（一八×一二・七糎）有界十行版心小黒口の印刷罫紙使用。毎行廿字、注小字双行。首に文化十有四年秋九月の自序「畢校呂氏春秋補正序」あり、寛政十一年春三月念五日年廿五にして最初の跋を青山書屋に操り、福山藩塩田屯からその翻刻になる畢沅校本を恵与され、以来教授の餘暇筆を進め十六年にして成ると云う。また「初校　寛政十一年正月至三月」「再校　文化十二年四月至六月」「初編　文化十三年初冬畢季冬」「再稿　文化十四年季秋吉日始把筆」「初巻畢於十三夜月明之下」と識す。未刊。青荘名は円、江戸の人。天保五年歿、年六十。尤も韓非子に精く、「定本韓非子纂聞」（崇文叢書収）等の著あり。

新雕皇朝類苑　七八巻首目一巻　宋江少虞編　元和七年跋刊　後水尾天皇勅版銅活字本　一六冊

淡茶色表紙（二八×一九・八糎）。首に紹興十五年江少虞の皇宋事宝類苑序、汪俣の皇宋事宝類苑後序、総目、麻沙新雕皇朝類苑巻第目録あり、本文巻首「新雕　皇朝類苑巻第一」と題し、巻末元和七年重光作噩六月晦日前南禅臣僧瑞保謹書の跋あり。双辺（二二・二×一六・六糎）無界、毎半葉十三行、行廿字、注小字双行。序跋目は大型行草体活字を用い、有界八行十二字。版心粗黒口「皇朝巻幾　（丁付）」。宋麻沙刊本の翻印で、通行今本は六十三巻二十四門で不完、完本はたゞこの勅版によってのみ知られる。誦芬室叢刊初編所収本は本版の影印。「渠夢翔／秘笈珍／蔵之印」及び董康の蔵印あり。第一冊の押紙に近人渠夢翔の次の手跋がある。

按日本銅活字版本伝世之最古者為文禄五／年甫倉道喜印之蒙求補注三号時当明／万暦二十四年此本為元和七年辛卯勅／印皆当明天啓元年楮墨精良可珤也／甲子十二月日　梵翔記

又　一五冊

寺田盛業の蔵印及び「呉興劉氏嘉／業堂蔵書印」の印あり。「静嘉漢籍解題長編」一著録。

*唐宋白孔六帖　存巻三―二〇、巻三九―四三、巻六五―七七、巻八九―九四　唐白居易編　宋孔伝続編　〔南宋建〕刊　一六冊

後補紺色表紙（二四・八×一五・五糎）。裏打補修がある。巻首「唐宋白孔六帖巻第幾」と題するが、巻三のみ「孔白」に作る。左右双辺（二〇・三×一三・四糎）有界十行、行十七字内外、注小字双行、行廿三字。版心線黒口「六帖幾　（丁付）」。左上欄外に耳格（郭なし）あり目名を題記。玄・匡・恒・貞・楨・樹・桓等に欠画を見るが、必ずしも厳格でなく、不定である。破損や欠丁が多く、巻一二の第二五丁、巻一三の第三丁、巻四三は第二四丁以下、巻七四首五丁、巻八九首九丁と第二一丁以下、巻九四は第三―八丁、第一五丁表、第一九―二二、二四、第二七丁以下が欠丁で、巻七七の第十丁以下は各葉下半が破損、また巻二〇の前に巻二二の首一丁が誤綴されている。元

来白孔両六帖は別行であったのが、合編されたので、毎条「白」を先にし、「孔」を後にし、それぞ〳〵白・孔の文字を圏で囲み陰刻にして標記する。この本僅かながら訓点の墨書入が見えるから、もと我が国に伝わったものである。南宋建刊本で、この合刻宋槧本は他に静嘉堂文庫蔵残本の外なく、恐らく同版であろう。「秀／誉」「知／鑑」（鼎形）「楊印／守敬」「宜都／楊氏／蔵書記」「飛青／閣蔵／書印」「逆圃／収蔵」の印あり。楊志補・楊譜六36著録。首に左の民国二年の守敬の手跋が存する。

海内著録家有宋単刻白氏六帖／而無宋白孔六帖合刻本故皆以明本／為祖刻此為宋刻宋印精妙／絶倫雖残欠当以吉光片羽視之／不第為海内孤本也癸丑五月端午／鄰蘇老人記（印）

＊増広事聯詩学大成　三〇巻　元毛直方編　元至順三年刊（建安・広勤書堂）　一六冊

後補黒地銀砂子散し表紙（二四・三×一六・三糎）。襯紙を夾んで改装。首に皇慶元年建安毛直方引の自序及び新編増広事聯詩学大成目録があり、目録後に「至順壬申仲秋／広勤書堂重刊」の双辺両行木記がある。本文巻首「増広事聯詩学大成巻之一」と題す。左右双辺（二〇・二×一三糎）有界十四行、注文小字双行、行卅二字。版心線黒口「詩学大成幾（或は幾巻或は幾フ）　（丁付）」、上象鼻に大小字数のある所少しくあり。巻十六第九丁以下及び巻廿五第廿五裏以下欠丁。所々朱点朱引が附さる。本版は他に所在を聞かず、慶應義塾図書館蔵の元至正十四年鼇江書院刊本は本版の覆刻である。「向黄邨／珍蔵印」「読杜／艸堂」の印あり。「静盦漢籍解題長編」一著録。

剪燈新話句解　三巻　明瞿佑撰　朝鮮滄洲（尹春年）訂正　重胡子（林芑）集釈　〔慶長〕刊　古活字版　三冊

後補淡紫灰色表紙（二八×二一・五糎）。襯紙を夾んで改装。首に洪武十一年瞿佑の剪燈新話序、洪武三十年凌雲翰の剪燈新話序、洪武十四年呉植の剪燈新話引、洪武廿二年佳衡の剪燈新話詩幷序、剪燈新話目録あり。本文巻初行より第四行にかけ「剪燈新話句解巻之上／（以下八格低）山陽瞿佑宗吉著／滄洲　訂正／垂胡子　集釈」と題す。単辺（二二・六×一七・三糎）有界八行、行十六字、注小字双行。版心小黒口「上　（丁付）」。朱点朱引墨筆の訓点四声点濁点を書入。この本の目録は四巻と録するが、本文は上中下三巻に分ち、合わない。この剪燈新話は、明刊本が朝鮮に伝り、朝鮮の明宗（嘉靖頃）の時代に尹春年（号は滄洲）が校訂、林芑（一に苾に作る、号は重胡子）が注を撰して刊行し、中央図書館にはその朝鮮刊本が二版蔵される。朝鮮本が室町時代我が国に将来され、本古活字版はその朝鮮本による翻印である。

剪燈餘話　五巻　明李楨（昌祺）撰　劉敬（子欽）訂定　張光啓校　〔元和末寛永初間〕刊　古活字版　五冊

後補淡紫灰色表紙（二八×二一・五糎）。襯紙を夾んで改装。首に永楽十八年曾棨の新編剪燈餘話序、同年王英序、同年林脩の剪燈餘話後序、劉敬序、張光啓序、新編剪燈餘話目録あり。

本文巻首より第五行にかけ「剪燈餘話巻之一／（以下低七格）広西左布政使虞陵李昌祺編撰／翰林院庶吉文江劉子欽訂定／上抗県知県旰江張光啓校刊／建陽県県丞何景春同校綉行」と題し、巻末「新編剪燈餘話五終」と題する。双辺（殆ど単辺の如く見ゆ、二二・五×一六・八糎）無界、毎半葉十三行、行廿字、小字双行。版心細黒口「餘話幾巻　（丁付）」。新話・句解共に「誦芬室叢刊」本はこの古活字版の影印。

仏説最上秘密那拏天経　二巻　宋釈法賢訳　〔鎌倉〕写

二巻

後補群青色地に金泥星文様表紙。巻子装。紙幅廿七・七糎。裏打補修あり。界高廿二糎、界幅二糎、毎行十七字内外。上巻は黄斐紙、下巻は黄楮紙、それ〴〵異筆であるが、時代は同じ頃である。巻首「仏説最上秘密那拏天経巻上（下）」、第二行「西天訳経三蔵朝奉大夫試光禄卿明教大師臣法賢奉　詔訳」と題す。下巻末訳場列位の後に「一校了」の識語あり。「高山寺」「読杜／艸堂」の印、楊守敬の印及び「張／継」の印あり。上・下巻末にそれ〴〵左の訳場列位を存する。

講法華経沙門臣道一証義／講百法論金剛上生経賜紫沙門臣守賛証義／講法華経百法論文章賜紫沙門臣句端証義／講金剛経百法論賜紫沙門臣懐哲証義／知蔵字学通慧（下巻作恵）大師賜紫沙門臣雲勝証義／講経（下巻作維）摩金剛般若心経明教大師賜紫沙門臣道文（下巻作丈）証義／講八経四論法済大師賜紫沙門臣従志証義／講維摩上生経因明唯識論証覚大師賜紫沙門臣守真証義／講円覚経起信唯識論論崇梵大師賜紫沙門臣仁徹証義／応制慧通大師賜紫沙門臣智遜綴文／梵学賜紫沙門臣致宗筆授／梵学賜紫沙門臣知江筆授／梵学光梵大師賜紫沙門臣惟浄筆授／梵学伝大教通梵大師賜紫沙門臣清沼筆授／西天訳経三蔵朝奉大夫試鴻臚卿伝法大師臣施護証梵文／西天訳経三蔵朝奉大夫試鴻臚卿伝教大師臣法天証梵義／内侍殿頭高品銀青光禄大夫検校尚書右僕射兼御夫（下巻作史）上祥（下巻作柱）国監訳経臣鄭守銅／枢密副使正奉大夫尚書工部侍郎上柱国江陵県開国子食邑五百戸賜紫金魚袋臣楊礪潤文（下巻作楊隅文）／大宋咸平元年十一月　日進

＊金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経　存一巻　唐釈金剛智訳

建久五年写　一巻

巻子装。表紙なし。料紙黄楮紙、紙幅廿六糎。厚手の紙を以て裏打。界高廿一・二糎、界幅二糎。巻首「金剛峯楼閣一切経品一」、第二行「南天竺国三蔵金剛智　訳」と題する。毎行十六乃至十七字。朱筆の句点ヲコト点(送仮名を附す。「高山寺」及び楊守敬の印、「張／継」の印、紙背継目に「相済」の印あり。巻末に左の書写奥書あり。

建久五年八月之比於高野山書写并／一交了為是偏法分衆生平等利益也

説無垢称経賛疏　六巻　唐釈〔窺〕基撰　〔元和末寛永間〕刊　古活字整板乱板　六冊

淡香色表紙（二七×一九糎）。巻首「説無垢称経賛疏巻第一　大慈恩寺沙門基作」と題す。双辺（縦二一・八糎）無

界、毎半葉九行、行廿一字、柱にたゞ丁付のみを印する古活字の巻摺の部分と、印面高さ約廿二・五糎、毎半葉九行、行廿一字の整版（鎌倉末刊室町遞修、原刻の所僅少）の部分とが混合せる乱板。整板の方がやゝ多い。「古活字版之研究」未著録。「縁山西溪／作業図書／門外不出」の印あり。

□者眷属　不著撰人　建久六年写　一巻

淡空色絹表紙、見返無地黄色絹。料紙黄楮紙、紙幅卅糎。虫損多く、厚手の紙で裏打。界高廿五・七糎、界幅二糎。毎行廿字内外不同、注小字双行。本文と同時代の返点送仮名を附し、梵字等の朱筆旁記が少しある。「高山寺」及び楊守敬の蔵印、尾に「張／継」の印あり。巻末左の奥書を存する。

建久五季八月　日清書了／老比丘興然記之

建久六季八月廿一日於高尾山以慈尊院／本申時許書之了／一交了／寛紹本

雪峯空和尚外集　宋釈慧空撰　釈慧然編　〔南北朝〕刊

無刊記第一種本　四冊

後補紫色表紙（二七・二×一六・七糎）。襯紙を夾んで改装、原料紙紙幅二三・七糎。左右双辺（一七・四×一一・九糎）有界十行、行廿字。版心白口（第廿九丁のみ黒口）「東　（丁付）」。巻首「雪峯空和尚外集」と題す。巻末に淳熙戊戌恵然の跋並に丁亥（貞和三年）七月書于建長方丈の梵僊の刊語がある。しかしこの版は貞和三年刊ではなく、貞和三年刊本の覆刻で、他に大東急記念文庫（二本）・天理図書館蔵本が知られるのみである。室町期の朱引墨訓点や、出典等を示す注の書入が多い。「神田家蔵」「香巌／珍蔵」「逝圃／収蔵」「有漏神／仙有／髪僧」の印あり。本書は南北朝室町時代盛行したので、五山版に異版が七種（細別すれば八種）も数えられる。

＊虎丘隆和尚語録　宋釈虎丘紹隆撰　釈嗣端等編　〔室町初〕刊　一冊

後補濃紺色絹表紙（二三・九×一五・六糎）。裏打補修あり。巻首「虎丘隆和尚語録」第二行「参学　嗣端編」と題し、和州開聖禅院語録・宣州彰教禅院語録・平江府虎丘雲巌禅寺語録・真賛・偈頌を収め、巻末「平江府万寿報恩光孝禅寺住持嗣法小師　校勘」と署する。左右双辺（一八・五×一二・四糎）有界九行、行十七字。版心白口「第幾（丁付、第の字なきもあり）」。僅に朱圏点が存し、眉上に書入あり。本書の五山版には㈠正応元年刊本（成簀堂文庫旧蔵）㈡それに据った貞治七年妙葩刊本（国立国会図書館・天理図書館・東洋文庫蔵）㈢㈠の覆刻たる無刊記本（成簀堂文庫旧蔵）㈣㈢の覆刻無刊記別本（成簀堂文庫旧蔵・大東急記念文庫蔵）が従来知られている。この本は以上の㈢㈣と覆刻の関係にある別版で、最も後出であろう。早印にして撫印清爽である。「五山版の研究」未著録。「張珩／和印」「呉興張氏／図書之記」「呉興張／氏韞輝／斎曾蔵」「宋本」「蔣／祖詒」等の印あり。

＊仏国禅師語録　釈高峯顕日撰　釈妙環等編　〔南北朝〕刊　二冊

後補鼠色覆表紙、江戸期の淡香色表紙（二五・五×一八・二糎）。裏打補修あり。左右双辺（一九・六×一五糎）有界十一行、行廿字。版心白口「（小題）（雲・浄妙等）　（丁付）」。

仏国禅師初住下野州東山雲巌禅寺語録／侍者妙環編」　住相州浄妙禅寺語録／侍者玄仁編」（以上第一冊）　金宝山浄智禅寺語録／侍者妙康編」　住相州巨福建長禅寺語録／侍者玄挺妙環編」　再住浄智禅寺語録／侍者妙準妙環編」　普説」法語」　頌古」　住下野州東山雲巌禅寺高峯和尚勅諡仏国禅師問答／参学比丘慧広編（巻末に元泰定三年清拙序、同年本覚霊石如芝跋、同年釈清茂跋）

から成る。本書の五山版には本版とは別版の十一行廿字本の天理図書館・宮内庁書陵部蔵本と成簀堂旧蔵本があり、本版と同版本は従来この成簀堂蔵本に附綴された雲巌語録の部（廿六丁の残欠）のみが知られているにすぎない。従ってこの版の完本の存在はこの本のみである。「姚埭／沈氏」「海日／廔」「曹／持」「寮叟／蔵書」の印あり、清沈曾植旧蔵。「静盦漢籍解題長編」一著録。

*五燈会元　二〇巻　宋釈普済撰　宋宝祐元年跋刊　二〇冊

後補紫色絹表紙（二九・八×一八・五糎）。襯紙を入れて改装、元料紙高さ廿六・八糎。後補扉に「宋本五鐙会元廿巻光緒壬寅十月得於鄂楊氏葱石記」と題す。首に淳祐壬子冬住山普済書于直指堂の自序、宝祐改元清明日通庵王橚の序（この序の第二葉補写）あり、本文巻首「五燈会元巻第一」と題し、毎巻書題の次に目次を列して本文に接続する。巻末宝祐元年正月旦日沈浄明謹題の跋あり、浄財を募って刊刻せる縁由を記す。末題の次に別紙を補って、貞治七年刊五山版巻末の円月の募緑重刊の跋文及び刊記を写して附綴してある。左右双辺（二一・九×一四・六糎）有界十三行、行廿四字、小字双行。版心白口「五灯幾　小題　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名がある。玄、驚、弘、貞、徴、樹、構、慎、廓等の字欠画。版心は破損が多く、識読し得た刻工名は、積斎、積斎棄林年、鄭夫、王錫、銭良、余斌、芦茂、芦洪、劉、合、孚、葉、恭、呂、王、呉、因、余、元、才、郭、翁、森、除、東等である。全巻室町期の朱筆を以て朱点朱引、所々訓点が附さる。この本は楊守敬旧蔵本で、守敬が森志巻六の貞治戊申刊五山版五燈会元の条に「此本余曾見之議価未成而別得元刊本」という本に該当するのであろうか。本書の五山版は本版に基づく覆刻である。「仁寿山荘」「好古堂図書記」及び寺田盛業並に楊守敬の蔵印の外に、「阮盦」「秘書正字」「周儀読竟」「卜娯」「劉世珩檼盦賞鑒」「世珩珍秘」「世珩十年精力所聚」「聚学書蔵」「聚学軒」「曾経貴池南山邨鐳氏聚学軒所蔵」「貴池文献世家」「鐳氏宝貨」「曾経貴池開元郷南山邨劉氏五松七竹九蒲之斎」「葱石暴書記」「開元郷南山邨鐳葱石鑒賞記」「葱石読書記」「逆圃収蔵」の印あり。

翻訳名義集　七巻　宋釈法雲撰　〔慶長元和間〕刊　古活字版　七冊

渋引茶褐色空押行成表紙（二八・八×二〇糎）。首前掲観海堂蔵古活字版と同じ。本文巻首「翻訳名義集巻第一」（大字）、次行小字低四格「姑蘇景徳寺普潤大師　法雲　編」と題する。双辺（二二・四×一五・六糎）有界八行、行十八字、（首の法雲自序のみ八行十五字）、小字双行（本文は全て双行）。版心粗黒口「翻訳幾　（丁付）」。所々朱句点や墨筆の書入あり。「古活字版之研究」によれば、本書の古活字版には従来三種知られていたが、この本は前掲観海堂古活字版とも別版で、共に新出の異版である。「金地院」の印あり。

浄土三部経音義集　四巻　釈信瑞撰　〔江戸〕写　三冊

後補紺色表紙（二七・七×二〇糎）。字面高さ約廿一糎。注文小字毎半葉十行、行廿字。首に嘉禎二年自序あり。訓点を附す。楊守敬の蔵印や「鴻宝／署斎」「観／察使」「逆圃／収蔵」等の印あり。楊志四・楊志補著録。首に守敬の左の光緒九年の手書題識（楊志補収）一葉を附綴す。

浄土三部経音義四巻日本沙門信／瑞纂自序題嘉禎三年当宋理宗端平三年也巻一巻／二為無量寿観経巻三為観無量寿／経巻四為阿弥陀経其引広韻則陸／法言孫愐分著引玉篇亦時見野王案語／是其所見古本与今殊異又所引東宮切／韻中載郭知玄辭峋麻果韓知十祝／尚邱武玄之王仁煦等之説皆唐以前／小学書之散逸者其見於新旧唐志者／不過数家餘多見其国現在書目雖巻／帙無多固当与玄応慧琳衆経音義幷／珍也光緒癸未春三月宜都楊守敬記／于東京使館（印）

是書引東宮切韻旁注云是書之作菅丞相／之父也菅名道真為彼国名臣当中国唐之中葉惜／其書不伝也此書彼国蔵書家亦不知之余從書肆得此本守敬再記(印)

五百家註音辯昌黎先生文集　四〇巻（欠巻二四―二八・首目）　唐韓愈撰　宋魏仲挙編　〔元和寛永初間〕刊　古活字版　八冊

胡蝶装に改装。前掲の観海堂蔵古活字版と同版。「霊／山」、「有宋荆／州田氏／七万五／千巻堂」「潜㚸／秘笈」「寒雲／秘笈／珍蔵之印」（清袁克文）「呉興劉氏嘉／業堂蔵書記」の印あり。「静嘉漢籍解題長編」一著録。

白氏文集　七一巻　唐白居易撰　元和四年跋刊（那波道円校刊）　古活字版　三〇冊

栗皮表紙。双辺（二三×一六・七糎）有界九行、行十六字。版心粗黒口「白集幾　（丁付）」。所々朱点朱引墨訓点、少しく朱墨の音義注等の書入がある。宋版を祖とする今通行本とは異った、李唐旧鈔の系統に属するテキストを有し、本版は朝鮮成化廿一年跋刊銅活字本に基づいて道円が校刊したと云われる。たゞ我が国伝承本に存する原注がない。四部叢刊所収本は本版の影印。「堀氏蔵書之印」「張印乃熊」「逆圃／収蔵」の印あり。

又　五〇冊

金鑲玉に改装。巻末那波道円跋を欠き、欠損の丁や補写がある。巻卅八まで江戸時代の朱句点、唐本・一本との校字、音義や字解の書入が存する。柳蓉邨宛の傅蔵園手簡を挿入。「呉興

劉氏嘉／業堂蔵書記」の印あり。「静盦漢籍解題長編」一著録。

山谷詩集注　二〇巻首目一巻　宋黄庭堅撰　任淵注

〔慶長元和間〕刊　古活字第三種本　一一冊

後補紺色表紙（二七・七×二〇糎）。虫損多く、一部裏打補修。首に目録（年譜附）、政和辛卯の黄陳詩集序、紹興乙亥許尹序あり。本文巻首「山谷詩集注巻第一」、第二行低九格「豫章黄庭堅　魯直」と題し、巻末紹定壬辰黄埒の跋あり。双辺（二一・五×一六・七糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心粗黒口「山谷幾　（丁付）」。南北朝刊覆宋本の翻印である。楊守敬の蔵印あり。

山谷内集詩註二〇巻首目一巻　外集詩註一七巻首目一巻　別集詩註二巻　宋黄庭堅撰　任淵注　（外集）史容注　（別集）史季温注　〔朝鮮〕旧刊　一五冊

丁子色空押唐草文様朝鮮表紙（三二・二×二一・一糎）。各集の首目題署体式は前掲の観海堂蔵朝鮮旧活字本に同じ、但し同書の補写の黄埒跋はない。双辺（二二・九×一七・一糎）有界十行、行十七字、注小字双行。版心白口「山谷某集幾　（丁付）」。字様活字体風を帯びる。

山谷外集詩註一七巻首目一巻　別集詩註二巻　宋黄庭堅撰　史容注　（別集）史季温注　〔朝鮮〕刊　一〇冊

淡茶色表紙（二八・九×一五・九糎）。首目題署体式前掲本に同じ。双辺（一八・五×一一・八糎）有界九行、行十九字、注小字双行。版心粗黒口「山谷某集巻幾　（丁付）」。刊刻は前掲本に比し新しい。「好古堂／図書記」「仁寿山荘」「白出書館」等の印あり。

＊新芳薩天錫雑詩妙選藁全集　元薩都拉撰　〔南北朝〕刊　二冊

後補橙色薄葉表紙（二四・六×一六糎）。裏打補修あり。首に新芳薩天錫雑詩目録あり、本文巻首「新芳薩天錫雑詩妙選藁全集」と題し、この書題の頭に花魚尾模様を冠する。巻末に「後跋又疏／雪磯和尚住瑞岩諸山疏」と題する跋あり、跋後「全集終矣」（陰刻圏を以て囲む）と題する。左右双辺（一八・六×一二・四糎）有界八行、行十八字。版心線黒口「天　（丁付）」。「新芳薩天錫雑詩妙選藁終」の末題後一行をあけて、墨釘になっているが、中央の刷りむらの如き白い部分に「□□□□法師／□□□／悟□□一皎法師」と刻されているのがかすかに見えるが、意味不明。詩四十四丁、後跋文疏四丁。朱点朱引が附されている。本版は伝本極めて稀覯、東洋文庫・阿波国文庫蔵の二本のみが知られるにすぎなかったが、後者は戦後焼失した。島田翰は宋本寒山詩集の翻印本（明治卅七年民友社刊）に本版も附印し、その所拠本に「永和丙辰歳九月吉日」の刊記があったというが、例によって疑わしい。「掃塵／斎積／書記」「逝圃／収蔵」等の印あり。

＊文選集注　零本（存巻九八）　唐人集注　〔平安〕写

一巻

後補鶯色地に花文様緞子表紙。巻子装。厚紙台紙を以て裏打

し天地に絹を貼る。紙幅卅一糎。元料紙は黄麻紙、紙幅廿六・八糎。界高廿一・五糎、界幅二・八糎。毎行十字、注小字双行、行十三字。朱筆を以て見せ消ちをなす。

この本は元来金沢文庫にあり、江戸時代よりその一部が漸次庫外に流出し、今廿有餘巻が金沢文庫を始め諸家に分蔵されている文選集注の零巻で、従来知られなかった巻である。この巻九十八は通行六十巻本の巻四十九に当り、首を欠く。残存の首葉は汚損甚しく、首より第五行は特に腐爛し、首行の上に「史」の字が見え以下破損、第二行は字が見えず殆ど欠損し、第三行は「晉紀惣」とあり下に双行の注を挿む。「晉紀惣論一首」以下双注、第六行「于令升」と題し、以下連続して欠損なく、巻末に及んで、末句一行を隔てゝ「文選巻第九十八」と題する。即ち李善本巻四十九史論上の班孟堅公孫弘伝賛及び于令升晉紀論晉武帝革命の首二首を欠き、第三首の晉紀総論以下が完全に残ったものである。たゞこの文選集注は他の巻の例によれば李善本六十巻の一巻を析いて二巻になしているから、李善本巻四十九はこの本の巻九十七・九十八の両巻になる筈であるが、巻四十九の初の二首のみでは、一巻の量に不足で、本巻の大部分を占める「晉紀総論」は頗る長文なので、中断できず、巻四十九のみは析かずして、巻九十八の一巻になしたのであろう。ただかく断定するにはこの本の「晉紀総論」のすぐ前の行とその前の行には前文の注文が記してある筈である。そこが破損しているが、前々行に注文がなく、「史」の大字が見えているのは疑念を抱かせるものが残る。推測すれば、「史」の字のある首葉片はたまゝ残存せる紙片を貼附したのではなかろうか。とするならば或は今本巻四十九の首二首を以て短くとも巻九十七の一巻となしたのかもしれぬ。この本の巻九十七が現存しないので、後考を俟つ。

この文選集注を学界に初めて紹介したのは、「経籍訪古志」で、その巻六に曰く、

文選集注零本三巻旧鈔巻子本　賜蘆文庫蔵

見存第五十六第百十五第百十六合三巻、毎巻首題文選巻第幾、下記梁昭明太子撰、及集注二字、界長七寸三分、幅九分、毎行十一字、注十三四字、筆跡沈着墨光如漆、紙帯黄色質極堅厚、披覧之際古香襲人、実係七百許年旧鈔、注中引李善及五臣・陸善経・音決・鈔諸書、注末往往有今案語、与温故堂旧蔵鈔本標記所引合、就今本考之是書似分為百二十巻者、但集注出于不知何人、或疑皇国紀伝儒流所編著者与、其所引陸善経音決等書逸亡已久、（陸善経注文選、偏検史志不載其目、敬見在書目、文選音決十巻公孫羅撰、文選鈔六十九巻公孫羅撰、又載文選鈔卅巻欠名氏、未知孰書、第百十五巻首題云、今案鈔為郭林宗）今得藉以存其厓略、豈可不貴重乎、小島学古云、此書曾蔵金沢称名寺、往歳狩谷卿雲、清川吉人一閲帰来、為余屢称其可貴、而近歳已帰于賜蘆之堂、故得縦覧、此本曾在金沢而無印記、当是昔時従他仮留連者矣、近日小田切某又得是書零片二張于称明寺敗籠中、一為第九十四巻、一不知巻第、今帰僧徹定架中、聞某氏亦蔵第百二巻、他日当訪求之、

と。右に温故堂蔵旧鈔本の標記所引と合うというのは、前掲の観海堂蔵室町鈔本（温故堂旧蔵）に見られる書入注がこの集注より引いていることを示しているのである。こゝに著録された「首題云今案鈔為郭林宗」という極めて重要な書入の存する第百十五巻は現在所在不明である。この本の書写について、羅振玉等は唐人の書となすが、平安前期、降っても中期にかけての邦人の書写と看做すべきであろう。往々唐帝の諱を欠筆し、六朝唐の異体字が多く、又その筆法から見て、その祖本が唐鈔本であったことは疑いない。羅氏は日本で購得せる二巻（後に再び日本にもどり東洋文庫・上野家に帰す）と、他は金沢文庫・小川家の本の伝鈔本によって、計十六巻を民国七年石印に附した。その後現存巻の全てが「京都帝国大学文学部景印旧鈔本」第三―九集にコロタイプを以て影印されている。たゞその中で巻八・九の九条家旧蔵現御物は金沢文庫本とは別蔵に属する平安鈔本である。羅氏はその序中に、海塩の張氏二巻を得、楚中の楊氏も一巻を得と記すが、その巻第が明かでなく、この本はそのいずれかの旧蔵にかかるものであろう。

文選集注は以上の如く、唐代文選の逸注にして、その注中引載の書また佚書を含むこと多く、その李善五臣注また現行本と出入参差し、校勘学上の一大宝庫である。しかるに現在十分に活用されること未だしと言うべく、この新出の巻が一日も早く公刊されることを望むこと切である。

追記

(1) この本は、雲衢張氏集義書堂刊の封面及び刊記を有する内閣文庫蔵の元刊本と同版。

(2) 静嘉堂文庫の近藤正斎手沢尾張藩刊墨書治要には正斎が文政元年八月より十二月に亘り紅葉山文庫蔵金沢文庫本を借り出して市野迷庵狩谷棭斎等と対校せる書入が附してある。この本の金沢本との対校は棭斎がさらにそれを移写しておいたものらしい。此は書入が巻卅に止るが、彼は全巻に及んでいる。

(3) この本の旧刻の部分は書陵部蔵明前期刊本（同部目録に元刊と著録）と覆刻の関係にあり、この本の方が先か。

(4) この本は内閣文庫蔵本と同版。本版について島田翰曰く「且以書口鐫手氏名言之、其付名仲、劉宣、呉畧、汝敬、徐子中、劉伏、劉恃者、周寿、付彦成名、全与内府明洪武欧陽居士集符、而其江同、江宝、又与家蔵元槧明成化十四年修本、斉民要術、成化十四年修版縫心所刻同、是即茲書、不啻能為明初刻本、実間有成化修版矣、由是而言、茲書確乎明初刻、而成化補修刷印本也」（「古文旧書考」巻四）と。